


鐵道院線沿道

明治四十四年六月

遊覽地案內

鐵道院





旅して口惜  
しきは、豫め我行く  
べき里のあらましを調べ置か  
ぬことなり。やれたる寺、荒れた  
る家にも、ゆかしき古の匂あり。怪の  
る山にも、流る、水にも、昔傳ぶの種多か  
るを、徒に心に留むることなく、つら過ぎむ  
は、興得きことならずや。この書僅に名勝  
のかたはしをすに止まれど、旅せ  
む人の榮りとなりて、聊かにても  
其興趣を添ふるにあらば、  
幸これに過ぐるもの  
なからむ。

|         |          |
|---------|----------|
| 帝都及其附近  | 一 東京及其附近 |
| 其西南地方   | 一 鎌倉附近   |
| 一 富士箱根  | 一 富士の裾野  |
| 一 東海の名園 | 一 尾州園池   |
| 一 志賀の浦波 | 一 北陸の勝   |
| 一 伊勢詣   | 一 京都及附近  |
| 一 大和巡り  | 一 紀伊路    |
| 一 浪速の勝  | 一 播磨の勝   |
| 一 備前山勢水 | 一 防長ノ勝   |
| 一 南海の風光 | 一 山陰の勝   |
| 一 筑紫路   |          |

目次

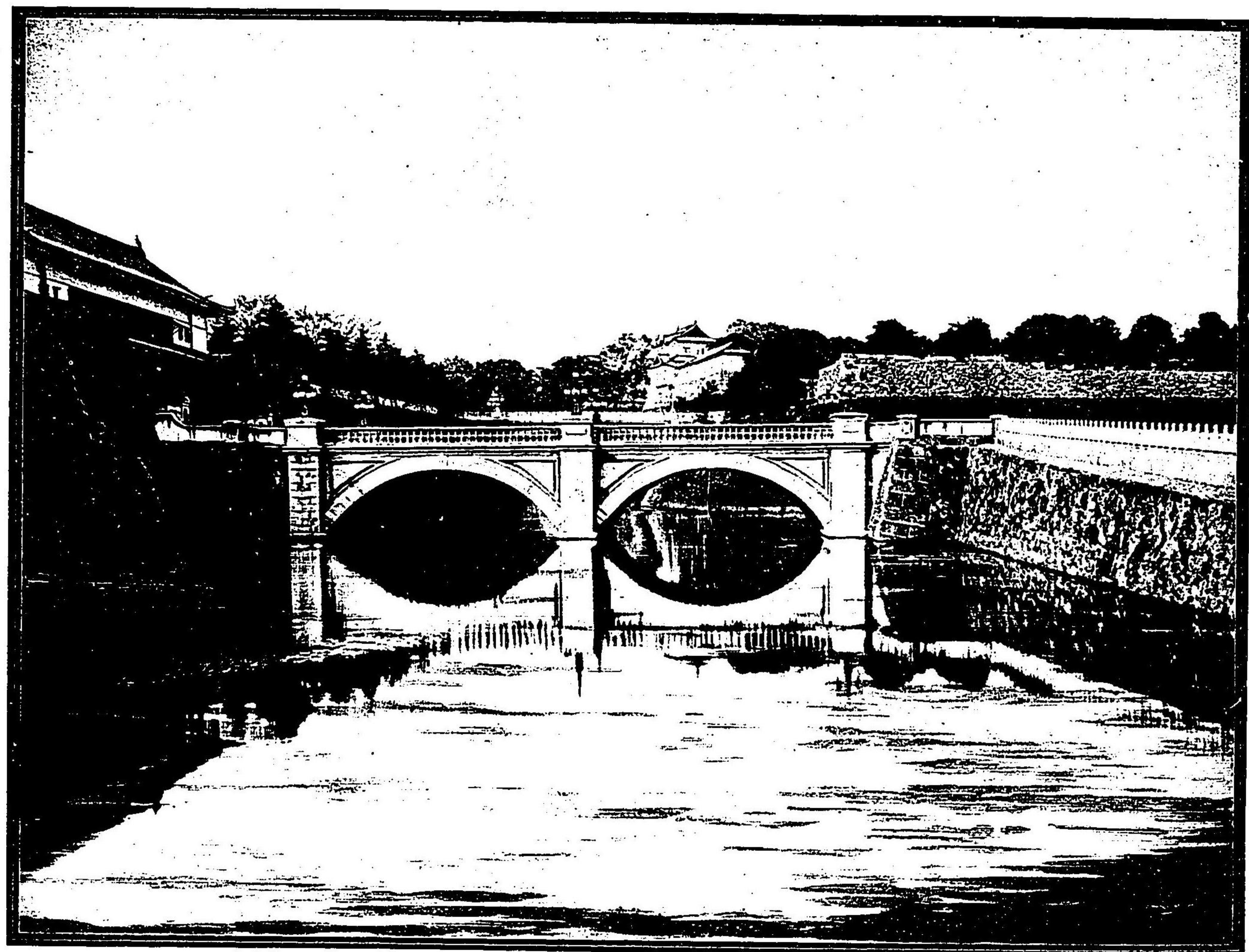
|           |         |
|-----------|---------|
| 東北地方      | 一 多摩の里  |
| 一 峡中の山水   | 一 信越の山水 |
| 一 碓氷の東西   | 一 下野の勝  |
| 一 白河關北    | 一 奥の細道  |
| 一 米澤以北    | 一 秋田路   |
| 一 兩總の勝    | 一 濱街道   |
| 一 北海の芥山岩水 |         |

附 録

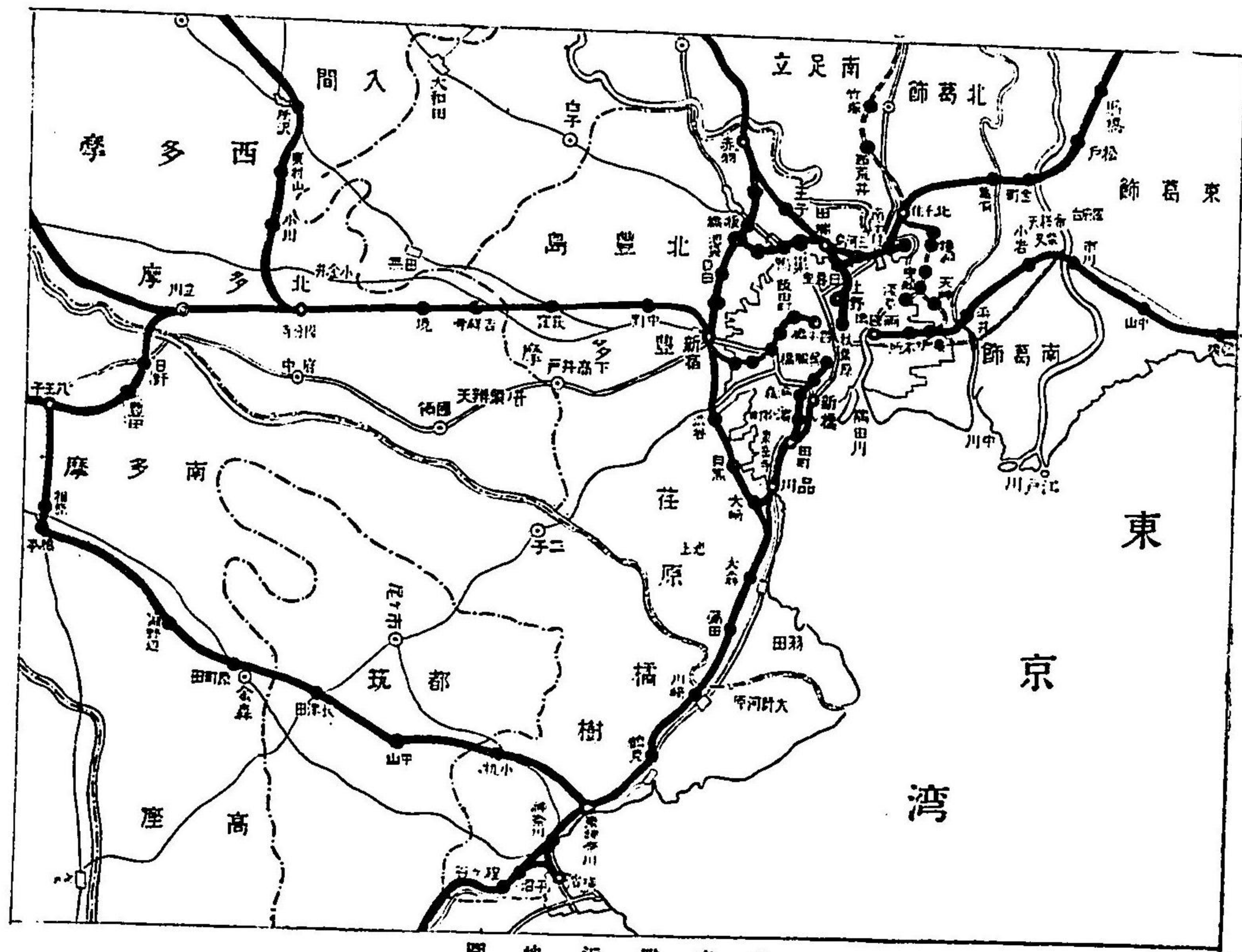
|             |         |
|-------------|---------|
| 一 朝鮮の風光     | 一 滿洲の山野 |
| 一 臺灣の風光     |         |
| 一 遊覽旅行の案    |         |
| 一 鐵道案内      |         |
| 一 主要驛間旅客賃金表 | 一 葉     |
| 一 鐵道院所管線路圖  | 一 葉     |

鉄道  
寄贈

明治  
44. 6. 3  
寄贈



城 宮



東京近附地



東京近附地

東海道本線、東北本線、山手線、中央本線、総武本線

近附其及京東

東京は我邦の首都にして、本州の東部関東平野の南に置き、太平洋沿岸の大内海たる東京湾の北に踞る所に在り、徳川氏三百年の繁華に加へて、今萬葉の宮城として茲處にあり、東洋第一の都市として其名世界に威を振へど、古は芳草繁々として天と連り、長江滾々として海に入りし處、四邊山なく夕陽昏く西の方に、峻々たる宮城千秋の空を見、峻峻たる東の方に、渺々たる筑紫萬古の家を望むのみ。然れども平野の内又高低なきにあらず、概して北部及西部の一半は高嶺なる丘陵地にして之を山ノ手と云ひ、東部及東北部の一半は卑濕なる平野地にして之を下町と云ふ。丘陵は数派に分れ、坂路起伏する處少なからず、其低地に臨むところ、往々急斜して断崖を爲し、其頭遠く八州の野を望みて、風景の美を以て知らるゝものあり、要岩山、品川神社、九段坂、日白臺、神田明神、湯島神社、上野公園、日枝神社、道灌山、飛鳥山等、眺望の勝地人の知る所なり。足を帝都に印するもの、先づ二重橋畔に馳きて、『宮城』を拜するを例とす。宮城は古の江戸城址を修築せるもの、老松蒼翠四境を圍みて、斜に影を御溝の中に垂し、幾許の水禽靜に其間に遊ぶ、正門は二重橋と云ひ、地の高低に隨ひ内外二橋を架せり、外橋は石を以て之を築み、瀟瀟にして雅致を存し、内橋は鐵を以て之を築き、堅緻にして壯麗なり、外橋の畔に至りて庶民の宮城を拜するもの、三々五々常に絶ゆることなし、頭を擧ぐれば、正殿、明殿の瓦葺高く紫雲樓建たる間に挿え、櫻山門前松樹の裡、盡忠報國の將士の爲に大神心を致したまへる指板を隨見すべし。外苑一帶の芝生は宛然緑野を敷けるが如く、稚松の影を差として、また二點の塵埃を留めず、南は櫻山門、東は馬場先門、北は和川倉門に連る堤上には、老松枝を垂れて常緑の色濃なり、東南の一角橋公騎馬の銅像宮城に面し、英風飄々千歳の下向皇威を護るの思あり。

市内公園多し、中に上野、芝、淺草、日比谷最著なる。【上野公園】は古の東叡山、深樹に富み、風景に富み、眺望に富み、古蹟に富む。春時櫻花至る處に霞を曳いて、中には三百年の歳月を経たるものあり。園の西南をめぐれば、『不忍池』、その中島に辨天祠ありて風光明媚を極めたり、曉の鐘上野の森に度る時、蓮花亂發池中に音あり、涼氣の池より起るにやと疑はる。【芝公園】は増上寺の境内、寺は開元淨土宗の總本山、上野と共に徳川氏廟祭の在る所、風に小日光の稱あり。境内の最高所を岡山といひ、品海の眺望佳なり。【芝公園】は芝公園といふよりは、壯麗なる金龍山遊草寺の大伽藍と、活動寫眞其他の見せ物とを見るべき地、婦女子の眼を喜ばしむる、都下、の右に出づる處なく、淨光射影塔々塔々、鐘音名狀するの聲なし。【日比谷】は市第一の新公園、其經營全く泰西に則り、丘阜あり、泉池あり、大運動場あり、音楽堂あり、花園あり、芝生あり、竹竹茂林能く天然の景を模せり。

東京の地由來櫻樹の生育に適し、陽春四月至る處白雲をみなきらず、花の都の稱其實に反かす。靖國神社、富ヶ岡八幡、清水谷公園、英國大使館前、飛鳥山等を初として、江戸川は新小金井の名あり、上野公園内は殊に老木多し、されど櫻の名所としては、まづ向島及小金井を推さざるを得ず。【向島】は隅田川と云ひ、詞人修して善境と稱す。堤路曲折して直ならず、處々其景趣を異にし、櫻樹一里に續きて、遠く望めば一抹の形影たなびくが如く、近づけば人は皆花の隠道の中を行く。堤下隅田川の流洑々として、遊船の往來續るが如し、三圃の祠、牛ノ御前、長命寺、秋葉神社、日輪明神、木母寺、廣若塚、水神、百花園等、櫻堤



空を以て著はる。赤坂には水川神社、牛込には宗正神社、市ヶ谷八幡宮、神田には神田明神、木野には湯島天神、深川には富岡八幡宮、日本橋には水天宮等、神威いやちこなり。



に近く點々として遊杖を誘ふ。向島に遊ぶもの、多く木母寺あたりより鐘を返すを例とすれど、花は千住あたり、いはゆる荒川堤に至りていよく盛に、長堤三里、兩側すべて青野さくも若しくは山櫻なり、前を望むも花の白雲、唯遠堤は河に近けれど、こはや、陳れたるを説とす。  
芝 【小金井】に遊ぶには、中央本線増原より小金井に出て、多摩川上水を瀾り、歸途は國分寺驛よりするを可しとす。花は流を換んで二里にながく、すべて山櫻なり、小金井驛最隣に富めり。  
宮は【日枝神社】、二帯の丘草老樹鬱鬱として繁茂し、幽邃の境たり、【靖國神社】は朝野深厚の宿宮に出て、戊辰以来の戦役陣歿の將士を弔祭したまふ所、先朝國運轉換の期、至國假世命を非業に殉したるの志士も、亦合祀せられ、いはゆる日本國粹の精華集まつて、此に國の鎮となるもの、巨棟高樓上古の風を存し、金塔の輝なく五彩の翳たるなしと雖も、賽者標を正さざるもの蓋橋なり、境内櫻樹多く、後庭泉池林木の雅趣あり、遊就館には新古の武器を蒐集せり、【愛宕神社】は特に眺  
【東叢寺】、四十七士の墓あるを以て、ことに名高し。  
東京より各方面へ行かむには、新橋、上野、兩國、御田町の四列車止立驛あり、山手線は、奥板橋より品川に至り、市の西郊北郊を繞りて、池袋より岐れて一は上野に至り一は赤羽に至る。今や電車の運轉をも開始したれば、都人の近郊散策多く之に便る。日暮驛に近く【日暮不動】あり、寺は慈覺大師の創建する所、都人南郊の散策一に此に取る、蓋し其野趣に富むを愛すればなり。堂後の丘隆其巖光生るの墓あり、五百羅漢寺またこの近くに

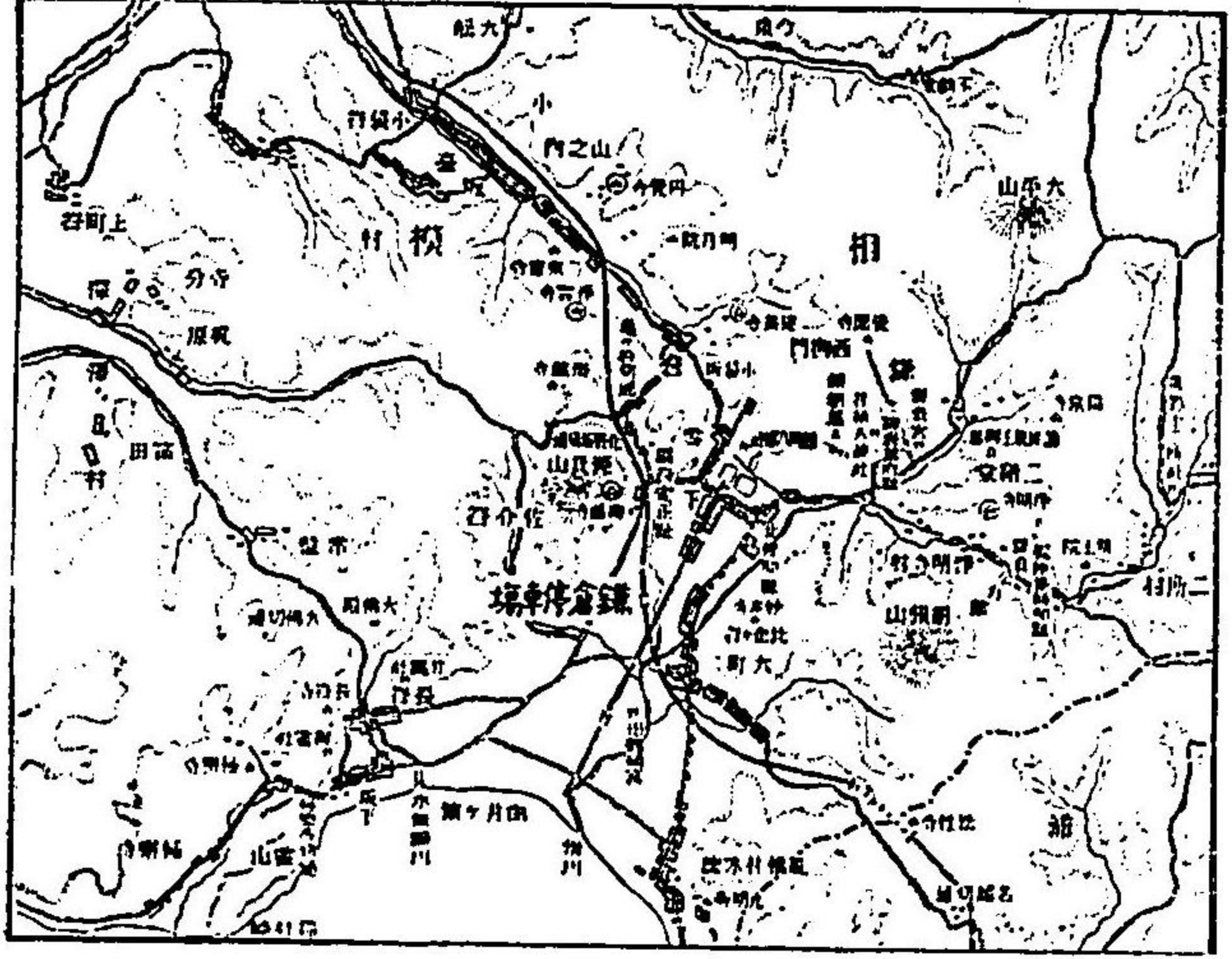
り漸く五十年へや我邦第一の要港として、最繁華なる一市となりぬ。【伊勢山大神宮】境内は市第一の遊覽地、登路紅葉坂の勝あり、公園は市の中央にあり、櫻樹園を掩ふ。屏風浦は市附近最風光の佳なる所、浦に沿うて【杉田の梅社】あり、一村皆白雲世界、後丘に登れば花光雲影遊近相合み、海濱山々然として一大鏡を照けり。  
上野驛より東北本線に乗れば直に日暮里に至る、常盤線の分岐點なり、これより山手線に至る間、鐵路は【道開山】に沿うて走る、山は納涼、避暑の名所、【龍神社】は龍皇佳なり、腰掛石の邊より眺むれば、田園遙に開け、荒川帯の如く、行き交ふ白帆連り、筑波原の山々遠く高き出せるが如し。【王子】は荒川川の流に沿ひ、飛鳥山の眺望を控へ、権現と稻荷との祭昌の外に、春は櫻、夏は菖蒲、秋は紅葉、冬は雪見、市北郊の勝地とす。  
浦和は埼玉縣廳の在る處、【調神社】は驛より八町、境内巨樟老松森々たり、今公園とす。櫻花を以て名高き【與野公園】は南一里、丘上至る處櫻花ならざるなく、富士、秩父も亦其の眺に入り、西南一面茫茫たる琴園菜圃相連りて、春景園かななり。大宮は信越線の分岐點、【永川神社】は驛より十町、武蔵の一ノ宮なり、木殿は白木造にして、丹塗の美金塔の燦たる無しと雖、清地にして雅致あり、境内今大宮公園たり、松杉相交りて天空を蔽ひ、櫻柳相擁して池沼を繞る。附近宮の名所見沼川あり。兩國橋驛より總武本線に乗じ、木所を過れば【龜戸】驛に近く、【龜戸天満宮】あり、梅及藤の名所として知られ、殊に藤の花房ながく垂れて、池水に姿姿うつすの時、都人恒に此地に向ふ。祠の附近菫の名所、櫻の妙見あり、有名なる【阪龍梅】は祠の東三町、府第一の名木なり、黃門光開の命名したる所、櫻柳相擁して池沼を繞る。附近宮の名所見沼川あり。人の下車地、寺は燈明寺といひ、中川の東岸に在り、小宮驛より十六町、江戸川の西岸【善養寺】境内に松あり、一は星葉松といひ、辛々として天心を衝き、一は影向松といひ、蜿蜒縱横に枝を延ばして、方數十間に及べり、立てる松、坐れる松、相待ちて儼然なり。【栗又帝釋大】は此驛より二十町、常盤線金町驛より十町に過ぎず、堂宇壯麗賽者常に絶えず。  
中央本線は飯田町驛より甲府地方を経て名古屋に至る、近く萬世橋驛より汽車運轉の速に至り、昌平橋より中野までは電車をも運轉せり、新橋驛に近く、【十二社】は中野の勝地、地口より丘をなして四處に池あり、祠野老樹蒼蒼都門の黃塵此に及ばず、小瀑激流清涼の氣を吐く、堀内の【妙法寺】は中野驛より半里、御覽甚だ壯大なり、【新橋驛】より數町【北蓮池】あり、神田上水の源地、依然として萬古に澄めり、島に辨天堂あり、丘に大盛寺あり、境内紅葉多し。



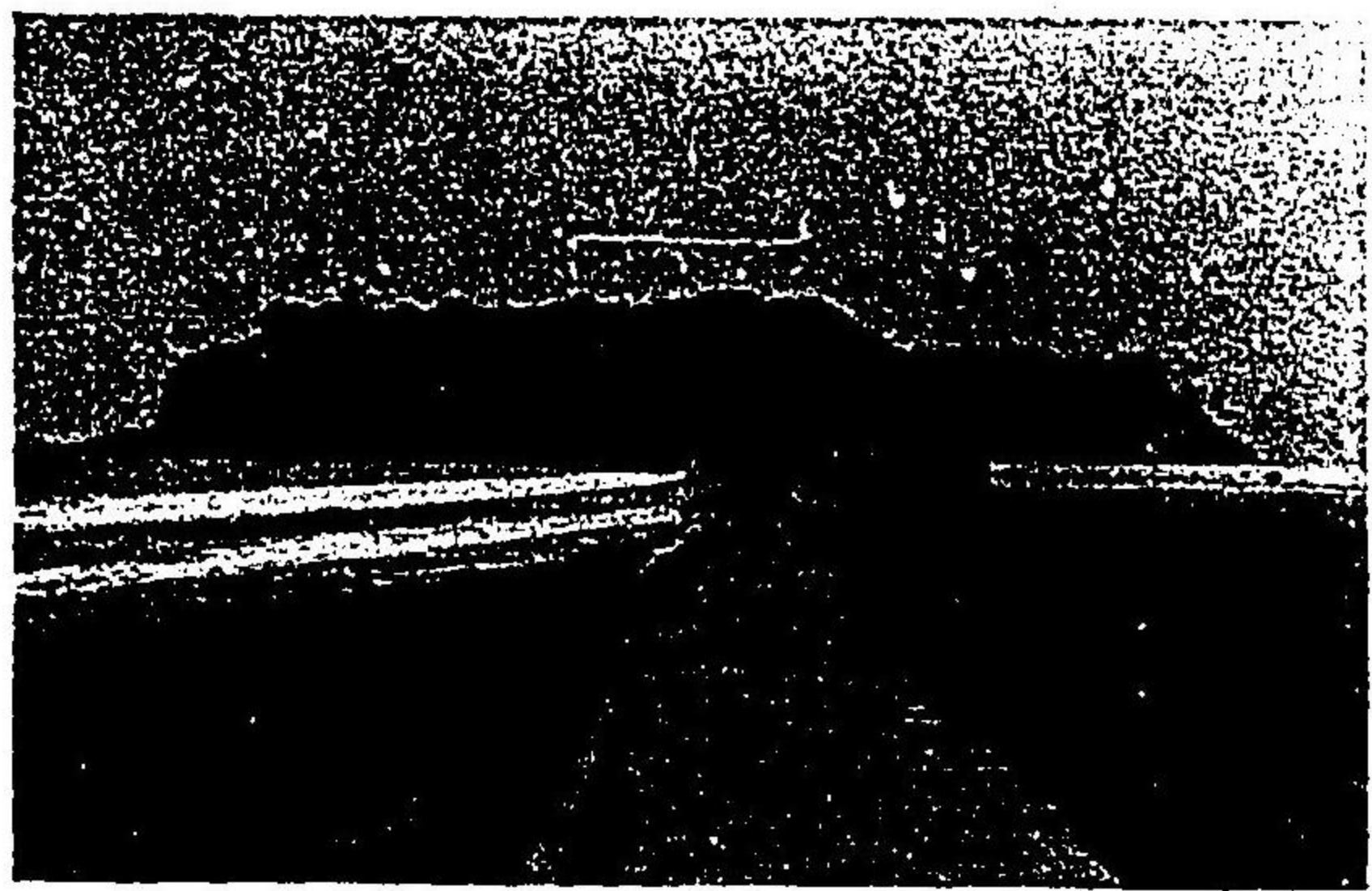
不忍池の庭

鐘ヶ谷附近

横濱を後にして程ヶ谷を過ぎ、品野坂の驛道を出づれば相模の岡、鐘路は大船に至りて、恰も扇の開くるが如く左右に散れ、左するは鎌倉を経て、横須賀に至れる支線なり。江ノ島、鎌倉地方を訪はむには、藤澤驛に下車、江ノ島に遊びて、鎌倉に出づる方便なるが如し。  
藤澤は【遊行寺】あるを以て著はる。寺は時宗の本山、南北朝の頃より戰國時代を通じて、此寺門遊行遍化の事蹟は、特に異彩を放てり。後山に富士堂あり、山海の眺望大だ佳なり。  
藤澤よりは片瀬を経て鎌倉に通ずる電車あり、【藤澤】は近く江ノ島と相對し、一帯の白砂青松風光美なり、近時海水浴地として知らる。【片瀬】は鎌倉の西口、太平記に「相田義貞、退兵、高降騎を幸して、片瀬腰越を打廻り、麻葉寺及へ打廻り給ふ」とあるは此道なり。龍口に【龍口寺】あり、寺は法華經の功德によつて日蓮の號を免かれたる靈蹟、古松側蓋を護りて、上人の靈像光を放つが如し。



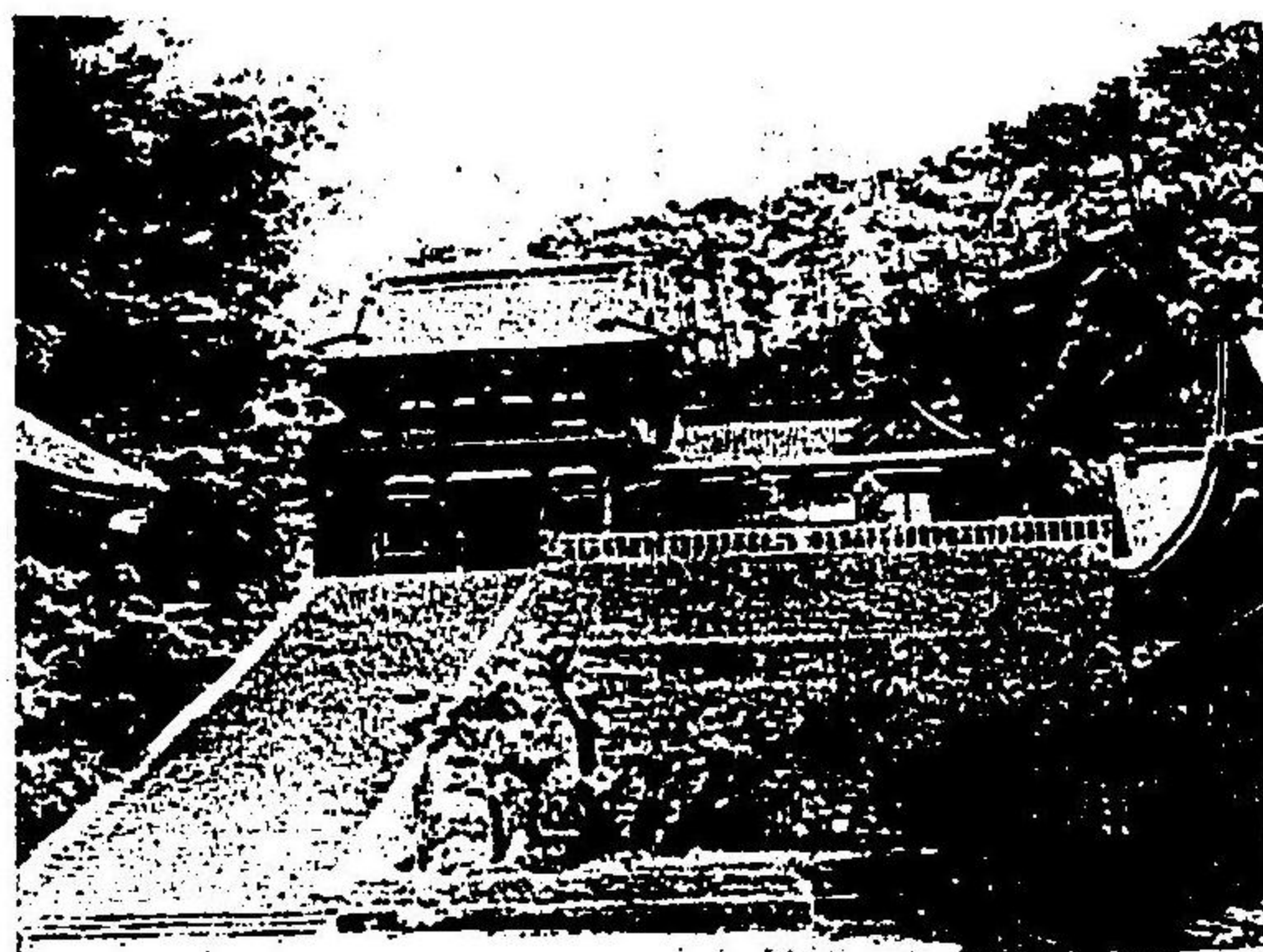
鐘ヶ谷附近地圖



片瀬に電車を捨て、疎々たる松林の間を縫うて、一ノ帯表を過ぐれば、一路の軟沙海に至る處、繪の如き島山海波に浮んで、温客人を招くが如し、一條の長橋虹を曳いて遊杖を導く、これ即ち【江ノ島】島は周廻凡そ十八町、全島岩石より成り、断崖絶壁四面を圍みて、繁鬱に其聲を絶たず、橋を渡りて帯表を過ぐれば、酒樓館高きに従つて層々相連り、碧瓦粉壁の海波に掩映する、眞に一幅の畫園の如し、神社は邊津、中津、奥津の三祠に分れ、奥津の宮より西下すれば南端兒ヶ澤あり、一條の細徑奇岩在石の間に通じて、遂に龍窟の前に至る、洞口調き方一丈餘奥行四十間、古の所謂眞辨天を祀る、龍窟茶亭多し、相に倚りて四邊を望めば、大島の一孤島煙を噴きて遠く波上に浮び、富士の白雪近く巖屑の間に懸りて、壯麗仰ぐに堪へたり。

江の島や 瀬風魚の新しき 子 規

江ノ島より鎌倉へ至る途に龍窟の村あり、文治元年義経鎌倉に入るを許されず、書を裁して宛を許さず、世に所謂腹腰狀にして、當時の草衣小僧【満福寺】に存す、池あり硯ノ海といふ、辨慶この水を以て帯池を謂はしたりと傳ふ、浮沫淺水悲しむが如く小波の動くを見る、寺を出れば白沙一路の【七里ヶ濱】、義貞の金装刀を投せし【鶴村ヶ崎】に連り、頼朝の千鶴を放らし【山井ヶ濱】に接す。この邊渡御にして、富士は笑み江ノ島は招く、海水浴の樂またひとしほなり。濱の中央【行達川】あり、渺たる一細流に過ぎずといへども、日蓮祖ノ口遊離の折、奇端を鎌倉に報する使者と、赦免の使者と、行



鎌 倉 八 倉 録

き達ひたる處なりとて世に知らる。星月夜の水に嗽きて長谷に至れば【海光山長谷寺】あり、十一面觀世音は長二丈六尺、佛工春日の作として名高し、法隆寺より飛んで渡向崎、獨を執りて機にその勢勢を辨すべし。大威山の【大佛】は鎌倉第一の遺物、碧瓦相穿んで小袋坂の邊にあり、壽福寺の後、唯を穿ちて四尊牡丹花を掲げる畫窠あり、中に實朝及政子之塔を存す。源氏山に登れば、古朝府の形勝眼前に展開せられ、五山七谷七十井十餘一々指點すべし。

【鶴ヶ崎】は字雲ノ下にあり、頼朝を護りて丹羽光朝、結構壯麗を極む。若宮は靜が想夫戀の一曲に坂東武者を流かしめし處、石階の左、天を摩して聳ゆる銀香の大樹は、承久元年別當公曉が身を擧して、右大臣實朝を刺したる處、今尙古の哀を訴ふるが如し、宮の東に右府を祀れる【白旗神社】あり、天下の英雄春と君とのみと、豐公が突つて其肩を叩きし木像を安置す。清川を渡れば頼朝の簡址、今唯昔風の吹くあるのみ。法華堂の山版【頼朝の墓】あり、五輪の塔高さ五尺、葛羅之を掩ひて落葉また拂ふなし、僅に認め法興武皇廟原大禪門。佳栢の天神を過ぎて【際堂】に至れば【鎌倉宮】あり護良親王を祀る、輪奐敢て壯麗ならねど、標遺古式にしていと神々し、社後の時増たる土宇、親王千載の恨を殘せり。

屋鋪ひとつ持たぬ泰山子ばかりけり 乙 二

【迎子】は鎌倉と二丘陵を隔つるのみ、海水浴場は類類といふ、清瀧稻の如き弓形の一小河をなし、豆相の峯清淡瀟の間に延び、江ノ島の翠翠峰に呼應すべし、而して清瀧の清瀧淡瀟に類はれて全景を映ふ、若



大 磯 高 磯 山 磯 海 濱 七 望

しそれ夕陽樹の連雲に落つるの時、波頭背金色を帯び、山は滲碧色より次第に暗碧色に移り行くさま、名手も刷毛を捨つべき景なり。田越川の畔老樹蒼蒼たる小丘【六代御前の墓】あり、塔を無色で、往時を偲べば、暗雲低く垂れて悲風蕭蕭に渡るを覺ゆ。【神武寺】は驛の東凡そ一町、行基の開基なり、寺後の神ノ瀧懸崖絶壁、相海登山指呼の間にあり。【栗山】は約一里を隔つる風光明媚の地、波に浮べる富士美しう眺に入れり。

英しきくらげ 浮きたり 春の 海 子 規

【金澤】は鎌倉、迎子、田浦といづれよりするもよし、横濱よりは海花散れる杉田を経て至るべし、風光の美昔來八景の名喚しけれど、瀬戸人の湖沼近世大平稻田と變じたる爲め、其景を殺きたり、金龍院内九聖子の眺を以て最とす。【稻倉寺】は北條顯時の建立にして佳景の地を占めたり。金澤文庫この境内にあり。

迎子より田浦を経てはやがて【横須賀】、これ海軍鎮守府のある處、大小の軍艦常に碇泊して、海國の威風自から心強きを受ゆ、想ふ昔昔に三十餘戸の小村今この般盛を見る、世運の變遷なるかな。驛より十九町餘十三郎の一端に【安針ヶ崎】あり、安針は英人本名ツ井リナム、アゲムス、慶長五年江戸に來り、留まりて徳川氏に仕へ、三浦安針と稱し造船の事に従ふ、かれこの地の風光を愛し遺言して葬らしめたるものこれ、日本橋魚河岸の繁昌は、實に彼が漁師と讀りて、三浦清海漁獲の鮮魚を輸送せしに繋解せりと云ふ、逸見の浄土寺内に、安針夫妻の遺牌及守木尊たりし觀音の像等を藏す、寺また風景頗る佳。若松町の東端に突出せる小岬を米ノ山といひ、【龍木寺】と稱する日蓮宗の寺あり、眺望宏潤なり。町の南一里半【安針城址】あり、治承年間三浦義明が前鋒守眉の身を以て鼻山重忠と戦ひ、孤忠を蛇ヶ小島の源公子に表せし處、松杉蒼蒼たり七百年の風雨、昔昔難き處殘礎點々として悲聲悲し。

されさしがむの小野に燃ゆる火の 弟 橋 規

【浦賀】は横須賀の南一里、豆州の山港と共に、西洋文明輸入の關門として、日本文明東土特異の光彩を放つ處、ヘルリ上陸紀念碑は久里濱にあり、海村を傳つて南端【三浦三崎】に至れば、山嶽波瀾に、海風蓬々然として天地一帯、走水の聲といふは即ちこれ、日本武尊の妃弟橘媛の登にかはりて、海に入りましぬといふは茲處なりとか、寄せては返す荒波の根は盡きじ幾千年、城ヶ島は三崎の海上にある一孤島、寶藏山は三崎御所の地、共に源氏三代家朝の跡、當年家朝の高勳を浮べたるはあまたの波か、小笠原の武技を演じたるはこなたの丘が、懐古の情山海の勝相待ちて時の移るも忘るべし。

藤澤より西、茅ヶ崎、平塚、大磯、皆海水浴地として知らる、平塚あたり右志一群の山嶽相連なるを見る、中に那智山を冠りたるが如きが、高く聳ゆるは【大山】なり、山は平塚より四里半、又雨降山といひ、山上に農家の守護神阿夫利神社あり、夏時七八月の候は、賽者陸續として踵を絶たず。

【大磯】は鎌倉の盛時に於ける脂粉の地、化粧の邊花水橋の畔、白馬銀鞍の影絶えざりし繁華の夢消えて、久しく海道の一寒村として、虎子堂のみ昔態のの種なりしに、佳麗なる江山水色く世に捨てられわや、近時水浴の好適地として其名大に著はれぬ、海濱は長江の如く東西に相連り、右に富士左に江ノ島、展望廣くが如し。【高麗寺山】は町の南、頂上高麗神社あり、眺望清麗なり。

【鴨立澤】は町の西端、細瀧海に注ぐ處丘あり、古松西行の像を安置せる一草堂を護る、「心なき身にもあはれは知られけり鴨立澤の秋の夕昏」夕陽波に落ちて鐘の音沈む頃、杖を曳いて低徊せる西行の面影胸に浮びて、あはれ言ふはかなし、庵に西行の什物を存す、請うて其高風に接する亦可なり。

鳴立ちてなきものを何に呼子島

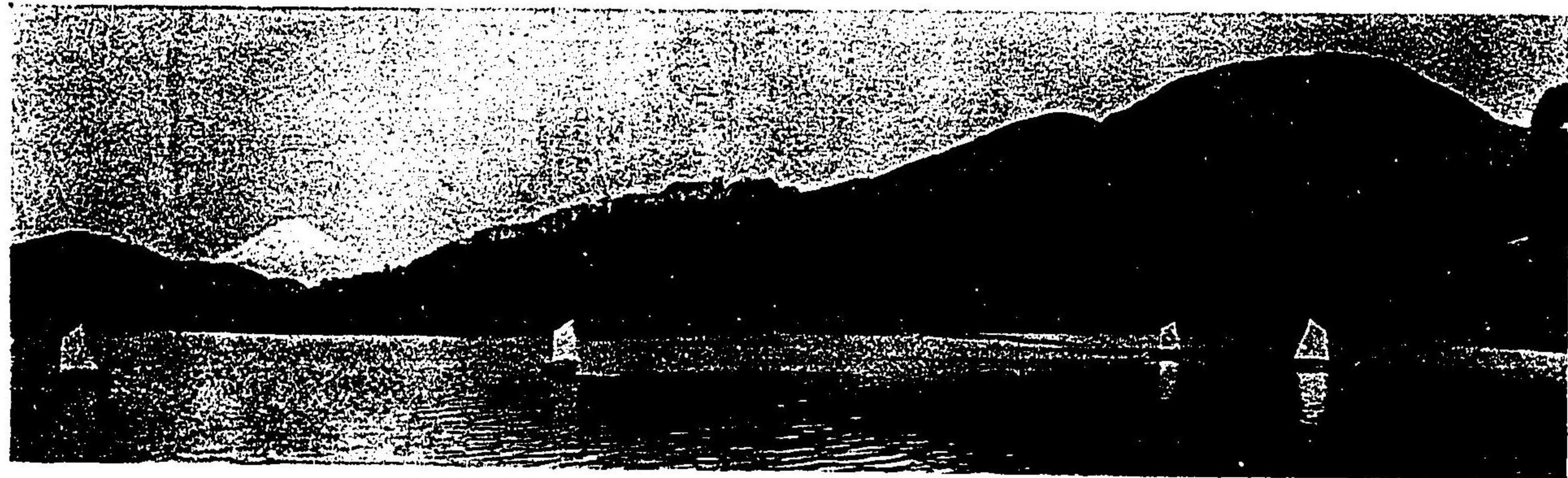
三千風

富士の形

東海道本線

帝都近方四時に下りて遊杖を曳くに足るもの、東に日光あり、西に鎌倉根あり。【國府津】は舊に箱根に遊ばむとする人の下車地にして、萬松一路長く連りて、相模灘の緑波と相映する遊り停車場あり、海岸を眺むといひ風光佳なり、村後の山多く蜜柑を植う、初冬霜白く葉黄なるの時、金丸山に映れて觀天なり。驛前より箱根に至る電車あり、酒匂の清流を渡れば葉松道を挟んで風爽に、小田原ははや日暁の間にあり、外郎を以て名高き八種作りの虎屋を過ぎて數町、右折すれば關八州に咸を振ひし、北條早雲の【小田原城址】、松風風々また當年を語るに似たり、二百尊徳翁を祀れる觀徳神社あり、【小室の梅林】は其花、早開を以て世に知られぬ、丘上大久保神社あり、海岸は即ち行李の濱、酒匂と共にまた海水浴地たり、町の南熱海街道を行くこと三十町【石橋山】あり、これ古承四年源公季が大庭景親と戦ひ、一斷朽洞に隠れて僅に身を以て免かれし處、登路十二町風色朗朗なり。湯河原、伊豆山、熱海、伊東の各温泉に向ふ人は、小田原より輕便鐵道に頼るべし、東道海濱に沿ひ、座ながら山海の勝を恣にするを得、門川の一水豆相の境をなして、右折すれば湯河原、南すれば【伊豆山】なり、【熱海】は伊豆山の南半里、一面海に瀕し三面山を負ひ、氣候溫暖寒暑なく、山水の勝麗泉の効相待らて、伊豆蘆葉中第一と稱せらる、夜夜五次熱泉噴湧の狀、壯觀比なし、熱海の西北一里半、口金山の絶巒を【十國峠】といふ、雲委を帯びて天海の如く澄む日、此處に登臨せむか、白眉倒懸の富岳手に取るが如く、足橋の連山逶迤として頷き、名にし負ふ十州五島雙峰に落ち、我既に神地を得て、天下山海の勝を茲に縮め得たるの概あり。

【箱根】は足柄山南麓の燧火山にして形勢頗る雄偉、峯情森立廻整廻合す、東海道の古驛路其間を過ぎ、俗に箱根八里といひ、坂東八州の天險と稱せられぬ、山澤の間温泉處處々に湧出す、湯水、塔ノ澤、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀、蘆ノ湯、これ古のいはゆる箱根七湯にして、近時小涌谷、湯ノ花澤、仙石原、強羅、蜷子の五新温泉を加へて十二湯あり、小田原より電車に乗りて一路繁華の相連れる間に至れば、【湯本温泉】の人家は已に眼前にあり、國府津驛より此處に至る道程三里なり、地名に負へる如く七湯中第一に湧出せしものにして、又温泉廻りの咽喉、道左右に岐れて、右は塔ノ澤、宮ノ下、左は蘆ノ湖、箱根宿に湧る本道なり、【金湯山早雲寺】は茶屋町にあり、北條五代の墳墓、宗祇法師の石塔、噴雲院路の中に寂然たり、【石橋山】は小田原征伐の時の太閤の營所、風祭の南にあり、【塔の澤】は湯本の西約五町、早川の岸に臨み頗る風致に富む、早川の大溪に沿うて行くこと一里半、去た宮ノ下に至らざる四五町の處、しのが塚より折れて急坂を下れば、溪底【堂ヶ島温泉】あり、四面翠壁に覆はれ、三面早川の激流を帯び、且三亭にして夜いまも明けず、行雲客座に入りて夕早し、わすれては又雨かとしたとらる、



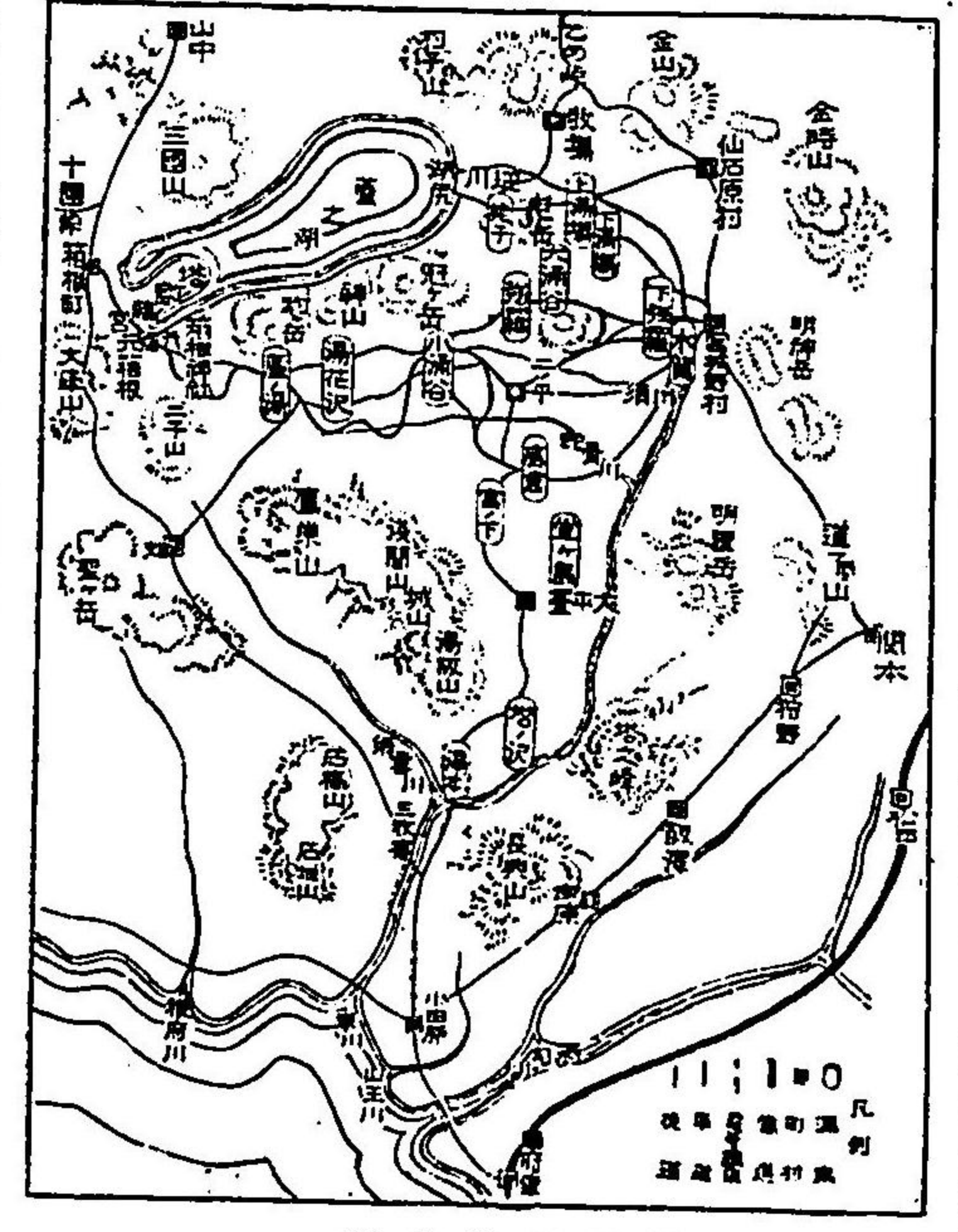
箱根の湖

富士の形



たる富士の姿は、八面玲瓏其姿を見るべく、正に知る秀麗の氣此山に鍾まるを、底倉より左すれば【小涌谷】、【天涌谷】はこれより里餘、火山噴出の餘勢未だ盡さず、白煙常に蒸騰せり、湯ノ花澤を過ぐれば【蘆の湯温泉】湯本より新海道の往還に出で、如より右折して至らべし、海拔一千七百六十八尺、鹿界の盛暑に秋の聲あり、風雲常に動きて一日の景勝屢々變ず、【蘆の湖】は形孤に似たり、半島あり塔ヶ島といふ、今隣宮を置かる、繩然として湖中に聳え、遂に富士と相對するの狀巖巖極まりなし、風靜に波穏なる時、一羽鶴の如き湖面に、芙蓉の露を映寫して宛然獨立するが如し、之を箱根の遊富士といふ、湖畔の【箱根神社】今朽腐甚しく、會ての華麗なげれど、古木寒風雨濛の境なり、箱根宿の西端開跡あり、

箱根宿より西三里餘にして【三島】に出づべし、驛より二町、富士見湯あり、【三島神社】は往古朝廷の崇敬最篤く、境内廣潤老杉森々神宮と尊し、青々、修葺す、土肥、湯ヶ島等の温泉に浴せむと欲する人は、三島より伊豆鐵道の便に頼るべし、北條驛に近く【兼山城址】あり、北條早雲が他日關八州に朝を稱するに至りし基礎は、實に此の一小城にあり、城址に近く暮末の英雄傑江川太郎左衛門英運の【反逆館】あり、源公季配流の地として史上に名高き【蜷小島】は城址の北にあり、往昔野川の流注へて此島を圍みたりといへど、今は草川の中に僅に其名を留むるのみ、南條驛より八町古公温泉あり、昔は伊豆鐵道の終點、村の南端水出山の美觀あり、里餘にして【蘆の湯温泉】に至らべし、地は南北山を負ひ、東西僅に通ずる峽地にして、梓川其間を貫流し、浴舎旅亭用に倚りて骨を就べ、渡月虎溪の二橋に因て相通す、瀟瀟奇岩多く、激流の中央温泉湧出す、瀧瀧湯特に名高く、溪中の奇石を開鑿して槽と爲す、夜靜に人橋に月東燈に升るの時、獨り金波激澗の中に浴す、また快遊のことならずや、箱根、國家の此に衰なる最期を達けたるは行人の知る所なるべし、

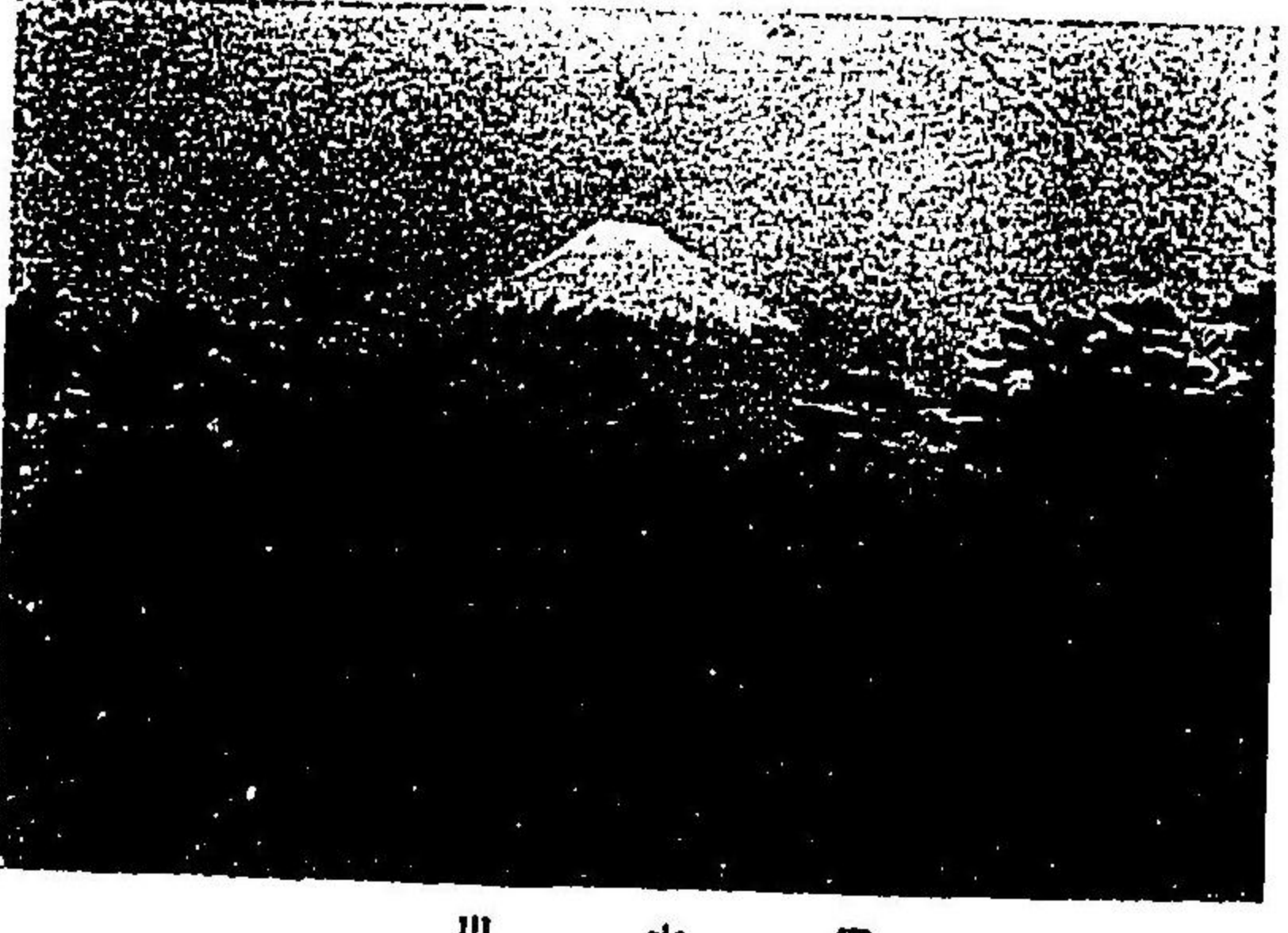


箱根近傍地圖

をすれば、溪底【堂ヶ島温泉】あり、四面翠壁に覆はれ、三面早川の激流を帯び、且三亭にして夜いまも明けず、行雲客座に入りて夕早し、わすれては又雨かとしたとらる、



東海國道は相模の山中を横断して三島に通ずれども、鐵路は國府津より岐れて西北に迂回し、弓の如き線を描き酒匂川の上流に沿ひ、次第に足柄の柔嶺に入る。松田驛より一里半「大雄山最勝寺」あり、境内の道は植林社を發着常に通ず。地は明礬の麓、松樹繁茂して日影を瀉き、「最上吉野の根」と傳萬里の歌へ、其丘を登せりといふべし。山北驛以西は東海道線中第一の險難地、隧道橋樑甚多く、加ふるに地盤の傾斜急なるが故に、補助機関車を附して運轉す。隧道に出で、は入ること數回、明時趣を覺じ、急な奔流應接に暇なし。小山驛にはや藤河の國、登り詰むる處は御殿驛驛なり、地は海拔一千五百尺、富士の靈峯右に緩やかなる傾斜をなして次第に高まり、屹然として雲表に峙たり、こゝより汽車は下りに向ひ、佐野、三島を過ぎて、再び國道に近づき沼津に至る。



富士山

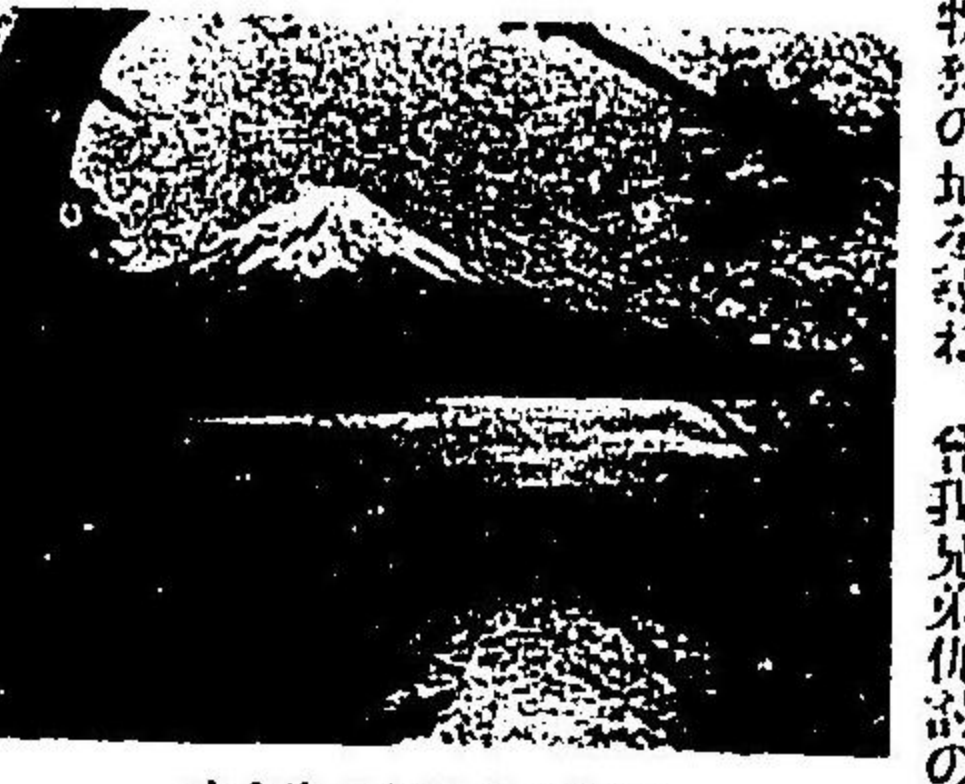
「天雲もいづきはかり鳩も鳥もさし上らず」と歌はれし富士の高根は、けわが日の木の嶺なり。前天王御尊一萬二千三百七十尺、日本木州の中部に座位を占め、前に青海を控へ左右に大川を帯び、八湖其麓に湛へ八嶽其頂に輝え、六十州の峻嶺大嶽皆袖ぐひなしといふ山は富士の根」と、また賈誼を要せず。日本武尊、聖德太子、桓武天皇の古は言はずもがな、植樹野の牧野の別なく、一年數十萬を數ふるに至る。登路九、鈴川又は富士驛より馬車道にて大宮に至り、其處より登るを「大宮口」と稱して木道なり、富士大宮淺間神社に隣座します。佐野驛より須山に至り、其處より登るを「須山口」と云ひ、途中佐野驛、景ヶ島、御殿ノ湖の勝あり。御殿驛驛よりは三路中如より登るを「御殿場口」と稱せり。須走より登るを「須走口」と云ひ、御殿口最登路平易なりと稱せらる。中央本線大月驛より吉田に至り、其處より登るを「吉田口」と云ふ。俗に淺間大神出生の古址なりといふ。鈴ヶ原の胎内洞は此登路にあり。駿河より登るものは甲斐に下山し、甲斐よりするものは駿河に下らむこと、最奥深かるべし。登山は七月二十日より八月末日頃までを好期とす。風雨の險惡なれば夜も亦登ることを得、而も高峻の山奇多し、初めての登山者は蠲毒先達に頼るの必要あり。行装輕捷を備へ心身の放鬆を戒む、これ其氣力修養に資する所以にして、古人の練行といひ修驗と唱ふる、必ずしも事と神異にするにあらず。裾野より頂上までこれを十合に分つ、大概三合目あたりまでは樹木繁茂すれども、それより上は沙石嶺山骨露す、五合目の遶山腹を一屈するを、中道通り十三里と唱へ、小富士、小御嶽、安永山、大澤等を巡行す、四邊の展覧窓然たり、これより上安氣次第に稀薄となり、人往々醉ふことあり、これを山中りといふ、六七合以上峻嶮漸く加はり、九合を斷崖といふ。

富士の山

富士の山はなほ委に見ゆるかな  
あなた面もこなたおしめて

衛門書信

富士の山形は古來各方面同一なりと傳へられぬ、されど其自崩倒に懸りて八面玲瓏たる姿こそ、いづくより見ても異なるが、この山決して單純なる容形にあらず。御殿場より見たる富士は吉田より見たる富士にあらず、吉田より見たる富士は裾野より見たる富士にあらず、裾野より見たる富士は赤松より見たる富士にあらず、各方面皆其特徴を有す、これ其周囲に寶永山、小富士、小御嶽、大室山、愛鷹山等ありて、富士との配合に異なる所あればなり。其峯頂の如きも、御殿場、吉田よりは、右側高く左端に向ひて稍低くなるに反し、大宮よりは之に反す、これ其縦々を眺むる方向の異なるが爲なり。而して通常給嵩に於て見る三峯分立的富士は、ひとり上井出附近に於て仰ぐを得べし。この各面各様の富士を見むと欲せば、すべからず岳麓を周遊せざるべからず。



富士山

裾野の山はなほ委に見ゆるかな  
あなた面もこなたおしめて

御殿場より見たる富士は吉田より見たる富士にあらず、吉田より見たる富士は裾野より見たる富士にあらず、各方面皆其特徴を有す、これ其周囲に寶永山、小富士、小御嶽、大室山、愛鷹山等ありて、富士との配合に異なる所あればなり。其峯頂の如きも、御殿場、吉田よりは、右側高く左端に向ひて稍低くなるに反し、大宮よりは之に反す、これ其縦々を眺むる方向の異なるが爲なり。而して通常給嵩に於て見る三峯分立的富士は、ひとり上井出附近に於て仰ぐを得べし。この各面各様の富士を見むと欲せば、すべからず岳麓を周遊せざるべからず。

御殿場より見たる富士は吉田より見たる富士にあらず、吉田より見たる富士は裾野より見たる富士にあらず、各方面皆其特徴を有す、これ其周囲に寶永山、小富士、小御嶽、大室山、愛鷹山等ありて、富士との配合に異なる所あればなり。其峯頂の如きも、御殿場、吉田よりは、右側高く左端に向ひて稍低くなるに反し、大宮よりは之に反す、これ其縦々を眺むる方向の異なるが爲なり。而して通常給嵩に於て見る三峯分立的富士は、ひとり上井出附近に於て仰ぐを得べし。この各面各様の富士を見むと欲せば、すべからず岳麓を周遊せざるべからず。

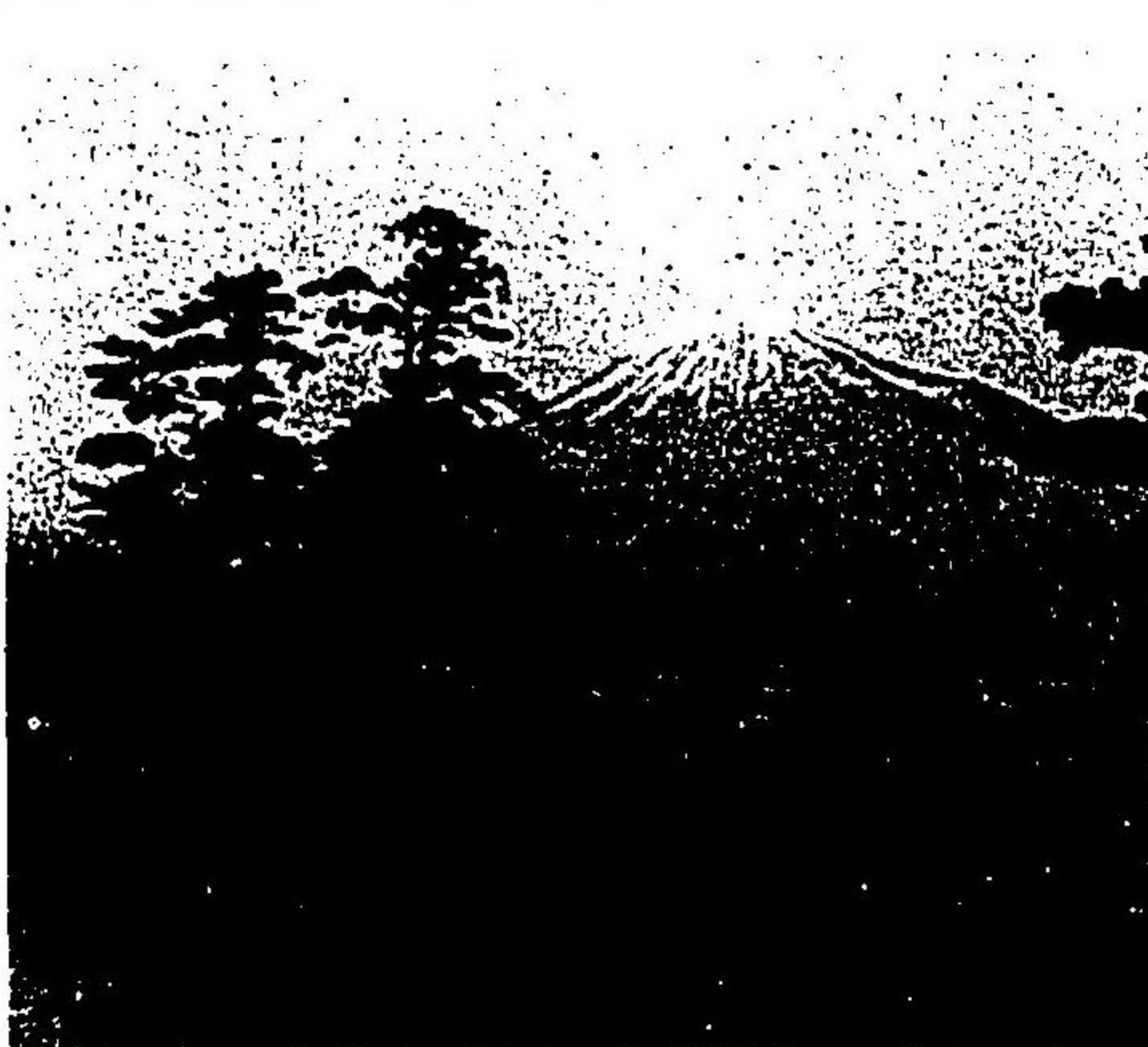


道跡【大塚丘】、菅笠一葉の玉葉、直に肩間に落ち来りて、管さ言ふばかりなし。【青田】は富士登山の北口、富士講元祖、角行、管の口より登山したるを以て、同行者の登山は多く此に由りたりと、【管】といへるは此地の舊家にして、管内建久館とて、そのかみ富士講野牧野の跡、高山庄司重忠の舊屋に川ひたる道跡を以て、建築せる古亭あり、并復舊跡を以て古色相すべきものあり。

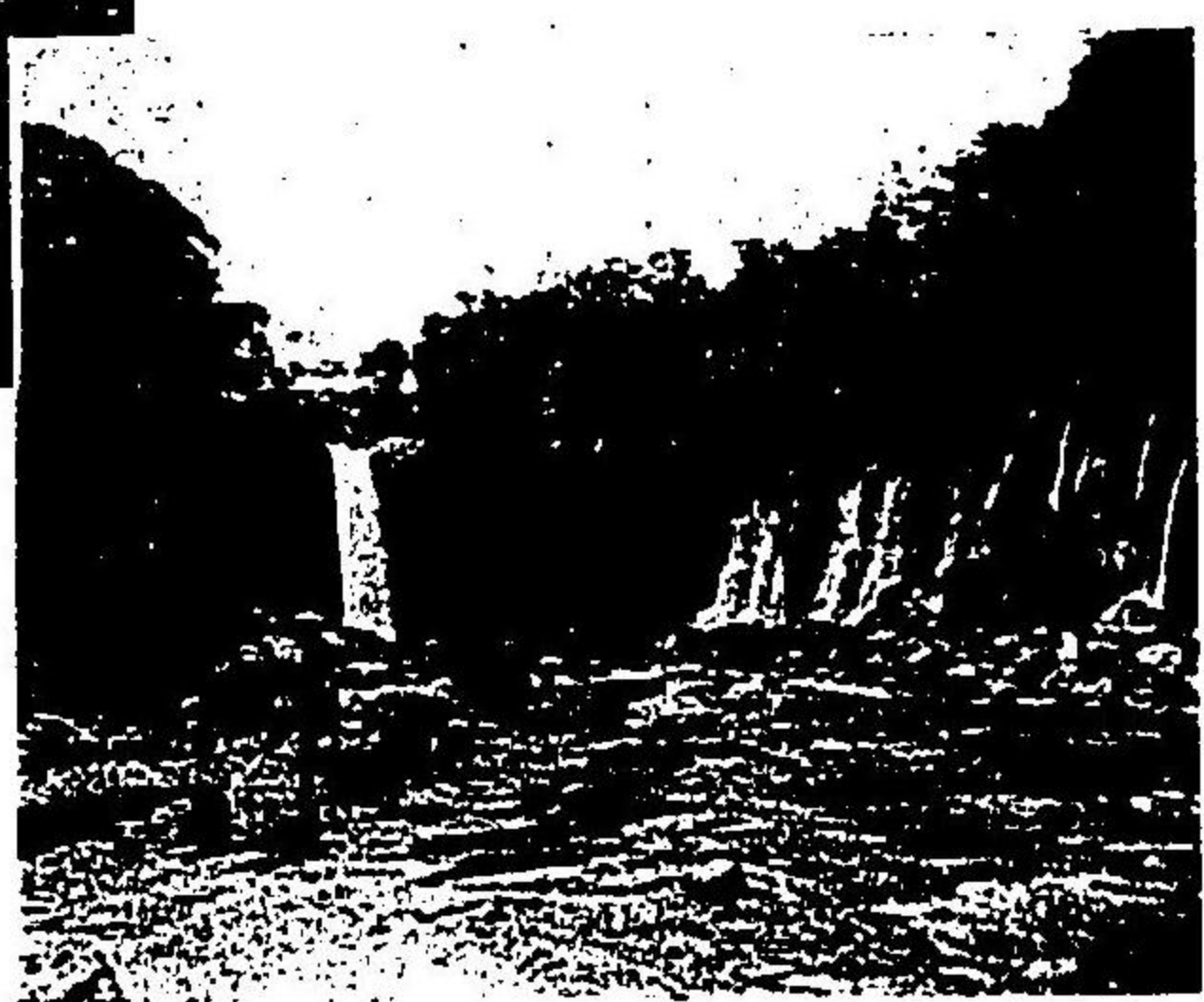
吉田より一里にして船津、【河口湖】畔の小繁華なり、これより長湫まで船して渡るべし、湖は管をなし海抜千七百八、周囲四里にあまりて八湖中最大なり、較の如く四門の御影峠、其北に管、川形なす三ツ峠其東に連り、富士隠しの名を負へる十二ヶ峠西に支を列ねて、三浦より湖を歴し、南より開けて、八葉の大葉管地に青田に満せり、清水濱の「管」うづる富士の高根にうづもれて残る水なき河口の湖」と、詠せるものこれ。小丘湖に臨む所あり、妙法寺といふ、頗る景象に富めり、御影相道所、辨天鳥美しう波に浮ぶ、其東岸なる産屋ヶ崎を望むの勝地とす。

河口、西側湖の間小峯あり、【鳥坂峠】といふ、見返れば管形の湖谷々として、湖畔五六の村落あり、炊煙の如く山の腰を繞りて、流舟二艘大島のはらに隠見して閑なり、更に前

程を望めば、後を十二ヶ峠に據せられ、【管】あり、一葉未だ盡きずして更に一葉を迎ふ、快言ふべからず、峠を下れば西側湖、村は危峻を負ひて湖水に面し、路は絶峭の脚を遶りて百尺の高さにあり、山脚轉曲して道も亦上下す、一曲又一曲、富士は次第に坂の上を姿をあらはし、歩々其秀致を以、根



右は精進左は本納、か言はむ。又林に入る、歩々途官の奥深く進むが如し、一鳥啼かず風死して天地静に、われ既に太古の人となり、路二岐す、【精進湖】は水最淺しと聞く、湖は管を以、後に女坂峠を負ひ、青木ヶ原の樹海を見越して、八葉の玉葉を仰ぐ、風光雄大にして幽邃をなす、霜寒して結氷すれば、宛然たる大水晶盤、好箇の水晶場をなすといふ。断崖湖心に突出せる處、歸化人皇野氏のホテルあり、左して三度青木ヶ原の樹海に入る。



山、木は樺、樺、山白楊等多く、楓樹其間を點綴して趣を添ふ、高さはいづれも二丈を出づるもの稀に、蛇行したるが如く、枝を交錯し葉々相重りて日光を細し、いよく入れば路すく、管、樹ますく、濃く、森ますく、深し。見渡せば樹下管錯落として、黒霧の管を被り、怪狀限りなし、猛虎怒りて路を許さざるが如きは、管の横はれるなり、隘阻路を過りて行手を斷つと見ゆるは、朽木の倒れたるなり、欄干の如くにしてしかも同じからず、爲に路のあしきも長きも忘る。二十町餘にして初て空を見る、管石累々として松のみ多き處なり、思はずほつと吐息する前向に、笑を含める管の秀麗を絶ちて、いやが上に高く登り仰がる、妙しき何と

山鳥帽子等環列し、南は龍ヶ嶽湖中に半出して、其後毛無山秀で、管えたり、東は管岩崎、難樹叢生して樹海に類し、仰けは管嶽其上に屹立す。本嶽より甲州街道を上る、このあたり牧野ヶ原といふ、首をめぐらせば連山屏風を樹て、管形の湖を抱くが上、一山秀色をあらはして、遙に富士と相點映くは白山なり、【初石峠】は甲州二州の境、これより途は次第に爪先下りとなるなり。見渡せば目の及ぶ限りの管ヶ原、風にまよきて波を打ち、やがて過ぐべき根原は、鳥とも見えて波の海に浮べり、根原より【穴】まで石のみ多き原道なり、穴は東に記せる、仁田忠常入りて怪異を見たりといふを以て、早く世に知られ、近頃角行者窟内に修法したるにより、富士行者の靈場となりぬ。尊者あり松明を點じて案内す、石壇を少し入れば穴横に通ず、窟内水あり丸木を敷いて其上を渉る、しかも向水膝に及ばむとす、凡二十間石を積んで道を築けり。

上井出の村に入りむとする處、石を建てしら管の湖と刻す、湖に至るの近道なり。湖上に架せるく字形の橋を渡れば、管の音耳を聞す、これ【管】勢雄壯なれども景趣乏し、【白神の湖】は三町を隔て、相並べり、川身床となりて落つる所、崖は左方に彎曲して、流れ落つる湖水、あるは連りあるは離れ、恰も水晶の崖を曲けたるが如し、瀑上林樹茂り藤葛まはらりて、幽趣耐ふべからず、芙蓉寮の眺望鮮かなり。

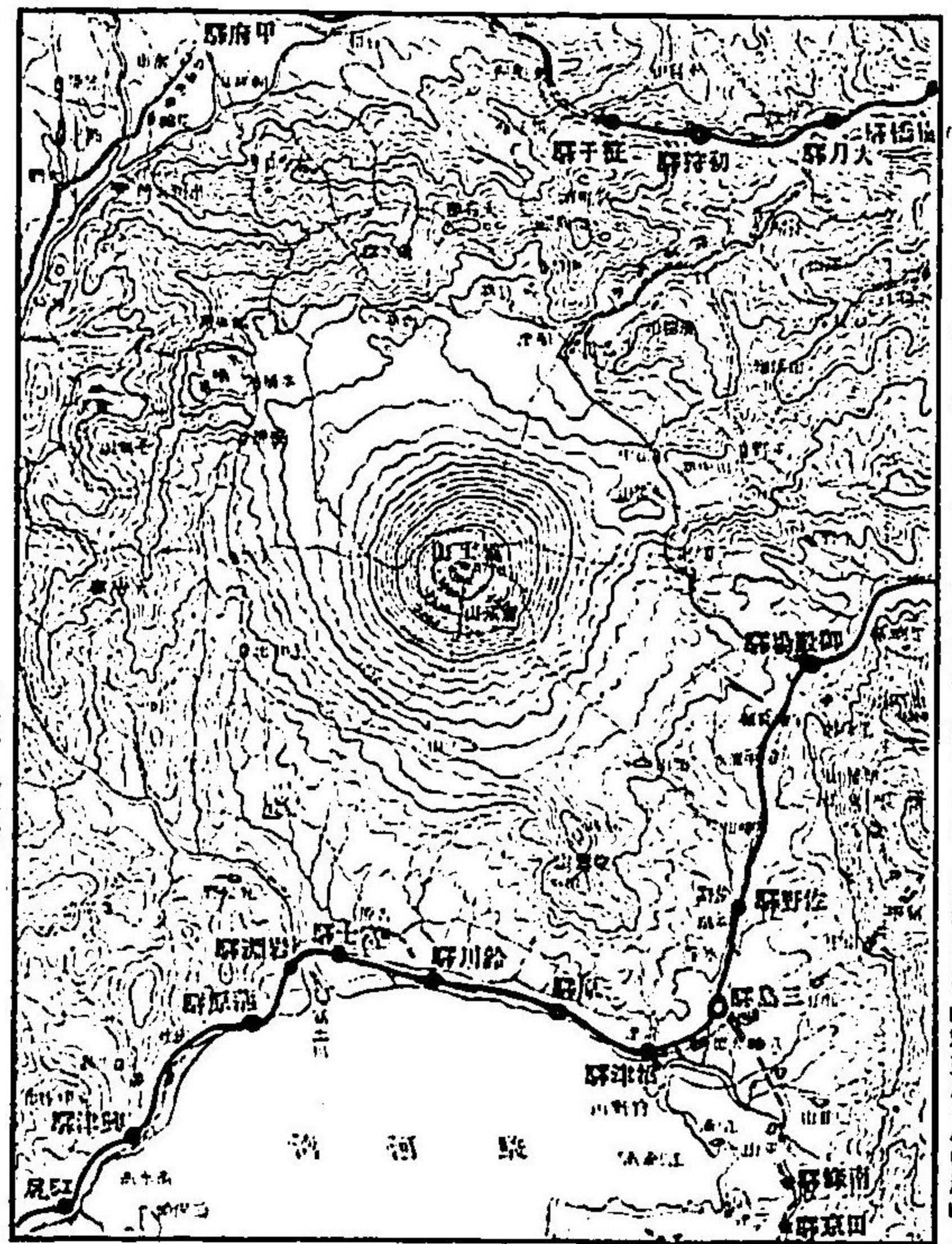
水上にいかなる管かおはすらむ

なだまきおるす白練の湖

稲

路を返せば【管】と稱するあり、【管我兄弟假屋の址】といふは、今の管我八幡宮の地、管には【稲朝假屋の標】あり。

野 蕨 の 土 富



富士山附近地図

大宮より青原を経て鈴川峠まで、馬車鐵道の便あり、【管我兄弟の墓】は其途次、久澤の船峯寺境内にあり、五輪の塔高さ三丈五寸、二葉相並びて香煙常に絶ゆることなし。想ふ此旅行の途次、大嶽に兄弟の屍を埋む、國府津を後にして左に箱根の連山を望み、右に見弟の人となりし管我の里を見、今や上井出に管經の墓を見、管我神社に詣りて、稲朝假屋の跡を訪ひて、更に此墳墓に對すれば、遊子は正しく生きたる管我物語を讀み終へたりといふべきなり。

引續とふ富士の野の小家より

藤

香取自沙數十里幾多の名勝を踏破す。田子ノ浦曲一帶、なんぞれ愛つべきの風光多きや、静浦、我入道、牛臥、千木松原、田子ノ浦、吹上ノ濱、清見河、陸奥山、久能山、清見寺、龍華寺、三保ノ松原、勝地あけて数ふべからず。加之芙蓉の露葉至る處秀姿をあらはし、風趣更に一段の美を動福す、宜なるかな東海名園の稱。

【沼津】は水野氏の舊城下、驛のある處は古の三枚橋城址、今西郷の遺すべきものなし、海濱は即ち千木松原の勝地、沙明に遊歩び、萬松遠く連りて、銀波激流たる内浦の水と相映じ、前は伊豆の山呼べば將に應へむとし、遙に三保の松原と相對す。沼津を南に距る二十町、牛臥、我入道の海水浴地あり、疎松亂立海濱に元立せる牛臥山の北麓は「我入道」にして、南麓に「牛臥」なり、牛臥の東南岸は静浦、風光の明媚なる恐らく沼津附近第一に位すべし、桃橋には東宮殿下の騎馬殿あり。

汽車は沼津より海岸に近く東海道と驛行す、原驛に近く【松蔭寺】あり、白隠和尚骨柩の神廟、疎松參差たる下、禪師の荆莪塔あり。浮島原は平軍を潰走せしめし水禽飛翔の地、汽車この間を過ぎて鈴川驛に至る、沙丘あり【天の香久山】といふ、摩天の大嶽北に峙ち、原野江海の眺望宏闊なり。驛の南海濱一帯の地は【田子の浦】にして望津第一の名あり。

富士川を渡れば磐瀨、蒲原、自沙一帯山を驚き水を抱く、【吹上の浦】といふ、蒲原の南津南郷の地あり、古松之を産る。【陸奥山】は山非與津の間に横出し、山勢千絶、激浪其東南を洗ふ、山の一端を山の神といひ、磐瀨あり、山海の眺望無比、富士、三保相踞頭いて、登臨の人を歎待す、山の神さつた時の風景は三下り半に書きもつべきせし、蜀山人の跡人の口に聞れたり。

【摩原の清見の塔の見極の浦のゆたけき見つ、物思ひもなし】(笠人)古歌に。



静 三保ノ松原ながく突出して、第一帯を曳ける風光、誠に八潮を捲いて一望の中に收めたるものならし、海濱波靜に水清く、江尻、清水にかけて共に海水浴あり、清見ヶ關の址は、今【清見寺】寺門のある處、寺は高く青山に倚りて百里を眼中に收む、【翠子龍窟外、潮光戸羅間、魚龍吹浪出、舟出傍欄邊】の詩、實に其眞を得たり、堂前梅櫻あり、花時殊麗なく半天より垂る。

【清水港】は江尻より十數町、海道屈指の港、百貨輻輳して帆影絶えず、舟を載うて三保ノ松原に至るべし、【三保ノ松原】は海上突出の一洲、宛然浮島の如し、一條の青松燈の如く長さ一里餘、潮風松に衝りて不絶の琴を奏で、自沙一路路の際ること繁し。南は渺々たる大洋、烟波茫茫直に南溟に入り、北は藤河の急流を隔て、清見寺一帯の山情遠達たるを望み、梵峯翠峯々たる水色と相対して、已に塵界の景にあらす。御魂神社の邊、松蔭靜かなる處、羽衣の松あり、老枝蒼々千古の遺風を傳へ、幹根蟠屈もこれを屈眠の枕とやせむ、見上れば富士は湯上りの海化粧の姿を見せて、腰より下の尾高や、裾ははかしの浪模様、天女の舞臺今日の前に見ゆる心地す。

お富士さん改のころしわがしやんせ  
雪のはだ(が)見たうこせんす  
蜀山人

【龍華寺】は江尻より一里餘、清水より十數町のみ、寺は青嶽を後にし晴海に對す、伊豆の山々より南降時、さては與津、江尻の長汀曲浦、樓影淡きは清見寺か、富士の大嶽釜山の如く、廣河の海濱釜水の如く、三保ノ松原屏風を立て、遠山近海の奇勝一日の中に集る。北隣【龍舟寺】あり、珍奇の寺寶に富む。これより一里半にして久能山に至るべし。

【静岡】は古の府中、家康茲に老を盡ひ、一時天下の賞權此地にありき、【久能山】は家康殯骨の地、驛より二里半、有底の海濱に沿ひて隆起せる一連崗にして、山麓は高からずといへども、隔國隔嶺大なり。頂上東照宮あり。【鷹橋山】は市の北端にあり、

驛より十六町南葉ヶ岡と稱す、南麓神廟の華麗を以て鳴る【龍華神社】あり、境内今静岡公園たり、櫻花彩霞を曳くの時、人も亦雲の如く集る。

誰がためぞしつはた山の長き日に  
聖のあやむる春のうぐひす  
如家

詞を北に距る十町【龍華寺】あり、今川義元の創建、境内其墓あり、寺は家康の今川氏に質たりし時の舊所、書院の一隅四疊半の小室は、家康が大原和向に就て學修せし所なりと傳ふ、【龍瓜山】は市北方の嶺山、蒲山森鬱遠蒼直に之を産る、松杉樟竹き處種種神あり、資養院、花陽院、一華堂、寶壽寺、親身寺等、徳川氏に敬啟ある佛寺市内に多く、連歌師宗長の住せし叶月家菜尾寺、慶安の首座者山井正雲の墓、赤松の道土かしく坊の墓、「森はこがらしの森」と枕草紙に書かれし木枯の森等、市の内外に散在す。

静岡を後にして、汽車は安倍川驛を以て名高き安倍川を渡る、川の西岸は、平語に長者の娘千鶴の斃事傳ふる手紙の里、一帯の山嵐廻響として、行手を導るが如きは、「うつ、にも夢にも人にあはぬ」と、業平のこころし宇津の山にて、山籠は葛ノ細道なり。松津驛より八町【松津神社】あり、日本武尊を祀る、藤枝は藤枝驛より里餘、附近【志太温泉】あり、鬼岩寺は藤枝町の西なる岩田山にあり、富士眺望の地として古來世に知られたり。

駿河路や花たちばなも茶の匂ひ  
芭蕉

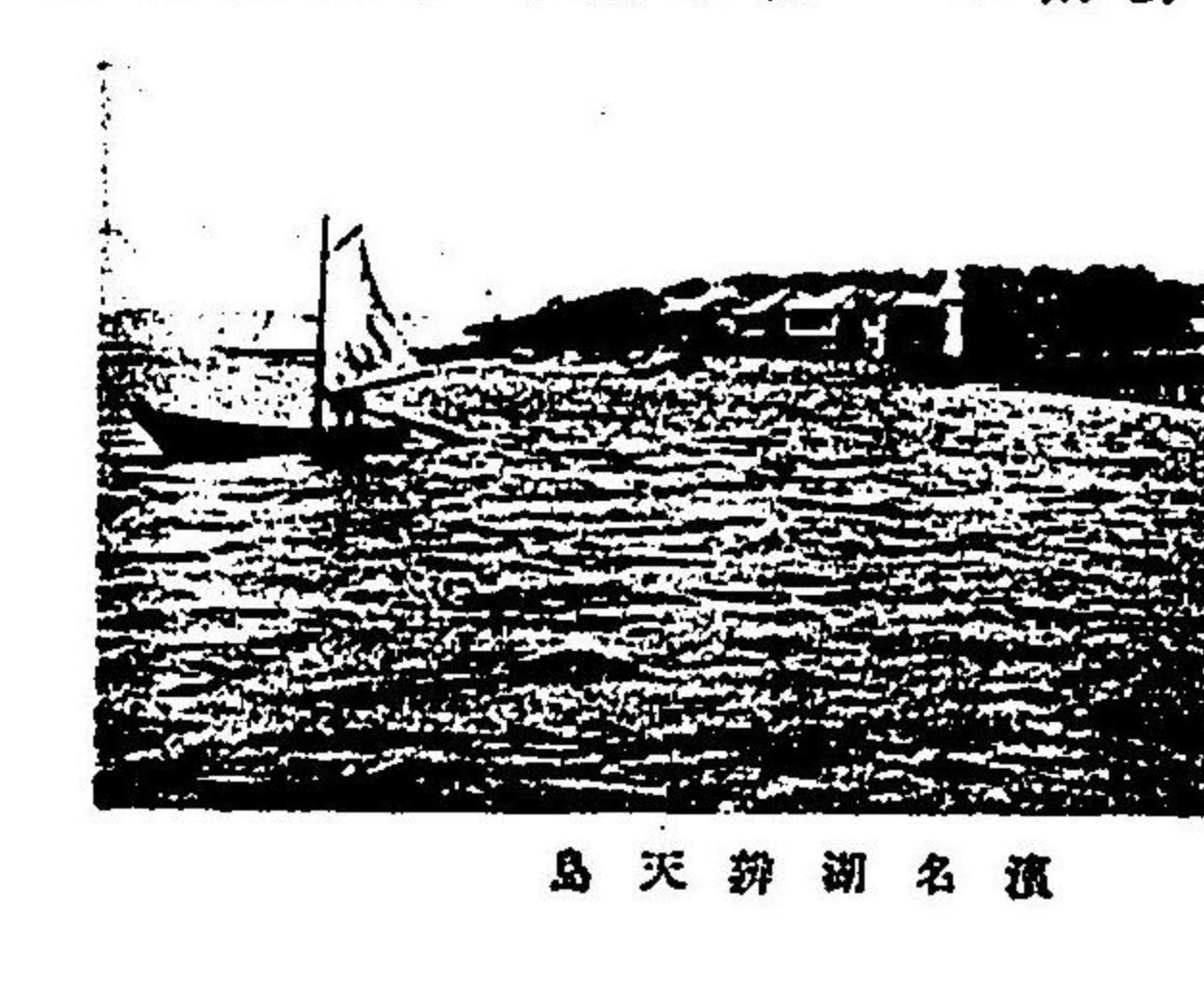
駿遠一州の境大井の巨流あり、幕府時代橋梁舟筏の繁ありしを以て、人の渡るや蓬萊或は野背に傾りき、島田、金谷の間、朝霞が川留めの歎きに、袖を濡らす遊子もあらむ。金谷驛を過ぐれば直に陸道に入ら、陸道の上は武田徳川の古戰場、牧野城址なり。出で、一小溪流を渡る、川はこれ菊川、上流太平記に名高き菊川の里あり、小夜の中山、亦この驛より近し。掛川驛は【松葉山】へ参詣すべき下車地、山は鎮火の靈刹秋葉神社の鎮まします所、驛より約九里、西麓天間の大河流る、川舟を備うて下れば、三時間にして池田の宿に達し、天龍川驛に出づることを得、池田には詠曲に名高き鹿野の寮あり。

掛川の次驛は笠井、驛より二十八町【可睡堂】あり、秋葉より三尺坊威徳大権現を遷し、より、賽者常に絶えず。中泉を過ぎて天龍川を渡り、天龍川驛を過ぐれば、やがて濱松なり。川は海道第一の大河にして、源を諏訪湖に發するもの、橋は長さ三千八百尺、恰も長蛇の蜿蜒せるが如し。

すはの海の水解くらし返つあふみ  
天の中川なきまされり  
定 臣

【濱松】は古の東馬の里、家康の武田氏を討つや此地に據り、以て天正十八年の江戸移封に及べり。城址あり、一帯に東照宮を鎮す。【三方ヶ原】は元龜三年信玄、家康の鏖りて戦ひし處、今多く茶園となれり。この地山來名松多し、中にも瀧ノ松は、足利の風流將軍義教の吟賞に入りしを以て名高く、琴瑟今も古に變らず。

濱松を後にして、舞坂より今切の鐵橋を渡りて濱津に至る間、北に濱谷の平湖あり、南に太平の巨洋あり、左顧右眺宛然たる横渡の大活畫を見らるが如し。【辨天島】は湖口の東岸、内外の勝景を感するを得べし、近時海水浴地として著はれ、夏期假停車場の設あり。湖は古のいはゆる遠つ淡海、崎形にして支瀨多きを以て、至る所風景の美を成し、湖畔の名勝あけて数ふべからず、夏をとへば佐細江や秋の聲、【沼田】、古歌に名高き【引佐細江】、また一支瀨にして東北に十入し、非伊谷川北より來りて此に注ぐ。川の上流【井伊谷宮】あり、宗良親王を祀る、御陵は社殿の後、英志奈しく擧げて遊陣に終らせたまふ、また悲しからずや。【猿蓑湖】は湖水の北方、別に一湖をなし小河を以て通ず、其東南岸に飛騨の辨天あり。半僧坊を以て名高き奥山の【方廣寺】は湖の北里



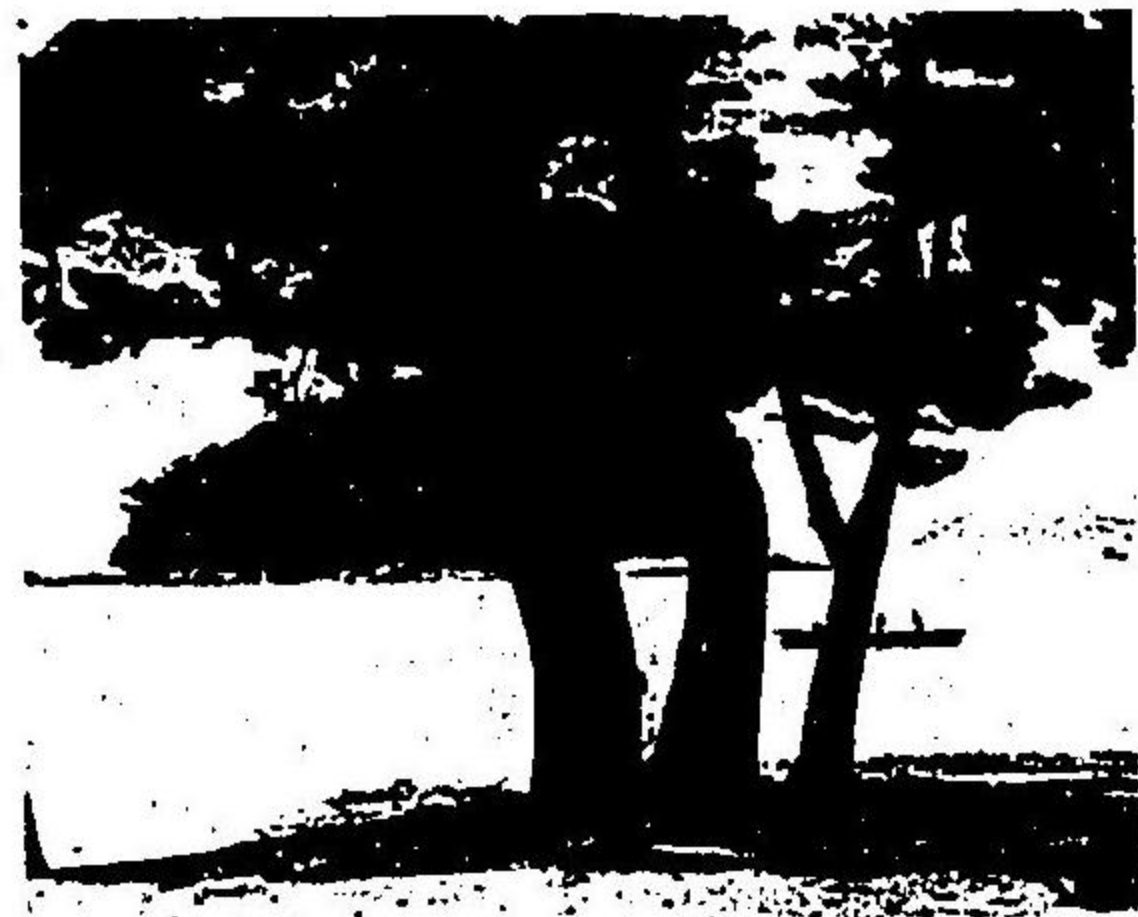
濱 湖 辨 天 島

近 附 町 名 濱

東 海 道 名 區

除、蒲山老僧古杉森として茂り、亭々雲に入りて幽邃甚し。境内の半竹坊は信徒頗る多く、可憐齋と共に、遠江に於ける天狗崇拜の一祠たり。堀江は引佐細江の南岸、【龍山寺】あり湖上第一の勝景とす。【本興寺】は堀江にある名藍、寺は湖岸に臨みて櫻花多し。【高師山】は古來世に聞ゆ、山は富士の北西遠岨の境にあり。【白須賀】は富士の西南一里、町の東南小坂あり【御見坂】といふ、南は太平洋とて波濤天を凌ぎ、眺望の雄大壯麗に世に推さる。磯路三州に入りて二川驛、右近小丘あり、岩石累々たる上に、觀音の像高く屹立す。【龍觀音】これなり、寺は驛より十五町、松路遊路の窮まる處危峻あり、登り盡せば即ち觀音堂、堂後大岩あり、高さ八十八尺横二百八、車窓見るとこの觀音の銅像は、實にこの岩の最高處にあり。

【豐橋】は昔時の吉田「吉田通れば二階から招く」、俳諧人の口に頤れたり、豊川其北に流れて百二十間餘の板橋あり、これ有名なる豐橋なり。此地豊川鐵道の接續地、豊川吃根尼天、三河の一ノ宮たる御願神社、信玄が月夜短笛に酔うて鉄橋を負ひし野田城址、鳥居強右衛門の豪膽を以て知らる、長徳の古戰場及同人の墓、三河七御堂の第一たる願來寺等、この線附近亦見るべきもの多し。【吃根尼天】は豐橋の驛よりして一里に過ぎず、賽客遠近より賑がり、香花甚だ盛に、堂宇輪奐の美を極め、林泉布置の妙を盡す。豊橋の南、深美半島遠く大洋に突出し、尾の知多半島と相對して三河灣をなす。深美の盡頭【伊良湖崎】の壯觀は、世に物興の地として、昔く世に知らる、所、驛を過ぐれば矢別川の櫻橋を渡る、上流に見ゆるは矢別の長橋にして、これ傳へて以て當年の駿河延喜が須賀賀小六と邂逅したる處とす。安城驛の南二里半、西端東端の兩村桃林あり、三里四方に互る、花天々として開くの時、天將に紅ならむとす。羽狩驛の北一里知立町あり、町の東十町なる【逢坂川】は、古八ッ橋を蜘蛛手に架したりと傳へ、今駒場の一堆丘の側なる芝生をさして、杜若の茂りし跡なりと説く、寺あり八橋山無量寺と呼び、業平の像を安んじ、堂後杜若を植えて昔日の傳を傳ふ。



かきつばた我に舞句の思ひあり

尾山深み

東海道本線、武豊線、中央本線

界川を渡れば尾張の國、【大府】は武豊線の分岐點なり、緒川、龜崎、半田を経て武豊に至る間、深美半島と相對して海岸に至る處風色に富む。武豊には海水浴場あり、【龍崎】は知多半島の絶端、武豊の南四里、海神を羽皇尊といひ、埴頭羽皇神社あり、四空の江山眺目極めて廣大なり。

大府を後にして大高驛に至れば、驛北九町敷を以て名高き鳴海町あり、古に歌はれたる千鳥の名所も、今海濱を遊ぶこと一里、鳴海は唯名のみとなり、宿臺の變遷に驚くべし。今川養元敗死の古戰場【捕鯨町】は、驛より一里餘、風聲悲しく鳥鳴哀なり。汽車熱川に至れば、長松落々の中逶迤として【熱川神社】を見る、宮は驛の東數町、日本武尊尊神の御劍を此に安置し給へるより、後世剛配永く其威威を仰ぎ、朝廷の崇敬接遇伊勢大廟に亞り。境域頗る宏闊、虹道四通して地に寸埃なし。華表八方に立ちて四境四門を築く、松杉等々四境に繁茂して神威を護り、靜かなること太古の如し。境の西南神苑あり、奇麗清泉配置宜しきを得、雅趣深し、苑内櫻樹多く、春風花雪を散るの時、花下逍遙の人多し。【八劍神社】は大宮の南にありて下宮と稱す。

【名古屋】は、三府に亞ける大都市、近時私かに中京の稱を立つるに至り。蓋し畿内、坂東の中間、尾張勢の江山別に一區



資を成し、此地恰も其腹心にあたるを以て、物資の輻輳商工の殷富、おのづから他に異なり。鐵道は東京より來る東海道本線、中央本線に合してまた岐れ、一は岐阜より近江を經、一は伊勢路を経て共に京阪に向ふ、又名古屋港に至る臨海線あり、榮港を完成するに至らば、將來の繁榮益々知らるべからざるのありむ。昨年三府二十八縣の聯合共進會を開會し、四方百萬の人士踴を接して雲集せしは、最新らしき事實に屬す。【城】は、徳川氏の蒲田、加藤以下二十六大名に命じて、築かしたる所、建築の宏壯、結構の雄偉「尾張名古屋は城で持つ」と語はれぬ。特に五層の天守閣は、加藤清正の自ら望んで造營せし所、閣上更に二疊の金櫓を置き、光輝朝暉に映じ夕暉を帯び、數里の遠き尚仰望すべし。

【若宮八幡宮】は市中第一の大社、境内廣く、樹木森々彩色瀟々が如し。西本願寺別院は門前町に、東本願寺別院は堀江町にあり、結構壯大なり。【大洲の觀音】は市人遊戯の向ふ處、稍東京の淺草に似たり。豊太閤及清正の生地として名高き【中村】は西一里、豐國神社を中心として、境内櫻を植ゑて移して公園とし、市西唯一の佳境として、市東の東山の風光と拉稱せらる。木曾路の勝を探らむとする人は、名古屋より中央本線に頼るべし、途次名勝多し、千種驛より一里なる【八半山】は、尾張高野山と稱し、風光秀麗なり、晚春の候御願山を蔽ふ。長徳の役、家康が織田氏の舊誼を重んじ、僅に送還三州の力を以て、豊太閤百萬の軍を制せし【小牧山】は、勝川驛より二里、今公園たり、山は廣漠たる平原に屹立する孤峰にして、形覆荷に似たり、老樹鬱鬱參天が如し。高藏寺驛より多治見驛に至る間、汽車は風景の美を以て鳴る玉野川に沿うて走り、旅情うた、爽然たり。【虎渓山水保寺】は東邊第一の勝境、土岐川の急瀾、奇巖怪石の間を屈折して走り、危崖高閣、崖に倚り流に枕んで眺望佳なり。全溪凡方一里、山あり水あり、皆永保寺の園地をなす、多治見驛より十町、中津川、坂下を過ぐれば、重巒せる山嶺車窓を展し、眼下藍翠の水激奔し、身ははやくも木曾驛原中の人となりたるを知るべし。

名古屋の大驛は枇杷島【蒲田町】は驛より一里を隔つ、地は信長勢興の處にして、天正の昔本州の都府たりき、城址は五條川の西畔にあり、老樹墳塚僅に當時の傳を残すあるのみ。【宮】は尾西鐵道の接續地、驛より六町、尾張の一ノ宮【龍山神社】あり、【妙興寺】は約半里殿堂古雅なり、尾張第一の貴刹とす。木曾川驛を過ぐれば、直に木曾川を渡る、川は尾張の境、東堤の櫻、川島の桃、近時世に著はれぬ。

【岐阜】は尾張平野の北端、飛騨高原を背にして長良川を帯び、山水清麗なり。【龍雲山】は又金華山といひ、市の東に屹立す、峯巒甚だ高からずと雖、平野の上にありて、山色秀潤、北長良川に臨みて、崖崖の間頗る趣あり。山の北端は岐阜の古城址にして、伊奈波神社、瑞龍寺、篠ヶ谷梅林等、其山麓にあり。

【鶴岡】は實に美濃の奇觀、長良の川、水石清淨にして多く香魚を生じ、其美古來人口に膾炙す。鶴岡あり、鶴を放つて香魚を捕らしむ、毎年五月中旬より始め、十月中旬に終る、月明を賑ふを以て、上弦の夜は、月の没するを俟つて出で、下弦の夜は、月の未だ出でざるに先だつ、鶴舟の數、一組五艘若しくは七艘、舟毎に篝火を點し、上流より且つ漁し且つ下る、宵氣陰凄のとき、火光水に映じて益の水面を渡るが如し。鶴匠鶴を繋げる十二條の繩を持し、



長良川の鶴

魚の篝火に集り来るを察して、暗暁に水中に放てば、舟子等を執つて船を亂打し、吐々聲を放つて鵜を勵ます。鵜は之に勢を得て、波を切り流を断ち、出沒浮沈端俛すべからず、船底に逸するの速なし、鵜已に七八尾を叩めば、則波上に浮び出づ、鵜匠を曳いて、嘴を開きて、水中に吐かめ、復水に入りしむ、その手業の早きこと、あやしく見事なり。觀者別に舟を繰りて之を見る、一夜の清遊夏已に無し。

このあたり目に見ゆるもの特徴し

長良川を渡りて種々驛を過ぎ、押妻川を渡れば【大垣】、戸田氏の舊地なり、【百鹿城】は驛より四町、關ヶ原の役、三成の諸將と軍議を凝らし、處、天守閣尚依然として仰ぐべし、今公園たり、【養老の瀧】は驛より三里、養老山中にあり、山甚だ高からずと雖、老樹鬱蒼石運磊落なり、瀧は高さ十五尺幅十尺、倒成の石壁支ふるものなく、水瀟々として落つ、瀑底唯一枚の岩石のみ、水の深き漸く膝を没するに過ぎず、人衣を棄けて直に膝下に至るべし、瀧を距る四町【養老神社】あり、祠畔樹古りて石頑、景趣寂寥なり、湧泉あり、これ養老改元の詔に致を述べたまへる、多度殿泉の址、泉性今變じて尋常の水となれり、垂非驛に至れば、左方【南宮山】驛として狩ゆ、山麓美濃一ノ宮南宮神社あり、驛の東方約一里、平野に隆起せる獨基の岡山あり、【御膳山】といふ、關ヶ原驛に於ける家康の宮址、築城遺跡の痕今に存す、【關ヶ原】は、關ヶ原驛附近一帯の高原、東西一里南北半里、東山道と桑名牧野の南北路、此原頭に相交り、四通の街を爲す、今鐵道は東岐阜、垂非より此に來りて長岡驛に向ひ、米原に於て分岐す、慶長五年九月十五日、三成家康の兩軍茲に相會して、屍山血河の修羅場を現したることは、今詳しく説くこと遺なし、當時の陣所皆木標を建て、この大體を傳ふ人々の聚をなせり、古の【不破關址】は、宇松尾の大木戸坂にあり、昔だにあれにし不破の關なれば、いまはさながら名のみなりけり

東海道本線

志賀の湖



關ヶ原を登りて尙西すれば、はや近江の國、右窓直に眼中に映じ來れるは【伊吹山】にして、長岡驛より一里半を隔つ、山は日本武尊の登陟ありしより、其名著はれ、江北の嶺出とす、海拔四千三百尺、形勢頗る雄偉、晚春尙殘雪を敷く、登の此山にて春霧に侵され給ひしを憶しまるらせたる、清泉【龍ヶ井】といふは、龍ヶ井驛の近くにあり、【米原】は北陸線に分岐點、【御膳山】の西岸下にして、朝雲の入江に臨む、時は驛より一里、絶頂望湖堂あり、瑠璃盤上に玉を投じたるが如き湖上の島山、一畔の下に集まり、東坡の【望湖樓下水如天】の一句、此處の爲に言ふもの、如し、驛の北【荒神山】といふ一座の岡山あり、往古湖の沙を以て富士を築き給ふ時、諸の神達運び疲れて、爰に暫く休みたまふ、其時足に附きたる沙聊か落ちて、此岡となれりといふ趣味ある傳説あり、【朝妻の里】は古の遊里として名高く、【養老神社】には尙舊祭の奇習を存す、  
米原より西、汽車は琵琶湖に近づきては離れ、離れてはまた近づく、車窓の眺望凡ならず、【彦根】は伊弉氏の舊地、西は太湖に臨み、北に東湖を瀆へ、水陸形勝の地なり、驛の前面金龜山の森林中に、白壁峻々たるは彦根城の天守閣、今公園たり、【樂々園】あり東湖に臨む、模造の八景を初め結構數奇を極む、三成の【佐和山城址】は町の東にある岡陵、今尙廢墟を存して満目蕭條たり、墓あり、往いて昔忠空しく挫折せる英魂を弔ふべし、岡の麓なる【大洞】は、支洞に臨める櫻の名所、一帯の白雲湧流と相映じて、花時最美觀を呈す、  
河津、能登川驛を過ぐれば、右に近く琵琶湖の一丈湖を望む、信長の【安土山】は其西北端にあり、今鐵道は城址の傍にて廢越隧道を通ず、遺墟殘壁僅に存

して、滿目蕭條悲風空しく舊時の山河を吹く、山腹信長信忠の像を安置せる遺蹟山麓見寺あり、間に倚りて湖山の景を見れば、朝雲霞散奇態千萬なり、  
田原藤太秀郷の靈塚遺治の傳説を以て有名な【三上山】は、又近江富士の名あり、山は南岩根山に續き、東は鏡山に接し、一峯翻り秀つと雖高からず、其蒼翠瀟瀟の風色、絶えて他の湖上の秀山に似ず、八幡驛を過ぎて野州驛に至れば、早くも左に此山容の美を見るべし、これより馬場に至る間、しばし其姿をあらはし、湖水の清澄と共に、車窓の人を樂しましむ、山の半腹に明現あり、八幡の長命寺、石部の金勝寺と共に、湖水觀望の絶勝として向の、  
蛇ヶ餅を以て有名な【草津】は、古より東海中仙兩街道の分岐點として、繁華なる宿驛をなし、今朽木に至る草津線の分岐點なり、日本六玉川の一にして秋の名所たる、野路の玉川は驛より半里を隔つ、  
汽車石山、馬場に至つて湖島の景更に新なり、見よ周廻七十餘里の烟波、濛濛として碧落を映す、春は融陽に秋は澄爽に、朝陰を籠め夕暉を盈し、浮嵐暖翠千萬の狀を呈し、時として清ならざるなく、處として奇ならざるなし、幾代の詩人徒に吟詠を發して、この湖の晴好雨奇の勝を、遺蹟する能はざるに汝く、三井院、石山秋月、翠田落雁、翠津晴嵐、矢橋歸帆、比良春雪、唐崎夜雨、勢田夕照、所謂近江八景とは即ちこれ、近衛關白の瀟湘八景に擬して選まれたるもの、人傑に之に於て、この勝の片影を覗ふことを得、  
【三井寺】は馬場驛より二十四町、海内屈指の寶刹なり、寺は高きに居り、四顧洞達、俯して太湖を望み、八景概指點すべし、湖の左方宛然屏風を樹てたるが如きは比良の山、春風尙未だ江州に至らざる間、峯頭の白雪夕暉に照る、翠雲地を蔽ふ數百坪、支柱數百基を以て垂枝を支ふる唐崎の松は、さながら盆に栽ふたる輩の如く、碧澗に沿つて小し、「にほてるや矢馳の渡りする舟をいくそたじしつ」



びて、近く石山の柔情に對す、【石山】は山背石、其名に背かず、石は世に謂ふ太湖石に類して、更に妙なるを覺ゆ、山の高き處觀月亭あり、清風稀星の夜、玉兔湖心に落ちて山水香葩、關頭の客神浸み氣平に、身の塵世にあるを忘れむ、此地又雲を以て著はる、山の北方雲谷より流雲幾千萬、湖上爲に閑なかりむとす、馬場驛よりの遊所、三井は已に説けり、【矢橋】は湖上一里舟して至るべし、唐崎の松は二里、【唐崎神社】あり、明智左馬助既に山崎に敗れて走り、大津に至りて堀秀政の軍に逢ふ、一鞭馬を躍らせて湖水を渡り、この松の汀に上る、追ふもの波を鳴して、其威容の壯なるを嘆稱しき、【翠田】は四里半、水に枕める蒲月寺より、汀岸の遊一橋を通じて、湖中に觀音堂を置く、澄見堂これなり、鴻雁飛行更に孤ならず、晚風月を帯びて東湖に落つるの時、遊子一味の新愁を覺えむ、【比良山】は八里、山勢雄偉、絶頂を遙索と名づく、獅子谷に浴澤あり、



唐 詠別に亦悲痛の感を伴ふ、いはゆる志賀の部の址は、今の幸崎より粟津までの地、崇徳寺の廢墟に立ちて、思を千年に馳すれば、「いにしへの人にわれあれや樂浪のふるき都を見れば悲しき 古人」  
石山の驛を下れば【粟津ヶ原】、平松一帯道を挟み、勢田川を東に望む風光得も言はれず、壽永二年藤仲上京の時、茲處にて平家の軍を破りしが、半歳にしてまた茲に破死す、墓は馬場の【養仲寺】にあり、「木會殿と背中はあはせの寒さかな、排聖凶黨其傍に盛を安んず、勢田の唐橋は大小二橋百二十間、高欄古色を帯びて、  
三 勢田の橋守、風帆吹仄して矢馳に向ふ處、驛口新なり、湖水勢田の西に響まり、一條の川となるところ、橋あり中二つ絶えて一線に通じ、更に又一橋を起すもの、これ「永き日や幾とつれだつ勢田の橋」なり、川の西堂塔を圍んで、岩樹の屹立するものは石山寺、にほてる月のさやけさは、もうこしまでも盛りながらむ、  
寺の西方に聳ゆるは【長等山】、「さ、なみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな、忠度の

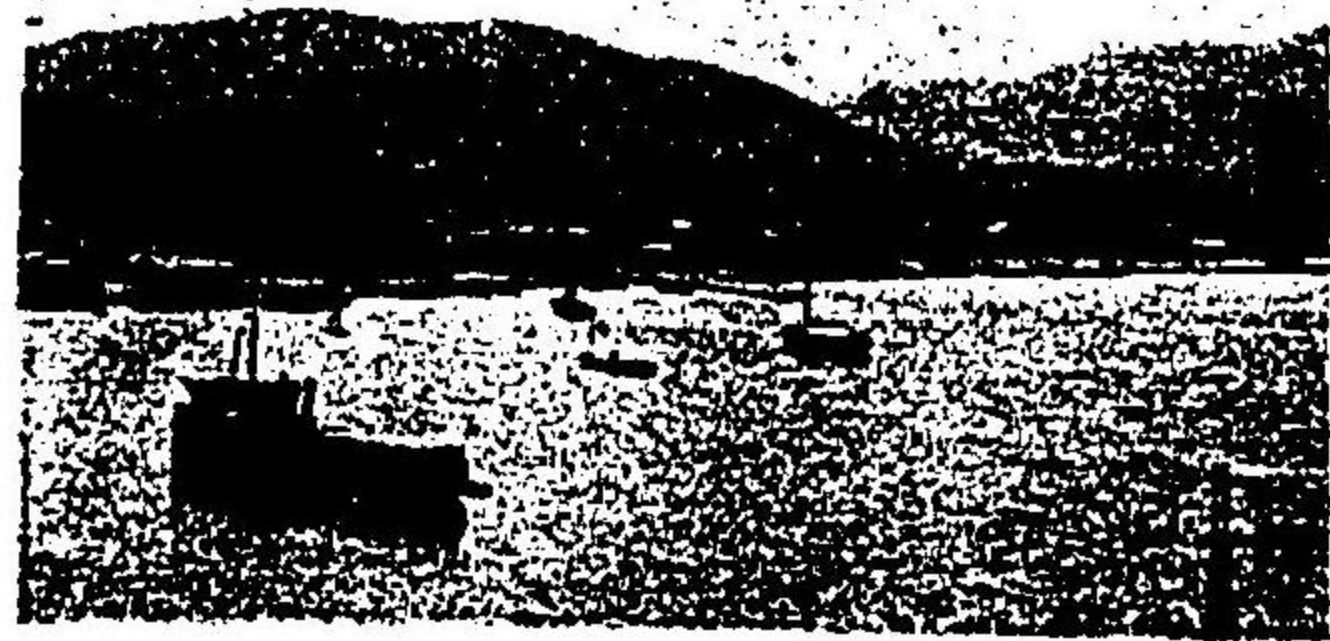
# 小湊の跡

北陸本線、七尾線

米原より北、汽車は琵琶湖を左に見て北陸に入る。【竹生島】は湖上の名島、長濱驛より航路三里なり。斷崖峭壁立神巧鬼窟の趣あり、老樹蒼蒼として湖光山色に掩映し、勝絶言ふべからず。一級樹影沈石木、月浮海上乘奔波」とは、空海の詠せし處、巖を礎にして辨財天の祠あり、桃山築城の一遊を移し構へたるものなりと云ふ。

七木松を以て名高き【松ヶ嶽】は、木の本驛より三十町、登攀十二町に過ぎず、山は余吾、琵琶湖の隔障をなし、北國街道に臨む、松嶽寺と名ひ、叱咤突撃、柴田羽柴の奮戦を思はしむ。木の木より汽車は余吾の湖を左に見つ、柳ヶ瀬に至る、天正中織田、朝倉並に羽柴、柴田の大戦ありしを以て知らる、柳ヶ瀬山は驛より十六町、今般道はこの山脈の一端に隧道を通じて越前に入る。

【敦賀】は敦賀川の南流にして、日本海往來の船泊地たるのみならず、谷領通關驛との交通門戸たり、琵琶湖と湖と磯に一嶺を隔て、木邦中原に於て、要害無雙の點にあり、海山の景亦甚美なり。驛を出づれば直に【北陸神社】仲哀天皇の御廟なり、廟宇壯麗境内廣く幽邃静すべし、祠廟の大華表は、海内多数の古建築なりといふ。海は即ち氣比の海、一帯の松原亦其名に呼ばる。白沙道々として碧海に枕せ、松風々として琴聲絶えず、松園【松原神社】あり、武田謙光、藤田小四郎等の靈を祀る。辨財天の勝は風に世に聞の、海路半里に過ぎず。



南朝の悲事なんぞ人を泣かしむること多きや、金崎落城の如き其最なるもの、延元元年の冬、管良和良の兩親王、新田一族を率ゐて金崎に入城、足利の勢と大戦數度、管良終に自刃したまふ、和良は賊手に捕へられ、後藤を仰いで無残なる最後を遂げさせらる。地は敦賀の東北八町なる小湊、兩日向の西湖あり、巧に相連綴して肢節複雑し、風光佳なり、安賀里を経て遠敷に至れば若狹彦、若狹磯神社あり、今國幣中社たり。小湊は遠敷より一里、敦賀へ十三里、舞鶴へ十一里、北陸山陰連絡の要衝たり、地は酒井氏の舊領地にして、城址は南北兩川の合流して海に注ぐ岸にあり、海は松ヶ嶽、湖の兩側東西より突出して海門を作るを以て、風濤奔騰の口も平靜にして、北海航行の避難所たるを得、殊に其風光頗る明媚に、山海の美容易に他に見るべからざるものあり、町の西端青井山麓梅田雪道の碑あり。松ヶ嶽の外壁太平洋に面するところ、嵯峨登立、島嶼起伏、怪石之に激して奇勝多し、中に大門小門の勝景聞の、小湊より西、道は常に風光明媚なる小湊灣に滑りて木津に至り、それより尾大なる大島の峯頂を右に仰ぎつ、湖水の如き入江に滑り、和川を過ぎて高濱に至る、一岬あり海中に突出す、これを天王山といふ、海山の景頗る佳なり、高濱より二里餘、吉坂岬は若丹の岬、新舞鶴は程近し。

敦賀を後にすれば、汽車は幾度か木の芽峠の隧道を出入して北に向ふ、其間左に敦賀灣の風光あり、うた、眼界の清静なるを愛の。山間の驛を【杉江】といふ、經驛の半腹にありて、眺眺甚佳なり。

【武生】は古の府中越前の國境たりき、前田利家終に居城し、徳川氏の世も多氏の領たりき、結江、大土内を過ぐれば【福井】地は西南に足羽山を控へ、足羽川内を貫流し、土地平坦にして、越前に於ける一大盆地の地方的中心を爲すが故に、其發達顯著なり。柴田勝家の雄略せし古の北ノ庄は即ち故處、近世松平氏之に居り北陸の雄藩たりき。城址は驛より二町、學堂の設厚大にして、樓閣垣垣撤去の餘、尙舊時の盛觀を想ふに足る。足羽川に架せる九十九橋を渡りて南すれば【足羽山】今公園たり、眺望廣闊、晚春櫻花爛漫たり、東面に新田義貞及其一族を祀れる藤島神社あり、義貞の墓ある長崎村、義貞の討死せし地明寺驛亦遠からず。山麓善慶寺内烈士【橋本左内】の墓あり。【永平寺】は、驛より四里、永平寺山の麓、幽溪の窮處にあり、枯木寒岩の色、鳥聲風韻の音、おのづから世間に異り、曹洞宗の大本山とす、道元禪師の開基、一邦幾千里を遊けて、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、奇き故ありとかや。【西菰】の記せし是なり。

足羽川は福井市街を貫流して後、日野川と合し、木は九頭龍川に入り、【三國進】に於て海洋に出づ。三國は古より隠れなき北陸道の海市、今津驛より一里半を隔つ。三國神社あり、一堆の小丘古木繁茂し、日本海の展望雄大なり。岸に沿つて北に続れば安東崎、崎頭樹木鬱生せる雄島を控へ、一帯の斷崖海に臨む處、俗に【東安坊】の稱あり、岬端二町四方に廣り千餘畝と稱す、斷崖絶壁の下、海水深碧にして源をなし、高僧善差神工鬼聖の奇觀を呈す。【盛原温泉】は三國の東方、驛より約一里、泉は近時の發見に係り、温井を地下に穿ちて噴溢するもの、無色透明にして臭氣なければ、味甚鹹なり。

細川本驛より一里半、【北江】の入江あり、沙丘樹園之を圍みて口を北方に開く、大聖寺川北東より來りて入江に接し、共に海洋に通ず、之を堀切と名づく、堀切の岸頭なる木願寺は、世に【吉崎御坊】といひ、蓮如上人の創立する處、鎌倉谷の奇蹟を傳ふ、北國門徒仰ぎて御祈禱の第一と爲す。

細川本より高洞山の隧道を過ぐれば加賀の國、幾くもなく【大聖寺町】の真雲を見るべし。大聖寺川の土流、兩岸の山嶽峭立して相迫る所、北陸第一の礦泉【山中温泉】あり、川は岸高くして斷崖に連り、橋あり懸橋と名づく、風色清絶なり、夏夜橋上に立ちて、蟋蟀の鳴く音に、心耳を浸す人多し、下流通明湖あり、深淵一泓鏡の如く、山影相映じて俗塵絶す、黒谷橋の眺望蟋蟀橋に譲らず。【山代温泉】は大聖寺町御祈禱より共に一里餘、風光の美なれば設備整へり、宇越中谷に九谷陶器製造所あり。



【舟谷の観音堂】は古來世に開えし靈場なり、動橋驛より一里餘、山嶽岩洞の形状頗る奇異、摩訶羅刹猛虎窟の如し、蓋加州中の最奇境か、春花秋錦の勝また此地方に冠たりといふ。驛の北【柴山】あり、其西南岸を丹山津といひ、鹽類泉湧出す、山水の勝あり又急流するに足る。湯の西北日本海に瀕するの邊、松林一帯の青を掩きて松嶺々たり、松間村あり篠原といふ、齊藤實盛が墓に在りて、潔き最後を遂げし處、老松の下小やかなる墓あり、人をして當年悲事の情に堪へざらしむ。【しほらしき名】や小松吹く萩すき、小松町の【多女八幡】には、齊藤實盛の鎮座の遺蹟を藏す、勸進帳によりて名高き【安宅の關】は、小松驛の西二十町、安宅の海岸に設けられたる、北陸の關門なりしかど、治承の變今其址を尋ぬるに由なし。今江村の三河寮は驛より一里、今江、木場、柴山の三湯の眺望地、風光清麗なり。小松驛より鐵路次第に海岸に近づき、荒川驛に至りて直に日本海に臨む、小湊子流の名あり。併人千代の生れし松江驛を過ぐれば、はや金澤なり。

【金澤】は元前田氏百萬石の城府、市の中央二丘陵の連なる所は、即ち城址にして、又有名なる集六公園のある處、園は驛より十七町、日本三公園の一として知らる、文政元年金澤公の經營に係り、宏天、幽邃、人力、昔古、水泉、眺望の六勝を兼有すとの意を以て、自河樂翁公の命名せられたるもの、池沼濶布あり、松杉鬱葱、花木研麗、泉石奇樹皆雅致を極む、園中の山を紅葉山、船遊山、雲霧山と稱し、水を霞ヶ池、瓢ヶ池と云ふ、瓢ヶ池の畔に湖邊を極め、湯あり琴湯と稱し、これに對する一小亭を琴亭といふ、結構頗る古雅なり、これより北に進めば樹木鬱蒼、人をして身の公園中にあるを忘れしむ。霞ヶ池の畔春花秋葉の美あり、又眺望に富む、池に近く唐崎の松の種子を植ゑたる老松と、有名なる改修遊園とあり、其他曲水の幽趣揚すべきあり、鶴島鳥の蹄躰、秋に宜しきあり。



山中温泉

能登、橋附近の杜若に宜しきあり、四時遊杖を曳くに足れり、園に隣れる一樓閣は曾て藩主夫人の隠居に在りたるもの、成異園といふ、結構甚麗なり。

【卯辰山】は縣より十五町、金澤城と相對せるを以て俗に向山と稱す、登臨すれば街市眼下に指點すべく、近郊遺存の衆、日本海の煙波、河北海の藍碧一眸中にあり。【野田山】は市街の南、山上藩祖利家以下歴代の墳墓あり、利家の墓を祀れる【辰山神社】は上松原町にあり、社地は前田家の別荘にして、館を金谷と稱し、其風景を皆樂臺に擬り、泉本堂山を設く、神門は石造にして三層、洋風を擬せり。

【白山】は日本三山の第一、海拔八千六百八十一尺、白山の名にあらはれて三越路や峯なる雪の消ゆる日となし、峯頭五箇に岐れ、大御前を主宰とす。【強陀ヶ原】は廣き平方里、黒百合、花菖蒲を初とし、種々なる草花咲きたれて、盛夏仲春の觀をなす、原より上、五葉の松と同種なる偃松、満山を蔽ひ、其間鶴鳥の人珍らしげに飛鳴する光景、全く下界の風色と異なり。絶頂白山本宮に詣れば、吸壁直に上天に通ずるが如く、峯々として三十六天の外、別に一天をなすを覺ゆ。見渡せば加賀、越前、美濃、信濃、越中、能登の國々眼下にあり、雄偉壯大なる飛騨の日本アルプス山系も、我に仕ふるが如く、天晴るの時、遙かに富士の靈峯と相點頭くべし。七月十八日山開をなし、九月一日に閉づ、金澤より山麓白家村まで十六里なり。



白山の雪はしらの雪けかな 道 興

金澤より【河北海】を左にして北すれば津波、七尾嶺の分岐點なり、海は一條の阜小なる沙丘を以て海洋と相對して風景佳なり。錢屋五兵衛が理立の工を起し、遂に罪科の一となりて、磔刑に處せられしはこの海なり。木曾義仲が火牛の計を用ひて平氏の大軍を殲殺せし【信利伽羅峠】は、縣より一里半、加越の界嶺にして、鐵道は茲に一個の隧道を穿りて越中の石動に至る。石動より福岡を經れば、平野漸く開けて【高岡】に至る、城址は今高岡公園といひ、射水神社を鎮す、櫻馬場あり也。沿川より鐵路海岸に沿つて【魚津】に至る、近海蟹類の現象あるを以て古來世に聞ゆ、泊は北陸線の終點、縣より二里餘、小川の上流に小川温泉あり、山間の勝地なり。泊より二里境川を渡れば道越後に入る、直江津に至りて信越線と接続すべき直線は今工事中なり、市振より青海まで四里餘の間、飛騨山脈の一風直に海に臨み、路は其絶壁を削れる間に通ず、所謂【親不知子不知】の險と稱する所は、懸崖の下狂瀉の衝に當り道路崩潰に堪はら、行人間を候て疾走す、若し風潮俄に至れば、山壁の窟中に難を避く、此際歩武の遲速を生死を分つ、子親を扶け、親子を顧みるの暇なしと此名あり、今はこの絶壁を開鑿して坦々たる大途を開き、其絶壁に「如紙如矢」の字を刻せり、此所臨等頗る雄大、佐波島遙に能登半島と相對して、水天駭駭の間一對の青嶺深へり。青海より縣川を渡れば糸魚川町、もと松平氏の城也たりき、糸魚川より三里にして能生、能生神社あり、山上に懸架し、風景甚多し、祠前の海中巨殿あり、松海風に靡せられて姿體愛すべし。能生より三里にして名立、亦類海の一驛なり、地は古地蔵の



二 同 高山大嶽並く眼界に入り、其眺望の洞大にして雄偉なる、殆ど人をして忘我の境に遊ばしむ。富山より東岩瀬、水橋を

爲め背後の山岳崩壊して全村これが爲に埋れたる所、南溪の名立册の一文世に知られぬ。名立を過れば鳥羽崎海中に突出す、岬に沿つて海岸をめぐり、長濱を經れば越後國府の所在地たりし五智に至る、地は直江津を距る半里餘風景甚佳なり、國分寺あり、今古の壯觀なしと雖、五智如來の名世に聞ゆ。【新瀨軍營秋氣浦、越山併能州城】と、謙信の跡せし能登は、加賀越中兩國を根柢として、遙に日本海に突出せる半島にして、風色多く人の口に上らず、内浦路外浦路、諸運轉運車備へて、人の訪ふなきを恐むるが如し。明細なる七尾崎、秀麗なる九十九入、雄偉なる越前崎、海山の光景變又轉、うた、遊子の目を樂しましむるものあり。津幡驛より七尾嶺に乗り換へ、木津橋、宇野氣、横山を経て高松驛に至る間、地として松影ならざるなく、處として白沙ならざるなく、荒涼たる風光、地の漸く僻處に入るを思はしむ。高松よりやがて能登の國に入り、寶達、敷波を過れば狛野、海岸平原の中心點なり。【能登神社】は能登國の一ノ宮、大國主神の神跡とす、山内古木森々として枝を交へ、幽邃を極む。狛野より鐵路海岸を離れ、右に鏡の如き湖池たる【益知沼】の風光を眺め、【石動山】の翠嶺を仰ぎ、次第に七尾港に近づく。徳川驛を過れば地勢漸く廣闊、やがて風情ある【七尾港】の五穀粉雪、宛然然林林の如く車窓に迫る、地は日本海岸屈指の良港、水深く波靜にして、よく大艦巨船を容る、に足れり。【七尾城址】は茲より一里餘、謙信の吟は實に此城を陥たる時、後翌十三夜にあひて、成興に觸れたるものなり。【和合温泉】は茲より二里海邊にあり、海水水色の美に富む。能登の海に釣すあまのいざり火の



知 不 説

# 伊勢詣

關西本線、桑宮驛

社頭新世  
とこしへに民やすかれと祈るなる  
我世を守れ伊勢の大神  
皇后宮御製  
ゆるぎなき世をなほ祈るかな

五十鈴川の土、神路山の麓、神さびたる一區の淨地あり、これ國家無上の大祀、天祖天照皇大神を奉祀せる、大廟の在る處なり、凡そ此土に生を享くるもの、誰か誠懇誠惶、神徳を尊崇せざるものあらむや。名古屋より西鐵路二つに岐れ、東海道本線は美濃、近江を経て京都に向ひ、關西本線は伊勢、伊賀を越えて、奈良より大阪を指す、神都に詣てむには、東西いづれよりするも、この關西線により、龜山より桑宮驛に乗り換ふ。名古屋驛を發して愛知、蟹江を過れば彌富、尾西鐵道の接續地なり。木曾川の長橋を渡れば伊勢國、汽車は再び揖斐川の長橋を渡りて【桑名】に至る、地は桑名公の故地城址尚存す。【多度山】は縣より西北三里、八景谷の幽溪勝跡に聞ゆ、山麓多度神社あり、富田驛の南方白砂青松相連る處、【霞ヶ浦】といふ、波濤にして潮水深からず、海水浴の適地なり。【四日市】は伊勢海灣の大埠頭、貨物の集散地なり。【菟野温泉】は縣の北西四里、湯ノ山にあり、山は幽邃の境、三面岩壁に圍まれ、東方遙に開けて、伊勢灣を隔て巨の平原を望むべし。河原田、加佐登を過れば【龜山】、舊石川氏の城下、桑宮驛の分岐點なり。驛より一

里餘日本武尊の御陵、能登野陵あり、英魂空しくここに終すまた悲しからずや、陵傍尊を祀れる【能登野神社】あり、老松古杉森然として神威威厳かなり。

汽車通山より南し、下川を過ぎて一身田に至る、【専修寺】の所在地なり、寺は眞宗高田派の本山にして、見真大師一向専修の法燈を相承し、花多多く東國に行はる、佛殿組堂以下諸宇麗々たり。【津】は古の安濃津、菟原堂氏の城市、街衢整然百貨備極、伊勢は津で持つ」の俗語、實に諺言にあらず。驛は二、北部に津驛あり、南部に、阿漕驛あり、津驛より二町なる【津公園】は安濃川に臨める丘陵にして、元藤堂氏の別業、關西屈指の良園なり、東陽高田神社あり瀟灑高敞を祀る。中河原一帯海濱遠淺にして潮清し、海水浴地なり。阿漕驛附近は歌枕に名高き【阿漕ヶ浦】、波靜に渚遠く、松香にして沙白し、また海水浴の適地、松間【結城神社】あり、結城宗茂を祀る。かの釋史に有名な阿漕平次の家は、字柳山老樹鬱たる間にあり。

【奈良州浦】は風光伊勢浦第一と稱せられ、海水浴地として知らる、高茶屋驛より三十五町、林間奈良州神社あり、湖畔の風光佳吉に似たり。高茶屋より六間を過ぐれば【松坂】、木居翁の生地として古く世に知らる、墓は町の西南山登山の嶺、櫻樹茂れる下に在り。【松坂公園】は眺望に富む、鈴の家書齋今この園内にあり。園の東北角を祀れる山守神社あり。汽車宮川の長橋を渡りて山田に至る、大剛は内外の二宮に分れ、内宮【皇大神宮】と稱し奉りて、五十鈴の川上、外宮は【豐受大神宮】と稱し奉りて、高倉の山麓に鎮り坐せり、奉拜の順序は各人の任意なれども、勅使奉向の大祭は、悉く外宮を先とし内宮を後にせらる。

外宮は驛より五町、雄略の御世今、



伊勢の雄略の御世今、

【見浦】は山田より二里電車の便あり、沙白く松青き長打曲浦に、【天婦岩】の危巖波に洗はれて、自然の門戸の如く、兩々對峙するの美觀、何を以て例ふべしや、若し夫れ天の一角やうく、曉の色を帯びつ、浪路はるかに一條の紅を呈して、兩岩の眞唯中より、朝暉運々として上るの光景は、夙に天下の絶景と稱せらる、所なり。【朝熊山】は風光の美、神都中第一と稱せらる、山田よりは二里、二見浦よりは一里餘なり、海拔一千七百尺、朝熊神社あり、眼下伊勢の海品々として一大鏡をなし、大島小嶼烟波に浮び、白帆點々其間を縫ふ。【鳥羽港】は二見浦の東一里餘、再稻垣氏の城市、城址は海に枕みて一廓をなし、風景佳なり、【日和山】は町の西北に屹立する丘陵、眼界極めて廣く、大小の島、縱横に羅列し、右は城址左は小濱の岬、巻尾の海山をも併せ收む。

伊勢の海のおまの志摩津があらびだま

よりて後かしのしげむ

告知せらる、特に明治三十七八年役を畢りて、平和克復するや、聯合艦隊先づ來りて安に詣りて、尋で車駕親臨、混しく克捷奉告の祭を行はせられぬ、蓋し歴古の盛儀なりとす。

おりたむむことしかし神垣や

伊勢瀨川の清きながれば

【山田】に興がるも面白し、電車の便によるも亦可なり。宇治橋に至れば五十鈴川流は澄み、神路山は社に渡りたり。橋を渡れば即神苑、一道の芝生緑毯を展べたるが如き間、稚松を點綴して地に寸埃なし、清涼の氣身に通りて、我已に塵世をはなれる、こと遠きを覺ゆ。苑内大山大將奉獻の巨砲と、東郷大將奉獻の大砲あり、前者は二十七年役、後者は三十七八年役の戦利品として、共に神明加護の謝恩を表せる絶好の紀念、賽者肅然として襟を正さざるなし。漸く進めば老杉古樹森然として天を衝き、蒼古幽邃の趣、異高の情に堪へざるものあり。一、鳥井を経て、五十鈴川の水に口噴きて左に轉じ、二ノ鳥居をくぐり、御垣の下に跪きて拜すれば、森々たる木立に風靜に渡りて、神下りますかと宮居尊く、清淨無垢なる白木造に一點の塵も許さず、額づけば得もしらぬ美き瀟り移りて、衣の香ばしきも破しく、木の間より洩れ来る日の御影の威かたるを仰ぎては、赤けなきに涙のはり落つるを禁じ得ざるべし。宮は崇神の御世までは、宮中に奉祀せられしを、神威を祈し奉らむことを恐れしめて、大和の宮の里に移し奉らる。後垂仁の御世、倭姫命神海を請けて、今の地に奉祀せられぬ、御靈代は畏くも八咫の御鏡にして、三種の御神器の一なり。そもく内外兩大宮が皇室の宗廟として、衆國尊崇の中心たるは、更めて説く要なし、されば四時の祭祀最盛を極め、事あれば必ず勅使遣はして奉



伊勢の雄略の御世今、

勢州餘部ノ關より伊賀の栢根に踏え、山城の笠置に向ひ、以て京都、奈良、大阪に通ずるは、即ち古の【伊賀越】、今鐵道は龜山より關を経て、栢根に至りて二分し、一は北折して津田に向ひ、一は上野を経て笠置に向ふ。栢根は實に非聖芭蕉の誕生地、碑あり阿加の水絶ゆることなし。

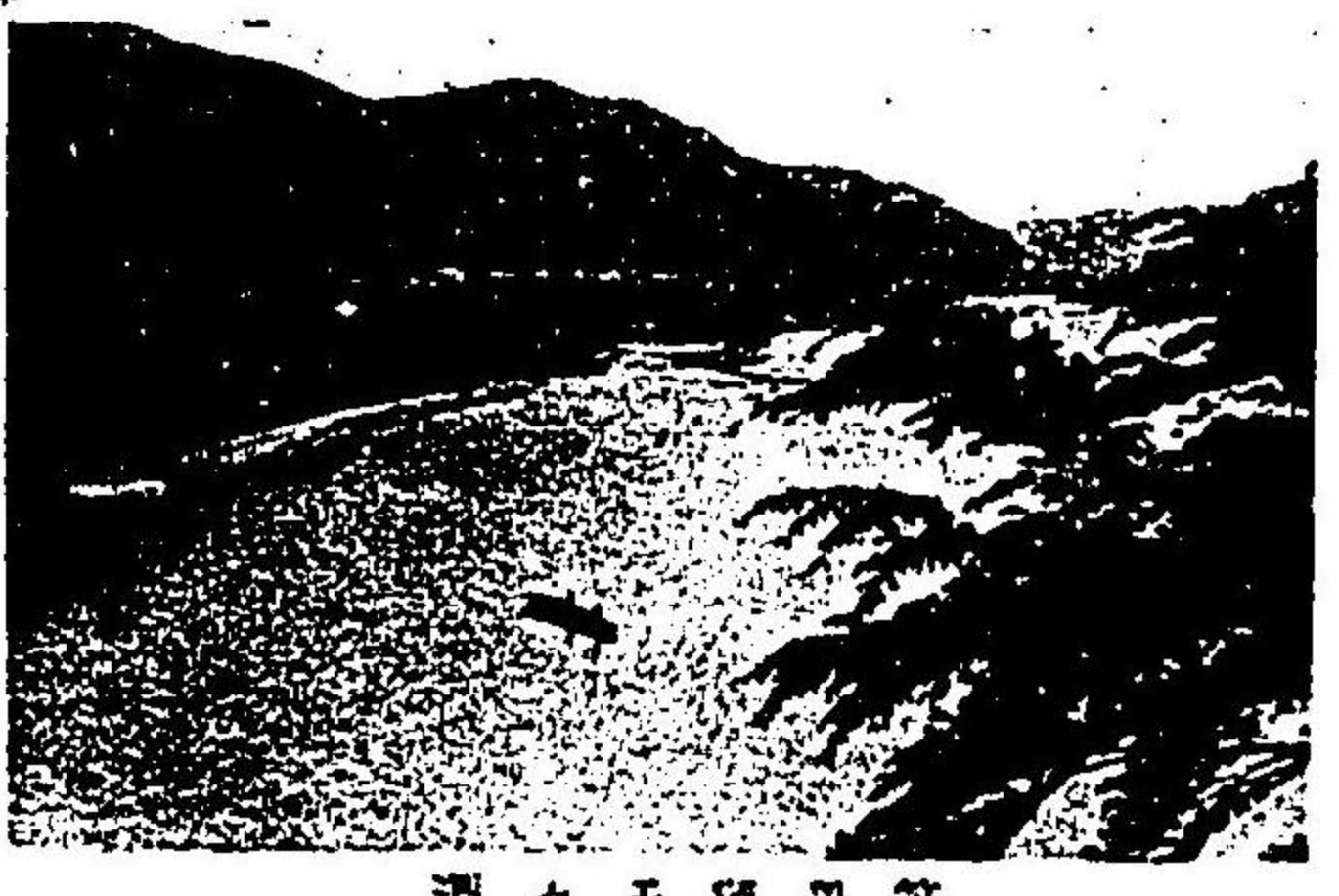
【上野】は伊賀盆地の中心、菟原堂氏の支鎮、城址今公園たり、町の北隅老樹喬木の鬱茂せるあるを見るものこれ。愛染院内芭蕉の故塚あり。郊外【鐘屋辻】は伊賀越の復讐によりて名高し。【岩倉峽】は巖石の奇を以て鳴る、驛の西凡そ二十五町、長田、服部二川合流する處を、峽の入口とす。【赤川十八瀬】は伊賀第一の壯觀、人將に仙ならむとす。此地怪石紛錯して梅と鐘を争ふ、河心亦巉石嶙峋し、流水石を啣んで懸奔怒號す、拙堂の記水石の奇に及ばざるは惜しむべし。溪また杜鵑花多し、夏月花燃えて、水銀血の色をなす、これ瀧瀧川の稱ある所以、月潮の遊尊唯梅時のみを遊ばむや、上野よりは四里、鳥ヶ原驛よりは二里半にして至るべし。

汽車本津川に沿つて山城に入り、笠置山麓を走る、四邊の風光一幅の畫圖を展開せるが如し、【笠置】は山高くして一片の白雲峯を埋め、谷深くして萬仞の蒼蒼路を遮る。古は笠置寺、岩に架し崖に倚りて、殿閣宏壯なるものありしかど、元弘の亂一山焚燬し盡して、今殘坊あるのみ。行宮の址、荒草靡々として方三百歩、「さして行く笠置の山を出でしより天が下にはかくれがもなし」、悲願を懸かるに忍びざるものあり。笠置寺野小丘の上、毘沙門天の小祠あり、帝の夢に二童子と語りて忠臣桶子を得、桶子盛激して進調したるの址。山上石の名あるもの多し、驛より山頂まで十町に過ぎず、山麓【笠置温泉】あり、川の鮎漁は瀟瀟の一興。

磯路本津に至りて十字形をなす、京都よりこゝに來り、奈良長に通ずるは奈良線、四條驛を経て櫻ノ宮に至り、大阪に通ずるは櫻ノ宮線なり、南すれば路大和に入りて、奈良の古都に至るべし。

磯のぞく奈良のまやこの桐の如

千 那



伊勢の雄略の御世今、

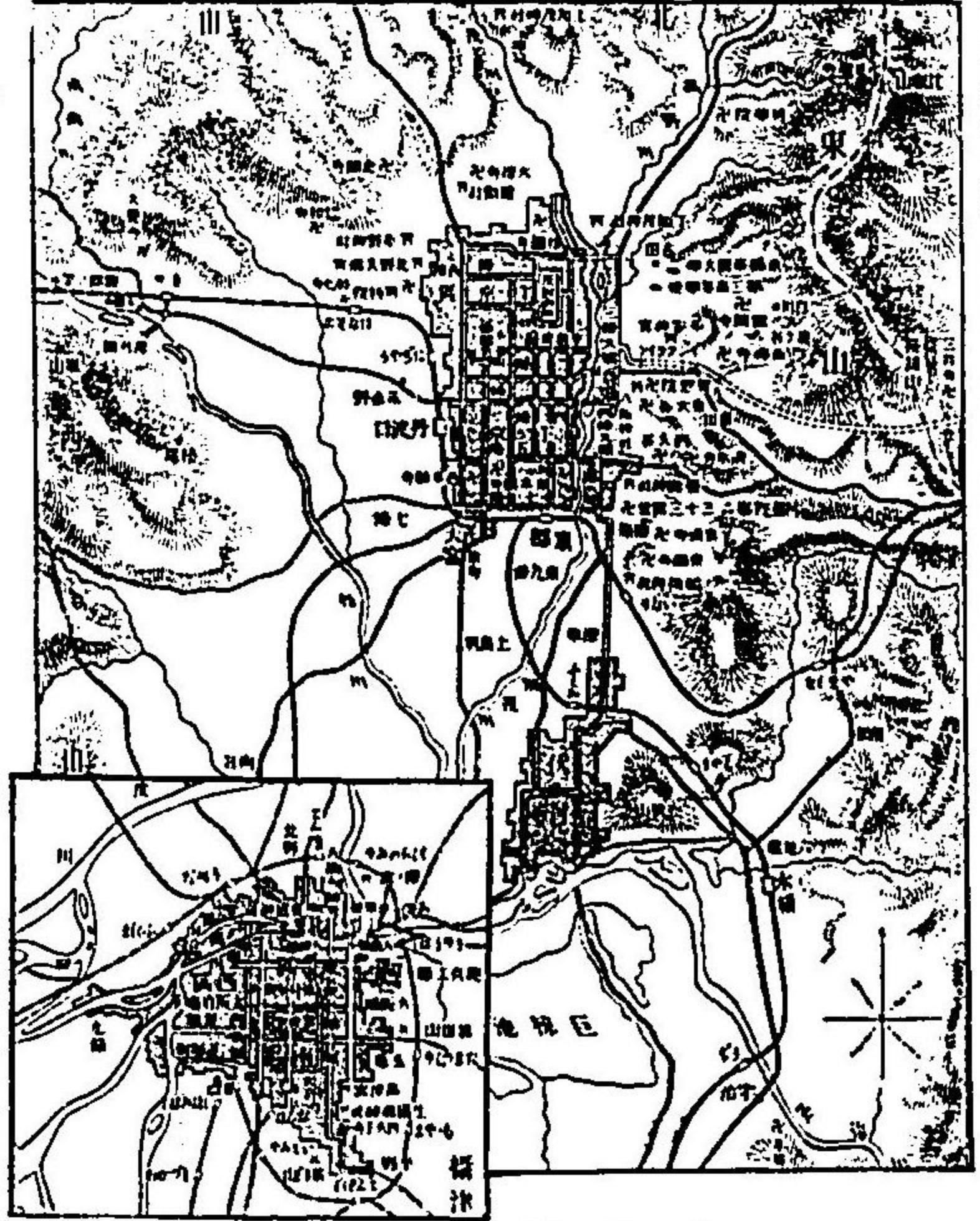
琵琶湖の風光を後にして、遠坂山の隧を出れば大谷驛、山は昔時遠坂の脚を置かれし處、驛を後にすればやがて山城の國、右方山に沿うて、一條の堤防長く續くを見るは疏水なり。『山科』は大石長雄國後の地として知らる、舊址今寺院となつて存し、右に續きて將軍塚あり。深草少將の住みにし址は、鶉の聲淋しく、小町の塚の邊り、秋草赤に伏せり。稻荷山の前高く峙つは稻荷山、山麓『稻荷神社』あり、朱欄丹楹並立して老杉の翠と相映じ、其美なり。鴨川の陂橋を渡れば、右に一帶の連山蜿蜒として互るを見る、これ東山なり。

【京都】は山背水明の地、東山の麓、西山の翠、鴨川の清、大津川の奇、一帯一帯其趣をかへて、人を賦かしめず、海濱日備懸々として歸るを忘れしむ。まして桓武の帝の此處を大宮處と定め給ひしより、七十二朝一千餘年の星霜に續りなされたる、美術工藝の花の匂ひは、また世に比すべきものもあらず、なべて世の美といふ辭は、唯此里にのみ占められて、山水の美、樓臺の美、風俗の美なると共に、人も亦美の美を披き、艶の艶を袖きて、鴨東の春色香ならず、晴す肩に翻る袂の風に吹かれては、人の心も和らぐべし。汽車は市の西部を経て保津川の給谷を湖りて岡部に至り、更に和知川に沿うて總部に至る京都線あり、伏見、宇治を経て大津に至る奈良線あり。【御所】は市の中央北部にあり、明治二年三月奉遷東遷、東京に宮城を定め給ひしより別宮となれり。されど尙大號を存し、皇宮森嚴、寢殿清輝、其觀を改めず、即位の大禮及大嘗會の大式、永世茲に行はせらる、蓋桓武の遺範を準修せらるるもの、洪武無窮瞻望に餘りあり。【二條城】は今隆宮たり、家康關ヶ原戰捷の勢に乗じ、大に關西の諸侯に課役して造營し、以て上京駐蹕の處とせり。慶應三年十月、十五代將軍慶喜此に在り、つらく國家の形勢に見る所あり、遂に大政返上をなす、明治維新の偉業に一道の光明を與へたるは、實に此城なり。規模宏大ならずと雖、其建築は徳川時代の粹を凝らし、ものなりといふ。

【蒲團寺】は遠坂の姿や東山、北如意嶽より南稻荷山まで、鴨東三十六峯總じて『東山』といふ、形容濶濶にして峭峻の狀なし、山の半腹より麓にかけて、世に開えたる勝地相連り、逡巡數日尙日の足らざるを思ふ。

四條の大橋を渡りて、伏見街道を下れば建仁寺、寺の東西一帶の地は、平家重代の館址を置きたる六波羅なり。【方廣寺】は右名なる大佛殿、秀吉の創建する所、洪鐘あり、路中の國家安康の四字、遂に大阪役の原因をなし、豊臣氏の滅亡となりぬ。寺の南『豐國神社』あり、寛永年間豐國廟崩壊せられしより、風雨三百年、今や枯骨再び花咲きて、偉大なる堂域を見るに至る。社前耳塚あり、五輪大石の塔なり、これより一路東に一丁目とて東に向ひ、數百級の石階を登れば、阿彌陀ヶ堂にして、即ち蓋世の美傑の骨を埋むる處。【三十三間堂】は後白河天皇の勅願、當佛佛多し、これより一路東に折れて盡くる處は、『泉涌寺』、寺行の正殿、孝明天皇、及美照皇太后の御陵あり、伏見街道を尙南に進めば『東福寺』、後延一溪をなし、これに架せる橋を通天橋といふ、上に鐘屋を蓋へり、古來紅葉の名所として喧傳する處なり。

鐘を旋らして、大佛門前より西大谷に至れば、木派木願寺の宗廟『大谷御廟』あり。これより路は、勾配緩かなる長



京の近郊

坂を登る、登り盡せば『清水寺』、洛中諸院第一の稱あり、堂宇の奇巧また見るべし、樓門は文明年中の遺構といひ、本堂は寛永十年幕府の造營に倣ひ、桁行九間梁間七間星根四注す、東西差障あり、前面雨覆あり、崩及舞臺之附し、懸崖に架して南向す。南離淺瀬一縷の水あり、これ世に名高き音羽ノ瀧。

清水の上から出たり春の月

清水坂の中程を折るれば『八坂の塔』、塔に近く『高倉寺』あり、北政所の本願なり、豊公廟内秀吉夫妻の像を置、庭園は菊酒の水を引き、樹石の安排巧を極む、小堀遠州の遺る所とぞ、千利休の意匠なる時雨亭茶室あり、萩また京名所の一に居る。

【八坂神社】は洛東の名祠、素戔嗚尊を祀る、其祭禮はいはゆる祇園會にして、古來京都の盛觀と稱せられ、其華嚴蓋海内神祇祭禮の冠冕とす。社より東方、山に據るの地は『四山公園』、洛陽遺儀第一の地と號す、此のあたり垂懸樓多く、古樹鬱鬱の趣を盡す、花帳夜に入れば、篝火を焚き、幽篋ます、加はる、これ世にいふ祇園の夜櫻なり。其時、原より北に向へば、松葉屋口と號する邊、一大寺門を見るべし、これ『善法寺』、寺は淨土宗の總本山、法然上人の開基、東山第一の巨刹なり。衆會堂は俗にいふ千燈殿、其後はいはゆる蓋張り、一步毎に音あり、死として流雲の轉つるが如し。山上鐘樓あり巨鐘を掲ぐ、四月の御忌の大法會を期して之を撞く、京洛の士女綺羅を競ひて參詣し、美觀言ふべからず、これを御忌の衣裳くらべと云ふ。知恩院は此に分岐し、支線は市中の給水源となり、幹線は京都、大津間の運渠の用に供せられ、荷船客船を備へ、機力によりて傾斜を上り、琵琶湖と鴨川との間を往來す。【南禅寺】は臨濟宗の大本山、松並木の中、總門の狹ゆるを見る、山門は五鳳樓と稱し、巍然たる建築なり、寺の北『水鏡堂』、秋時鐘緋の美、通天橋と並稱せらる。

市内外の地、殆んど神社佛閣を以て埋む、今其名目を掲ぐるに數頁尙足らざるべし。帝都既に東に遷りて、痛く舊時の繁華を殺がざるもの、登峯者四方より至るが爲ならずとせむや。【平安神宮】は實に此地第一の餘慶の的、桓武帝を祀る、社前樓造大極殿あり、結構往時の半に及ばずと雖、尙古の盛觀を傳べし。堀ノ小川の清き邊り、糺ノ森の翠綠の中、【下鴨神社】、糺まはりおはす、境内清淨にして趣致に富む、【上賀茂神社】は北に距る、こと二十町、兩社合せて賀茂大神と稱す、後に御生の祭禮を



清水の美、風に好事者の推す所なり。【東本願寺】は近時の建築、堂宇の華麗壯偉海内無雙と稱す、境内噴水器の壯觀、亦共に世に聞えたり、根柢ことなく、經緯圖書の密緻海内比なし、五重塔は高さ三十五間、木邦第一の高塔として知らる。黒谷の『光明寺』は淨土宗の巨刹、境淨く苦澁かに、唱音經聲膾に聳す、堂前に鑿窟するは巖谷直實の銅鑿松なり。【聖護院】は義政閣樓の地、林泉の美茶室の數寄世に聞えたり。【金閣寺】は義滿の燕居の地、三層の金閣尙古の光を煥發すべく、林泉の美依然と



【建勳神社】は信長を祀る、嗣後の丘上眺望佳なり。【平野神社】は桓武外戚の祖神、五殿相並べり、拜殿は本社と共に、故らに接材を用ひ、構造宜しきを得たり。【北野天神社】は道真の靈を祀る、本殿は八棟、繪皮脊の華麗なる祠堂なり、境内梅松參差、特に堀川の高堤梅樹多く、神靈の遺愛を傳はしむ。松尾神社、護王神社、梨木神社等神威皆仰ぐべし。寺は『西本願寺』、現今の御堂は寛政十年の創造に倣ひ、頗る宏壯なり、唐門は東山圓福の舊構を移したるもの、彫刻精妙なるを以て著はる。攝津園あり、其飛鳥閣は聚樂宮の遺物、亭榭水石の美、風に好事者の推す所なり。





来と稱し、俗に嵯峨野遊園といふ、竹林の中小橋及足利義隆の兩墓相並べり、千歳の黒龍其地を降る、黄壤の下重泉の遊り、突つて手を執るか怒りて相打つか。【天龍寺】附近は古の嵯峨野、雲の上人の月にあぐられ、慈に心を澄ませし處。かの小竹ノ局の幽栖の址も亦この地にあり。

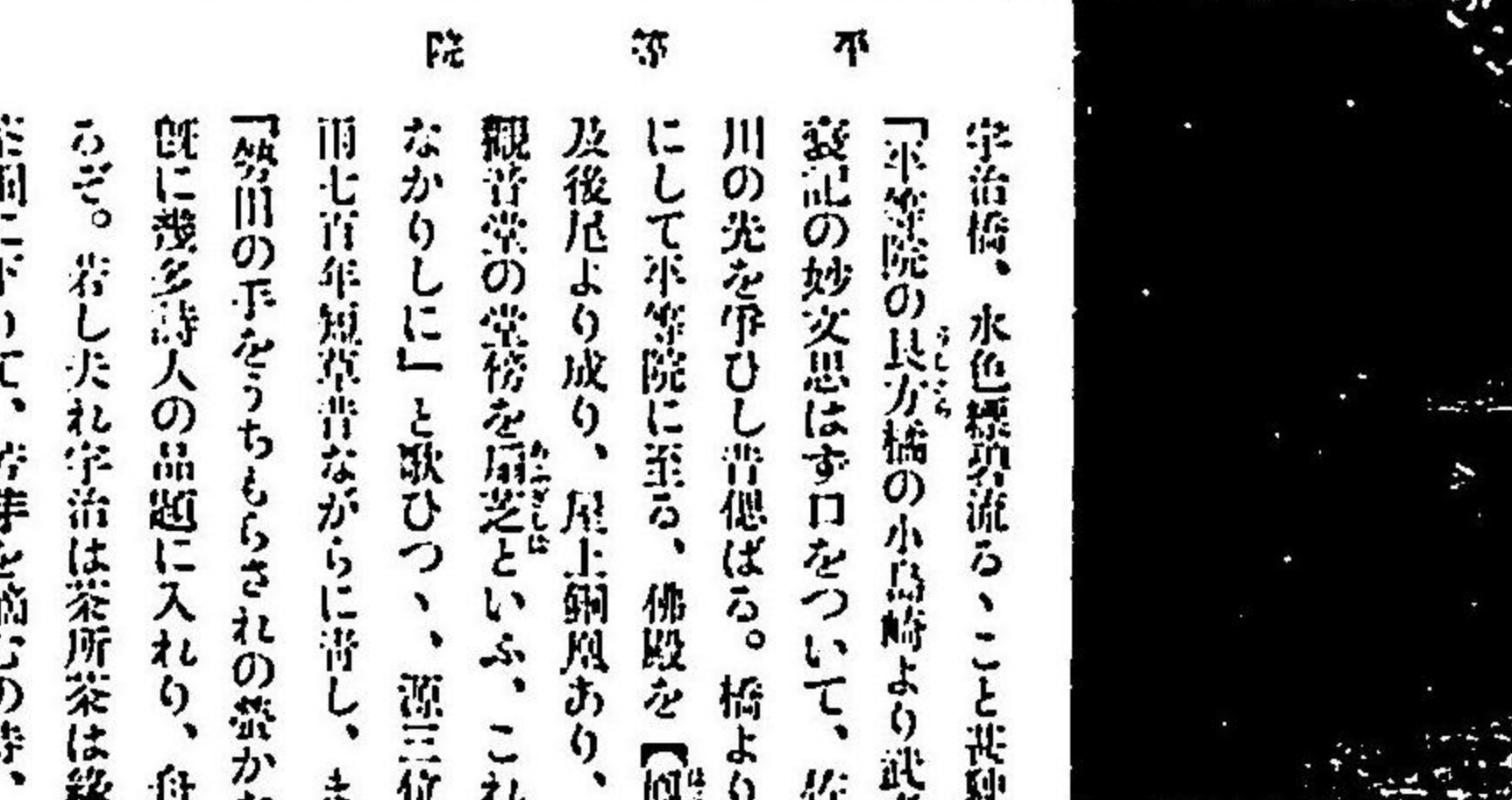
京に遊んで花を賞するもの、誰か【嵐山】に行かざるものやある、小竹ノ局が月明に對して、想夫戀を誦せし嵯峨野なる、京都線嵯峨野に下車して、祇王祇女の祇王寺、横濱の三寶寺に、翠苔を撫で、美人の薄命を嘆じ、行くこと數町、水聲濤々として心耳を清め、忽ち一場の明媚なる山水を展べ来る。長橋ありこの勝境に導く、これ所謂渡月橋なり、千鳥ヶ淵は橋の上流三町餘、俗に横濱投水の處とす。戸無淵の淵は燃燈の西、今昔の奇なし。【花の山】二町のほれば【大堰】、大堰川縦撃の功をなし、角倉子以の像、この園内にあり。山の廣袤二十町、斜に西北に向ひて深淵となる、所謂風峽これなり、凡そこの山隈水清樹多、春閑なるの時、花爛漫として寒まきに燃えむとす。其流に枕む處、花氣水氣と相氣氣し、夜もまた光あり、舟を浮べて往來すれば、花を出で、は又花に入り、花幾度か陰晴す。川の上流は即ち【保津の急瀬】、亂石奔流の奇あり、遊子まづ汽車にて龜岡に至り、歸路川舟を楫ふべし。峽中石あり水之と闘うて下る、舟子巧に一字を操り舟を行る、舟の下るや箭よりも早し、兩岸の風光須臾にして百變す、此間流程四里、一時間にして已に嵐山の客となるを得べし。この遊初夏新緑の候を以て第一の好時節とす、兩岸の斷崖絶壁紅を瀟して美觀限りなし。

【川風】海衣きたる夕涼、【鴨川】の水濤濤として流る、嵐風一味已に夏なし、四條橋は東祇園の花街に接し、西に先斗の袂あり。白雨一過煙塵を洗うて、晚涼人に可なるの時、東山の峯漸く暮に、鴨川の水漸く明に、水樓遠近に湘簾を捲き、涼空洲渚の上に設けられ、燈を懸け甍を敷いて客を迎ふ。玲瓏の月上に照り、清淺の水下に流れ、輿運更に夜の明くを知らざらむとす。



鴨川

行きがよ、獅子の頭やほろろ月  
此散、愛宕、鞍馬は京の三山、好箇の遊地、京洛の地に遊ぶもの、其遊京の數日を、この登山に割愛せざるべからず。雖然として市の東北に據ゆるは【北叡山】、山勢峻絶頂を大嶽と云ひ、東傍延喜寺中堂あり、大嶽の西北、西塔の峯勢北走して、大原魚山の嶺となり、横川嶺大嶽と一縱谷を隔て、東北に横互す、四明堂無動寺は大嶽の南にあり、琵琶湖を眼下に望み、清涼の光景を恣にするべく、京都より淀川の末、また鴨川の中に入る。



宇治橋、水色縹流る、こと世襲し、橋の西は橋ノ小島、【平等院】の具方橋の小島崎より武家一騎かけ出たり、盛衰の妙文思はず口をついて、佐々木松原の二勇士が、渡川の先を争ひし昔徳はる。橋より右に折れて行くこと二町にして平等院に至る、佛殿を【願成堂】といひ、木堂兩翼及後尾より成り、屋上銅鳳あり、結構壯麗美觀絶倫なり、觀音堂の堂傍を扇芝といふ、これ「理れ木の花咲くこともなかりし」と歌ひつ、源三位頼政の居眠したる處、風雨七百年短草昔ながらに青し、また悲しからずや。

四福三共共に幽邃の勝を占め、眺望の遠を擁せり。老杉喬松峯を掩ひ谷を埋めて、陰翳尙尙暗き處あり、秀僧嵯峨密に聳え雲に峙り、明堂天亦近き處あり、近時内外人の暮月を此處に過すもの、空々多きを加ふ。近江の坂本より中堂まで二十八町、これを東坂といひ、山城の修學院より四十町、これを西坂といふ。【愛宕山】は嵯峨村の西北、一ノ鳥居より登路五十町、杉松路を蔽く輕揚し、久しうして始て深谷に墜つ、また佳興なり。頂上愛宕神社あり、東嶺大雲峯の月輪寺、春隨堂開闢の地、謂ゆる十州の山河目前に呈はる。【鞍馬】は市北の方の名嶽、三條大橋より三里、山の半腹鞍馬寺あり、其西北に貴船山神鎮座す、亭々たる老杉全山を掩うて、び谷肌膚に迫り、幾々たる怪道路を遊りて、攀躋幾度か皆倒せむとす。寺の西北十町許正谷に應王堂あり、俗に鞍馬天狗の栖居とす、巖石樹林の饒壽常にあらず、岩面刀痕を殊すもの、これ遊那王若丸修業の迹と傳ふ。

大和巡り

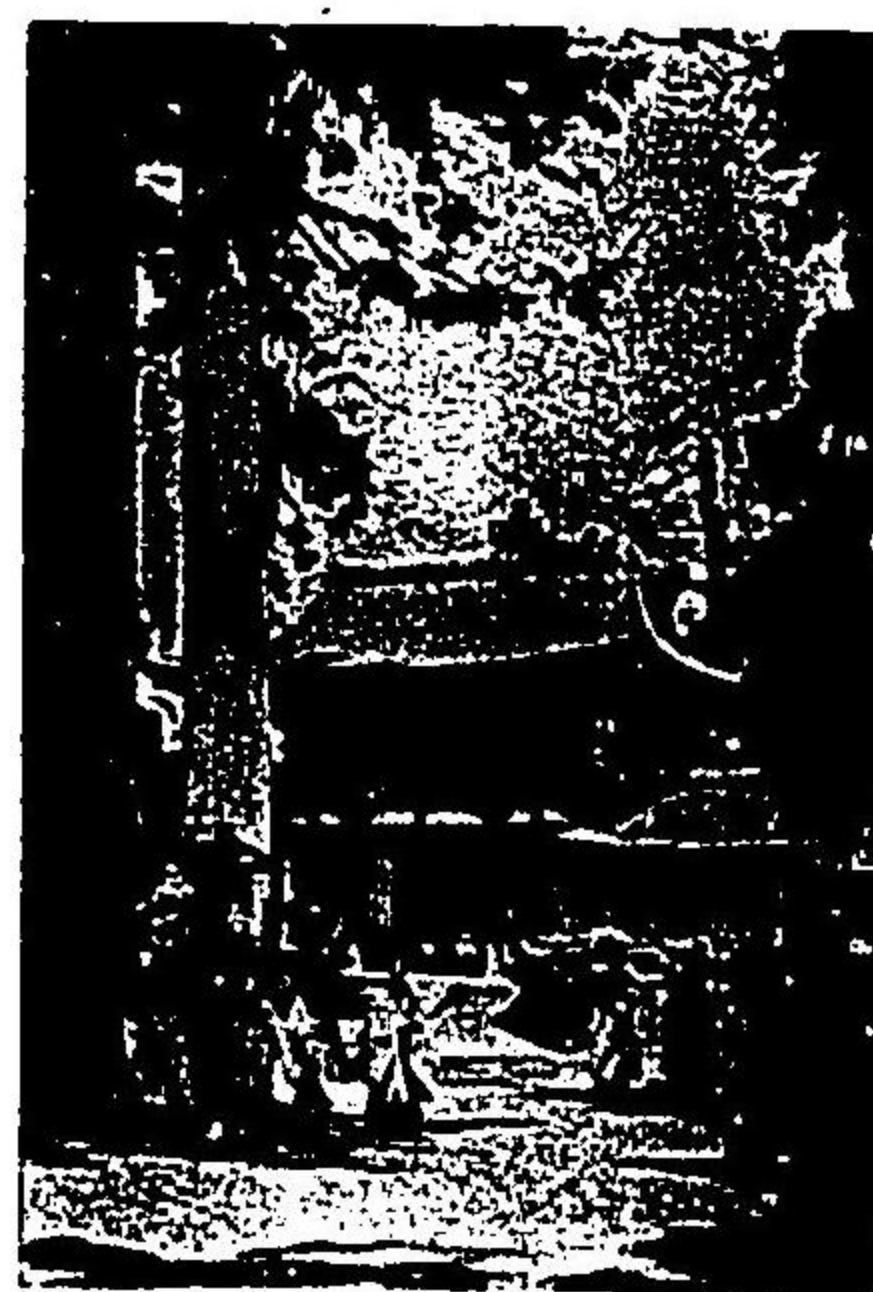
園西本橋、櫻井、和歌山縣

大和は名勝の園なり、歴史の園なり、宗教の園なり、美術の園なり、日本上古史を繕くもの、誰か此二園が史實の大半を占め居るを知らざるものやある。而してこの名所史蹟の中心點は、實に奈良の古都とす。京都より奈良線に預りて、宇治の風流峯を見、木津より南すれば已に大和の國、丘陵二三逶迤して、開豁なる平野に出づると共に

に幾千の星五早く眼前にあらはれ来りて、其上堂塔高く聳ゆるを見るべし、これ即奈良。

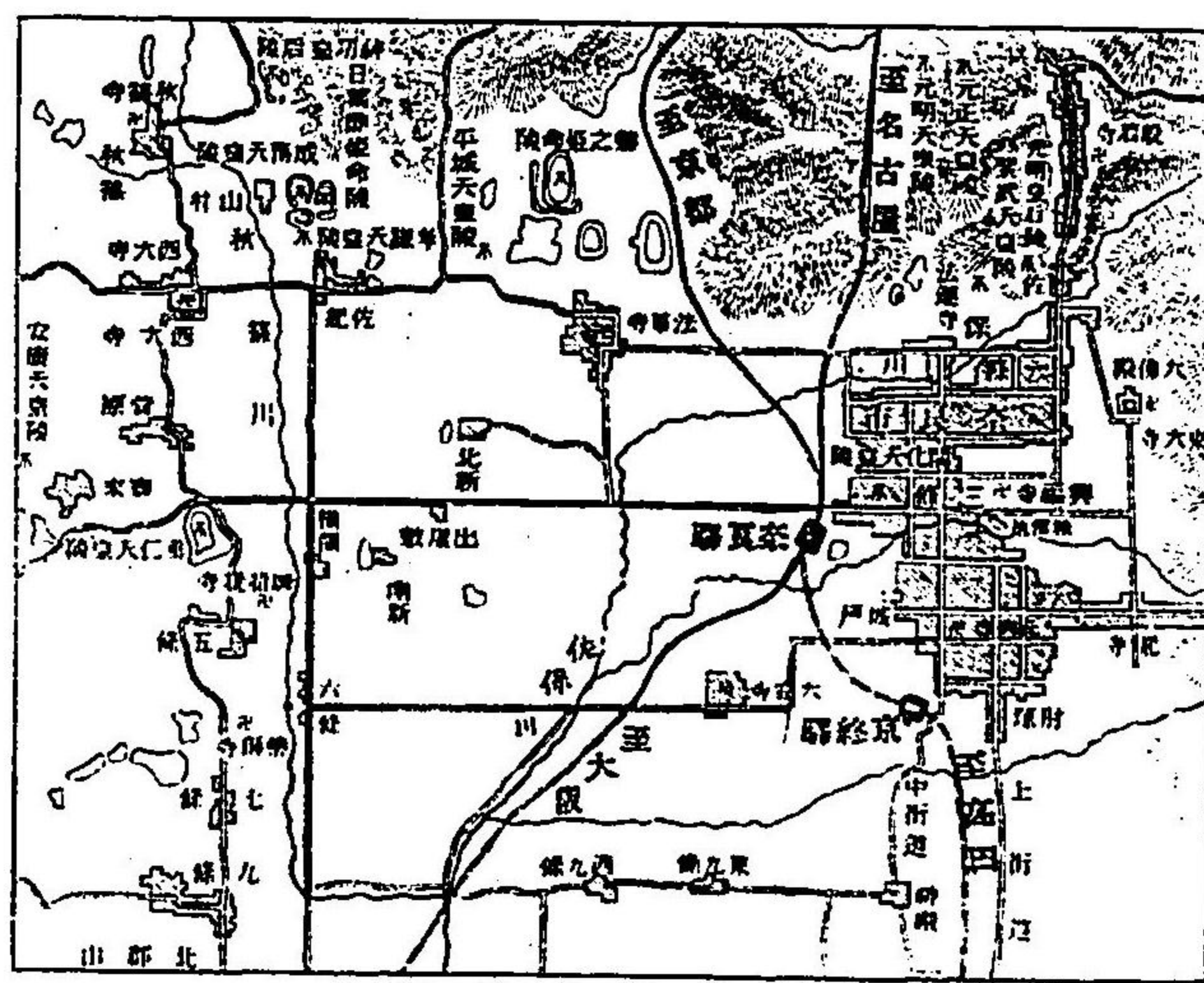
「奈良七代七堂伽藍八重塔」はせを、九重の都なりし古も、星と和の敷を積みて、瓦に内裏の址を傳じ、礎に寺の面影を悲しむばかりの處多かれど、なほ當代の神社佛閣の現存せるあり、洵に我邦文藝美術の淵藪と謂ふべきにや、西人嘗て此地に遊び、其山水の温雅を賞するを見、奈良の風物は佳酒の如し、人をして美備暇々眠りを思はしむと云へり、まことや足一度奈良の地を踏みて、先づ温然たる碧草の山に對する時は、歩行自ら緩かに衣帯自ら寛くを覺ゆ。

春日神社、東大寺、興福寺境内は、今「奈良公園」といふ規模の大風致の美、海内他に比すべきものもあらず、驛より直路「猿澤池」畔に至る、池は公園の入口にあたり、大福寺の南岸にあり、岸川の水を湛ふ、池に鯉魚多し、大福寺の南岸にあり、衣懸柳に宮女采女の運命を悲しむ、石階を登れば「興福寺址」、古の宏大壯麗今見るべからずと雖、南円堂、北円堂、金堂、五重塔等を存す。南円堂は八角寶珠形の堂宇、丹老、碧麗し古色偏に愛すべし。堂の南三重塔あり、北円堂は境内最古の建築にして、藤原時代、東金堂五重塔は應永年間再建にして、東山時代の趣味を發揮せるものなりといふ。東金堂の前、弘法手植の花ノ松あり、清陰百歩の地に敷いて、花よりも麗なり。師範學校門内なる八重塔は、東圓堂の址に空しく「古の奈良の都」の名残を留めたり。一ノ鳥居を潜れば「春日神社」の境内、春日野の半蕪草色爛らが如し、路の右傍は淺茅原にして、今樹多し、空澄澄また近きにありて、若菜摘みけむ古ゆかし。いはゆる神鹿は諸人の奇とする所、或は芝生の上或は清流の畔、或は路傍に或は樹陰に、三々群をなし伍々隊を作りて、人の袂をひいて食を乞ふさま愛すべし、春季彼岸に行ふ鹿の角切、また一奇觀と稱せらる。賽路の左右に立てる燈籠の数を讀みて社頭に至る。廟宇の華麗また云ふを須るす、祭神四坐四向、百五間の廻廊左右に度り、千餘の釣燈籠、繡華花の如く古色摺すべし、諸路の石燈、社内の掛燈、節分を期として悉く之に點火すと、美觀思ふべきなり。廟の背後に峙てるは「春日山」、一山翠蒼として頗る佳色あり、「春日山」より見れば、三千里外遊子をして、故郷の月を戀ひしめたるは「春日山」はまた春日山といふ、諸山小芝生にして草花を散らさるが如く、形容温雅を賣せたるに似たり、春燈の後殊に雅趣多く、兒女麗粧して遊べる狀、宛然たる



春日神社

土佐家の園障、之に對する久しうせば、路に眠りに落ちむとす。【手向山八幡宮】は風の名所、「紅葉のしき神のまにまに」秋掃の美を極むといふ。社を過れば【東大寺】、二月堂、三月堂、四月堂、中に二月堂は山腹に倚りて眺望佳なり、三月堂は奈良第一の古建築、人をして天平時代の建築を吟詠せしむ。【大佛殿】は即ち寺の中堂、結繩跡五丈三尺五寸、仰望氣魄を驚かさるものなし、堂上十數人を容せて高座あり、鼻孔或は人を容るべし、想ふこれ一千二百年前の錯造、また世界の珍とすべきものなりとせむや。【しほしつ】の僧坊、東大寺。 藤村



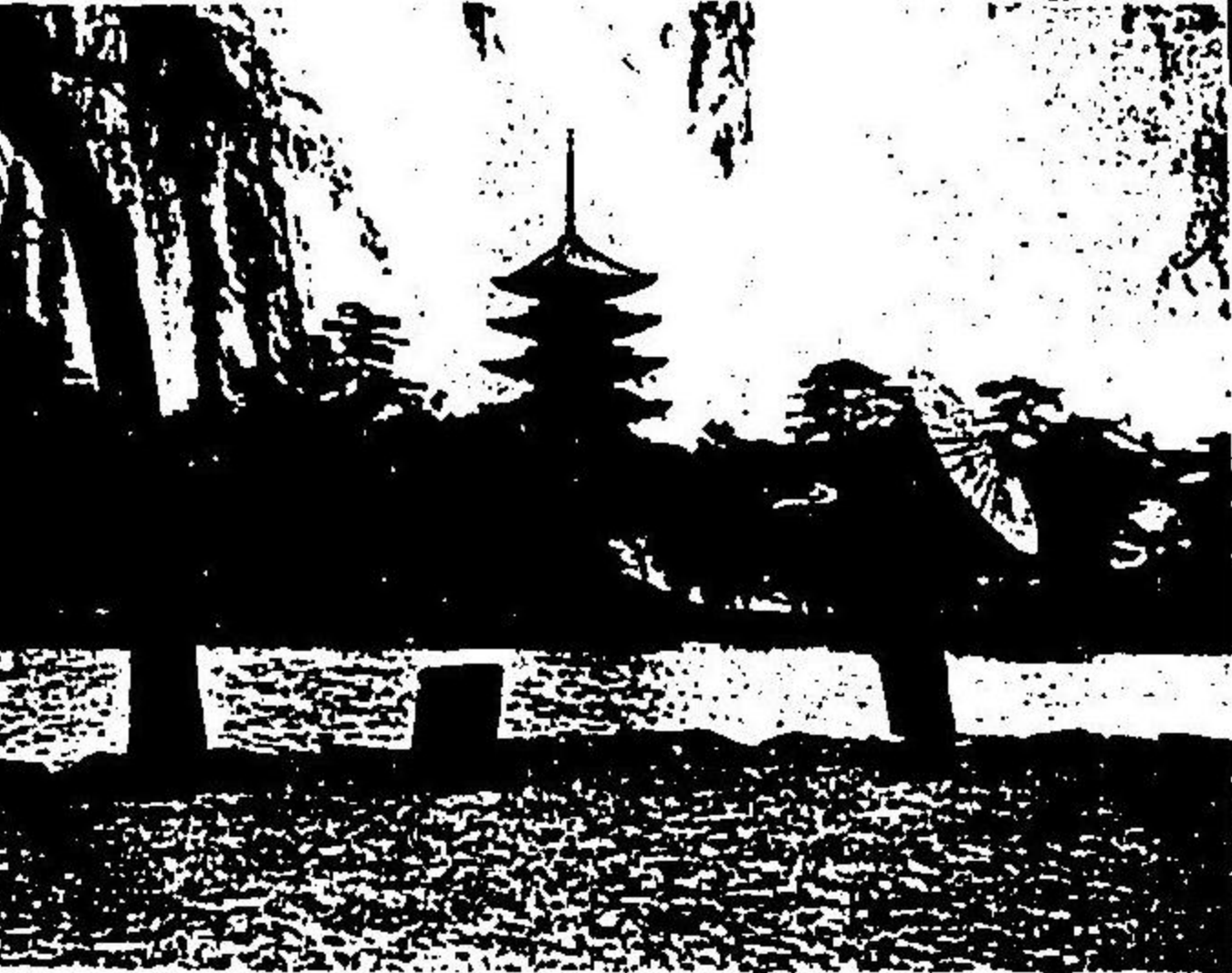
奈良真近の地圖

光、眼前に展開せらるるを見る、遠く南を眺むれば、平野の極まる所、誠傍、香久、耳垂の三山を曳き、近く東には觀音山、若草山、春日山の諸丘陵相連り、西は生駒、志賀の諸山蜿蜒として相接し、雲烟繚繞宛然一幅の名畫を展べたるが如し、想へ七朝七十餘年、咲く花の匂ふが如く盛りなりし「奈良の古都」は、實にこれ諸山に囲まれたる、この一帯の廣き盆地に構へられたるものにして、今殆ど田畝の地、誰か「世の中を常なきものと今ぞ知る奈良の都」のうづら見れば「萬葉」の嘆なきものあらむや。

法華寺の西敷町、土俗【大園の芝】と稱する芝生は、古の大極殿の遺址、西北種木林の繁茂せる處は内裏の址なりとぞ。佐紀村に至れば路三岐す、一は北林後寺に至り、一は直に西大寺に至り、一は南都山に達す、賽者はまづ北して秋篠山に詣で、西大寺に至るをよしとす。【西大寺】は南都七大寺の一、眞言律宗の本山、殿堂は近世の復興なりと雖、尚宏大の遺制を存す。寺を出で、南すれば、一帯の地風情ある松林畫けるが如し、これ【唐招提寺】境内にして、寺は唐僧鑑真の創建せる所、南都七大寺中、典雅幽深千古の風色を傳ふるもの、法隆寺以外この寶坊あるのみ。金堂の後にある講堂は、平城宮の朝集殿を賜はりて移建せるもの、古色また拘するに堪へたり。山門を出で、南南すれば、疎林の間一塔高く中天に聳ゆるを見る、これ【藥師寺】なり、金堂の木曾樂師如來は金銅の尊像、勝土日光月光すべて三尊なり、これ米人フェノルサをして世界無比の鑄造佛なりと、驚嘆せしめたるもの、黒漆黝然光澤輝すべし、東塔は三重なれど装階を有する爲め、俗も六層塔の觀あり、塔と相對するは佛足堂、中に有名な佛足石あり、寺を出で、南すれば【羅城門址】、即ち古京の南限にして都山町の北なり。



法隆寺



法隆寺

【郡山】は奈良の次驛、地は梅原氏の舊領地、町の中央城址あり、附近菜畝多く、夕陽花光城壁に及ぶ、堂内に安置す。金堂を出づれば西に五重塔あり、現身住持所と稱す、塔西須彌山を造り、諸佛菩薩像を配置す、其製奇古なり、俗に流佛と稱す。凡そ此寺は其建築に於て推古朝の典型を遺し、法隆に於ては隋唐三朝の光明を傳ふ、これ識者の推重して措く能はざる所以なり。富ノ小川の水とこしへに流れて、ながく日本の誇りたれかし、背後の梵天山風光佳なり。

お蔭のはづれなつかしへの花

紅葉の名所として知られたる【龍田】は、玉寺驛より東北十町、法隆寺よりは半里に過ぎず、龍田橋あたり楓樹多く、秋時節繡碧流と相映じて、美觀ふべからず。【信貴山觀音院】は玉寺驛より一里餘、懸崖の上に倚り、樓閣繚繞其中の趣を具す。奈良より櫻井驛に賴りて南すれば京終、奈良市の南端なり、帯解には平安の地蔵寺あり、櫻木には柿木寺あり、人麿塚近く存



す、月波市野附近は古の石上、驛の東方十町宮幣大社「石上神宮」あり、山に據り林を負ひ、境内清淨にして神威自ら尊し。地は天理教育あるを以て、該信徒の崇拝するもの蹟を接す。此邊東室西南を望めば、櫻谷嶺に據ける平野の中、畝傍山を中にして、香久山、耳無山を其左右に望み、風光典雅土佐風の名表を見るが如し。三輪山に至れば三輪山の西面、「大神大物主神社」鎮り坐す。国土修成の功神古來國家の崇奉する所なり。社前三輪ノ茶屋あり。三輪山の背後は初瀬川にして、「長谷の観音」は其半腹にあり、近時同様の災に罹りたりと雖、尙勝地たるを失はず。蓋し此附近は奈良朝の時、公卿百官の修造一口を消せし處、初瀬川、初瀬川の名は、萬葉古今を稽くもの、口に親しきことなり。櫻井は三輪と互益相望み、其間半里に滿たす。町の西方一帯の地は古の磐余の地、東松山街道には、神武の八十皇孫を誅したまひし忍坂あり。「流山神社」は南五十町、社は藤原鎌足を祀り、祠殿壯麗にして四地幽邃。世に西の日光と稱す。詣道の左右櫻楓枝を交へて、春秋の景観美なり。山頂鎌足の墓あり。「神代をもかけて」の「神代をもかけて」の山を今日見れば「成章」、畝傍驛を出で、垣々たる大道を南すること十五町、一座の丘陵他に連接せず、樹林蒼鬱たるもの、これ「畝傍山」にして、皇祖「神武天皇」の御陵は實に其東北麓にあり、高城周回四百五十間、繞らすに二重濠と堀溝とを以てし、松樹其間に趣致を加へて、うた、人をして敬虔の念を起さしむ。御陵の南方數町、「阿蘇神宮」立たせ給ふ、地は神武御園の皇居の「はげがしつく下路」、その路しつくと乘りては大川となり、吉野山林の連綿一に此川に由る、宮瀨、大瀨、嵯峨瀨、流水石に激して急流となるもの多し、鮎を名産とす。宮瀨の西、上市町の東、川を挟みて相對せる丘陵あり、これ古歌に名高き嵯峨山。兄の山にたゞに向へる妹のやま

今や京都奈良附近の勝地を説きて、更に紀伊に移らむとするに際し、尙一事の遊子に嘆むべきものあり、其陵遊拜のこととなり。方今四月九日奈良風を仰ぎ、文明昌大の美化萬國に秀る所以のもの、一には列聖の遺蹟、宏遠深厚なる致す處たらんばあらす。而して歴代の山陵は我邦の鎮護として、我皇尊民を萬代無窮に守らせ給ふ聖域なり。されば我等國民たるもの、祖木の森を



初瀬川



吉野川

### 山陵系群

明にせむが爲め、列聖の靈域に稽考して、會藏なる遺蹟を仰ぎ、謹みて歴代先皇の徳を回想して、以て忠孝の情を養ふことを勉めざるべからず。かの佛教に於ける靈塔巡拜の如き、西國巡禮といひ四國遍路といひ、或は狭坂坂東に、或は京地熊野に、名山大澤を探りて、視しく佛光の瑞氣に打たれ、以て偉大なる感化を受けるを思へば、山陵巡拜の如き、亦我國民の志氣を發揮する一助たるならむや。神武帝より孝明帝に至る、御代一百二十、北朝の五帝を加へて二百二十五帝なれども、重祚の二代を減じて百二十三帝なり。然れども一の御陵にして、數代の御靈を鎮めざるものあるが爲に、帝陵の所在地は、實に九十二箇所十箇所に渉れり。中に和泉は堺市の東南に近く、仁徳、履仲、反正の三帝陵あり。攝津は高槻驛に近く、體體の御陵あり。近江は大津に、弘文の御陵あり。丹波は山國に、光嚴、後花園の二帝陵あり。淡路は福良港に近く、淳仁の御陵あり。讃岐は鴨川驛に近く、崇徳の御陵あり。長門は赤間關に、安徳の御陵あり。其他は山城に四十二箇所七十二帝陵あり。大和に三十箇所三十一帝陵あり。河内に九箇所十二帝陵あり。いづれも鐵道線よりさして遠からず、遠隔の御陵を除けば、巡拜一週日にして終るべし。山城、大和、河内は山陵多きが故に、各方面にわけて巡拜の衆とせむ。

- (一)御室、嵯峨方面。一 金剛寺附近。花山、三條、二條。二 龍安寺。宇多、一條、堀河、後朱雀、後冷泉、後三條、三 宝町附近。光孝、村上、同德。四 嵯峨附近。嵯峨、文徳、後醍醐、龜山、後宇多、後龜山。五 水尾、清和、三 乙訓郡。一 大原野。淳和、二 海印寺村。土御門。
- (二)伏見、山科方面。一 桃山。桓武、光明、崇光、二 深草。仁明、後深草、伏見、後伏見、後光嚴、後同德、後小松、稱光、後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成、三 竹田。白河、鳥羽、近衛。四 東福寺。仲崇、五 泉涌寺。後堀河、四條、後水尾、明正、後光明、後西院、靈元、東山、中御門、櫻町、桃園、後櫻町、後桃園、光格、仁孝、孝明、六 醍醐。醍醐、朱雀、七 山科。天智。
- (三)東山一帶。一 三十三間堂。後白河、二 清涼寺。六條、高倉、三 粟田口。花園。四 鹿ヶ谷。冷泉、五 神樂岡附近。陽成、後一條、順徳。
- (四)奈良附近。一 奈良。開化、元明、元正、聖武、二 佐紀。平城、三 平城村附近。垂仁、成務、安康、孝謙、四 香掛。光仁。
- (五)櫻井附近。一 柳木。崇神、景行、二 忍坂。舒明、三 倉梯。崇峻。
- (六)畝傍附近。一 畝傍山周圍。神武、經靖、安寧、懿徳、二 石川。孝元、三 鳥屋。宣化、四 阪合村。欽明、天武、持統、文武。
- (七)吉野。一 如意輪堂。後醍醐。
- (八)御所附近。一 三宮。孝昭、二 掖上。孝安、三 車木。皇極。
- (九)玉寺附近。一 玉寺。孝徳、二 志都美。武烈、三 下川。顯宗。
- (一〇)千早。後村上、三 鳥屋。雄略、三 道明寺村。允崇、四 櫻田。應神、五 長野村。仲哀、仁賢、六 西浦村。清寧、七 吉市。安閑、八 磯長村。敏達、川明、九 山田村。推古、孝徳。

### 紀伊路

和歌山線

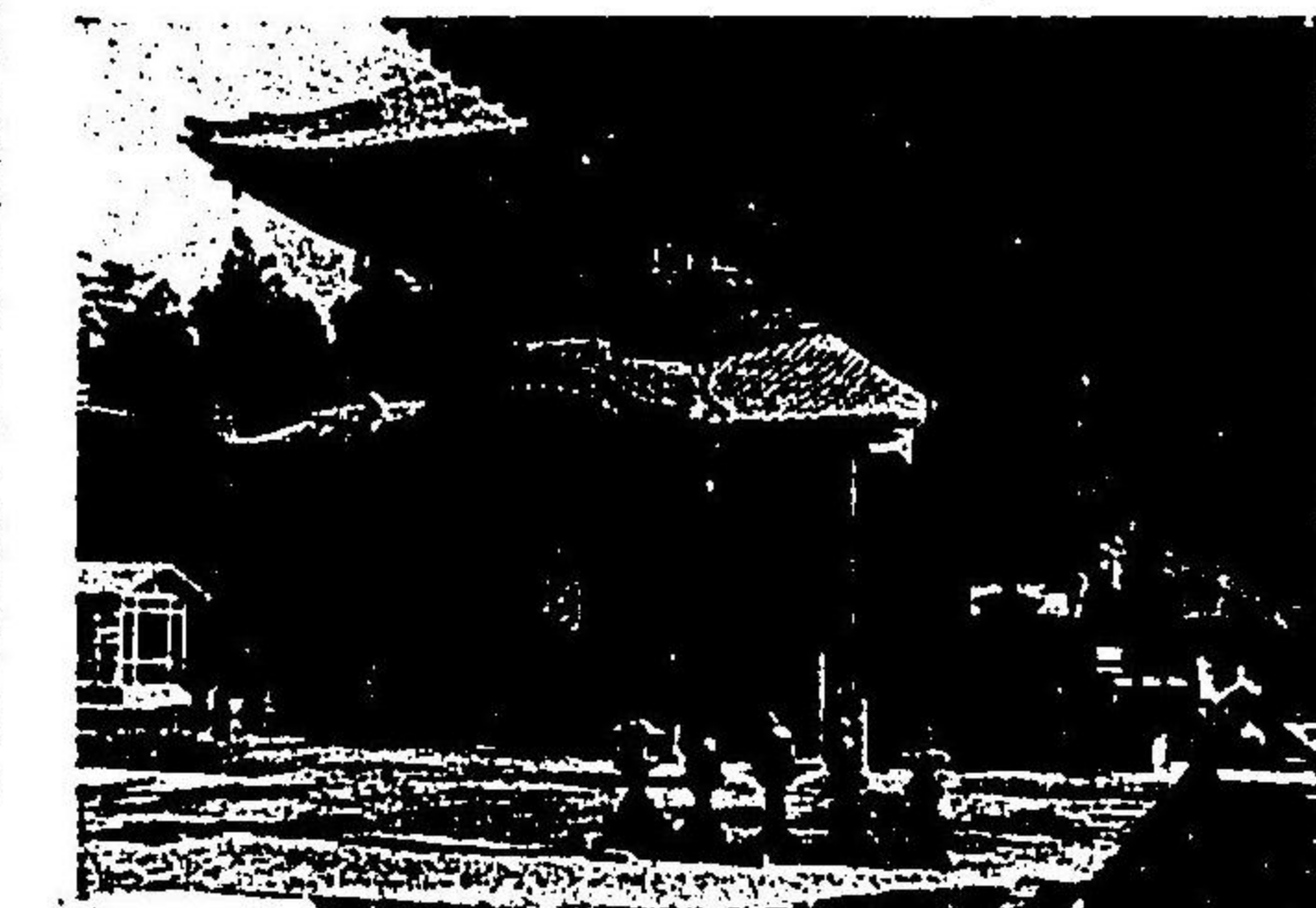
鐵路紀州に入りて階田驛、次は橋本驛、「昨日獲つたも今道心、一昨日獲つたも今道心」、あはれ石草丸がはるく父を尋ねし再遊「菊宮堂」へは二十町、最田幸村が暫し閑居の夢を結びし「九度山」へは一里なり、驛はまた次驛高野口驛と共に、「高野山」に養する人の下車驛にして、高野山女人堂まで、橋本より四里十六町、高野口よりは三里十九町を隔つ。



子室送馬阿のけ於に寺業剛金



て、實に海内第一の盛名を博せらる。寺域周回十三里、僧坊百三十餘、大門、金堂、本堂、高天原殿、講堂に絶す。一ノ橋より奥ノ院に至る間は、貴賤道俗の慕仰、立錫の餘地なきまで立立し、殊に諸侯の幸賜は高天原極む。奥ノ院は大師の廟所、四面雲形造にして瑞雲を周らし、岡むに蒼蒼たる杉樹を以てし、繞らすに清涼なる玉水を以てす、幽邃閑寂童子の靈地なり。



山野高 鐵路和歌山に至りて盡く、地は徳川氏親藩の所府、市の中央の園阜に「和歌山城址」あり、天守閣尚依然として仰ぐべし、城内の天妃山は今公園となす、四空開窓眺望佳なり、春風給満園の櫻花咲ふの時、佳趣云ふべからず。市より南して和歌ノ浦に至る、其間一里餘、電車の便あり、西は歌柱に名高き歌上ノ濱、東は片園辨天山今公園となれり。雜賀崎より毛見崎まで、和歌村、紀三井寺村の江灣は即「和歌の浦」、和歌村の南一帯の沙嘴あり、天ノ橋立、三保ノ松原と地形を同じうし、古松白沙の間に偃蹇す。浦は古聖武、稱徳兩帝の望海樓を建てさせたまひし地、浪寒の變、當年菅波を漲へたる時、今人家川島となれる處多かれど、「玉津島神社」附近、尚往昔の面影を孌孌し得べし、社前に入江三つの斷橋を架し、一帯の青松茂しき影を海波に懸せり。「和歌の浦」は名所がござる一に「權理」とはこれしは、玉津島の北なる「權理山」の「東照宮」、金碧目を驚かすもの此宮を推すべし、岡下藩祖を祀れる南龍神社あり。「紀三井寺」は浦の東岸草草山の西麓にあり、浦の全景一望指掌の間あり、是の寺に及ばずして和歌ノ浦の勝を説くはあやまれり。

おとなしき時雨を聞くや高野山 東 其 「父母のめぐみも深き粉河寺はとけのちかひ頼もしの身や」、寺は粉河郡より八町、風林山の麓にあり、殿堂壯麗麗々たり、本尊は十一面の千手觀音なり。歌代に名高き高野の里は、紀ノ川の北岸にあり、昔出陣の所在地とす、驛より三十町航言宗新義派の總本山「根來寺」あり、高野山と並びて法風盛に、戰國の際に及び、僧兵の強項根來を推して第一としたりき、寺域宏闊、古松を植の間、櫻樹數千株あり、春時堂塔紅雲彩霞の中に埋む。

浪連の縁

東海運米線、城東線、阪鶴線



なつかしき京を後に遠逝へと志す、桂川を渡りて向日町驛に至れば、右に低く丘陵の連るを見る、これ「長園の古都址」山崎驛の前面豁然として屹立するは「天王山」、山崎の町合戦、秀吉の山を得て勝を制せり。「石清水八幡宮」は驛より一里十町、男山の上あり、朝廷の崇敬公武の歸信厚かりしは、昔人の知る所。「水無瀬宮」は驛より十町、はや攝津の岡なり、承久の三帝を祀る、ふるき軒端のしるぶにも尚ありある音なり。櫻井村のはづれ、三基の石燈二木の樹、さびしげに路傍に立つ、これ世に楠公父子の訣別の地と傳ふる所、碑傍に存する枯木の残株は、古の子別れの松なりといふ。

「なにには津に映くやむかしの梅のはな今も春なる浦風ぞ吹く」、古は浪連と呼び、また浪華と唱へて、梅に名高く處に名高き處、今「大阪」と稱して木邦第一の都府、海内無雙の商業地として、市街の繁盛商機の話談、首府東京にも優るの觀あり、旅客一度大阪驛に下れば、家庭の構置市街の規制、道路の布置市民の風采、また全く一種の商業的趣味を帯ぶるを發見せむ。市内大小の河川、四通八達舟楫の便を備へ、南方攝津灣を控へて、海陸運輸交通の便を全うす。見よ山城より落ちて流る、流川は、京橋を過ぎて寢屋川と合し、百流いよく西方に落ちて、こゝに中之島を作り、餘勢一流に散れて、堂島川となり土佐堀川となり、共に西南に奔り、末また合して安治川となる、これを市内の大河として、木津川あり、尻無川あり、東横堀川あり、西横堀川あり、長堀川あり、道頓堀川あり、東西に南北に、流るる川々に架したる大阪名物の橋梁は、其數凡て二百四十有三、八百八橋の稱また宜なりといふべし。中に難波橋、天満橋、天神橋を三天橋と稱へ、揚造の体外觀の麗、木邦第一に見るところなり。夕陽西に暮つげば、淀の川面に燈火の影滿天の星と落ちて、風にのらる、柳の絲の、招く手振りに月ほのめきて、往さ來るさの涼舟、目もくるめかむばかりなり。



淀の川瀬の水車、小さき三十石舟に、静けき夢を載せて、寝ながら伏見に寄くを、無上の利便と考へしは、福ある年老の昔話となり、水の都の大阪は、今蜘蛛の巣の如く敷設せられし鐵道に因りて、一入の利を占むること、なれり。京都より來りて梅田の大阪驛を経て神戸に至る東海道線を初として、滋賀驛より奈良名古屋に通ずる關西木線あり、櫻ノ宮驛より木津に至る櫻ノ宮線あり、神崎に至りて北舞鶴を指す阪鶴線あり、梅田を發して市の東部を一周する城東線あり、梅田より櫻島に至る西成線あり、其他南海鐵道あり、高野鐵道あり、線路交叉複雑して、旅客をして行く手を惑ふの感ありしむることあり。

寺門跡の御坊、堂の裏岸原神社あり、市の鎮守神にして社殿壯麗なり。「御裳神社」は市の遊園地、大阪の名物たる文樂座この境内にあり。「法妙寺」内近松門左衛門の墓あり、「清風寺」内井原西鶴の墓あり、一は淨瑠璃木作者として、一は浮世草子の作者として、共に今の大阪趣味の種を植ふしもの、大阪に至れる人の必ず詣つべき所なり。桃山は桃の名所、櫻ノ宮は櫻の名所、共に春時雜踏の地。「天満神社」は菅公を祀る、年毎の夏祭はいはゆる關西の大祭禮として、京の祇園會と並稱せらる、所なり。「大徳寺」は弘法大師の開基、浪連に於ける古き寺院の一なり、境内流石の墓あり、石ものいはす首むして、豪華の墓帯やかなり。「中の島公園」は市中第一の遊園、東端豊國神社あり、八阪神社は多門天を祭る、社前の通りは「難波の市場」にして、朝々の雜踏いはむ方なし、路あり、「ねん／＼」こゝろいち天満の市よ、大根そろへて身に積む、身に積んだら何處まで行ける、木津や難波の橋の下、「今宮神社」は俗に蛭子神社といひ、正月九日十日は、福徳を授けたまはる縁日なればとて、賽するもの幾十萬、俗語十日成の一曲あり、曰く「十日成の賽物は、はせ袋に、とりばら、せにかます、小判に金箱、立烏帽子、いでばす、さいづら、たばねのし、小笹をかたけて千鳥足」「道頓堀」より「千鳥渡」にかけては、川竹五座の芝居前を設けて、客席あり、觀世あり、義太夫席あり、飲食



唐あり、東京の淺草、京都の東福と共に、天下の三大俗地といふべし。【生國魂神社】は市中第一の大社、社行既堂あり、茅葺の海を隔て、淡路の青螺を望むべし。【高津神社】は仁徳天皇を祀る、その給馬堂は雲景を以て知らる。【荒原山四天王寺】は聖徳太子の建立、天台宗の古刹、堂舎四十餘宇あり、境内今公園とす。【心寺】は開光大師の開基、淨土宗祖法然二十五箇御遺跡の一、難波名號の靈場なり、寺の裏門を出れば、河底の池に臨みて登着たる小高き丘あり、これ【桑山】にして家康の陣を構へし所、真田幸村六連銭の旗風、今尚顧るを愛の。山麓【邦福寺】あり俗に雲水と稱す、庭園雅致を極む、遊息軒に憩うて普茶料理を求むる亦一興か。茶土茶屋を過ぎて住吉に至れば、住吉神社あり、社殿古雅にして神威自ら高し、長松一路遠く延びて、沙白く浪音き處に通ず、風光甚佳なり。堀、濱寺共に形勝の地、西に而して茅葺の海を控へ、淡路島眺るが如く波に浮ぶ。海水浴の適地とす。



真の面

大阪を後にすれば神崎、阪鶴線の分岐點なり、西ノ宮驛より住吉に至る間、右國の機運、國勢の發展に伴ひて、今日の盛大を致せること、亦頗る興味あることに屬す、市内三ノ宮、神戶、兵庫の三驛あり。【生田神社】は三ノ宮驛の東北五町、社後の森林は生田の森、壽水の役に於ける荒原太敷の梅の風流は、また知らざる人なげむ、形見の梅境内に存せり。生田川の源流【船山】の半腹、二條の瀑布懸れり、瀑の上方を瀧谷といふ、一條の幽澗また探遊に可なり。【瀧山】は再度山の山口にして諏訪明神あり、眺望開闢あり、東麓温泉あり、布引と拉稱して此地の二遊所とす。【摩耶山】は六甲山中の一峻嶺、山頂利天寺あり、大阪灣の風光を恣にす、阪神の人夏季に至れば、避暑の計を此處に取る。【淡路神社】は神戶驛より数町、殿前門垣の結構壯麗なり、落々たる長松の下、碑あり高きこと一丈、これ水戸黄門の修せられし「嗚呼忠臣補子之墓」なり、社の北なる【廣嚴寺】は俗に補寺といひ、正成の一族と共に自及せし處、今尚遺物を存す。正成の敗れし西淡川の流域は、今改修して一大遊園地を拓き、堤上花樹を栽えたり。兵庫の西南端、海中に突出せる海濱を【和開】といひ、岸頭砲臺及燈臺あり、海を隔て、紀束の衆雲と相對し、淡路島手を伸ばせば將に捉へ得べし、展望秀絶市第一の名勝たり。

阪鶴線は神崎より岐れて新舞鶴に至る、池田驛より東一里半にして【雲面公園】あり、園中の瀧安寺は役小角の創建に係る、寺より瀧に至る間、楓樹瀧日光を遮り、溪水夏さら波を立て、流る、楓葉きて松來り、水落ちて石出づ、瀧は幅三間高さ四十間、椋橋山谷に隱ひ、壯快言語に絶す。【雲山中山寺】は中山驛より七町、聖徳太子の建立に係る、山嶺の遠望甚佳なり、奥ノ院の西南十町餘、米谷の山中、【雲山南院寺】あり、我々より東十五町を隔つ、寺は宇多天皇の勅建に係り、境内日本第一清荒神あり、庭園は支那庭園の風景を模倣せしもの、幽雅麗た愛賞するに堪へたり。寶塚驛のある處は即ち【寶塚の温泉】地、後に肥山を負うて、武庫川の諸瀧に臨み、風色明麗なり。【生瀧温泉】は生瀧驛附近にあり四邊山に圍まれ、夏は涼しく冬暖なり。【行馬温泉】は近く京畿の山に在るを以て、古より名あり、而も其湧出處にして効驗多きが故に、今に至りて益々盛なり。生瀧驛及三田驛より各三里餘、東海道本線佳吉驛より、六甲山を山麓に越えて至るも興多かるべし。生瀧驛の途上、峯崎繁辻淡流粉料して巨嶽甚だ多し、四十八湖の名あり。湯山は六甲山の北麓、三面山を以て包まれ、北の一方僅に開けたり、海拔一千一百尺、極暑八十五度によらず、大氣清淨避暑に適す、浴場の構造宮殿に擬せり。上谷に新泉あり、女子盛裝して之に臨めば、怒

吼して止まずと、有名な鼓譟は町の南方南ノ澤にあり、附近楓樹多く秋錦を織る。生瀧より武庫川を経て遊園に至る、此間約八哩、汽車武庫川の河峽を縫うて廻り、十一の階段を貫けり、本邦鐵道中有數の難關にして、難水の絶壁と拉稱せらる。其間奇勝多く車窓の眺望飽く時を知らず、遊子一日の間を暮むなくば、茲に【武田尾嶺】あり、一浴して奇勝を探る亦可ならむ。

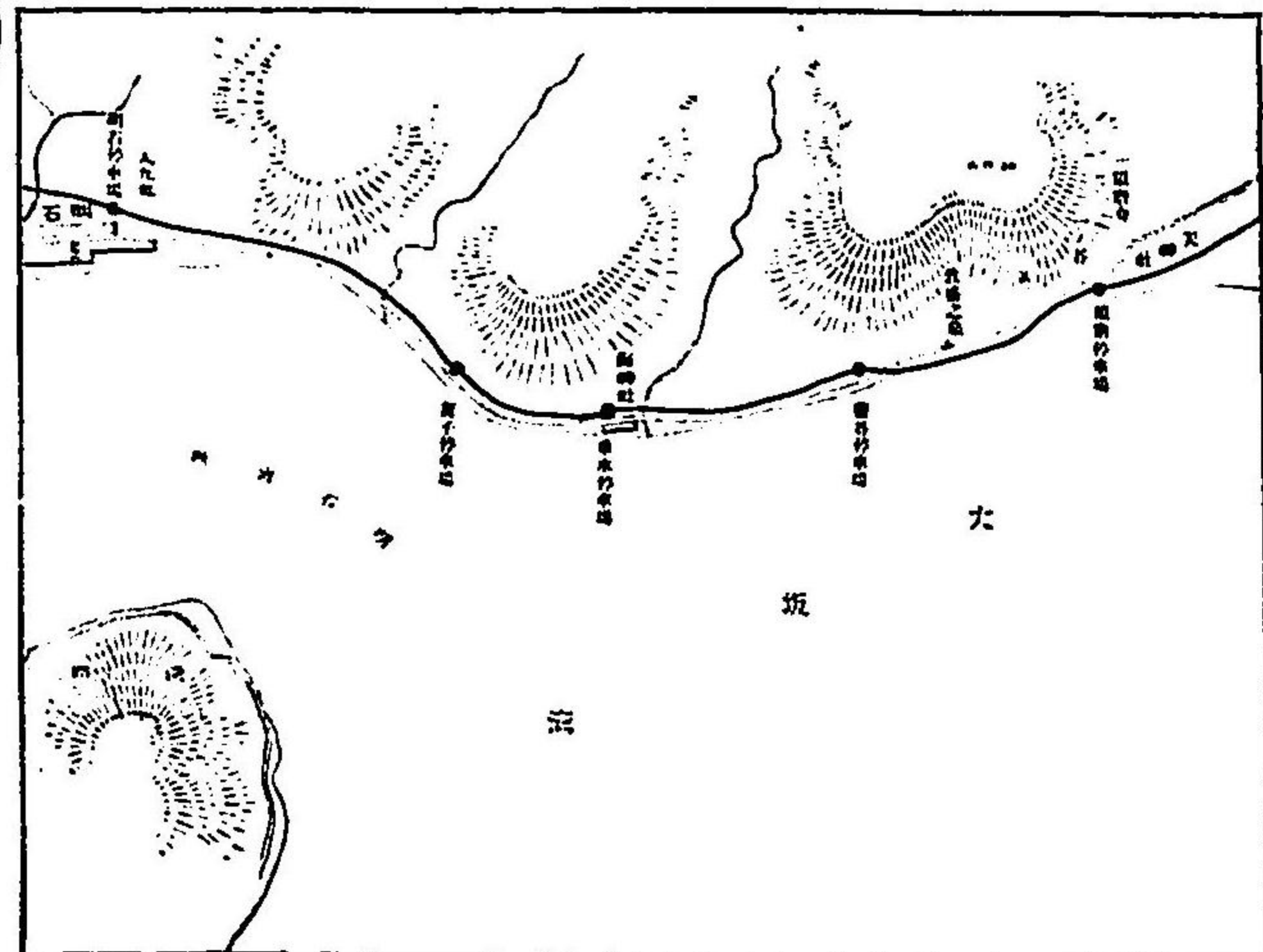
### 播但の勝

山陽本線、播但線

神戶より西下關に至るまで、山陽本線の鐵路、多く瀬戸内海に瀕し、展望目を娛しましむる幾回なるを知らず。兵庫を後にすれば直に新淡川を渡る、これより明石に至る間、一帶の翠嶺若に屏風を樹て、左は紀泉の山道く烟をなし、淡路島近く呼ばば應へむとす、而して汽車は白浪青松を縫うて走る、櫻葉明爛また極くを知らざるなり。【須磨】は水碧沙明大だ優雅の地、加ふるに源氏の君、行平の風流、平門一時の夢などを聯想せられて、旅情豊なり。【須磨寺】は驛より八町、境内今遊園となる、驛の西北に控ゆるは鐵掛ヶ峯、一ノ谷二ノ谷三ノ谷と打續きぬ、九郎御官が奇蹟を傳せし【朝越】は嶺の北、谷の上方に壽永帝の内裡址あり、翠華一たび去つて春秋七百歳、今唯松風の昔を語るのみ。直賢が教盛を招きし海濱は、晚潮徐に去來して、古を町が如し。三ノ谷の西、海に近く五輪石塔あり、北條貞時平門修福の爲に建つる所、何時の世よりか【敦盛塚】と稱ひ做したり、塔の西七町細流あり、徒渉すべし、これ播播の界川なり。



歌盛塚及淡路島の遠望



須磨明石附近地圖

川の西は明石の里、【彌屋】は近時海水浴場として名あり。【舞子】の驛は松林の中にあり、松は高さ三丈に過ぎず、おほむね其梢を齊うして枝幹屈曲す、高きは舞ふが如く躍るが如く、低きは臥すが如く舞るが如し、一樹に一樹の趣應あり、百樹に百樹の風韻あり、沙はさながら白玉を散らすが如く、南明石海峡を隔て、近く淡路島と相對峙し、青松碧波一色をなす處、白帆ノ其間を縫ふ。明石に至れば、西北三町、一群の老杉森然たる中に、高く白雲の隠見するを見る、これ若松平氏の【明石の城】城に續ける丘陵は丸山にして、歌聖人丸を祀れる祠あり、祠前の眺望實に須磨明石一帶の風光を占斷す。海水浴場は驛の南八町、中崎遊園といふ。【須磨】は淡路島の北端、須磨明石と相對す、海水浴場として名あり、明石より毎日數回汽船往復す、明神宮あり、給島は若屋明神の磯邊につける一塊の丹石、之を望めば赤珠あまた凝り集れるもの、如し、石紋自ら人物花鳥の象あり、彫れるが如く給けるが如く、玲瓏として愛すべし。島の盤根は平にして席を設けたるが如く、海潮に臨んで涼し、月明の時最賞遊すべし。明石の西、土山、加古川、寶殿、今根各驛の海岸、播磨名



松の生相

所巡りと稱する名勝あり、土山に下車して西南に向へば、一里十町にして別府に至る、住吉神社の神表を入れば【手松】、清隆四十歩の地に布き、龍脊虎槽横橋に蟠蟠す、別府より西行二十二町、尾上神社内に【相生の松】あり、雌雄兩松根を同じうして生じ、雌枝に雄葉あり、雄枝に雌葉あり、誠奇觀なり。相生ノ松に隣りて都懸しき片枝ノ松あり枝盡く東に向ふ。社前鐘堂にある尾上ノ鐘は、神功皇后の三韓より齎らしたまひしもの、風韻凡ならず。聖徳太子宮居の舊蹟なる【鶴林寺】に詣りて、轉じて加吉川の長橋を渡れば、高砂神社内【相生の松】あり、舊曲に隠れなき雄雌合體の奇松にして、千秋の契りめでたし、高砂を後に荒井川を渡れば伊保崎村、岐路右標あり、「石すねば石の資殿左すれば資根の松」と刻す。松は【資根天満宮】境内にあり、龍脊高き三丈周り二丈、枝の長さ十二丈に餘り、恰も一大竜殿を張るが如く、風彩の壯美、四所中の第一なるべし。【石の資殿】は名所中最奇觀を極むるもの、ゆるぐが如き一塊の巨巖、社殿を横さまにせるが如し、周圍常に水を湛へて、宛も池中に泛べるに似たり、資殿の南數町山腹一大巖あり、【觀音窟】の三天主を刻す、丘上眺觀に富めり、山を下れば川道一疋、二十町にして資殿畔に寄す。

參觀往來の著岸なりき、港に三島ありて雁次す、地の唐荷中の唐荷神の唐荷といふ、港塔明神山なる加茂神社社頭に立てば、小豆島及四國の山峯、遠野遙望濼として想らむとす、月明の夜其美觀を極む。

【赤穂】は別府より南三里、城址今唯四方の礎礎と老松とを存するのみなれど、大石屋敷、大石櫻等、元祿の故事を追想せしむるもの多し、

【赤穂】は別府より南三里、城址今唯四方の礎礎と老松とを存するのみなれど、大石屋敷、大石櫻等、元祿の故事を追想せしむるもの多し、

【赤穂】は別府より南三里、城址今唯四方の礎礎と老松とを存するのみなれど、大石屋敷、大石櫻等、元祿の故事を追想せしむるもの多し、

播 磨 の 時

分限畔に近く、高野の鐘五輪の塔あり、これ兒島高徳の父種長の墓なり、御著碑のあり、左方小鹽城址見ゆ、これ赤松氏の故城にして、鹽原東西に横延せり、俗に袴腰といふ。鹽路は酒井氏の舊地、城は皆て秀吉の築きし、世に名高き【白雲城】、五層の天守閣屹然として半空に聳ゆるを見る、地は播磨線の分岐點、南は備前、北は城ノ崎に及び、將に陸隔の連絡を全うせむとす。備前には海水浴の適地、家島の僻島而に芬布して風光佳なり。

鹽路より西、龍野の南三里【津】の港あり、これ徳川時代、西國大名



ら別天地の感あり、遷客を兼ねて登山するもの多し。

野里より北、鹽路市川の流に沿ひて溯り、遂に但馬に入る、【生野】は但馬の南端、市川の上流とす、右名なる生野銀坑は、今官府の手を離れたれど、幕府以來史を遺きて開採せしめし所なり。文久三年海内管攝の議大に起り、中山侍從忠光に兵を大和に舉ぐ、平野國臣澤宣嘉に説きて、兵を生野銀山に舉げ、海に大和に應ず、已にして忠光の敗關あり、士氣大に沮み其衆散じす、南八町以下三人先守したるも、衆寡敵せず遂に自及す、衆は新井藩附近に在り、患事すべし。

汽車學問を過き城崎に至りて停まる、これ山陰第一の稱ある【城崎温泉】地、豊前川の西岸、來自嶽の麓、北は津井山港を距る一里、海山の勝を兼ねる處、樓屋栴比して、遠國近國の浴遊を待つ、川の末内川村の江流を【二見浦】と呼び、古來歌枕に名高し、河流稍調き處、山崎石現はれ、空懸願住なり、碧海丹崖の勝數里の間に盡く。



泉 温 崎 城

對岸【武藏】あり、志賀氏の日本風景論に「武藏の武蔵野の最顯著なるは、但馬の武蔵野にして、八角七角五角なる黒色堅緻の玄武岩柱、高三二千尺乃至三千尺なるもの、竊々として排列する、萬千條なるを知らず、柱は七尺乃至一尺毎に、横に裂理あり、故に裂々として、幾多平石を累積するが如く、眞個に天巧の極。」と記せるもの即これ。

柳行 李二見の浦の湯入り舟  
堤岸より山陰線若菜に至る間、今横道の工事中なり、竹野を経て香住に至れば、宇養村に大乗寺あり、俗に應樂寺と云ふ、寺内應樂の講多し、寛政年中住持若菜京に遊びて應樂に會ひ、資を給して其技を修めしむ、應樂之に因り遂に名聲を馳す、後應樂此に來り、上人の爲に揮毫して若菜に報の、門弟應樂、瀧崎、榮春等の描亦亦附からず。  
香住より阿波、徳部を経て瀬野、西但馬の小都市なり、これより海岸に沿うて津寄、居屋を経て、七坂八峠を越えて四州に入る、大坂島、小坂島等書の如く散點して奇景謂ふばかりなし。

### 備山養水

山陽本線、宇野線、免根、宇品線

那波の西上郡より三石に至る間、汽車は山陽線第一の稱ある、「舟坂山」の長隧道を過ぐ、山は播磨の界備後三郎高徳が、贊奧を尊び奉らむとして果さざりし處、吉永縣の南二十町、新太郎少將の「開谷聖堂」あり、山低く水長く竹樹幽邃、祠あり開谷神社と云ひ、先政公を祀る。吉永縣より和氣縣に至る中間の一村、藤野に名あり、【芳原園】といふ、日笠川の流に沿ひて櫻樹を驛植し、春花見るべきものあり。西大寺は西大寺驛より半里、眞言宗の古刹なり、毎年二月十四、五の兩日修法大會あり、詣者數千人、標體となりて競うて之を取、奇觀名狀すべからず。  
旭川の長橋を渡りて、汽車【岡山】に至る、これ池田氏の西城市、東に旭川を帯び、南は水原見島驛に通ず、鐵道は近く宇野線開通したれば、四國との連絡、一層利便を感ずること、なれり、別に中國鐵道線あり、西は津井、北は津山に至るべし。城は一に馬城と稱し、宇喜多氏の修築せる處、天主閣尚雄然として古の壯觀を存す。【後醍醐】は驛より十二町、旭川を隔て、直に岡山城と相對す、林泉の美斯の如きは蓋稀なり。地は西南稍高くして丘阜の状を爲し、備後養水として宛然深山に入るの感あり、東北は平夷にして岡外の風景亦曠野の中に入る、岡中宏大なる建築の壯麗なる、安藝の嚴島と其左右を争ふ、廻廊長さ百八十間、社内御祭の御殿あり、一條の小流の山に發し、祠域を横きりて去る、これ古歌に名高き細谷川、宮より一里高松水攻の古址あり、清水宗治の古を思ふべし。庭園の次郎は合敷、【養水】の奇景は、この驛より北西五里を隔つ、嶋宮無數細谷川の溪流を歴して燈え、幽邃の致波瀾の趣を有り盡せり。



岡山より備中に入れば、備前、北一里を隔て、吉備開國有功の太妃【吉備津宮】鎮座す、これ備前備中備後三社の第一に居るもの、備前のと相照るに十町餘に過ぎず。祠宇頗る古風を遺して、規模の宏きを、賽者阿曾女に請うて古風禱福を祈す、海濱の地あり、【養水】海濱あり、【養水】驛より一里十町なると、近時世に多くの信徒を有す。鴨方よ

【養水】に至れば、山光水色一幅の好景を現はし來り、須磨明石以來、久しく平凡なる山野に厭きたる車窓の人をして、思はず日を拭はしむるものあり、見よ深碧なる海波に長く横はれるは神島にして、片島の青螺これに相連り、更に遙に遠島を隔て、沼隈半島と相對する處、白濁點々相俟するなど、偏に風光の美を盡せり、町の東端古城山公園あり、一帶の海光一時の下に集まる。  
瀬戸内の海岸至る處風光に富む、中に瀬戸、尾ノ道は特に其名聞の、笠岡より金崎の隧道を過ぎて備後に入り、備前驛に下りて、今公園となれる【備前山】に至り、五層の天主閣巍然として雲表に聳ゆるを仰がば、遊子は更に妙見山より海に沿うて南すべし、二里にして【備前池】の勝景に中に入らむ。橋は瀬戸内海の要津、また巴津の稱あり、南に津島、津島あり、東に備前島、備前島あり、仙醉島の風光最麗すべし、島は岩岬、翠色白波に映じて畫けるが如し、六島あり、西南の瀬中海水浴場を設く。【備前寺】は眞言宗の古刹、海山の勝景を撰り、特に二樓を設けて對瀾樓といふ、其後正清名前神社あり、橋より海岸に詣じ、西に迂廻すること一里、一岬海上に突出するあり、【阿伏兎の岬】といふ、口無の瀬戸を隔て、田島と相對す、瀬戸は湖三二窪にして潮流急なり、峭崖の上大垂簾あり、觀音を安置す、水濱より磴道を開き、岬を遶りて之を激ふ、岬の途中に道樓あり、閣は瀨より高きこと九十二尺、欄に凭て下瞰すれば、海山の眺望奇絶、身は空外に懸るが如し。



備前山

### 備山養水

【尾の道】は備後第一の海市、大發安の二山其後には、向島其前面に横はりて一海峽をなす、海山の展望まことに混雑なり、この風光を悉にせむには、大發山なる【千光寺】あり、寺背登ること五六町にして山嶺なり、坪地あり千尋敷といふ、展望奇備第一の稱あり、幾十の奇巖下に錯落して、海は止に幾多の平湖をなし、遠く伊豫鐵道の翠煙をが如く、絶勝言ふべからず、尾ノ道より奈崎を経て三原に至る間、風光明媚須磨明石に比して遜色なし、【奈崎】は古の長井ノ浦、神功聖德の時、御船を寄せて水を汲ませ給へる處、驛の東八幡宮境内、古の調子戸あり、三原の驛に接して【三原城址】あり、浮城の實今見るを得ざれど、海に臨んで眺望佳なり、今公園なり、野田山の半腹なり、【妙正寺】、山海の勝色を一眸に擁む。  
三原より路藝州に入りて、水郷驛の東北一里半【備前寺】あり、これ所謂安藝の御許山なるもの、境内奇巖屹立して老樹枝を交へ、激瀉奔流中を貫きて幾を二分す、誠に海外の險地にして、詩人會て山中三十二勝を並びぬ。驛の北方一小峯あり、これ小早川氏の舊城址、西條驛に近く左方原中に隆起せる形状秀麗なる一孤山を見る、



尾の道の風景

これ鏡山、大内氏の盛時此に築き、西條城といひ安藝を鎮座したり、このあたり低山性の岩層起伏し、溪流激湍風氣綠を拖く、瀬野驛より西、線路瀬川川に沿うて、廣島平地の東端なる、海田市に至りて、再び海光に接す。  
【海田市】は廣島の分岐點、神武天皇の封尊は其址定かならねど、西方一里の府中村内なりといふ、【呉】は海軍鎮守府所在地、往時海岸の一小邑、今尠大なる軍港となれり、江田島は海軍兵學校のある處、北方廣島市と相照る間に船島あり、一に呼んで安藝の小富士といふ。江田島の南方にある倉橋島は、元一地圖を爲して本土と接續せしを、平瀨渡舟行の便を計らむ爲、これを開鑿したりといふ。これ即ち瀬戸内海勝地の一なる【首戸瀬戸】にして、對岸備前府との間五十間餘に過ぎず、潮流急激にして、帆船は瀬瀬に乘するにあらざれば、容易に通過するを得ず、附近風光明媚なり。  
船頭かわい、やおんどの瀬戸で  
一丈五尺の橋が崩る

【廣島】は中國第一の繁華の地にして、淺野氏の舊府、地は南方海に接し、河流多く、市内を貫流するを以て橋梁頗る多く、水の都と稱せらる、大阪市と宛然



相伝たり。城は毛利輝元の創築する所にして前主正徳を存す、今第五師團の營城たり、日清の役、聖主親征廣島に臨み、城中を以て大本營となし、軍國の事を統へ給ふ、我軍大捷武蔵八表に揚る、此地實に國策の上不朽の名を得たり、近く日露の戦役に際しても亦築地たるを、驛を出つれば西北樹木の鬱茂せる一丘陵を望むべし、これ一築山にして今公園たり、藩祖長政を祀れる【龍津神社】あり、淺野侯の【龍津園】は支那西湖の景を模したるもの、泉石花卉の幽勝風に世に聞ゆ、國泰寺、佛護寺、龍津寺は市の三天主、國泰寺は當年の安國寺にして重瓊の建立に係る、京橋川に架けたる虹なす御幸橋を渡れば帆橋林立煙囪高く聳るものあるを見る、これ【宇品】にして、廣島市の繁盛を來せる、この港を有するが爲なること多しとす、港西、宇品島あり、觀音を鎮す、眺望其佳なり、

廣島を後にして横川、己斐、五日市を過ぎて二十日市に至れば、海濱一丘老樹鬱々たるあり、これ櫻尾城址、洞安寺は驛の北佐方にあり、陶全委の塔あるを以て知らる、嚴島に至りて陶、毛利興亡の址を憶ぶもの、まづ此地を訪はざるべからず、

藝備の郡【嚴島】に至りて其妙を稱む、宮島驛に下車すれば汽車の時間と連絡せる小汽船あり、十数分にして、風光明媚なる別天地に運び去るべし、島は廣島島の西南、佐伯郡の陸岸に沿ひて、東西三町南北二里半、北偏嚴島神社あり、風光秀麗なる境を占めたり、其殿閣海に向ひて、江中に基礎を建つ、今其結構を見るに、大宮、寶殿、其中央にあり、幣殿、拜殿、被殿、其前にあり、被殿の前に高麗窓、其左右に平舞臺あり、樂屋それについで左右に分れ、門客神社、樂屋と並びて左右に立てり、廊下は火燒前といひ、更に海に突出すること七間餘、通に海中の大船表と相對し、其一端に一大燈籠を設く、寶殿の左右燈籠あり、扉曲百四十八間の長きに互り、一間毎に燈籠を飾る、潮來れば廣澤波怒る生じ、百燈長く照映して、光彩陸離美觀名狀すべからず、有名なる海中の大船表は、火燒前の前方七十間、軟沙の上に立つ、滿潮の時は、參詣の舟口帆を掲げて滑り入るべし、木殿より左折して廻廊を廻れば各神社、寶殿、拜殿、被殿、並び備はる、社殿の後方圓形の一塔池あり、鏡ヶ池といふ、月夜明鏡の裏、蟠龍窟を映す、殿閣の前方、左右の江濱長松鬱々たり、松に傍うて百八の石燈籠あり、雙鹿遺跡其人に親しむ、凡そ此神社の結構、江山自然の形勝を利用して、殿閣廊廡の排布を爲す、高きに攀ぎて俯視すべく、舟に泛びて遠望すべく、江山樓閣相掩映して、無限の妙趣を見る、

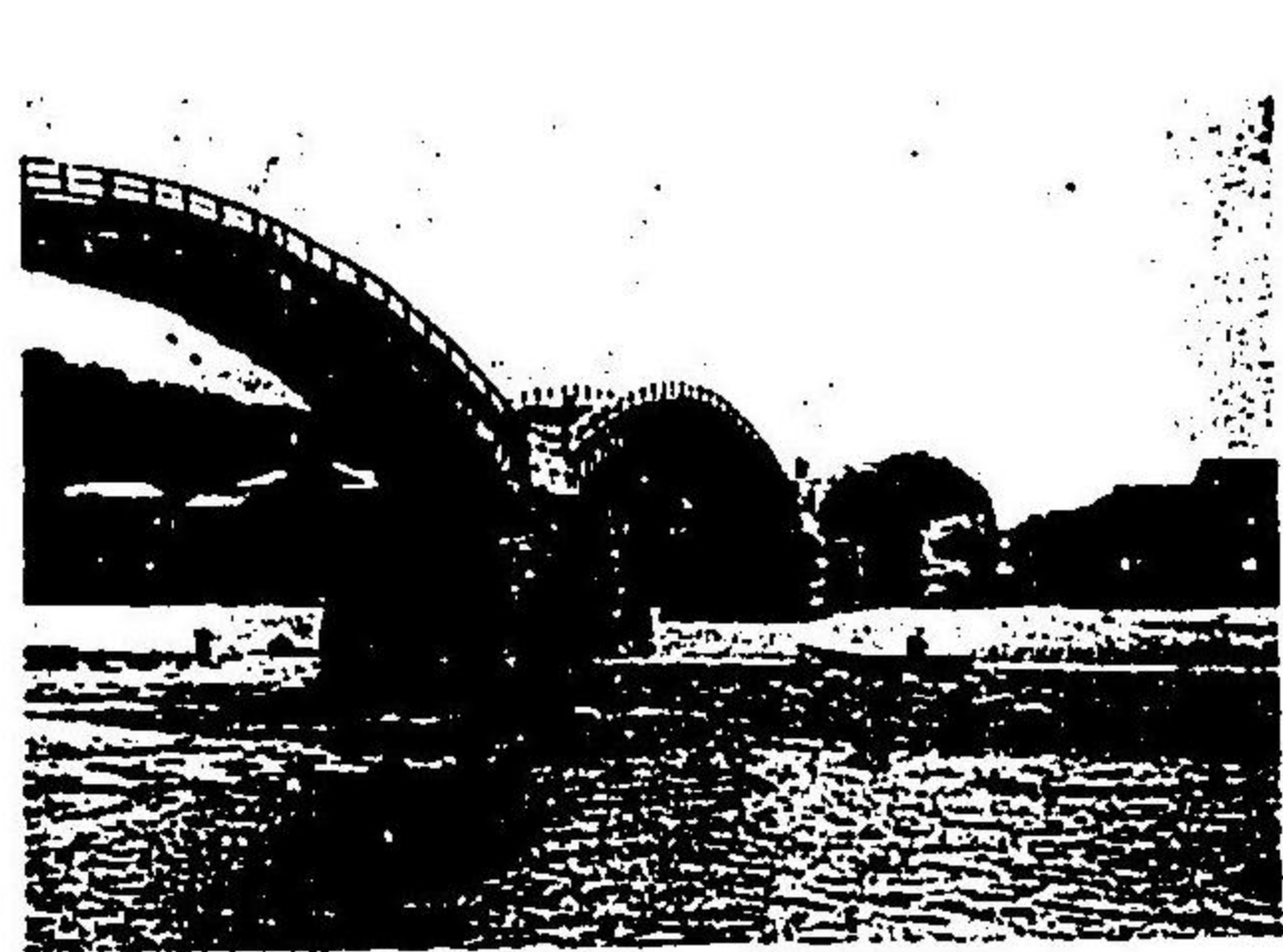
御手洗川を渡れば【大願寺】、海に沿うて更に西すれば【天徳神社】、境内今公園となれり、大元浦の後山二層の寶塔あり、これ陶晴賢の御手洗川源々として石上に奔れり、岸の雨邊樹影多く、危橋怪岩景趣佳なり、宮の東側、聖公第一の御徳院の時祭道したる、【千燈殿】及【九重塔】あり、東北町を隔て、瀧ノ尾の高原あり、西行返りノ坂を下りて、海邊に出づれば【長濱神社】、眺望佳なり、北偏海水浴場の設あり、一御海に突出するは、即ち元就の城を築きて敵を誘ひし要害ヶ鼻【龜山】は大宮の後なる變秀の峯、又御山と呼び、登路二十八町と傳ふ、麓に白練の瀨あり、高き十二丈、瀧ノ宮あり、又夜盆多し、

島に七浦あり、各浦に江比須祠あり、一安藝の宮島はれば七里浦はな、浦七江比須、風景の變化に富める、煙波の趣致に富める、島廻りの樂遊さざるものあり、

まづしほに月より上の宮居かな  
宮島より西吹渡、大竹あたり、海面の風光佳なり、大竹の西小瀬川を渡る、川は藝防の界、慶應年間長州征伐の時の激戦地、川の上流魚切、蛇喰の奇勝あり、

### 防 長 の 跡

山内水線



山内水線

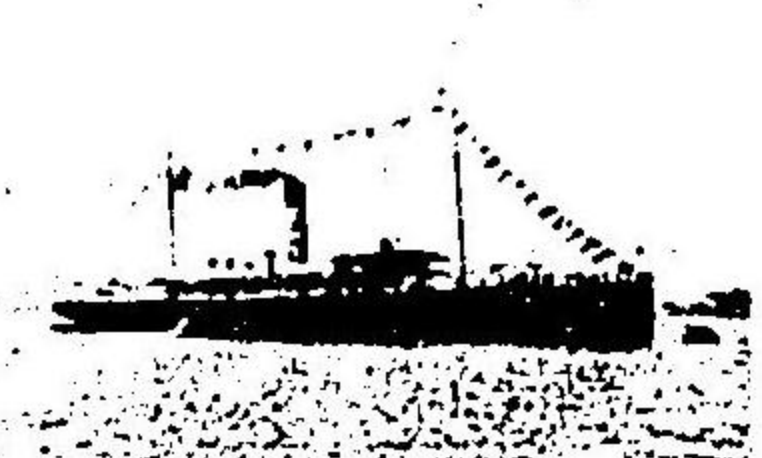
鐵路防州に入りて岩國驛、驛より一里にして岩國町あり、錦川道々として町の西南を過ぎる處【錦帯橋】を架す、本邦製橋工事中、構造の奇巧と堅牢とを以て名あるもの、長さ百二十五間、最高き所水面を抜くこと三間、河中に石を築んで四箇の橋脚を築き、半圓の五小橋を架す、橋下一柱なし、柱を組んで屏々相懸らしめ、以て橋を支ふ、其構造自ら西洋の迫持法に通へりとす、舊城址は宇賀山にあり、今吉香神社の社地たり、瀧社を祀る、錦川一帯の風光麗すべし、

岩國より西、汽車は藤生、山宇、神代、大宮の各驛を経て柳井津に至る、此沿岸風光美なること多し、藤生の黒磯天宮寺、殊に眺望に富むと稱せらる、神代驛より十五町、岩屋澤あり、湯水淺くして廣し、以て水浴に適す、往吉神社あり、海面の眺望佳なり、大島の海面尾代島の青嶺横はる、島と陸との間は即ち大島の瀨戸、潮流激甚壯觀比なし、

【柳井津】は大島瀨戸の西北に灣入せる灣頭の港にして、古の大島津、此地義經の瓊ノ浦攻撃の船頭を發せしところ、中世海賊衆ありて大に海外を劫しき、下松驛より徳山に至る間、沿岸の風光麗すべし、ことに【魚ヶ邊】一帯の眺望開豁にして、江に横はる奇石閉岩妙趣くる所を知らず、海水歌町を隔て、笠戸の島嶼く波に浮ぶ、下松驛より十町【笠の浦】海水浴場あり、風景宛然たる天ノ橋立なり、【徳山】は舊毛利氏支封の地、故見玉大將は實に此地の出身、大將の創設にたる見玉文庫あり、海軍煉成所を有するは、此地の誇りとする所なり、徳山の次驛は福川、海面の眺望佳なり、【富海】に至れば、一帯の海濱青松自津遠く連り、瀧水極めて明澄、海水浴の適地として知らる、【三田尻】は繁盛殷賑の海驛なり、向島其瀨戸に當りて門屋口の瀨戸あり、北に連れる市街を宮市といひ、常と同一市街の觀あり、今合して防府町といふ、【宮市天神】は酒垂山にあり、樓門廻廊丹雘然たり、國分寺其東北にありて、幽靜甚雅安すべし、驛より一里、周防ノ宮神社あり、【小郡】は、山口縣廳のある山口町へ通ずる、最捷道路の衝に當るを以て、旅客の乗降盛なり、

【山口】に小郡より三里、中世大内氏此に館舎を置きしより大邑となり、其繁榮の時、富強京都を歴したり、地勢山中の平夷を占め、稍京都に似たり、大内氏没びて後、毛利氏の長防に封せらる、や、ま、山口に大部す、尊府命じて此を去らしむ、因て秋に築く、山口これより頗に衰へぬ、文久二年毛利親地形の利を察し、治所を山口に建つ、これより又長防の府邑となる、市の北福山口陣址あり、其丘峯を【龜山】と呼ぶ、大内氏世より義隆まで、十代二百年の故城なり、今公園たり、【龍興寺】は曹洞宗の巨刹、義隆の菩提所とす、【龍興神社】は毛利元就を祀る、祠に接して瑠璃光寺あり、義弘の菩提所とす、

小郡より瀧川、阿知須を過ぐれば長門國、神功聖德の船を作られたる船木町は、船木驛の西一里を隔つ、厚狭は厚狭川の東岸、此地大瀧線の分岐點なり、世に赤間石と稱する硯材は、今専ら此川附近より出づ、地生礫あたり一帯の海濱を、赤間ノ松原といひ、風光明媚の境、小月を過ぐれば【長府】、古の府中なり、今の二宮八幡宮の地に即ち仲實天皇の【瀧浦宮址】、地に東面して海濱に居り、西に山を負ふ、南に祇山ありて突出す、車輪といふ、山口毛利の府址あり、内藤の陣址あり、羊腸たる石徑瀧浦宮址にして、中下口瀧宮に雲を捲く、松崎八幡宮あり、觀月の名所とす、詩東二十町許の海中、【瀧津】、【千珠】の二宮あり、陸するに仲實記に「皇后、瀧浦津に得如寶珠於海中」と見え、此如寶珠は瀧浦と瀧浦の變化にて、後之を瀧浦島に納めたまふと説く、蓋瀧浦千珠は、其物具分の質なれども、此唯して之を語れば、瀧浦の進退を知るのりか、今の語に海濱を得といふは、猶瀧浦千珠を得といふが如し、豐浦の人、神功皇后の威徳を憶ひ、其遺事を傳へて、珠名を以て岩に名づく、亦所以ありといふべし、



船 結 運 釜 田



長府より汽車を下ノ関の背後に起伏する、丘陵の間を縫うて走る。一ノ宮驛に近く、(住吉荒御魂神社) 鎮り、石階を登ること五丈、樅門あり鐘樓あり、老樅下に怪樹を交ふ、春時遊觀の人多し、宮は神功御尊の後、直に此處に鎮めたまひし名神にて、歴代の崇敬篤かりき。

山陽線の盡くる處は即ち「下ノ関」、海峽の北岸に居り、水を隔つるの青山はこれ嶺西、門司と相對して、中國九州の咽喉を扼し、形勢大異海西の要津なり、市街は麓に沿ひ海に瀕して、約二海里の間に橋比し、道路狹隘なるを免かれざれども、其後山に登れば、眼界豁然、山光水色深遠が如く、山陽線中橋に見るの佳景なり。

日本戦史中最慘なるもの、不家没落のそれに過ぐるもの蓋少からむ、「今ぞ知る御裳瀬川の流れには波の底にも都ありとは」、幼沖の天子、空しく壇ノ浦の遺府とならせ給ひしより、茲に七百年、山は舊によりて昔々の容を變へず、水は古の如く若々の色を改めず、【赤間宮】頭を以て、檀吉の念を就れば、雙袖自ら涙を感えざるべし。宮は驛東二十町、紅石山麓にありて官幣中社なり、御陵は境内に葬す、宮の左側紅石山に登る坂口に、平家の一門、清經、資盛、敏經、經盛、知盛、教經、家長の墓あり、山に登れば眼界遙く、豊山は遠にして染むるが如く、筑山は淡にして眉を與くに似たり、加ふるに豫州の山風颯々として海に霞む、佳處なんぞ之に過ぐるものあらむや、況や瀬戸内海道一路の青松緑波は、漸く此處に盡きむとし、眼下怒濤天を衝くの奇觀を至するに於てや、見よ左方漁家蟹相並ぶ、波悲しげに岸を打つは「霞の浦」、浦に異煙あり、甲敷入面を爲して憤怒の相あり、平家堂といふ、魚あり形鱗に似て金鱗、上に白斑あり雪の如し、小平家といふ、俗に傳ふ、平家の亡靈、男は化して蟹となり、女は變じて魚となり、宮の左側に鱗々として控ゆるは、これ日清兩國の使臣折衝の旗亭【春帆樓】、榎和使李鴻章の旅館に充てし【別接寺】亦近くあり。

海峽の西口【彦島】の一島嶼は、附近嶺岩多し、島は海水の役、平氏の據りて、二龍の兵を乗退したる處、南方豊前との海門を大瀬戸といひ、與治其衝岩、崖柳島あり、北方町の西偏小門との海門を小瀬戸といひ、距離凡五十間、一字を投すれば成は達せむとす、潮流最急にして奔馬に似たり、兩岸崖岸崩れを樹てたるが如く、小赤壁をなす、【小門】海水浴場あり、附近の漁夫夏秋の交、夜々小舟に松明を焚き、網を以て魚類を捕ふ、漁火散じては螢火の如く、集つては火團の如し、また一奇觀なり。

緑道紅燈籠道、西橋影月高麗、隈東急身公家、兩赤青山是驛門、 榎山 陽

またの風景

観音堂、徳島縣



開山より宇野に至り、連絡汽船によりて高松に向ふ、其間僅に一時開半、瀬戸内海の眺望、身を一大畫園の中に置くの感ありしむ、船高松に近づけば、五穀山の巖峯たる山容、已に前に高く、右に接して源平の古戰場、尾山を認むべし、兜島、大島、女木島、男木島の衆嶽等畫の如く、碧瑤瑤盤に散在せる間を過ぐれば、互登粉壁、美しう海波に映じて、高松ははや眼前にあり。

小豆島【松原】一石の珍ならざるなし、一路窮まる所また忽に開け、歩々其觀を改め、長短の嶽嶺嶺に相通して六池を結ぶ、平樹あり、坐して雲空山の風景を把ふべく、俯して小西湖の沈暎を掬すべし、近時大に始園の計畫あり、水園の將來また見るべきものありむ、高松に至るものは、必ず「尾山」は登許すべし、これ當に其風光の四圍に冠たるのみならず、又日本屈指の絶勝なればなり。

しかも地は源平二氏の決戦地、風光歴史を得て更に佳なるを覺ゆ。高松より一里半にして古高松村、村の北一條の干河を隔つる海島は即ち尾山、元暦二年二月源義経尾山を襲ひ、火を行宮に放つ、平軍盡く舟に上りて、西走赤間關に赴く、海聲轟轟古を悲しむに似たり。【尾山寺】あり、殿堂壯麗長松蒼々として之を護る、什寶多く、源平合戦の寶器を傳ふ。寺の西一町【獅子の嶽】あり、風光絶倫の佳處、茲處を以て余島第一とす。附近那須與市の所石あり、佐藤權信の碑あり、七百年前の史事親しく讀むことを得。【五穀山】は讀の名山、尾山と頂ノ浦の一曲油を挟んで相對す、山頂著しく傾斜せられて絶壁をなし、遠く望めば、拳狀の岩峯突起せるが如く、所謂五穀嶽立の奇形をなす、山の半腹千手院あり、龍目雄大なり。

汽車高松を發して、鬼無、瑞岡を経て、因分に至れば因分寺あり、【白雲洞】に詣て、保元古を弔はむと欲する人は、鴨川驛に下車すべし、驛より一里半なり、殿前白雲神社あり帝を祭る、「命あれば帝が軒端の月も見つけられぬ人の行するの空に、萬葉の尊詠か、悲調あり、涙なくして誰か吟せ得るものあらむや、白雲寺あり、内海の水一頁波の如く、龍潭の諸島嶽々其石を散せるが如く、眺望頗る佳なり。九龍は北西海に枕む、【伊豆寺】は新宗師氏の香火院、念比羅利生記に名高き田宮小太郎の墓あり。【多度津】は古より瀬戸内航路の船の、好みて結山せる海驛にして、鐵路はこれより南して琴平に通ず、多度津の次驛は金藏寺、智識大師の誕生地たる【金藏寺】は驛より一里を隔つ。次は【龍運寺】驛、地は弘法大師の誕生所にして、其道址を傳ふるが爲め寺塔盛に、讃州第一の名刹なり。

汽車琴平に至りて停まる、龜頭山の半腹【金刀比羅宮】あり、社は大己貴命を祀り、崇徳天皇を配祀す、近世海内無比の靈祠と稱し、群俗の崇敬極めて厚く、賽人の多きこと、伊勢大宮に類ぐといふ。親狹祈願の男女、四時市中に填充せる中に、赤銅色の顔冠しく、髪を大髻に結びたる、船乗の行き交ふもの特に目に新らしく、精馬寮の中、風波難船の額多きを占むるは、此神の海來の要津にあたる、鹽屋七島は其民長擲舟を善しく、遠國近海航行に至らざるなし、此神此形勝の地に居り、此航走の民を得、其盛大を致せる亦偶然にあらず、龍より祠前に至る迄九町、華表、燈籠、鼓樓等道を挟む、賽路の入口に精橋あり、鼓樓の傍に清少納言の墳あり、數千級の長段上り遺せば、神殿、拜殿、繪馬殿、奉納所、社務所等、皆近時の更築にして、壯麗眼を驚かす。拜殿珠の遊より北望すれば、近く讃岐富士、八栗、五穀の山を看、青嶺幾點瀬波十里の風光あり。

【道後】は四國第一の溫泉、多度津より汽車にて、瀨田に至れば、汽車四十分にして遊子を溫泉に導くべし、高松よりは山陽線宇品への連絡の便船あり、高松は松山市の前進、興居島長く前に横はり、伊豫不二其影を海波に映し、風光の美旅客の思を惹くに足れり。汽車高松を後にすれば、やがて海岸をはなれ、一帯の平野前に展げ來りて、松樹蒼蒼たる丘陵中、【松山城】の白雲を穿むべし、地は松平氏の舊城市、俳人子規の故郷なり。

道後の發見は遠く神代にあり、海内の溫泉中その最古に聞ゆるもの、此湯の右に出づるものなし、凡そ四國の溫泉十餘、多く冷泉に屬し、溫泉極めて乏し、獨り此地の熱泉を湧出すること、誠に天造地設の奇といふべし、浴場の構造最華麗を極む、伊佐爾波神社あり一に湯月八幡とも稱す、湯祭神社は今道後公園、林泉の美あり、石手寺は眞言の名刹、甚古宏壯なり。

讃豫の勝説き終りて、向阿州の風光を残せり、【徳島】は即ち其景に入るの關門、大阪、神戸、若しくは和歌山より船して至るべし、市の中央に山あり高き十二坂、深樹鬱蒼として吉野川を帯にし海口に隣す、山勢孤岡之を望めば塔の伏するが如し、【消山】の稱あり、これ蜂須賀氏の舊治城のある處、今公園たり、紀の室時へは應ふべく、波の海潮せば拘すべし、四望一盡眺覽窮まりなし、城山の西南端の山に【持明院】あり、勝長市中第一たり。

南海の勝【鳴門】の壯觀を以て其極とす、この壯觀を目撃せむには、淡路の鳴門橋、又は大毛島の孫崎に至るべし、徳島より北四里、巡行船の便あり、鳴門崎と孫崎との間、相距ること十五町、石灘あり、中潮と稱す、長さ二町二十四間幅十間、や、形體を論はせり、島あり、西なるを孫崎といひ、東なるを飛島といふ、潮流大速力を以て



社神平琴

# 山陰の風景

既報 境線、山陰本線

之を通過する時、中潮に碍へられて、激しく浪を飛ばし、渦を捲き捲き、其音数里外に響き、千輪の雷車を一時に鳴らすが如し。満潮の時は南海より來り、干潮の時は内海より來る、月輪の初瀬の時は最麗なるべし。海潮盛んなる時は、海士釣を兼ねて釣魚を掛ふ、往來の船帆を掲げて渡らば、開々として鱈の落花を追ふが如し、靜觀動觀極めてこの海峡にあり。

鴨門より出で、やまつらみつしほの

ひらまはかりし見れば船しき

徳島より汽車は吉野川の急谷に沿うてのぼる、府中驛、東常樂寺、因幡寺、觀音寺、井戸寺あり、鴨島驛、近藤寺、熊谷寺あり、西原驛、近藤寺あり、皆いはゆる四國通路の賽寺。鐵路船戸に至りて盡く、此地阿州北部の咽喉、吉野川の清流に臨みて、風光掬すべきものあり、鮎漁の樂言ふばかりなし。

阿州の勝、鴨門と並稱すべきものあり、【祖谷の急橋】の奇あり、祖谷は吉野川の一、松尾川の山谷にして、剣山の西北麓にあたり、溪を隔て、東西祖谷村あり、溪左右絶壁をなし、橋梁を架すべからず、雲を編みて釣橋を成ぐるもの郡で十三橋、善徳橋、最著名なり、長さ三十三間、之を架めば雲梯の中を渡るが如く、直下十八丈水石激せる上に懸る、渡りて中頃に至れば、橋端々として睡り、身は次第に天上に登るに似たり。住民は平國盛の遺裔なりと傳へ、赤旗一旗を藏す、僻遠なる深山、外界の文化に感化の縁なきこと、茲に七百年、言詰風俗中世の遺風を留む。



鴨門

既報の線路山陰に入りて、吉野を経て【徳島】に至る、可は驛より一里半、丹波西南部の一郡合なり。大山驛より汽車は一度西して山陰の間を縫ひ、下流より谷川に至り、これより北して植原、石生、黒井、市島、竹田を過ぎて【船山】に至る、地は吉野川の左岸なる平野に位し、俗に丹波の京と稱す。【鬼ヶ城山】は船山の北、丹後との境にあり、かの大江山の因幡酒香童子の山城にして、一族茨木童子の住める處なりといふ、由來丹波は山國なれば、作り物語に鬼の名所となすも、人情ふさはしきことなや。【河守大神宮】は驛より三里半、鬼ヶ城山よりは一里に滿たす、傳へいふ、伊勢内外の大神は、遠く神代より此地に鎮座ありしを、雄略の御世遷し奉られしなりと。社殿の構造、宮川、五十鈴川、茨道橋など皆伊勢に同じ、内宮の左方露間に天ノ岩戸の跡あり、岩戸より佛性寺に至る途に、【鬼ヶ茶屋】といふあり、これ頼光が酒香童子征伐の際宿泊したる處。【大江山】は更に行くこと一里、山頂怪嶺矗立する處、洞穴あり、これ往昔酒香童子の棲みしところなりと、嶺上遠く若州の峯巒を全視標榜の間に見え、近く與謝の村落を指點し、風光掬すべきものあり。



立 舞鶴は日本海岸に於ける要害の地にして、新舞鶴は今軍港となれり。町の東邊【丹波城址】あり、これ慶長の役細川幽齋の籠城せし處、杉崎幾度か降りて、數島の道の爲に、幽齋の命を全せしめられたるは、風流の誇りとして傳へらる、美事なり、「古も今もかはらぬ世の中に心のたねを秘す言の葉 幽齋」、心種園内記念碑あり、永く其芳を傳ふ。

萬松一路海に浮ぶこと凡二十八町、上下既ね枝節を舟しうして、一字を釣水の上で描き、遠く之を望めば、長洲海波に映じて水中松あるが如く、釣水天と連りて、

# 山陰の風景

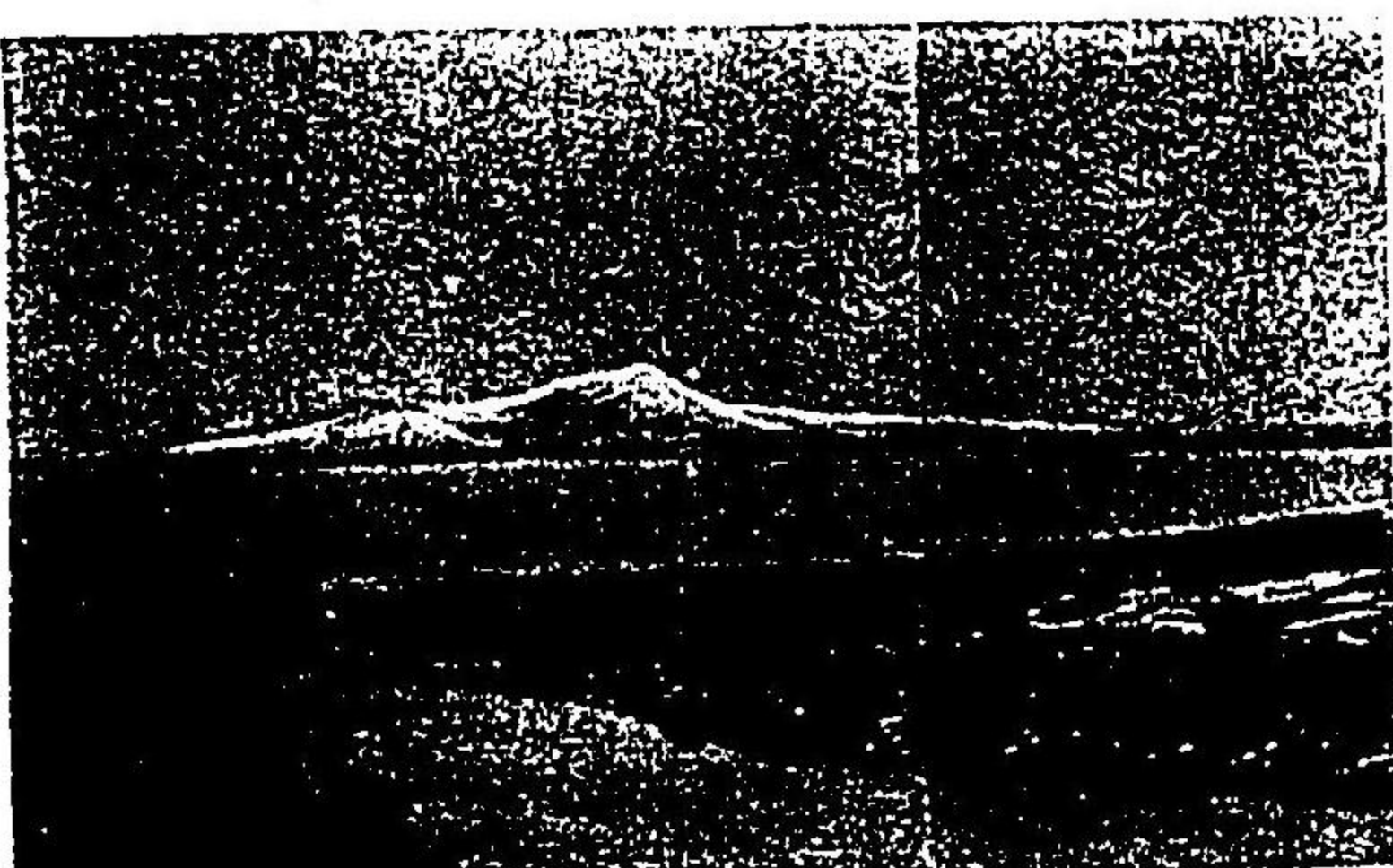
既報 境線、山陰本線

天上亦橋あるに似たるもの、これ丹後の【天の橋立】の風光にあらざるや。橋立は宮津の北一里餘、與謝海の西側なる門洲狀の沙嘴なり。舞鶴より宮津へは定期汽船の便あり、舞鶴對内河の風光に沿ひ、左瀬右瀬日本海に出でむとして、又與謝内海に入る、船の與謝内海に入るや、忽ち前面蒼松一帯蒼翠の如く、細く長く海面に浮べるを見む、これ松島、殿島と共に、皇國の三勝と稱せらる、天ノ橋立にして、晝夜陰晴、春霞冬雪、皆この景を粧ひ、二十四節季其美を異にす。長洲の盡くる處【橋立明神】あり、社殿瀟瀟たり。若しこれ橋立の景を瞻望せむには、櫻峠あり、【成相山】あり、櫻峠よりは横一文字に、成相山より斜に横一文字に見るを得べし。龍神社に詣て、社後の成相山に登れば、中腹【成相寺】あり、與謝の江山全景を収むる處なり、人は皆宮松島の景は富山にあり、橋立の景は成相山にありと。賽路の傍松陰の蔭より眺望するを最とす、試にこの美景に背いて、立ちながら身を屈めて股間より窺へ、一里の松葉波光に映じて、與謝の入江を測する處、水中天あり天上水あり、上なるが海かなるが天か、天ノ橋立股眼地、實に天下無雙の奇觀なりといふべし。寺の奥に慈眼堂あり、幽谷穿寂として塵外の樂境。

宮津より但馬街道を辿りて口大野を過れば峰山、元京極氏の城址、四面丘岳の間に入り、これより久美濱を経て但馬の豊岡に出づべし。久美濱は瀨川狹窄にして波を捲りたるが如く、宛然湖水の觀をなせり、町の東方甲山に金毘羅神社あり、瀨内の風光は更なり、東は丹後西は但馬の海岸を望み、青松白沙小橋立の觀あり、地僻にして人の訪ふなきは惜むべし。

出雲は古王者の地、御崎山の麓、大社殿として神威赫灼たり、共通湖其東にありて、無波汪洋周迴十三里、湖を廻りて形勝の地多し。唯地北に偏して、交通の便に欠くる處あるを以て、人の多く此山水の美を知らざるは遺憾なり。播磨驛に賴りて成崎溫泉に沿したる人は、海岸を傳うて岩美に至り、それより汽車の便に賴るべし、

既報驛に賴りて天ノ橋立に遊びたりむ人は、更に舞鶴より汽船にて伯耆の境港に至るべし、別に中國線津山より米子に出づる途あり。



境は山海の景勝を占む、汽車は兩して、米子に至り、西は今市東は岩美に通ず、地は夜見ヶ濱の北端、島根半島其前面を繞りて、一帶の海峡を形成し、東は渺々たる大海に臨み、西は中海を介して宍道湖に通じ、舟行僅に三時間にして松江に至るべし。境より米子に至る長打曲浦は、即【夜見ヶ濱】、美保湖と中海との間を、隔障する一帯の堆洲にして、長五里湖一里に滿たす、沙濱一丈尺狀をなすが故に、また月ヶ濱の稱あり。一帶の青松の如く連り風

【米子】は舊池田氏の支藩、城址尙嘗て存す、島狀の一丘深浦に臨んで、山海の眺望大佳なり、北に隣りて米子公園あり。

【安養寺】は驛より約一里、後醍醐天皇女璣子内親王の開基、境内御塔あり。

米子より西、磯路出雲に入りて安養寺【清水寺】は驛より一里半、推古朝の創建なり、其金堂は大開元年修造の傳なりと傳へ、雲州第一の古伽藍なり、境内開羅園また松づからざるの勝地。寺の南【雲嶽寺】あり、臨濟宗の名刹にして、附懸明の開基、後醍醐帝の物語を掲げ、繪旨以下多く古簡を傳ふ。戰國時代、足子氏の雄を中國に振ひし根拠地たる【廣瀬】は驛より三里、富田川の上流に在り、川の上流一小孤山あり、これ【月山】にして、足子氏の古城址、經久之の築あり、足子十勇士の墓、國久の殺されし新宮、時久の敗れし布部山、因久を祀むる大夫神社等、富田川一帶の流域は、眞に足子氏興亡の悲劇を語る。

【雲津浦】最開の

光俊美、詩人之を大天橋と呼ぶ、天ノ橋立に比して、其景致更に雄大なるを以てなり、この絶景を瞻望せむには、いはゆる伯耆富士の名ある大山の中腹、及、境の對岸島根半島の鷹尾山を可なりとす。

【美保明神】は島根半島の東南端、境より汽船に乗れば四分にして至るべし、伯耆富士其前面に聳立して、其秀麗を美保湖の碧波に滿し、夜見ヶ濱の大夫橋右に長衆を曳きて、風光の美いふべからず。【美保神社】あり、事代主神及其妃美保津姫命を祀る、毎年四月七日に青葉祭の神事、十二月七日に、諸子船の神事を執行す、これ事代主神が大國主神の命に從ひ、國土を天神に譲り、青葉壇を海中に作り、船の櫓を踏みて、自ら隱退し給ひし故事による、社頭神代史の一頁を繰くも、亦興多きことならずや。美保開

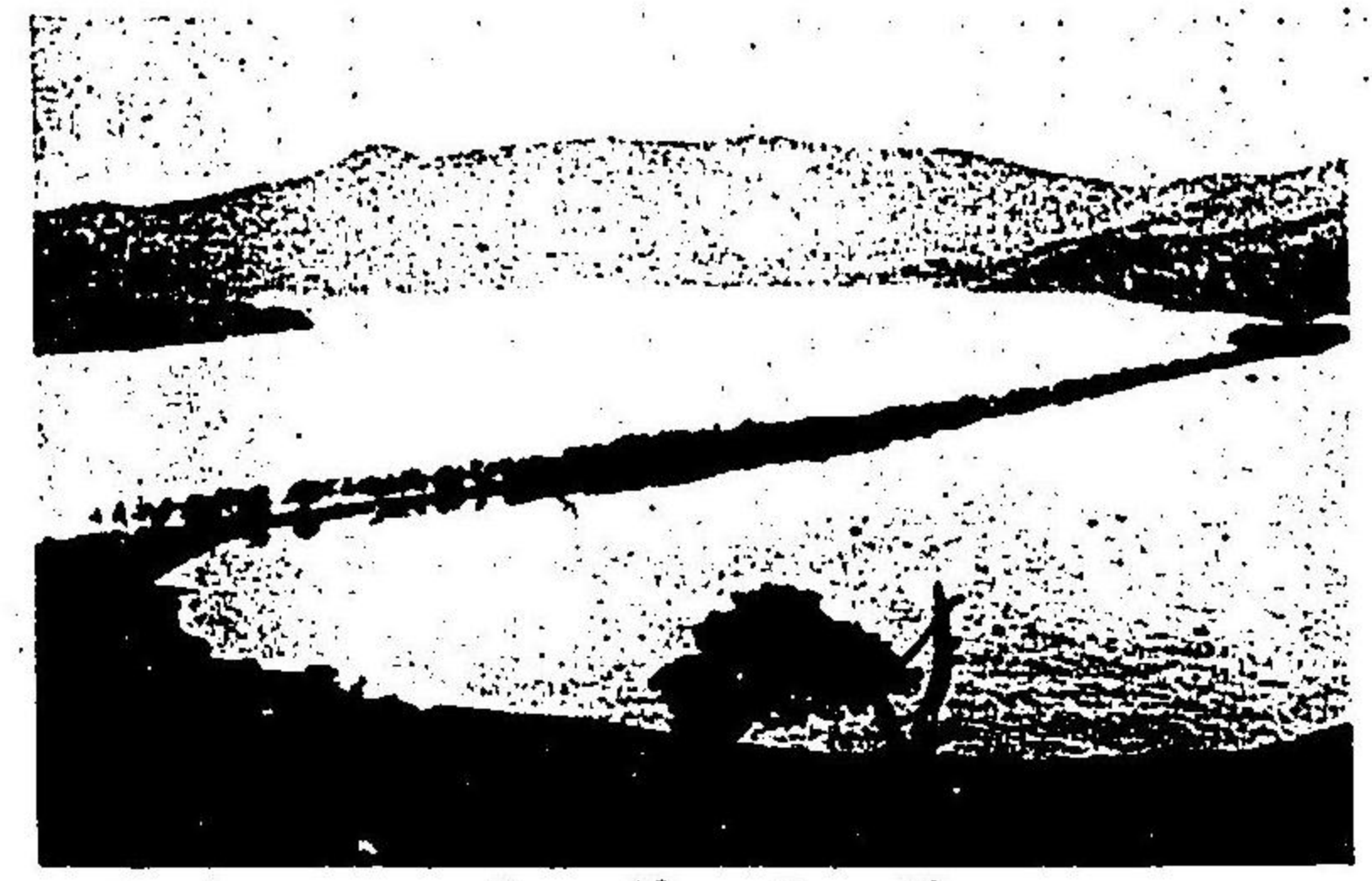
之を通過する時、中瀬に碍へられて、激しく浪を飛ばし、渦を捲き狂奔す、其音數里外に響き、千輪の雷車を一時に鳴らすが如し。瀧瀧の時は雨海より来り、干瀬の時は内海より来り、月輪の初瀬瀧の時最観るべし。海瀧最盛せる時は、海士釣を兼ねて蟹女貝を拾ふ、往來の船帆を掲げて渡るさま、聞々として鱈の落花を追ふが如し、静観動觀収めてこの海峽にあり。

鳴門より出で、やまづるみつしほの

徳島より汽車は吉野山の發着に沿うてのほら、府中縣野間寺、因唐寺、觀音寺、井戸寺あり、鳴門縣附近藤井寺、熊谷寺あり、西條縣野間寺、因唐寺あり、昔いはゆる四國通路の賽寺。鐵路船戸に至りて遠く、此地阿州北部の咽喉、吉野川の清流に臨みて、風光獨すべきものあり、鮎漁の樂言ふばかりなし。阿州の勝、鳴門と並稱すべきもの、(瀬谷の恐橋)の奇あり、祖谷は吉野川の一、松尾川の山谷にして、劍山の西北麓にあたり、溪を臨みて、東西祖谷村あり、溪瀧左右絶壁をなし、橋梁を架すべからず、夢を馳せて釣橋を渡くるもの都て十三橋、善徳橋最著名なり、長さ三十三間、之を架めば雲霞の中を渡るが如く、直下十八丈水石激せる上に懸る、渡りて中瀬に至れば、橋橋々として軽く過り、身は次第に天上に登るに似たり。住民は平國盛の遺裔なりと傳へ、赤旗二旗を藏す、僻遠なる深山、外界の文化に感化の緩なきこと茲に七百年、一掃風俗中世の遺風を留む。

山陰の勝

阿蘇縣、境、山陰本線



阪鶴の線路山陰に入りて、古市を経て「森山」に至る、町は驛より一里半、丹波西部の一部なり。大山驛より汽車は一度西して山陰の間を繞り、下瀬より谷川に至り、これより北して植原、石生、黒井、市島、竹田を過ぎて「輪知山」に至る、地は昔無瀬川の左岸なる平野に似し、俗に丹波の京と稱す。【鬼ヶ城山】は猿崎の北、丹後との境にあり、かの大江山の因襲酒吞童子の山城にして、一旗赤木童子の住める處なりといふ、山來丹波は山國なれば、作り物語に鬼の名所となすも、人情ふさはしきことなや。【河守大神宮】は驛より三里半、鬼ヶ城山より一里に滿たず、傳へいふ、伊勢内外の大神は、遠く神代より此處に鎮座ありしを、雄略の御世遷し奉られしなり。社殿の構造、宮川、五十鈴川、志道橋など皆伊勢に同じ、内宮の左方露間に天ノ岩戸の跡あり、岩戸より佛性寺に至る途に、【鬼ヶ茶屋】といふあり、これ頼光が酒吞童子征伐の際宿したる處。【大江山】は東に行くと一里、山頂信濃新正の處、洞穴ありこれ往昔酒吞童子の棲みしところなりと、嶺上遠く若州の峯を雲烟縹緲の間に望み、近く與謝の村落を指點し、風光獨すべきものあり。

驛鶴は日本海岸に於ける要害の地にして、新羅鶴は今軍港となれり。町の東邊【山陰城址】あり、これ慶長の役細川幽齋の船城せし處、櫓門幾度か降りて、敷島の道の爲に、幽齋の命を奪はせしめられたるは、風流の誇りとして傳へらる、其事なり、「古も今もかはらぬ世の中に心のたねを残す言の葉、幽齋」、心種園内記文あり、永く其芳を傳ふ。

萬松一路海に浮べ、二八十八町、上下概ね枝節を齊しうして、一字を勢水の上に播き、遠く之を望めば、長洲海峽に映じて水中松あるが如く、碧水天と連りて、

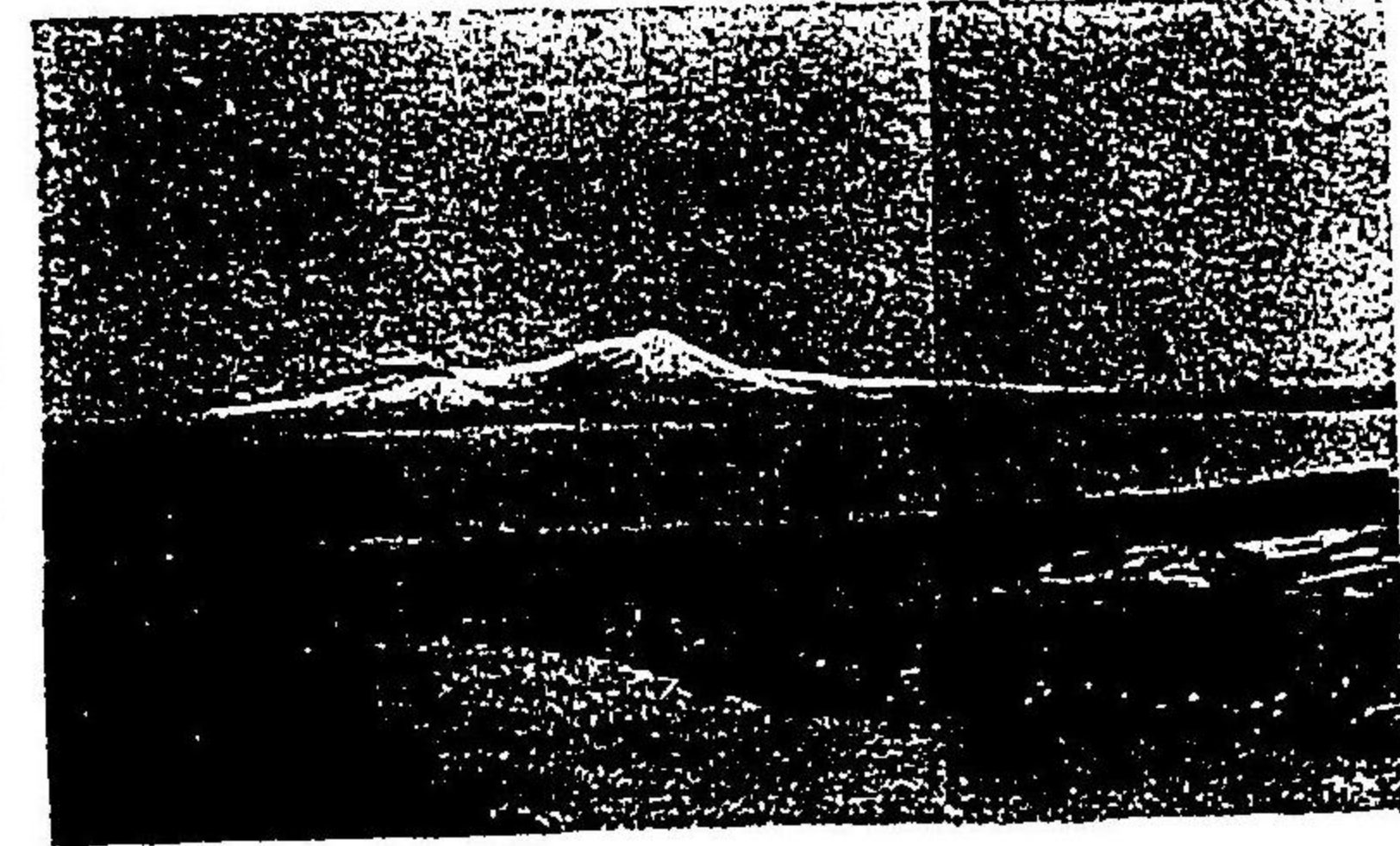
天上亦橋あるに似たるもの、これ丹後の【天の橋立】の風光にあらずや。橋立は宮津の北一里餘、與謝の西側なる門洲狀の沙嘴なり。驛鶴より宮津へは定期汽船の便あり、與謝内海の風光に沿ひつ、左瀬右阿日本海に連りて、又與謝内海に入る、船の與謝内海に入るや、忽ち前面若松一帯蒼鬱の如く、細く長く海面に浮べるを見む、これ松島、嚴島と共に、皇國の三勝と稱せらる、天ノ橋立にして、夜夜陰晴、春夏秋冬、昔の景を眺む、二十四節悉く其美を異にす。長洲の盡くる處【橋立明神】あり、社殿瀟瀟たり。若しこれ橋立の景を眺むむには、櫻井あり、【成相山】あり、櫻井よりは横一文字に、成相山よりは斜に横一文字に見るを得べし。龍神社に詣りて、社後の成相山に登れば、中腹【成合寺】あり、與謝の江山を景を萃むる處なり、人は言ふ松島の景は成相山にあり、橋立の景は成相山にありと。賽路の傍松の蔭より眺望するを最とす、試にこの美景に行いて、立ちながら身を屈めて股間より窺へ、一里の松葉波光に映じて、與謝の大江を測する處、水中天あり天上水あり、上なるが海か下なるが天か、天ノ橋立腹腹は、實に天下無雙の奇觀なりといふべし。寺の奥に慈眼堂あり、幽谷寂として原外の靈境。

宮津より但馬街道を辿りて日大野を過れば、峰山、元京極氏の城邑、四面丘壑の間にあり、これより久美濱を経て但馬の豐岡に出づべし。久美濱瀧は瀧口狹窄にして、髪を掃りたるが如く、宛然湖水の觀をなせり、町の東方甲山に金毘羅神社あり、瀧内の風光は更なり、東は丹後西は但馬の海岸を望み、青松白砂小橋立の觀あり、地僻にして人の訪ふなきは惜むべし。

出雲は古王者の地、御崎山の麓、大社殿として神威赫たり、雲道湖其東にありて、櫻波清音周廻三里、湖を廻りて形勝の地多し。唯地北に偏して、交通の便に缺く處あるを以て、人の多く此山水の美を知らざるは遺憾なり。播磨線に頼りて城崎温泉に浴したる人は、海岸を傳うて岩壁に至り、それより汽車の便に頼るべし。

阪鶴線に頼りて天ノ橋立に遊びたらむ人は、更に驛鶴より船にて信者の渡港に至るべし、別に中國津山より米子に出づる途あり。

境は山海の景勝を占む、汽車は兩して、米子に至り、西は今市東は若美に通ず、地は夜見ヶ濱の北端、島根半島其前面を繞りて、一帯の海岸を形成し、東は渺々たる大海に臨み、西は中海を介して雲道湖に通じ、舟行僅に三時間にして松江に至るべし。境より米子に至る長江曲浦は、即ち【夜見ヶ濱】、美保瀧と中海との間を、隔斷する一條の堆洲にして、長五里瀧一里に滿たず、沙濱一大片狀をなすが故に、また江ヶ濱の稱あり。一帯の岩松雲の如く連り風より北、日本海に面する處、雲津、七瀬、片江、千野、野波、加賀の各浦あり、大島小島星羅する處、終年奔來奇觀をなす、中に【雲津浦】最開の。



【米子】は舊池田氏の支藩、城址尚遺蹟を存す、島狀の一丘深浦に臨んで、山海の眺望また佳なり、北に隣りて米子公園あり。

【安芸寺】は驛より約一里、後醍醐帝女璣子内親王の開基、境内御祭あり。

【雲津】は驛より約一里半、推古朝の創建なり、其金堂は大同元年修造の儘なりと傳へ、米子より西、鐵道出雲に入りて安芸驛、【清水寺】は驛より一里半、推古朝の創建なり、其金堂は大同元年修造の儘なりと傳へ、雲津第一の古伽藍なり、境内園難離また松のべからざるの勝地。寺の南【雲津寺】あり、臨濟宗の名刹にして、僧覺明の開基、後醍醐帝の勅額を掲げ、繪旨以下多く古簡を傳ふ。戰國時代、足子氏の雄を中國に振ひし根拠地たる【廣瀬】は驛より三里、富田川の上流に在り、川の右岸一小孤山あり、これ【月山】にして、足子氏の古城址、經久の墓あり、足子十勇士の墓、國久の墓されし新宮行、晴久の敗れし新宮山、國久を祀る大天神社等、富田川一帯の流域は、眞に足子氏興亡の悲劇を語る。

【松江】は松平氏の舊城市、地は宍道湖と中の海との間に横はれる、狭長なる地頭に位し、北に宍道山脈の蜿蜒たるあり、山光水色遠くが如し、試に長き百間帯も如の懸けたるが如き、大橋々上に立ちて、四邊の風光を味へ、西に宍道湖の渺茫たるものあり、東に伯耆富士の巖岬あり、湖に面せる南岸の人衆樓臺、昔影を倒にして、層々樓を幻出する、其眺望の佳境なる、東西のジュネーブなるモンブラン橋と比せらる。【千鳥城址】は今城山公園といふ、五層の天守閣高く老松の間に聳え、城濠尚依然として水碧く、夏時蓮花風發して美觀なり。【松江神社】あり瀨祖を祀る、宍道湖畔の風光收めて一幅の畫中に入り、天神公園、植降浦、納涼に舟行に、遊意暇なかるべし。

【宍道湖】は東西四里南北一里半、東馬渡浦を経て中海に沖す、其湖の稱あり、周廻十三里の範圍、伯耆富士常に其麗姿を粧ふ。東岸一小島あり【松ノ島】といふ、月明の夜遊舟の至るもの多し。湖上赤穂十六彦などいふ奇勝あり、一步に一景十歩に十景、花榮々柳蔭々、鳥關々魚澄々、戸重々樓浮々、船搖々人來々、無聲の詩にも有聲の繪にも、寫しがたきは此風光なり、松江を本邦十二景の一に數ふる、要するに此湖の勝景あるに因るなり。【松江】に至りて停車場。一里にして松江町あり、これ【出雲大社】の地にして、宮は古日本の王者、大國主命を祀る、創建遠く神代にあり。社家の町を過ぎ、大華表より阪路を過れば、橋あり被橋といふ、賽路の左右古松長く連る、更に石鎧の大華表を過れば、即ち社境、拜殿あり構造壯麗を極む、殿の後八脚門あり、左右に廻廊を廻らす、更に進めば樓門あり、これ天ノ日門宮にして、繞らすに珠璣を以てし、廟宇高潔神威嚴如たり、別に境内五社境外九社あり、社境三方丘陵を以て圍まれ、後丘を八雲山といひ、鶴山龜山其左右に列なり、長松空を蔽うて俗塵を遮り、幽禽雲に啼いて靜なること太古の如し。社家の海濱は即ち【伊弉諾】、【武甕槌】、【經主】神とが、大國主に迫りて、隨從の諸君を圍ひ給ひし所歟なり、巖あり形狀恰も鯨の如し、一帶の沙汀轉曲して三里の稱あり、船を載うて更に【日御碕神社】に賽する亦可ならずや。

この國は命のまゝにまつらむと  
存運りましと神代しおほほ



出雲大社

出雲第一の靈廟【二知寺】は、宍道湖の北岸に沿へる、小坂の北一里餘の山中にあり、樂師如來を本尊とす、眼下宍道、中海の雨水霞を流へて、眺望秀麗なり。石見地方に遊ばむとする人は、今市より西南に向へる石見街道に頼るべし、大山と并稱せらる、名山三瓶山前前に據ゆるを見る、不見に入れば波根に一湖あり、湖水の日本海に通ずる處を【鶴走】と稱し橋を架す、兩岸崎嶇屹立して松松を釋し、海上柱岩の奇觀あり、風光堪愛すべし、【三瓶山】、【大森】、【大案】、【滝】、【江川】の河口に架する長さ九十間の江津橋を渡れば、瀨津、西南に連りて都護村あり、日本海海濱の際、路繼イルチツツ號稱岸して、築組二百餘名の傍傍となれるは此海岸にして風光佳なり。瀨田は石見第一の都會、海濱を擁し溪流を帶び、地勢狭少なれども江山の風致多し、城址は龜山にあり今遊園として垣圍に富めり。瀨田より尚西南に進めば益田町あり、其家等舟船の地にして舊に大岩庭にあり、高津は高津川口にあり、海濱の風光明媚なり、榑木神社あり、人丸終焉の地と傳ふ。津和野は石見西南の一市、峯巒四面を圍繞し、津和野川中央を貫流し、幽靜なる別天地をなせり、南方野坂峠を越れば山口縣に入り、德佐を経て山口に達すべし。米子より東すれば熊鷹峠、【大山】登山の人は茲に下車すべし。山は山陰第一の名山、山勢雄偉一望人を動かすの概あり、海拔五千六百尺、山中大神山神社あり、大山寺あり、構造の大聖師の美共に見るべし。眼を放てば、因伯雲三州の海山手に把るが如く、名にし負ふ千瀆は、曲浦遠く連りて、波の打落するといゆる一線白く曳きて、宛然布を晒せるが如く、美保關を見越して、やがては八重の湖路、空も一つに際なき中に、隱岐の小島始も浮べるが如く、漁船幾片ノの影白う、鶴の鳴きかとも見ゆる風情など、うた、策の幼きを嘆せしむ。



走 跡

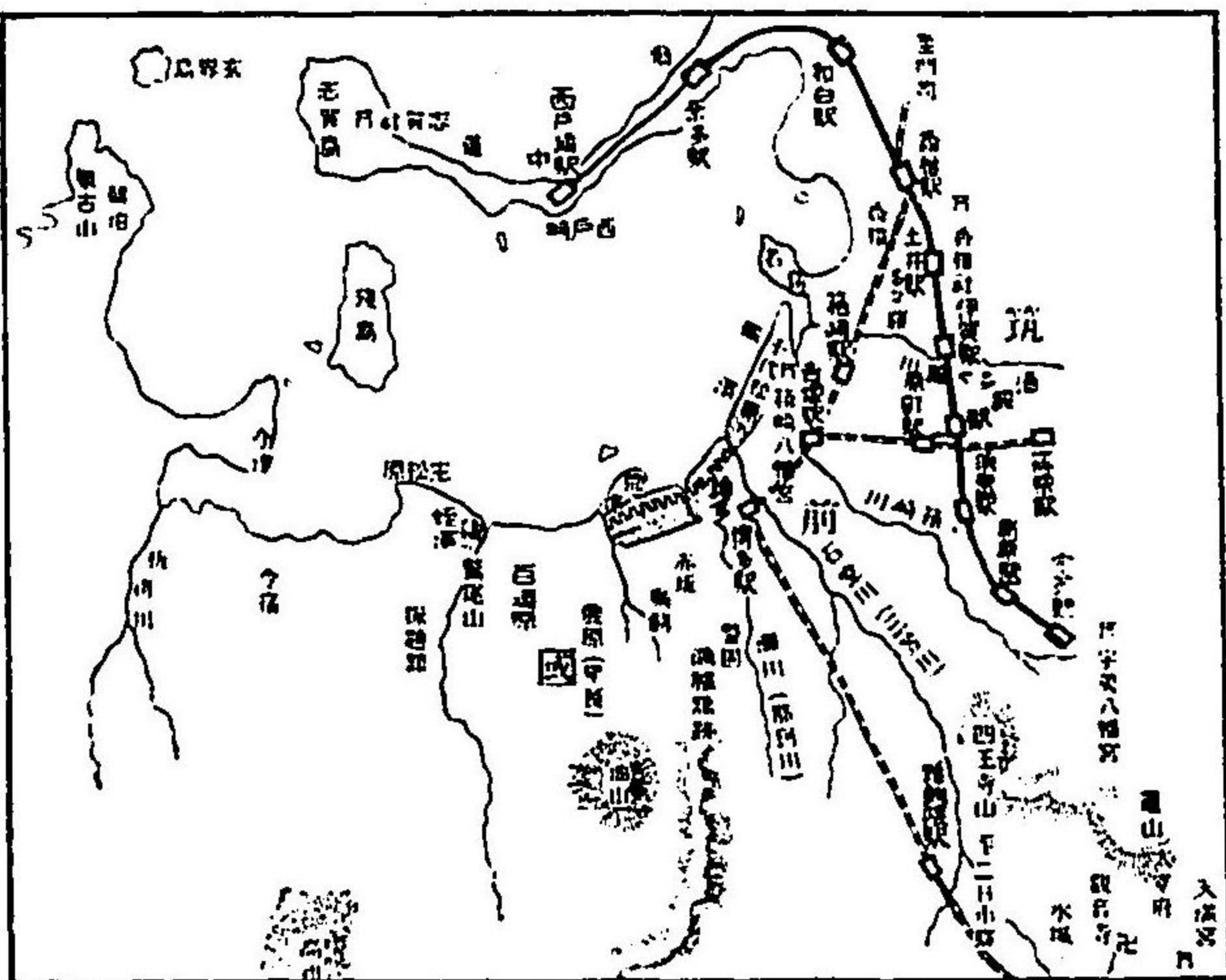
【船上山】は赤松の南二里二十町、大山の北尾にして一大高原をなし、方三里に互る、山中に智積寺あり、元弘帝行在所たり、興隆王事に勤め、旌旗關々滿山を蔽ひけむ當時を追想すれば、感涙の禁へざるものあり。倉吉は倉吉驛より一里餘、町の中央【打吹公園】あり、再城址を拓きたるものに、【三徳山三佛寺】は驛より三里半、岩て、泉石の幽、眺景の佳、また一勝地たり。【三徳山三佛寺】は驛より三里半、岩阿の奇、寺閣の勝、伯耆第一の名刹たり、逢次三朝川源流の勝あり、奥ノ院の一閣を【投入堂】と稱す、方二間石壁削立の上、大巖窟の中に建つ、之を望めば投入したるもの、如し、これ役の行者が窟外に於て組立て、屏成りて投入せしものなりといふ、爾來是組一千二百年、基礎依然として舊觀を改めず、堂澄苔滑に徑路全く絶えて近づくべからず、水聲鳥語の心を亂すなく、幽寂の氣人に滲るる覺の。

倉吉の次驛は松崎、驛の前面【東郷湖】あり、一に湖ノ海と稱す、山丘四周して影を水上に映じ、風色鮮かなり、湖の南邊水底より温泉湧出す、引地温泉といふ、泊驛を過ればやがて因幡の國、荒谷、濱村、寶木の各驛を後にすれば、左方【湖山池】の風光、激瀉として車窓に映じ来るを見る、池中青島、粒島、團子島の三嶼點在して、景勝をなせり。【鳥取】は山陰線中著名なる一都會、池田氏の舊城市、城址は市の東北久松山に在り、城壁濠依然として古を憶はしむ、山上は眺望宏闊、市の互登粉脚下に展開し、賀茂、瀨原の海濱、荒茅として雲烟の間にあり、其一部開かれて公園たり、興禪寺内には渡邊數馬、妙惠寺内には荒木又右衛門の墓あり、伊弉諾の復讐を憶ふもの、須らく此の墓に詣つべし、武内宿禰を祀る【宇倍神社】は驛より一里、風光清絶、社殿の結構又壯麗なり、今五間紙幣の表面に刻せるもの、實に本社之景とす。嗣後の山は即【稻葉山】、「たち別れいなばの山の宮におふるま」とし聞かば今かへり來む、在原行平の跡によりて、早く世に知られぬ、短草萎々として眺望尤秀麗なり。鳥取より觀見を過れば荒谷、山陰線の終點にして、これより城崎に至る線は今工事半ならず、浦富、細代は小港にして、驛より浦富は半里、細代は一里を隔つ、細代より浦富に至る津岸は、壁立百尺直に海を壁し、怪巖奇石海中に錯落す、中に菜花島の黄化、千貫松の翠嵐、最勝の風光として聞ゆ、浦富には海水浴場あり、岩井温泉は驛より一里、浦富川の清流に枕して、避暑なり。

流 水 記

鹿兒島本線、四州本線、長崎本線、唐津線、伊弉諾線、佐世保線、三角線。

筑紫は我邦に於て最早開けたる所、天孫瓊杵尊の始て降臨し給へるも此地、神武天皇の始て師を起して、日本統一の基を定め給ひたるも此地、西洋各國と始て交通の途を開きて、泰西の文物を輸入したるも亦此地なり、鳥は西北南の三面、遠洋を望み、形勝要害の所、されば古聖皇も「是朕之外朝也、千里合符、一方寄重」と詔せられ、特に太宰府を置きて治せしめられぬ、稱して筑紫といひ、九州といひ、又西といひ。馬關と一葉帯水料に相對し、呼ば、將に應へむとするは、即ち豐前の【門司】、門司連絡船上、左顧右盼、海の勝に醉ふこと十



敷分、足は己に九州の咽喉に立つべし。想ふ二十餘年前人  
烟道煉なりし一漁村、今や海に火船の來往の要點たり。  
に鐵道の著發者も絶えず、水陸運轉東西交通の要點たり。  
驛より十六町【和布刈神社】あり、風光佳なり。  
【東西に走りて】大里】を過ぐ、幕府時代九州諸侯の委託  
は、此地より赤松關に航するを例とせり。【小倉】は小笠  
原氏の若城市、鐵道は此に分岐し、南走するものは、中津  
日田に至り、西走するものは、一は戸畑、枝光、八幡を経て、  
一は大城を経て、黒崎に合ふ。【戸畑】ははや筑前ノ國、洞  
海の東南岸なり、海勢は門戸最險峻にして、宛も洞窟の如  
く、東北の門を船門といひ、今の若松港これなり。【枝  
光】は製鐵所のある處、煙突林立して煤煙空を覆ふ、若  
松港近く指すべし。黒崎を過れば折尾、此地北若松より、  
南直方、伊田等の、筑豊二州の炭田所在地に通ずる線路の  
交叉點たり。門河より此處に至る間、一帯の海濱石炭の山  
積せらるゝを見るべし。香椎に至れば驛より五町【香椎關  
宮】あり、仲哀天皇皇后と共に、熊襲を征討あらせられし  
時、行在所を置かせ給ひし處蹟にして、宮居の址爾後の小  
丘に存す。廟は結構壯麗にして、寂々たる林樹の間に嚴如  
たり、神功皇后を祀る。境内皇后御手袋の櫛形あり。  
香椎驛の間、一水級に流れて名島に至りて海に入る、川

は【多良山】、濱もまた其名に呼ぶ、菅氏西奔の時、肥後の菊池氏南朝の爲に、しばし小沢大友と激戦せる處【名島】の海  
岸頗佳の奇あり、元寇十萬の兵船、船を連ねて押寄せたるは越處の濱邊、風光明媚の境、古を懐へば龍虎相搏らし址、曾仰低  
徊うた、去るに忍びぞらしむ。  
汽車【箱崎宮】の地に停まる、官は應神天皇の胎安を理めたる神靈の地、廟前の松は即其靈蹟なり、廟の四邊大樹森然として  
蒼蒼かに應龍はす、海に向へる一扇は【敵國降伏】の四字、實に應神天皇の御宸宇に成る、仰望襟を正さざるもの誰かあら  
む。宮の邊は【千代の松原】、満日の赤松千尋萬尋、琴聲を絶ゆることなく、松籟地に敷いて、沙の軟かなる蒲團の上を歩むが  
如し。東は香椎驛に鄰り、北は那珂濱、志賀島長く連り、西は博多につぎ、荒津の浦山近、能吉の浦、唐泊まで遙に見え渡  
りぬ。元寇紀念館あり、龜山天皇、僧日蓮の銅像あり、遊子若く元寇の古に返らむ。  
【博多】は古の袖ノ湊、那珂川を隔て、福岡と鄰し、今合して一の市となる。「我輩はかたを出づる唐舟のたにたのたに追風  
ぞまづ 夫木集、此地古唐船の出入多く、支那貿易の市場として、其名風に海外に聞  
ゆ、徳川氏鎖國の世にも、尚九州商業の首領より三町【博多神社】あり、【城  
址】は市の西南偏にあり、海岸を距る數町、四方圍むに池水を以てし、西方海潮を通ず、  
これ菊池氏の府城。市の西北端海に突出する所、【西公園】あり、博多灣の景勝悉く  
眸中に入り、筑紫富士の眺書如し、驛より三十町。  
有名なる【芥尾の大門】は博多より八里、芥尾浦の地北に延びて盡くる所、峭然として  
高く巨巖の洋中へ突出せるもの、昔々武官より成る、驚き此岩の北東を噴みて一洞を穿  
てり、洞口より凡五十間の間、洞腹稍寬にして小舟を通ずべし。洞頂洞底六角成五角  
石を以て編み、到る處龜甲紋を編らざるなし。  
博多より汽車は直路南を指す、これより矢部川に至る間、山野田畦の間多く植紅葉を見  
る、晩秋の眺紅葉よりも美なり。箱崎驛、二日市あたり、凡てこれ【大宰府】の府城、

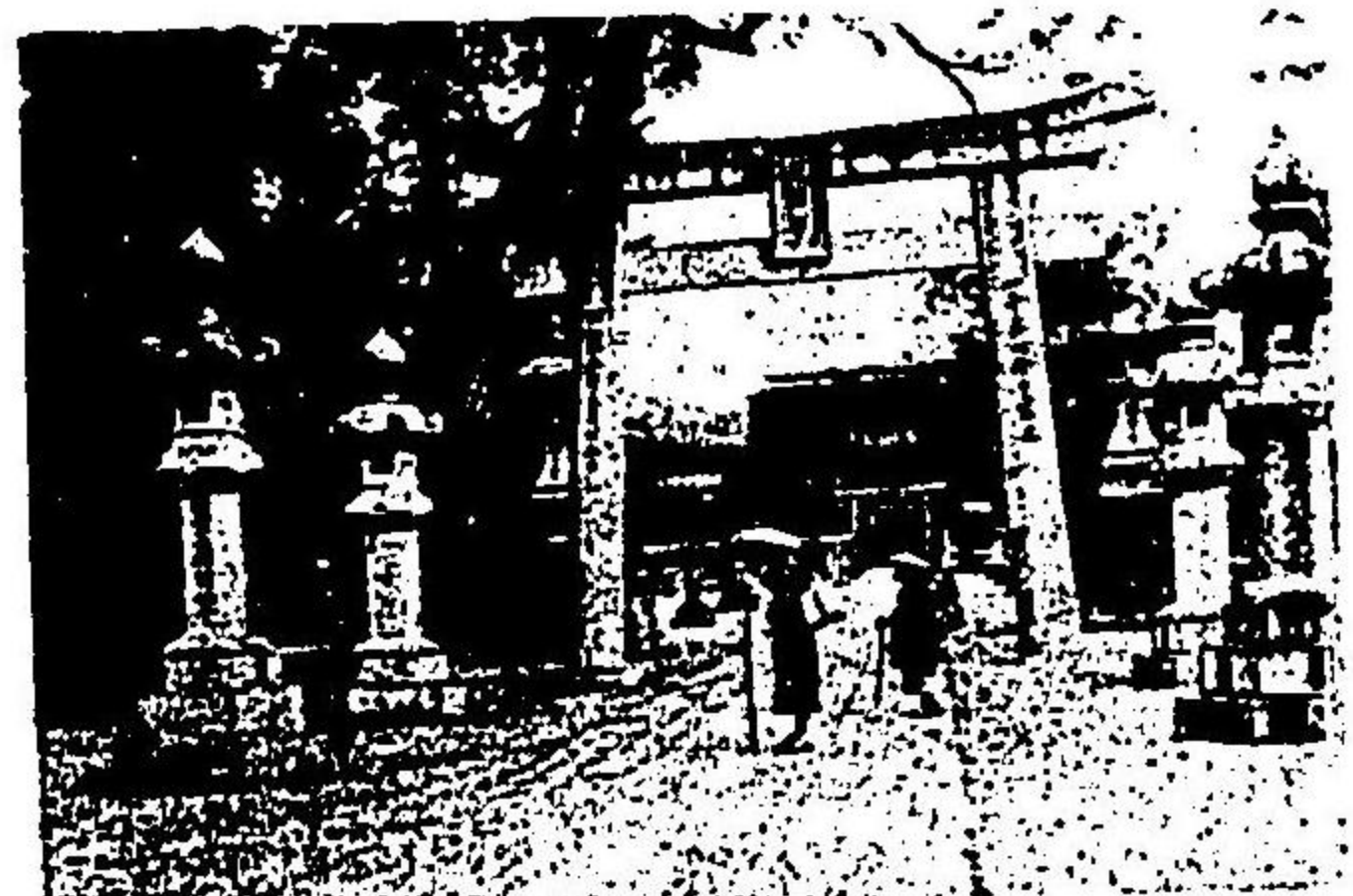


千代松の原

箱崎驛の邊【水城】の跡あり。築山と稱する小丘の邊、稻田の間大なる礎石を露はし、敗瓦片々散積す、これ【大宰府の古址】。  
北に都府樓の跡あり、南に府門の址あり、九州一島の政務を執行し、併せて對外の警備を司れる太政廳、當年の佛何處にか覺  
めむ、遊社こ、に至りて斷崖を臨し、敗瓦を拾ふ、感概に多しとはするぞ。都府樓樓有五色二觀音寺獨稱靈蹟、嘗て資公  
の吟詠に入りし、嶺西第一の大伽藍たりし【觀音寺】、朝夕の鐘聲尙當時の韻を改めざれども、輪奐の美見るべきなし。【戒壇院】  
これに鄰す。音に聞ゆる【矢部宮】は、今大宰府神社と稱す。二日市驛より三十餘町、大幣表を入りて資右の舊路を歩し、左折  
して二ノ幣表を入れれば心亭の池あり、石段橋を架す、大楠あり橋水を臨む、廟は壯麗雄偉を極む、梅樹あり桐を繞らす、東風  
吹かば匂ひおこせよ梅の花あるなしとて春な忘れそ、所謂飛梅は即これ、近時社行に遊園を拵きて、一段の雅致を添へたり。  
二日市より原田、田代、鳥橋を経て、筑後川を渡りて久米に至る、【鳥橋】は長崎線の分岐點なり。【久留米】は石馬氏の  
舊城市、城址は筑後河野にあり、【後藤神社】あり、舊祖を祀る、川は九州第一の排流、川に臨みて【水天宮】あり、東京藤野町の  
は實にこれの分祠なり。寺町の邊臨院に【須土高山修九郎の墓】あり。【高山】は驛の東一里半、山頂高良神社あり、【神前石】  
は神祠の後阜より、周廻二十餘町の間、石燈を廻らすもの、構造嚴然たり、古史に磯城磯城と云へるものこれか、山上の展望其  
開塞なり。

久留米より荒木を経て大塚に至れば、驛より三十町、矢部川に沿って【船小屋温泉】あり、近時世に著る。奇勝耶馬溪に譲ら  
ずと稱する。【日向神社】は、大淵大浦、日向の間、矢部川の上流峽中を貫通して泉を添ふ、驛より九里なり。  
【大赤山】は三池探炭以降勃興の市也、三池の西に接して海に臨む、地は筑後の極南、瀬田川を渡ればやがて肥後なり。長洲に近  
づけば、有明海初めて車窓の眺に入りて快言ふべからず。海の彼方に嶼々として聳ゆるは、鳥原の嶺山【温泉嶺】、一に雲仙とも  
いふ、これより八代に至る間、幾度か車窓の人を驚かしむ。【高瀬】は菊池川の右岸、丁丑の役戦陣の衝に當れり、これより南  
木葉、植木のあたり、彼由水悉く血戰新關の跡なり、此間往來は、右塞に三ノ嶺を望み、左塞に丘陵起伏して南北に見るを見  
る、丘陵は即川原坂にして、三ノ嶺の中腹は喜次越、共に苦闘難戰の地なり。田原坂上【紫雲院】あり、左塞に關門に隱見す、山鹿  
温泉は植木驛より四里菊池川にあり。南朝史に隠れなき菊池氏の【隱居】も、植木驛より四里、熊木よりは六里を隔つ、今限  
府城址に、別格官幣社【菊池神社】あり、武重以下五代の靈を祀る。境内櫻樹多、勤王の赤心萬葉の花と咲くにやとなつかし。  
【熊木】は細川氏の舊城市、地は西北丘陵を繞らし、東南水流を帶び、田野平蕪なり、其西方海を距る其た遠からず、驛は二北  
にあるを上熊木、南にあるを熊木といふ。上熊木驛の西八町、【發見山】あり、此處異域の兎窟を止めたる、鬼將軍の靈を  
安んずる處、結構壯麗雄偉、群俗當に喧嘩す、町に入れば京町堂に【錦山神社】あり、今加藤神社と改む、地高うして全市の眺  
觀を領す。【熊倉】は丘に倚り、川を帶び、樓閣學堂布置整正、久しく天下の名城と稱せらる。今第六師團の營城たり。昔ら  
くは丁丑の役、甚く舊觀を損じたれど、孤軍固く堅守して五旬、潮の如く寄せ來れる薩軍の攻圍に耐へて、遂に挫折せしめたる  
を思へば、城の面目更に新なるものある  
を愛ゆ。【藤崎神社】は白河々畔にあり、  
其祭式に於ける甲冑武者の行列壯嚴な  
り。市の西北に聳ゆるは【金栗山】、南  
西熊木驛に近く【花園山】あり、これ丁  
丑の役、薩軍の砲臺を設けて熊木城を砲  
撃せし處、登陸すれば、市及砲臺十里の  
曠野、一望の下にあり。

林泉の美風景の妙、園山の後樂園と並び  
稱せらるゝは、市外出水村の【成趣園】  
なり、一に水前寺といふ、庭園は散客を  
極め、東方富士の芝山あり、其麓を廻れ  
る一泓の清泉、石竇より直に吹き出で  
て、甘美掬するに堪へたり。北陸細川氏  
祖先の祠廟を營み【出水神社】といふ。



大宰府神社

池水南流して【阿蘇】に入る、湖中一  
小島あり、竹樹密々景趣を添ふ、舟を浮  
べて涼を納るれば、阿蘇の神山なんぞ早  
く我に來らざるかと招くが如し。  
【阿蘇】は世界有数の活火山、近年大に  
噴火の勢を増したり、熊木の東凡十里、  
大津まで輕便鐵道の便あり、山麓數處  
湯の絶景を見て【粉水温泉】に一宿し、  
翌日登山するを可しとす。粉水は白川に  
沿へる溪谷の縮縮地、空狭うして夏目短  
く、湯雲低送して時に室中來去す、鮎  
龍の眺あり。こゝより噴火口まで登り  
三里道峻なり、半途より上草木を見ず、  
鞋底踏む處、焦石と燐砂とのみ、噴火口  
は名付けてミカドといふ、之を踏ふれば



橋の口の如く、煙霧塵上して森然たる柱を立て、萬雷地下に鳴りて、吾も山も地も共に、微塵に粉砕し去らむとす。沙石塵あり、奔騰して又塵落す。落つるもの塵るもの相闘うて火を發す。凄にして壯、怪にして幻、魂飛び神驚くを禁する能はず。抑阿蘇火口の外輪たるや、北は長谷峠一帯の山脈を以て、東は豊後境上の連峰を以て、南は大天山、冠嶽を以て、西は依山、二重峠を以て限割せり。黒川北より西を繞り、白河東より南を繞りてその缺處を衝き、やがて合して平野に流下す。今の火口は中嶽にあり、之を圍繞して梓島嶽、烏帽子嶽、高嶽、根子嶽の四嶽あり、阿蘇の五嶽と稱す。五嶽の四周一帯の平原あり、北を阿蘇谷、南を南阿蘇と稱し、今一町十四箇村、無慮四萬の生靈を納息せしむ。今この地勢を按ずるに、所謂五嶽を取捨ける連山は、一大噴火の際にして、外輪山と稱すべく、五嶽は此外輪山の中に噴出する火口山なり、五嶽の四周の窪地は火口丘と稱すべく、黒川の雨水は即火口湖なり、形勢の絶大かくの如きもの、地奥廣しと雖、其四隅を見すとやや、山中山麓温泉湧布數々に迎あらず。栃木より登りしもの多く窪地に下りて、阿蘇木宮に詣りて、寶物を拜觀するを例とす。

【阿蘇神宮】は官幣中社、山麓窪地にあり、延喜式に阿蘇郡健甕郡命神社、名神大と注するものこれなり、境内廣く、老杉蒼松たる間、樓門、拜殿、神宮等、嚴としてあり、賽者思はず身を正す。

阿蘇木宮を後にして南南す、白川を渡りて川尻に至る、緑川の北岸なり、地は丁丑の役陣軍の本營を置きし處、驛より二十町【大森寺】あり、龜山法皇の勅願、泰隆和尚開創の禪院にして、遺西橋石の名刹なりしが、幾度か祝融の災に罹りて、今舊觀の十が一だになし。

宇土驛に至れば、左方平野の間、一山特起するあり、【鹿嶋山】といふ、昔鎮西八郎爲朝、此山に在城して飛龍を射る、今に於て飛龍臺上に亂行すと、故にこの名あり。

鳥羽、此山に在城して飛龍を射る、今に於て飛龍臺上に亂行すと、故にこの名あり。



山 蘇 阿

此地小西行長の舊城地にして城址あり、三角線の分岐點とす。緑川の海に入るところ、海岸の礫脈起伏して、雫岩崎、宇土島、風流島となる、これ狀貌に名高き名所にして、三角線往吉野附近、車窓この勝景を見るべし。【三角】は宇土半島の尖端、北右明洋を隔て、島原の温泉嶽を望み、南不知火海を瀕りて、天草諸島の景色を指點し、風光の美肥後第一と稱せらる。近時頓に海水浴地として著はれ、浴客雲集す。附近【赤瀬温泉】あり。若しこれ汽船の便によりて長崎に至らむか、航上臨目する處は即天草洋、【赤瀬山】即赤瀬、水天宮第一一壱、遊子已に山陽詩中の人ならむなり。

宇土より八代に至る途に存存驛あり、これ明治の桃源境【五家莊】に至る道なり。五家は球磨川の源なる山谷を占め、方四五里に涉りて、権原、久連木、樺木、葉子、仁川尻の五村となる、山峯重疊の中間に在りて、九州第一の僻境なり。平家没落の際、惟盛清経等の逃匿したる山なりとて、其傳説種々あり、行路險に交通種々なるを以て、言語風俗を異にし、一見太古の民の如し、驛より十里、鏡は驛の西に連接せる小市にして、印鑑明神の池は狀貌に名高き鏡ヶ池なり。

八代は日本三急流の一に數へらる、球磨川の海に朝する處、鮎を名物とす。松江城内【八代宮】あり、南朝史に隠れなき征西將軍俊良親王を祀る、金枝玉葉の尊體、かゝる西陣の邊境に埋れ給ひしを思へば、露ならぬ秋の潤ふを愛ゆ、構造華麗ならず、白木造の畏き有様、賽者身を正さざるなし。御殿は驛より半里、當地村椿堂寺傍にあり。【日奈久温泉】は南二里餘、海に臨んで眺望佳なり。所謂【不知火】は昔に八代海上の奇觀なり、遊子若し陰曆八朔の前後、幸に此地に至らば、一夜を山岡に明かせ、五更潮の漲つる比より一點、又一點、陰火次第に數を増して、黎明には一帶萬點の連珠、海上更に闇ならむとし、夜白に従つて消没す。觀者酒肴を携へて遠近より群集し、附近の山岡一夜大宴會場となす。

八代より南、汽車は【球磨川】の右岸に沿ひて、坂木に至り、鐵道の鐵橋を渡りて左岸に移り、瀬戸口、白石、一勝地驛、那良口を経て、海の鐵橋を渡り、更に右岸を走りて人吉に至る。川は日本三急流の一、人吉八代間十六里の舟行、僅に五六時間を要するのみ。河中岩石磊々幾千萬なるを知らず、峯峙時に脚を水底に挿んで往く水を得け、茲に三十三の急瀬を成す。晩秋の候、兩岸の林樹紅葉を呈して、岩の碧黒と水の青白と、相映帶して、うた、車窓の人を魅むるものあり、白石驛の對岸、岩戸山の中腹【鏡ヶ池】あり。高五十八、間口三十間、奥行四十餘間、池あり神祖後息すと傳へらる。

【人吉】は球磨川の東西に跨れる相良氏の舊城地、【人吉神社】あり、相良氏累代の靈を祀る、驛に近き【青井神社】は大同元年の創建、歌あり、「球磨で名所は青井の御門前は蓮池櫻馬場」と、境内頗る閑靜なり。人吉町の盡頭、汽車は三度球磨川を渡りて矢張に向ふ、其間直路僅に十哩に過ぎず、されど其高低の差、實に一千四百呎に近し。されば茲に其距離を延長し、兼ねて勾配を緩かにするの必要あり、其中間大畑に鉢形形の輪線を作る、輪の長さ約一哩四分の一、上下線の交錯點に於ける施工、基面の高低の差百七十呎なり、此間線路は三十三分の一の勾配なるが故に、本線外に水平線を作り、大畑驛の設あり、天下の難工事と稱せられたる矢張線道は肥田の界、隣道を出れば、霧の峯層波濤の如く連り、車窓の平野遠く見えて、景致雄大なり。

【吉松】は大隅の最北端、栗野、横川、牧岡を過ぎて嘉例川に至れば、附近驛を、口ノ出、山ノ湯、各温泉あり、彦火出見尊の高尾山上に、俗に神祖廟といひ、驛の北三十町にあり。【國分】は櫻葉の産地として古より名高し、驛に近き【鹿兒島神社】あり、社は彦火出見尊を祀れる官幣大社にして、いはゆる大隅正八幡宮、社説高千穂宮の址なりと傳ふ。

かけまくも畏き天孫降臨の靈峯【霧島山】は、隅川二州に跨り、東西二峯あり、其間三里に互る、東峯は高千穂と稱し、西峯は霧島嶽といふ。天降川兩峯の間に發源して南流す、驛より五里にして山麓【霧島神宮】に至り、祠より登ること三里にして、絶頂に達すべし。頂上は展望開闊、隣隅の三州は俯ふも更なり、肥後の高山も唯眼下にあり、近山遠峯皆此山に臣従し、錦江の東海庭池の如く、櫻島假山に似たり。

國分より汽車は【錦江】の海近く、可形をなして走り、鹿兒島に至る、國分半平野を過ぐれば【加治木】、【龍門】の瀧は西遊記によりて、早く其雄大なるを知られぬ。重富驛に至れば直ちに錦江灣に臨



川 磨 球

千態萬狀の奇を呈す、しかも海水浪濤かにして、宛然大湖の如く、浮ぶかまがふ三の小嶼散在して、景よく新なり、市の東なる【多賀山】は、市の全景と湖の風光を見るに宜しく、木は老いて松檜亦開くべし、山は丁丑の役官軍の據つて城山を砲撃せし處、山の下を【紙圍洲】といふ、もと砲臺のありし處、老松疎林として風光佳なり。岸角をめぐりて【磯の瀧】に至れば、島津公の別館【仙臺園】あり、江山の勝を内め、林泉の美に富む、岡は萬葉年中、光久公によりて建てられ、天明年中、重安公重修して三十六景の勝を遺す、清人の題詠を求めて石に勒せらる。市の南二里なる谷山の【養眼寺】は紅葉の名所、高嶽山より移植せしもの、池畔秋意多く、楓葉錦を綴りて如月の花よりも紅なり。谷山の南七ツ島あり、櫻島の望觀此地を以て第一とす。

門司より鹿兒島に至る九州鐵道の勝は、既に説けり、更に途をかへて横斷の勝を説くべし、小倉より豊州水線によりて南に走れ



一曲は一曲より奇にして奇なるを知らず、誠に天然の一大傑作といふべし。神原より南すれば、【新耶馬溪】、近時奇勝水湫に優るを説くものあり。宇佐は、官幣大社【宇佐八幡宮】の鎮まります所、宮は古より朝廷の崇敬厚く、伊勢と並べて二宗廟とあがめられし剛宇、和氣清原氏宮の靈威は、國史の初歩を學ぶ小學の兒童も熟く知れる所なり、俯仰間に心を清めて、思を千年の古に馳すれば、神威嚴として尙摩すか如し。

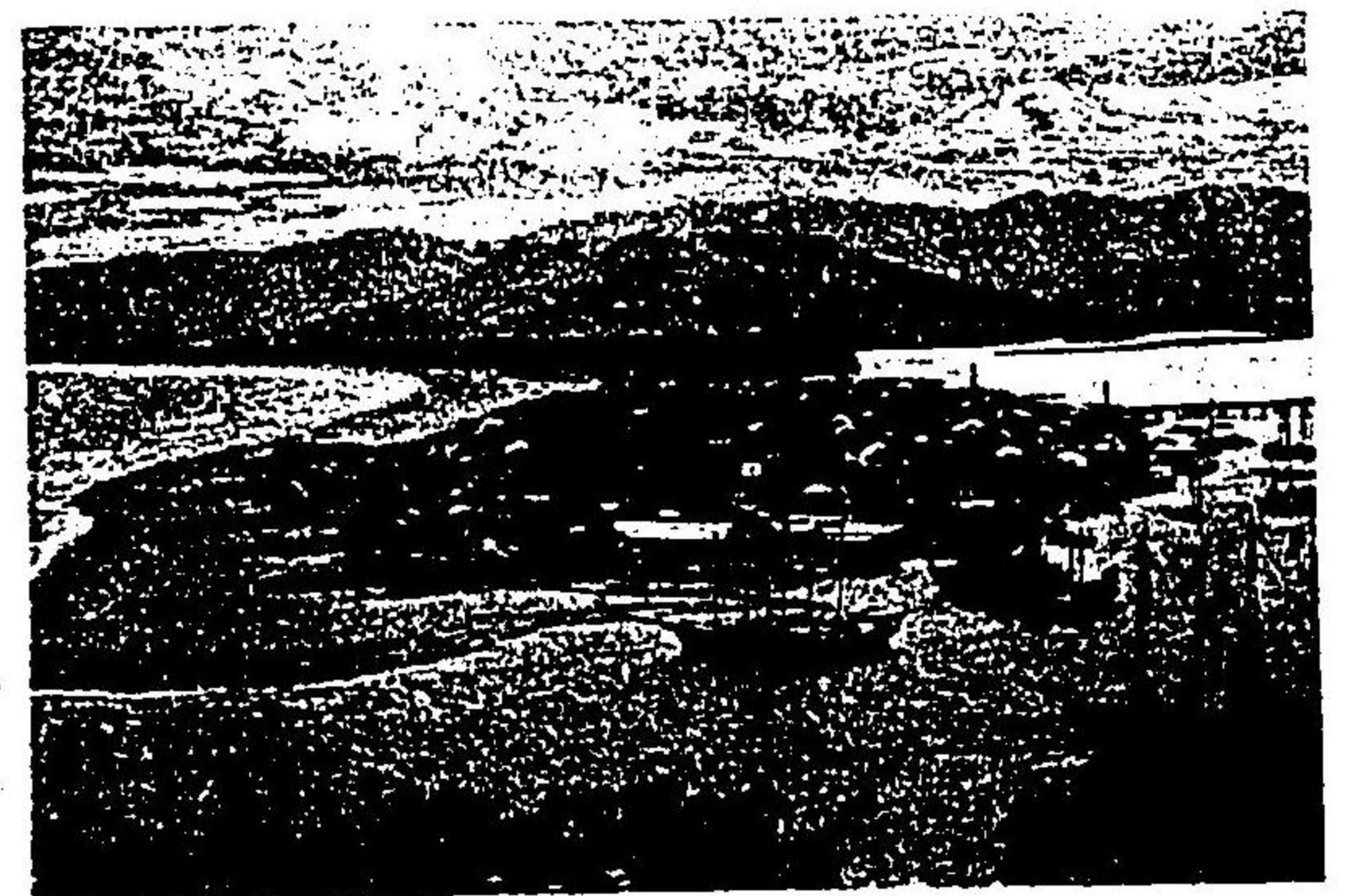
汽車口出に至つて停まる、これより別府温泉まで僅に二里、地は郡海に接りて、山海の風光に富み、方數里地ある所必ず温泉湧出す、海邊の汀沙亦所々温氣噴出す、浴客沙中に半身を埋めて温氣を取る、これを沙湯といふ、又一興とす。

鳥栖より長崎水線に頼りて西すれば、やがて【佐賀】、鍋島氏の舊城址、【松原神社】は驛より南す、藩祖を祀る、林泉の美あり今公園となりぬ。境内【昭徳諸君子之碑】あり、江藤新平以下の英靈を記念するもの、命題奇偉、哀悼の意、かに深しとはするぞ。【神野茶屋】は関原公の遺愛、多布施川の清流を引ききて泉地となし、林丘の趣頗る妙、天山の重嶺また暈日の中に入る、驛より西北十町なり。佐賀の次驛久保川より汽車北に岐れて走る、線の盡くる所は即ち【唐津】、小笠原氏の舊城址今【舞鶴公園】といふ、北麓の【近松寺】は、元祿文政の花を咲かし、近松門左衛門の骨てありし所と傳ふ。市の東松浦藩の長江二里餘の間、萬松一路白波の上に架を連ねて、夕海の清波に浮び、帆巾振山の晴嵐に映す、これはゆる【聖の松】、×客の雲集する亦宜なりといふべし。【節申振出】は佐川藩の故事によつて早く世に知られぬ。西唐津驛より二里、神崎に【七客】の奇觀あり、全神寺武岩より成り、斗壁峭立、先端分岐して稍三叉狀を成し、其東なる又の基脚に、七箇の横洞竝列して道を竝べたるが如し、いはゆる七客とはこれ、波濤靜謐なるの口、皆舟を容るべし。これより北呼子港に至る間一里餘程、断崖絶壁峭然として連続し、崖や壁や皆を武岩、遊子をして思はず「日本にもフンガル窟あり、巨漢の石道あり」と、絶叫せしめむ。此地筑前志摩半島の弁尾の大門の武岩洞と、東西相距る十里里、遙に相對して自然の大觀をなす。呼子港の南、島あり波に浮ぶ、【御船島】といふ、田島神社内佐川藩神社あり、額去石を存す、社前の鴨翠松浦灣一帶の風光を容む。呼子の西一里、一小海峡を隔つる海村は豊太閤が征明討韓の行營を置きたる【名護島】、これ當年五十萬の將士を出陣せしめし所、倭伯陣營の址、二里餘の間に存在して、規模の大今尙推知すべし。九州に至る大唐津を結つべからず、唐津に至る人又必ず此地を結つべからず。

津を結つべからず、唐津に至る人又必ず此地を結つべからず。久保川より更に西すれば、武雄驛より七町、白龍山下【武雄温泉】あり、【磐野温泉】は南三里、また此驛より至るべし、陶器を以て名高き【有田】は伊萬里線の分岐點、伊萬里灣の風光また愛するに足るものあり。石田より早岐に至れば、汽車更に北に岐れて佐世保に至る。【佐世保】は大村藩の外灣にして、對尾島の西岸より北方に轉入す、往時の一漁村、今海軍軍守府の地となりて、彪大姿の如きものあり。早岐より南、川棚より彼岸、松原、大村、諫早、唐津、大草に至る間、汽車は屈曲せる海岸に沿うて走り、灣又灣、山又山、車窓の眺望うた、遊子の目を魅しましむるものあり、これ即ち【大村灣】の風光にして、大草驛附近最佳とす。灣はまた鯛ノ浦ともいふ、群山環繞して湖池の狀あり、西北水道を通すと雖、對尾島之を擁塞し、二篠の狹港を以て佐世保灣に通す、大村は其東岸に沿ひ、前面寶島、白鳥等散在して、風光佳絶なり、古の大村城址は、町の南にありて海水を瀕りし。【龍崎】は所龍潭寺氏の地、肥前の南部なる數多の半島は、此地に於て中字形を爲し、此地は其中心にあり、重要な地點たり。



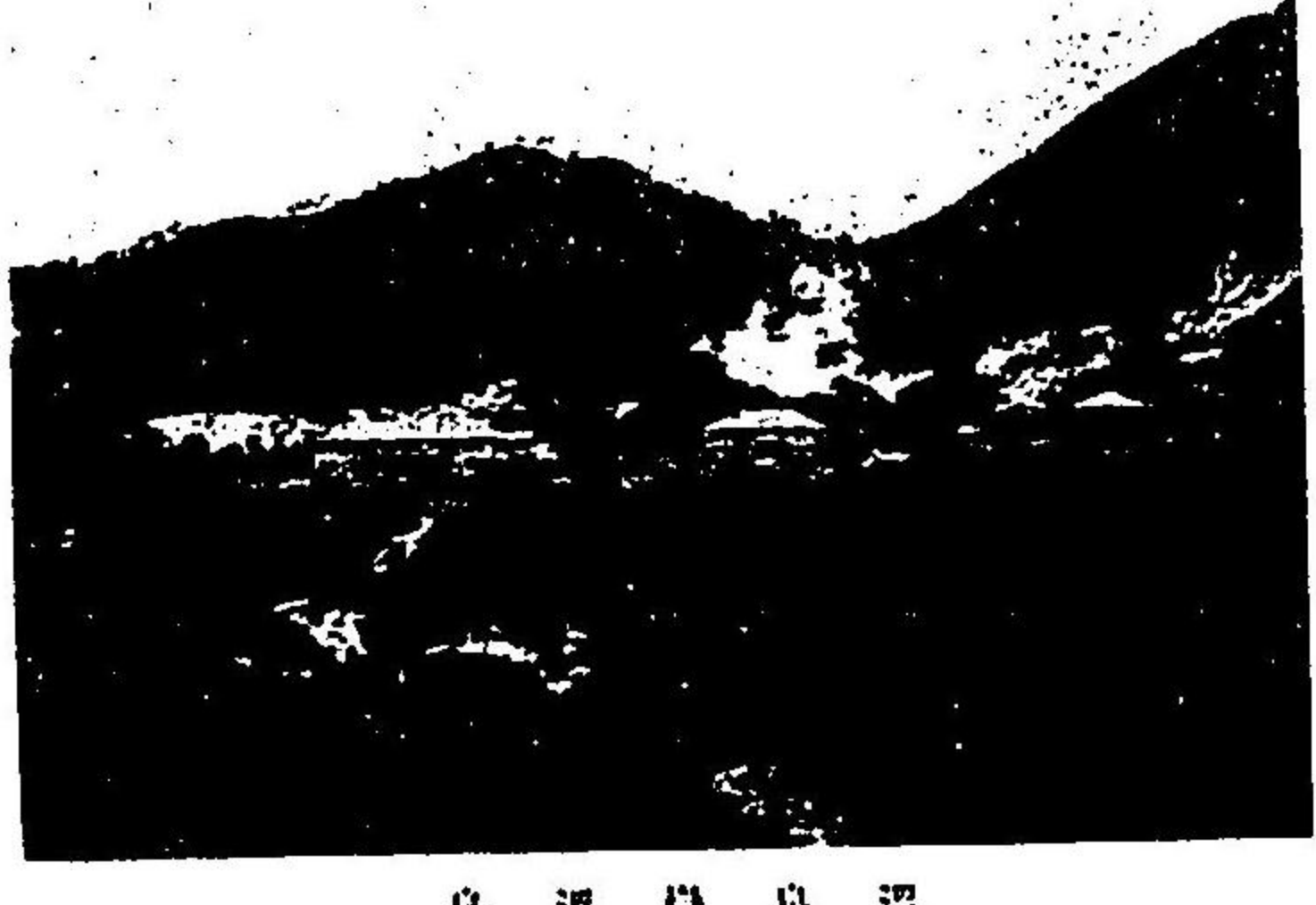
寺 氏 羅



一門戸たり、西方の文物消息、皆此地を経由して入れりき、外人の筆この地に及ぶもの多く、日本を知られるものこの港の名を知らぬはなし。灣頭の風光愛するに堪たり、夙に【理浦】の美稱あり、丘山海を抱いて三面を繞り、波濤にして流水の如く、會て海若の怒るを見ず、多少の鳥影また此間を點綴して、一帶の風色輝けるが如く、三十六灣二十四橋勝景盡くことなし。【諏訪神社】は長崎の産土神、山に倚りて殿舎門扉を築飾し、石階を踏へてに登る、殿宇宏壯林泉また美なり、祠隣の山、樹石亭榭の布置を加へ、開きて公園とす、市隨一の展望を備ふ。【稱徳】は踏國大聖二の故郷、西に朝佐松の奇峯聳て、山上常に雲煙の飄飛を見る、夕陽美しく映じて景麗裝、詩に七化といひはせり。山の麓は岸廻り滑曲り、長江前に湧りて、洞岸水磯各名あり。瓊浦第一の勝概とす。【出島】は和蘭人の愛重する獨占紀念の地、森崎大波戸の南なる沙嘴にして、鳥狀眉の面如なるを以て、また眉嶼の名あり。

長崎の山からいづる月はいか  
こんげな月は三つとなかばい  
蜀山人

長崎より茂木に至り、船して小湊に至る、温泉あり、これより三里にして【温泉嶽】あり、深草よりは十里、一日の路なり。山は又雲仙嶽とも稱し、九州三山の一、頂上湖斗狀をなせる熾火噴口を存す、海拔四千八百尺、肥山筑紫、有明、千石の諸嶽千里、曠日雄大、九州半面の景像羅如として眉端に集まる。温泉は山麓三千二百尺の所にあり、夏期浴遊の客遠く上海、香港より來る。【出島】は山の東麓、直に海に臨んで風光佳なり。定期船あり、肥後の三角に至るべし。



泉 温 嶽 泉 温

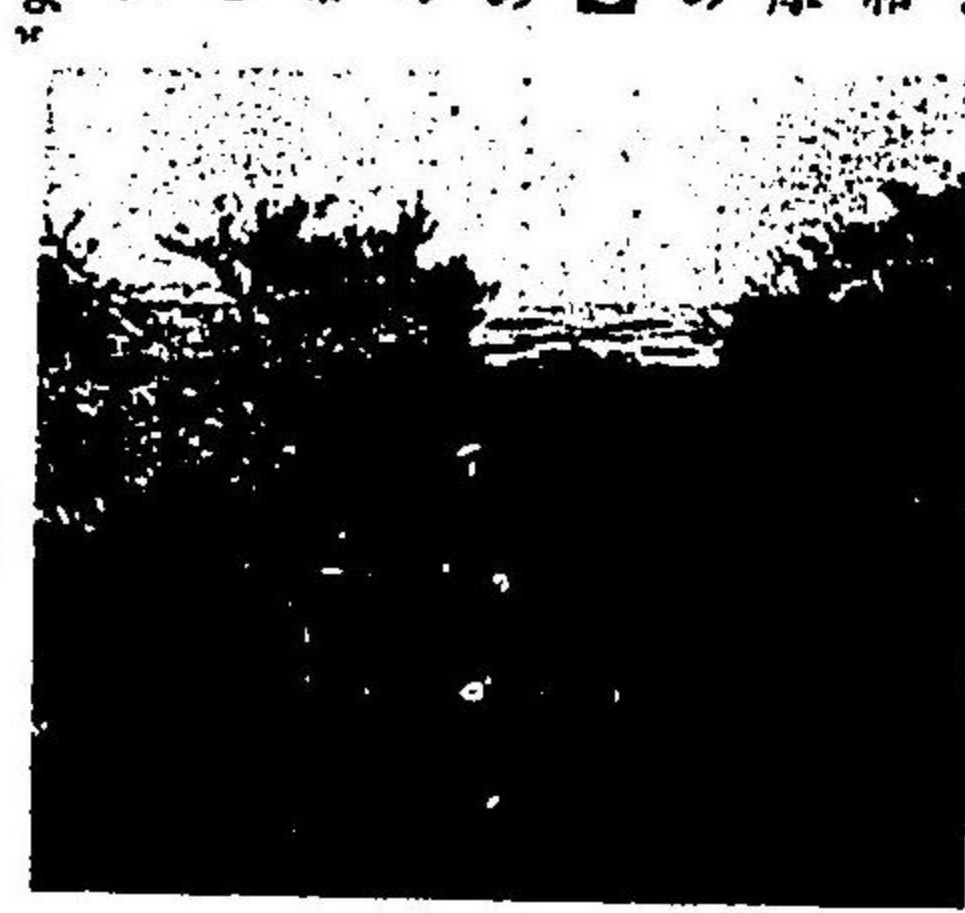
うんげんや湯女岸に立つ女耶花

三千風

多摩川

中央本線

要すべきは多摩川の風致なり、連亘せる多摩の横山其標をなし、多摩川、浅川の二水其帯をなし、山光水色相待りて、所謂武蔵野西隅の景を新にす。...



立川より日野驛に至れば、驛の南二十町高橋不動院あり、【百草園】はそれより南半里、丘上八幡宮あり、其石狗は天守時代の作と稱せらる。...

多摩川の少少

中央本線

馬入の水上、桂川の清流、遠く群山の翠を被せ來つて、猿橋町を中斷する處、兩岸欽立すること數百尺、水石相衝つて巨音を吐き、一橋飛ぶが如く其上に懸る、長さ十七間、橋下一柱の支ふるものなく、兩端を穿て礎を置き、横さまに木を加へ、互に居...

水の中



仙舟橋



仙舟橋

貫す、隧道の長さ一萬五千三百六十四呎、東洋第一の長隧道として普く世に知らる。隧道を出づれば初鹿野驛、【天目山】は驛より二里、山は武田氏滅亡の地、古杉風に鳴りて當年の哀に泣く、中腹に、...

太

【富士川下り】また快心の壯遊、釜淵、箱根合流の十一里を漕ぎあり、即舟夜の發着地にして、甲府より四里餘馬車の便あり、小舟一度岸を離れて中流に泛べば、釜淵を瀕して走ること矢の如く、兩岸の山嶺須臾にして百變す、舟子一條の竹竿を操り、...



要せず、恰も扉隙を樹て列ねたるが如きもの七里、七里岩の名あり、天正九年勝頼此宮上に新府を築いて移居す、翌年三月織田の亂入にたり、支ふる能はずして遂に亡ぶ、重頼のあたり車寄つた、感多し。【駒ヶ嶽】は日野春勝より登る、山麓まで二里、途に白須松あり、釜無の沼に續いて一里餘、直登雲梯へり、白雲清麗海流の光景に似たり。山麓駒ヶ嶽の前面あり、山頂は雲白の大花園岩、尤々として峻立し、其西南急峻なる前谷を以て、野呂川谷に臨む、山頂の眺望無此駒ヶ嶽より宏きを覺ゆ、海拔九千九百尺、頂上神廟あり、夏秋の候登山の人多し。【八ヶ嶽】は海抜九千六百七十六尺、小淵澤驛及信の富士見驛より登山するをよまず、山勢雄大甲信一國に跨り、峯巒岩壘として八葉に分れ、赤旗を最高頂とす、雲秀高く雲表に表はれ、宏闊なる前野を展べたり、山頂の眺望は實に大觀中の大觀たり。山麓小笠間に武田村上の古戰場あり。

信越の山

中央本線、篠井線、信越線。

重頼驛より鐵路は次第に爪先上りとなり、日野春、小淵澤を経て信濃に至る、【富士見高原】を其總頂とす、地は海拔三千二百尺、盛夏尚衣の薄きを感す。原頭に立て四顧すれば、北方八ヶ嶽の嶺々として天を突くあり、南方駒ヶ嶽の嶺々として聳ゆるあり、東南遙に富士の秀麗を望むべし、首を回せば御嶽、乗鞍嶽、鎗嶽、大室山等、所謂日本アルプス山系、蜿蜒として西北方に雄を争ひ、展望自ら氣宇の大なるを覺ゆ、原の高背を【分水嶺】と云ひ、金澤川西に流れて諏訪湖に入り、落合川東に流れて釜無川に合す、此地一帯歌枕に名高き古の穂尾野、聖上御遷幸の際、衆を駐めて富士を觀覽せられし處、伯爵渡邊千秋氏、分水莊を營みて碑を建つ。

御嶽驛、 穂尾野、 深谷驛、 深谷湖。

富士見より鐵路下りに向ひ、野柳、茅野を経て、【諏訪湖】の風光に接するを得べし、湖は周圍五里に近く、海拔二千六百四十尺の高地にあり、山村水原之を庇りて湛の如し。富士見分水嶺、八ヶ嶽の嶺々として天を突くあり、南方駒ヶ嶽の嶺々として聳ゆるあり、浸れて西方山嶽の間を破り、茲に東海の大河天龍川の源をなす、四周の衆嶽倒に水面に映じ、雲霞遙に富士の晴雪を見る、予はの海衣が崎に來て見れば富士の上ぐあまの釣舟、なるものこれ、湖は冬期氷結して、厚さ一尺より二尺に及び、人馬其土を往來す、近年好尚の氷溜場として世に知られぬ、湖畔温泉湧出す、上諏訪、下諏訪の旅館、料理店、一として浴室を設けざるものなし、【諏訪神社】は信濃無雙の名刹、上下兩社あり。下諏訪より鐵路更に西に向ひ、駒谷より天龍川の河口に滑り、鹽尻驛の南方を迂迴して木曾路に入る。洗馬、三川を経て、奈良井に至れば、直に【鳥居峠】の前途を過ぎるを見る、峠は木曾路の最高頂にして、太平洋と日本海との分水嶺をなし、水流北するものは、信濃川の源奈良井川、南するものは木曾川なり、今鐵道は此峠を貫通して麓に至る、これより南地勢峻峭、山峯重疊して一の平地を餘さず、森林蒼翠たる所、良材に富み、木曾五木の名風に世に稱せらる、頭をあぐれば、信州第一の高山海拔一萬九百尺といふ御嶽山は、西天に輝え、三十六峯八千餘の駒ヶ嶽、東空に峙ち、兩嶽の餘脈左右に延きて、こゝに木曾の一大峯谷を形成す、【出づる嶺】の嶺のちかければ木曾路は月の影さみじき、此峯谷に其巔を得たり、【木曾川】はこの大峯谷を貫流する巨流にして、兩岸碧道、迂迴曲折、激瀾激を噴み、急流激を穿ち、風光雄大にして遠く俗塵を絶ち、前最近



り後景迎へ、車寄入をして所々と應接に迎あらざらざらしむ、木曾長仲の【山口城址】は宮ノ越の東端、驛の對岸木曾氏の菩提所【徳吉寺】あり、福島は木曾路第一の繁華の地、木曾路旅行者の多数が参詣する御嶽山、またこの地より登る。

【御嶽】は管領坂上氏の築ける名山、福島より九里にして山頂に達す、登路一、二里、深澤口一を王瀬口といひ、王瀬口より登るもの多し、福島より王瀬まで五里、途に深澤口に至れば、指針を伏せたる如き富士式の御嶽、繩段として天漢に入るを止面に仰視し、壯麗極を正さしむるものあり、絶頂は劍ヶ峯といひ、所謂奥ノ院にして、天風常に怒吼し、盛夏綿衣を重ねて尚從侍す。【かげしや命をからむむかづら】はせを、木曾路は既ね川の東岸に沿うて、棧道甚だ多し、名にし負ふ棧は、上松より二十町、今は川に沿うて新道を開き、また棧の危道を踏まず、唯其夜路の地、兩岸窄く迫りて懸崖高く聳え、流岩火岩に湛へられて、滑溜能く數丈の底を透見すべし。いはゆる木曾路の八景といふもの、徳吉寺ノ晚鐘、駒ヶ嶽ノ夕照、御嶽ノ暮雪、棧橋ノ朝霞、巖壁ノ夜雨、風越ノ晴嵐、小野ノ瀑布、奥川ノ秋月を數ふ、中に【巖壁の床】の勝を最とす。臨川寺畔兩頭の架橋々々出で、九曲の寒水沓々として來りて湍急となる、巖青嶺巒須臾にして岩と相擊ち、千瀉萬瀉滾々として相逐うて流る、潭邊奇石巖崖聳起伏して、奇勝筆の及ばざるを恨む、何土傾成昔昔之形、誰家染出遺蹟之色、其勝殆く世に知られり、上松驛より十町、上松より須原、野尻、三留野を過れば坂下、はや美濃の國なり。



白雲や青雲若葉の三十里 于 規 鹽尻より篠井線により【精進ヶ原】を過ぎて松本に至る、原は武田小登原の古戰場なり、【松木城】は松本市の中央にあり、五層の樓閣高くべし、三十町にして淺間温泉あり、上地高嶺にして氣清く、東北山を負ひ、西南山を背つて、松本市街を望む、泉は無臭無味、以て飯を炊き、以て茶を點すべし。

湯上りの關干嶺しや風蕭々。 梨 花 松本より川津、明科、西條、麻績各驛の間、鐵路山谷の間を縫うて幾多の隧道を穿つ、麻績よりまた【松本山】の長隧道に入りて、【松本】に出づ。驛前の眺望、他に比なき、尾代を中にして、左右に幾村の人家散在し、千曲川より川中島のあたり長野まで、【松本】一面の地眼下に落つ、前面一重山を麓にして、鏡山山美しう輝え、今昔りし姫宮山南に高し、山は古より名高き日本第一の觀月の勝處、形極を伏せたが如く半圓形をなす、驛下長樂寺あり、庫裡の一室を月見堂と云ひ、欄を設けて客の月を見るに便す、堂に上りて遠望すれば、千曲の清流を隔て、鏡山山を仰ぎ、仲秋空

請き夜、一團の名月其嶺より登り、影水田に映じて所謂月夜を現す。 【川中島】は千曲川、犀川の中洲を云ふ、篠ノ井驛實に其中央にあり、磯山、不識庵の古戰場なるは、三尺の童子も之を知る、茶臼山、西條山、陣營の跡今尚互に曝曬す。驛は篠井線と信越線との接続點、犀川の長橋を渡れば直に長野に至るべし。 【長野】は海内著名の名刹たる【善光寺】のある處、本堂は一光三尊と稱せらる、圓浮檀金の阿彌陀如來、一尺五寸の靈像にして、抑我邦渡來最初の佛像なり。伽藍宏大、構造精妙、峯者常に繞るが如く、雜踏を極む、寺の東一堆の丘陵あり、廣山氏の城址なりと云、今八幡宮あり、丘の中腹【城山】あり、雄捨の峯、千曲犀川の碧流、善光寺平一帯の小野、一時の下に集まる、丘の三方を繞りて、公園あり、竹樹泉石の庭園の備はれり。人口に勝劣せる【善光寺】は寺の西北八町の山腹にあり、驛に近き【西光寺】は、重氏の等阿法師が、善光寺駐錫の時間基せるもの、石堂九父を尊ね來りて茲に寂せり。 【善光寺】は信の名山、平糲茂此處に鬼女を退治せりといふを以て、夙く世に知られぬ、長野市の北に出づれば、前面戸隠、磯城、黒姫の三山鼎立





と云ふべく、【金洞山】の勝を以つて最とす。

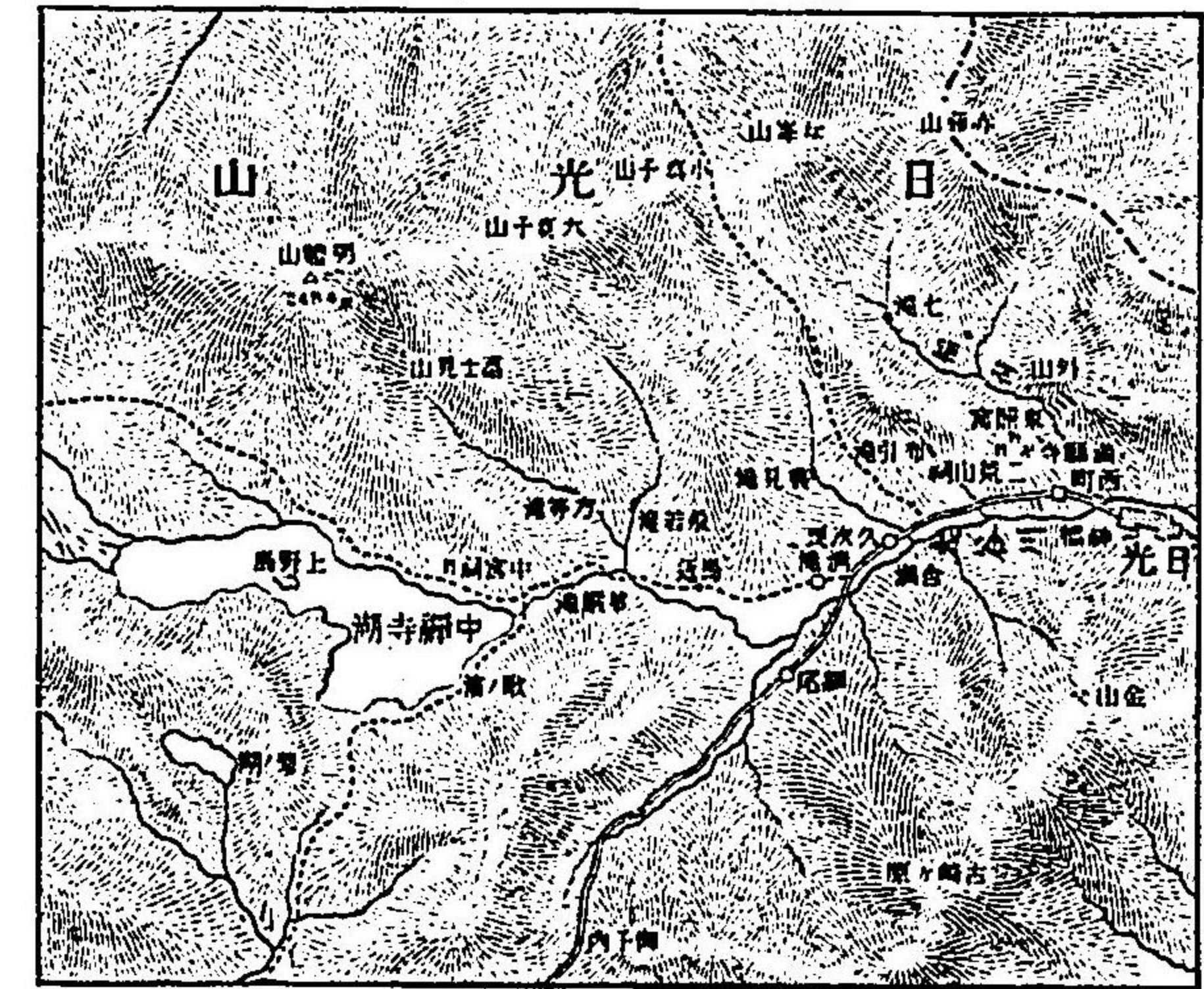
【龍水】は坂東平野と信濃高原との通路にあり、古來中仙道第一の天險と稱せらる。嶺上楓樹多く、晩秋霜雪の候に至れば、滿山の紅葉宛も錦繡を晒せるが如し。横川驛より龍水峠を渡り、信の輕井澤驛に至る七哩の間は、我邦鐵道線路中第一の難所、アプト式鐵道により、十五分の一の傾斜を登り、二十六の陡道を出入す。忽ちして明、忽ちして暗、一時間半にして二十六夜あり、其間仰きては峻嶺を望み、俯しては深谷に對す、秋季は紅葉の美しいべからず。【輕井澤】は龍水の西麓なる高原の中に在りて、四面皆山を繞らし、樹は青く草は芳ばし、淺間山は萬丈の噴煙を吐きて中天に挿え、笠戸岩、龍山は峻々として近く對す、大氣新鮮水清冽、海抜實に三千八百尺、風に一味の冷あり、靜坐すれば輕寒を覺ゆ、都人酷暑に苦しむ時、此地恒に夏日の長きを愛すべし。

【淺間】は有名なる活火山にして海抜八千二百尺、輕井澤、追分、御代田各驛皆登山の路あり、各處其容易なるを以て、いつれよりますも、一口にして上下するを得べし。噴火口は東西に長く、南北に短く、濃煙幾條天を衝て昇り、轟々たる噴聲夏火の砂礫を降らし、硫氣瀰漫噴喉を刺殺す、其壯觀名狀すべからず。

【追分】は輕井澤に對して、近時運籌地として知らる。御代田を結ばば小諸、牧野氏の舊城下なり。田中より鐵路千曲川の溪谷に沿うて【上山】に至る、地は武田上杉の古戰場、龍田氏城を築きて、關ヶ原の役、秀忠の軍を此に阻止したりき、【別所温泉】は、信州著名の温泉にして、山光水色また佳、上山の西方二里半を隔たり、上山より尙千曲の巨流に沿うて、西北に下れば、右に鏡臺山あり、左に冠笠山、姥捨山あり。坂城、厩代を経て、佐久間集山の故郷やいつくと、遙に右に松代を物色するまもなく、篠ノ井驛に至る。

### 下野の野

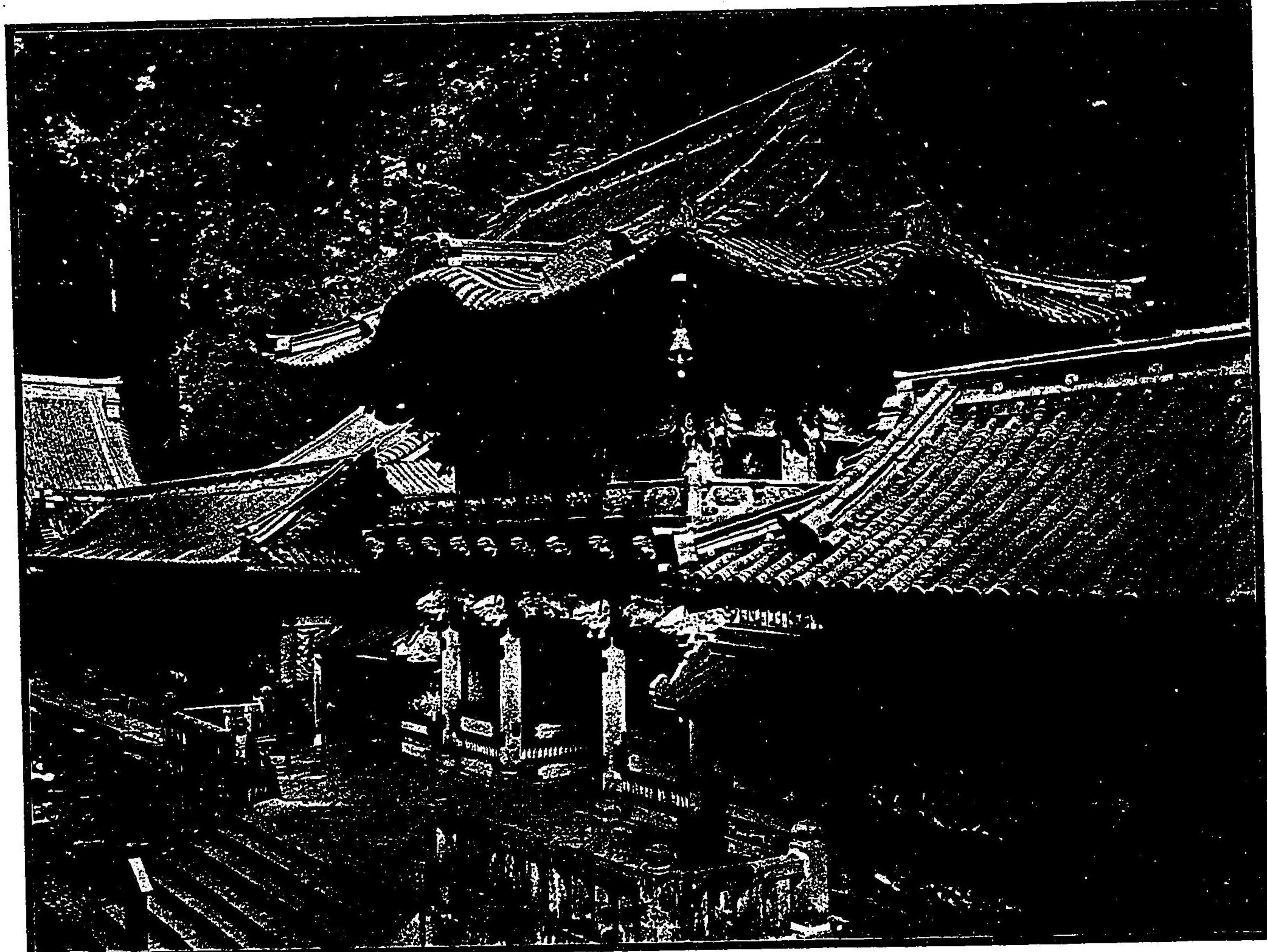
東北本線、日光線



日光附近の地圖

鐵路利根川を渡りて、古河を過れば、やがて下野國に入る。【小山】は兩毛線及水戸線の分岐點、小金井、石橋、雀宮の各驛を過れば、【宇都宮】、戸田氏の舊城址あり。公園あり、富士筑波の眺めあり、春櫻樹白雲をなす時、衣香朝彩相連る。奇勝に富める大谷觀音は、驛より一里半。【日光】の一區は大那山水災の蹟まる所、峯情あり、瀑布あり、湖水あり、溪流あり、霧原あり、温泉あり、之に加ふるに殿堂樓閣の美あり、自然の秀麗、人巧の精華、相俟ちて斐美の盛名を獨占す、人この山に遊ばずして、口に結構を語ることなかれ。宇都宮より日光線に山に入り、側警備街道の古杉蒼蒼たる間を走ること數里、文藝驛に至れば、一帯の山嶽既に車窓の眺に入り、今市驛に至れば、山容いよいよ明に、【別所山】の偉大なる姿、高く群衆中に挺立するを見る。日光驛に下車して、坂道一路、鉢石町を過れば大谷川の急瀾、左に【神橋】を望む、朱欄金珠、碧水に映じて綺麗が如し。橋を渡りて左へ長坂を登れば、右に輪王寺あり、正而は即【東照宮】、結構壯麗海内無雙なり。

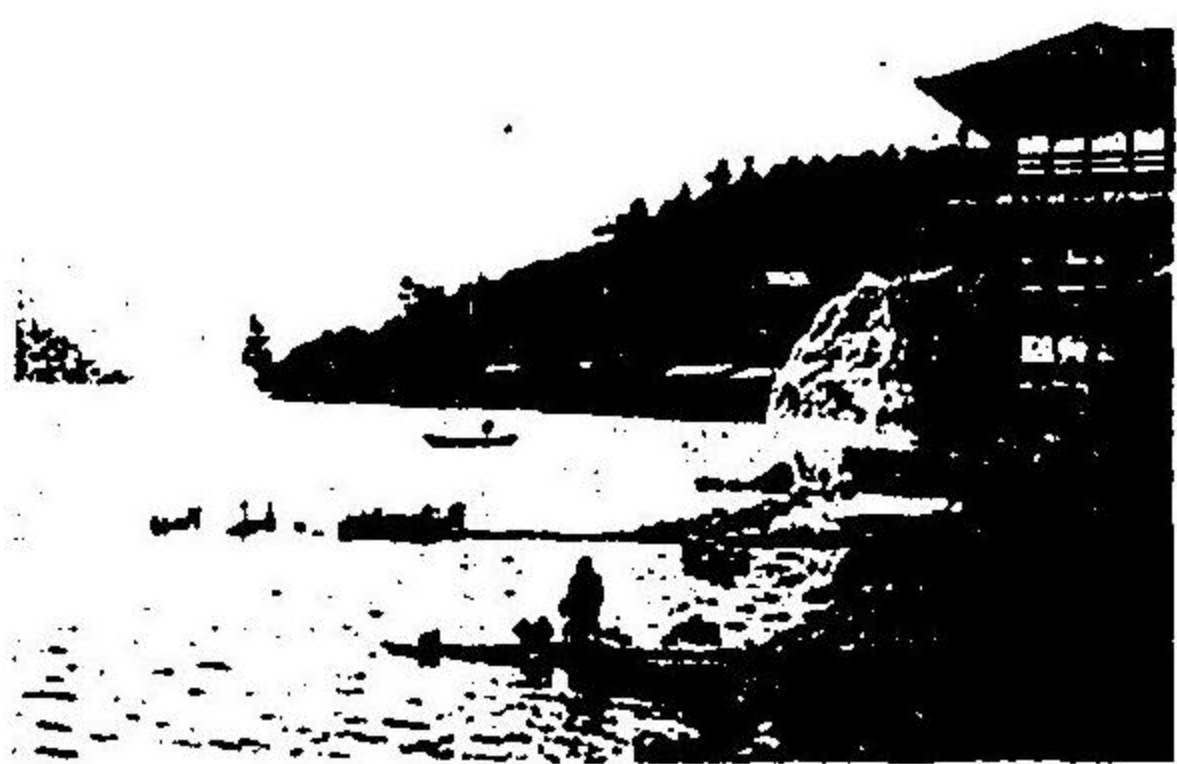
陽明門、唐門、廻廊、拜殿等、采畫の妙、鐵刻の精、建築の壯、靈秀並美なるは今更めて説かず、二荒山神社、大猷院殿まで、遊覽者は案内者の口より詳しく説明せられむなり。



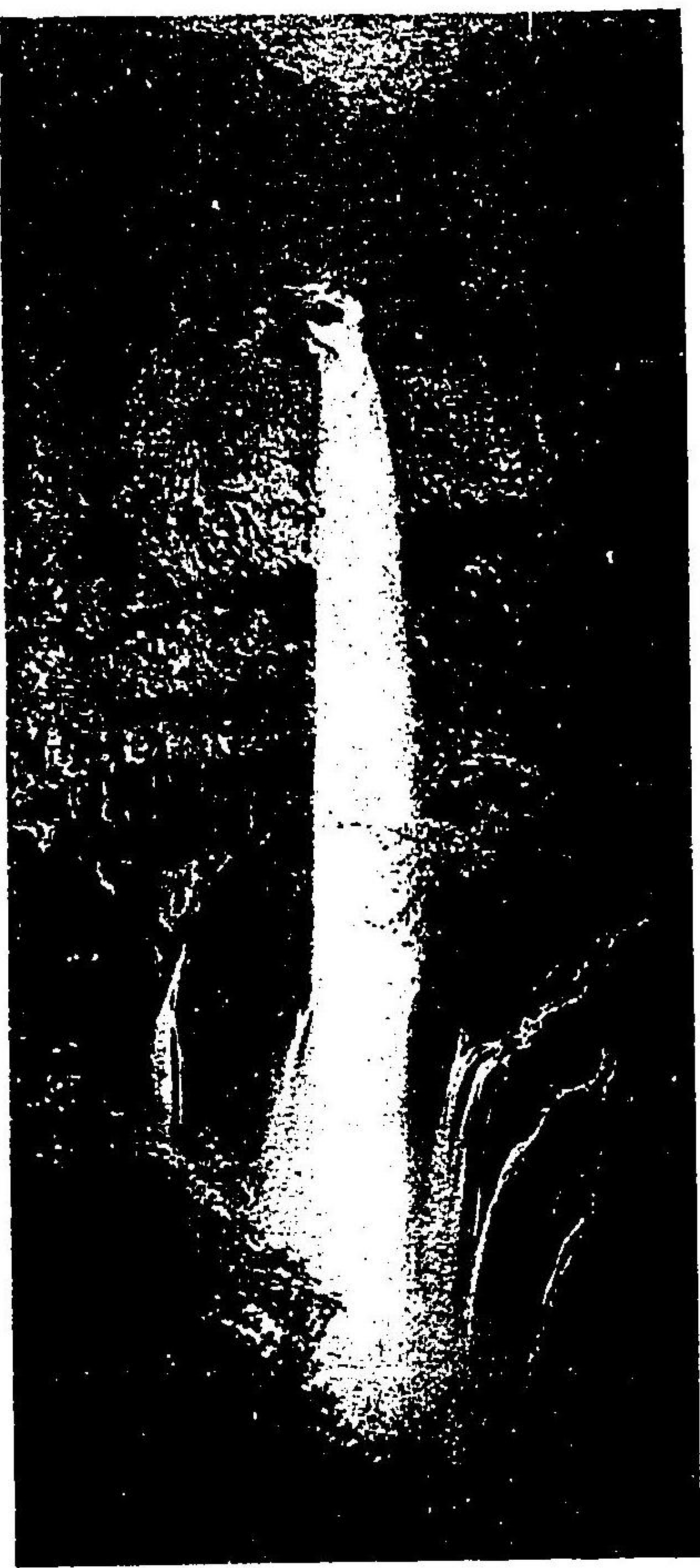
日光感明門



佛湖の勝あり。〔庚申山〕は湯元より三里、山中奇岩怪石巖峙し、百形千態人を驚かせしむ。宇都宮より南北すれば、那須の荒原渺漠として遠く連り、西は高原、那須の連山屏風を樹て、東は野城の八溝山、屹然として平原に峙立す。汽車は此間を南



光岡の打観終らば、壘一口を流廻りに費すべし。霧降、金網、真見、方巻、船着、那須、柳野、白旗、枇杷等、光岡七十瀑の稱あり、中に最偉觀あるを『龍潭』とす。瀑は即大谷川の源にして、中禪寺湖水の決する所、其初めて落つるや、一曲また一曲、之字の様をなして流下する七八町、大岩塊くる所、直下四十丈、草木震動して巖石砕けむとし、除沫容となり、蓬物として梢端に上り、去つて壘となる、石間岩盤あり、水煙を破りて翻翔す。〔中禪寺湖〕は日光より四里、那須よりは十數町のる。東西二里南北三十町、水光一碧映へる境の如く、倒瀨の四山、浮遊の閑世、洗滌として爽も亦及ばず。湖の北岸に沿うて湯元に至る、道〔飛坂ヶ原〕を過ぐ、原は夏期に至りて清く春の時氣を得、數百種の花一時に開く、原の盡くるところは古谷、湯湯は森林より數町の奥にあり、湯に沿うて急坂を上れば、幽寂なる湯ノ湖一景を開きて、風光の美言ふべからず。〔湯元温泉〕はこの湖畔にあり、中禪寺より此に至る道程三里なり。〔白根山〕は湯元より谷路二里、五色湖、鹿湖、より北に横斷して白河に至り、遂に古の奥州に入る。其間名勝として争くべきもの二、一を鹽原温泉とし、一を那須温泉とす。〔鹽原〕は西那須野より五里、途次櫻花を以て名高き鳥ヶ森あり、道路平坦なり、荒涼たる那須の麓原を過ぎて、開谷村の盡頭、人勝橋を渡りて、終に山に入る。一車を輻りて白根坂を踏えてより、回廊橋に三十八の飛瀑をふみて、山中の景初めて奇なり。これより行きて道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全徑にして三十橋。山あれば必ず谷あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば十二勝、十六窟所、七不思議、一々探り得べく



湯の原

重なるもの、白河の清流迂曲折、其脈絡となりて、景物其勝なり。〔那須温泉〕は黒磯より四里、北に活火山那須嶽あり、主峯を茶臼山と呼ぶ、直立六千四百尺、常に煙霧の上騰を望むべし。湯水に温泉神社あり。〔殺生石〕あり。石は今楓を繞りして人の近づくを禁せり。

### 白河の美

東北本線、岩倉橋、鹽原

鐵路那須の曠野を横斷して、左に那須山右に八溝山を眺めつ、黒磯、鹽原、那須の諸驛を過ぐれば、踏次第に上りとなり、山岳これに迫りて自ら關門をなすもの、これ關東と奥羽との分る、所にして、之を越れば阿武隈川一帯の平野、眼前に展開せられて、白河の町に近づく。〔白河城〕は戊辰の變、純義隆の會津兵と共に壘守して、官軍に抗したる所、汽車正に其外壁に沿うて走り、懐愴の情に堪へざるものあり。地は又北高田家の義親親王を奉じて、義を唱へし所、城址は其遺址なり。〔南園公園〕は驛の南半里、樂翁公士民僱築の爲に修めし處、風景佳なり。能因の歌によりて名高き〔白河の關址〕は、驛より三里、關街道の關門に當り、峯巒左右より迫り來り、僅に一溪路を通じて、又岐路の出づべきなく、誠に要害の地點たり。思ふに交通不便なりし昔時にありては、陸奥は實に遠遠の地、而も曠野百里に連りて、天遠く山長く、山河草木、皆島岡的の形態を脱して、大陸的風物の面影あり、京人一度此關を越れば、恰も漢人初入るの思ありしなるべし、今や東京より白河に至る僅に半日、之を黃都よりするも亦二日を要せし、霞と共に出て、秋風に驚きけむ、當年のことを回想すれば、時勢の變文化の進歩、夢の如きものあり。白河神社ありこれ古關の址なりと。祠前樂翁公建つ所の碑あり、白河の流儀々として古を語る。

白河より北東崎、矢吹、須賀川、笠川の諸驛を経て、〔郡山〕に至る。岩倉橋の分岐驛あり、雜新後、疏水及開拓事業の爲め、頓に進進に向へり、町の西一里餘〔開盛山公園〕あり、眺望に富み、晩春萬葉の櫻を山を封じて、美觀な狀すべからず。郡山にて岩倉橋に乗りかへ、山岳に至れば、〔猿蓑代〕の湖光に接すべし、湖は東西三里南北二里、周圍十三里餘に及び、櫻波渺茫、對岸の風物、宛然淡墨の繪を見るが如し、天晴れ風靜かなる日、猿蓑山の影湖心に映じて、山光水色畫くが如し、近時遊覧の爲にこの湖畔に遊ぶもの多し。〔猿蓑山〕は湖の北方に控り、形狀の美富土に似たるを以て、又會津富士とも稱す、猿蓑代驛及び猿蓑驛より三里半にして、頂上に達すべし。〔若松〕は四州山嶽の盆地、元保科氏の城市なりき、戊辰の變幕府に與して主帥に抗し、天下の大兵をこの一城の下に集めて、苦戰旬日、うた、會津武士の氣風の尋常ならざるを思はしめぬ。城址は市の南端、湯川に臨める所にあり、殘草埋れて當年の悲劇を語る。〔磯盛山〕は市の東端にあり、これ白虎隊の十有九士が、春尚早き青春の身を以て、背離に殉じ、封建時代最後の光榮を放ちし所。市の東方一里〔東山温泉〕あり、三面峯巒に圍まれ、西面僅に開けて頗る幽遠の地たり、屏掛湯川の兩岸に控りて、流水激に激するを見る、泉は無色透明、玲瓏として玉の如し。

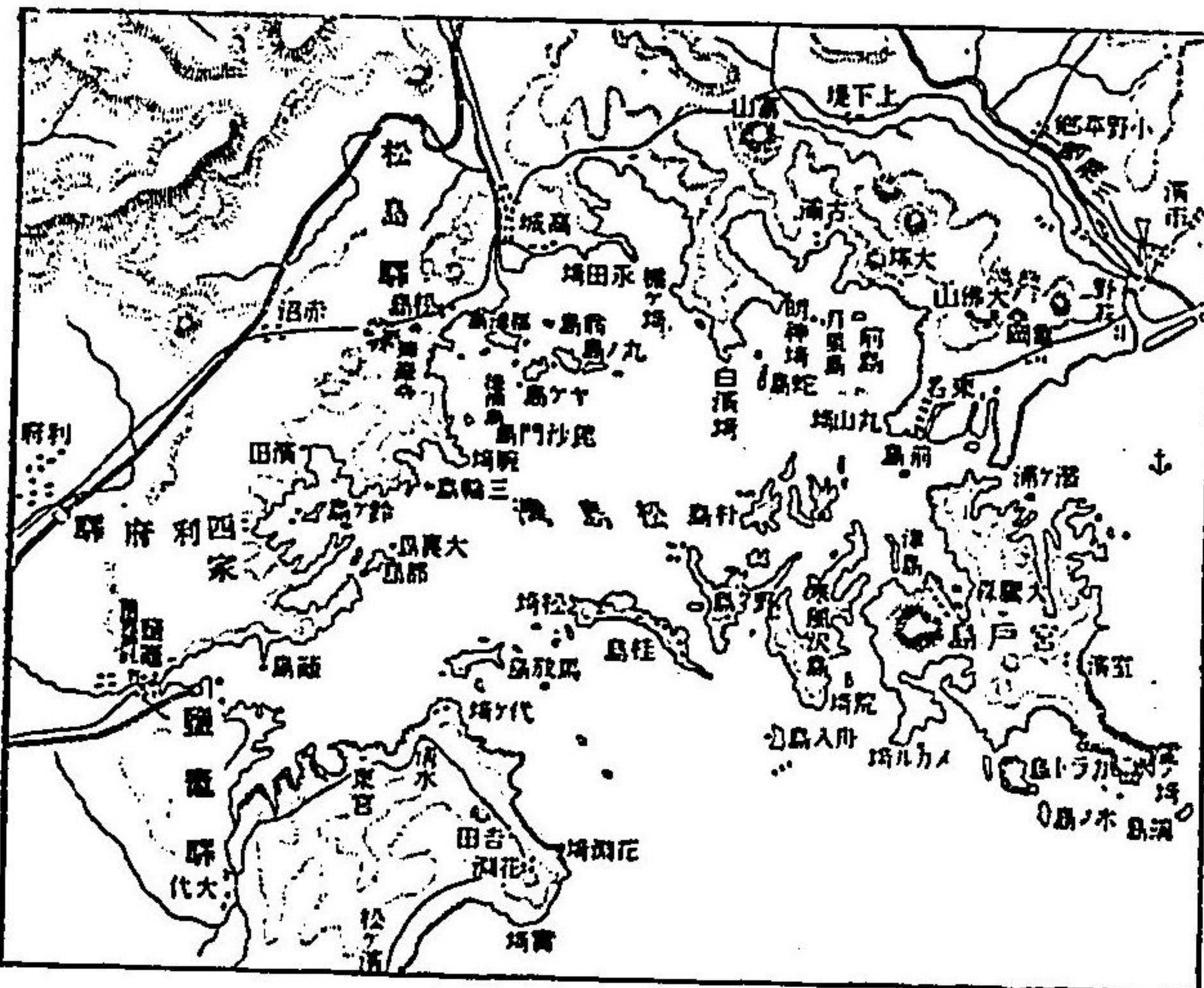
郡山より南北に向へば、やがて福島に至る。酒板倉氏の城下、阿武隈川の南岸にあり、〔信夫山〕は驛より十六町、松杉蒼翠として柔滴るが如く、梅櫻其間に點綴して、花季の美、先づに遊覧者の心を惹くものあり、眺望亦甚佳なり、今公園とす。所謂〔交野橋〕は、東一里觀音寺境内にあり、古來夢の遊樂を以て、此石面を踏れば、相思の人の面影を見得べしと傳へぬ。〔磯坂温泉〕は福島より一里、長岡よりは一里、摺上河畔にあり、湯野村温泉と相對し、其間十綱橋あり、河底巖龍石虎起伏し、水流相衝いて碎々琴聲を聞かす如し、家は懸崖に據て建てられ、屏樓影を水中に映じて、其構造妙を極む。汽車交野驛を過ぐる頃、東望すれば、一山ながら龍の鱗たるが如きを



會津東山温泉



の waterfall 下を流り、清濁の境、英雄千年の靈を安んずるに堪へたり。花信一度通じて、彩霞をなびけば、綺羅紅袖を連ねて、人花と好を爭ふ。



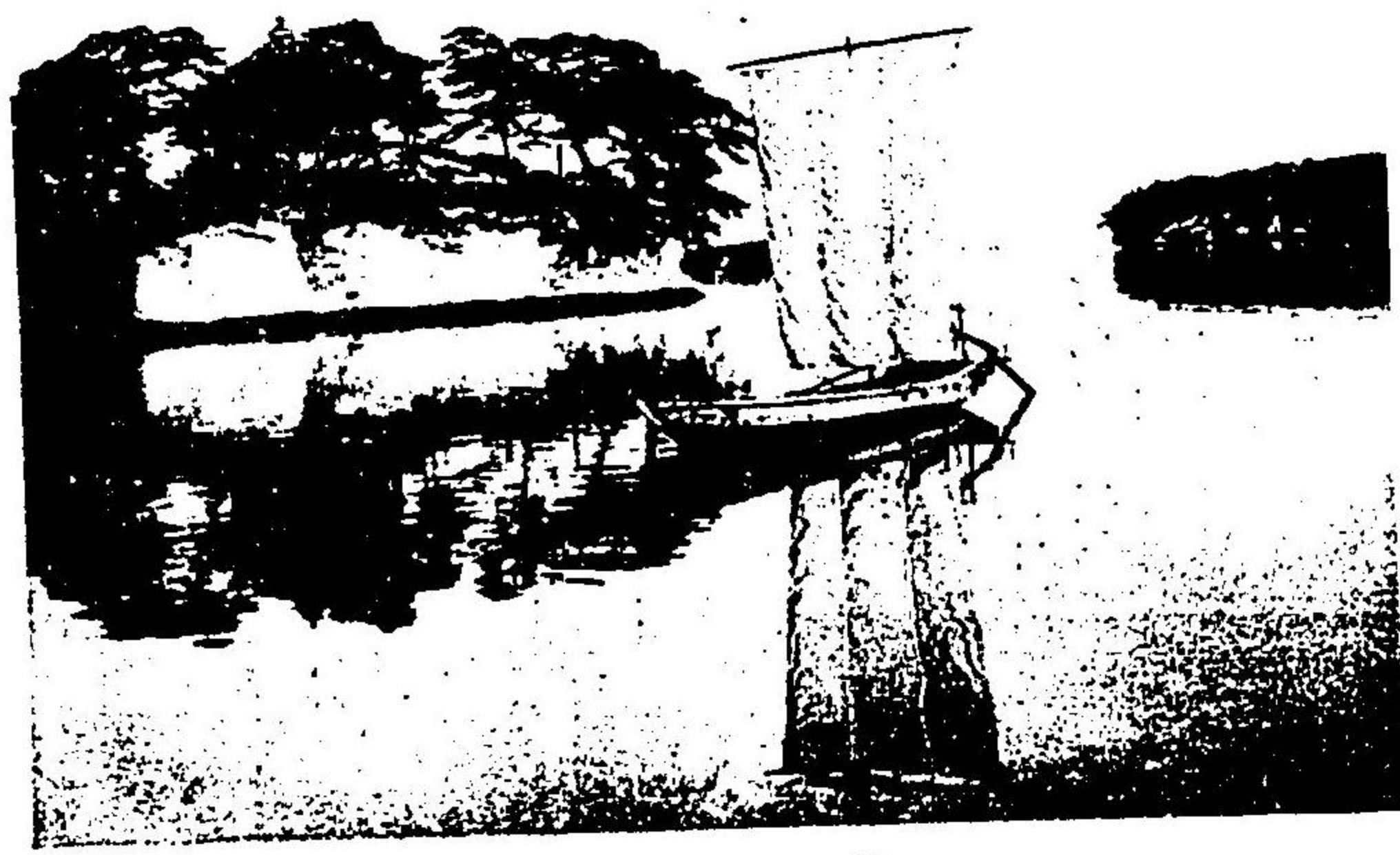
松島附近の地図

【白石】は舊伊達家の老臣、片倉氏の城下、城は戊辰の變、奥羽三千餘藩聯合の盟約を結びし所、今中學校の在るところ即ちこれ。町の附近は温泉に富む、曰く「先湯」曰く「小原温泉」、附近材木産の奇蹟あり、曰く「遠田川温泉」曰く「青根温泉」。湯の盛なる、浴池の宏闊なる、恰も海濱湯場の觀あり、附近温泉中最世に著はる。曰く「岬ヶ湯温泉」、「不老山」にはこの温泉より登山すべし、山は海拔六千二百尺、頂上霧氷溜あり、火口湖なり、其水煙の如く佳景いふべからず、奥羽人に通るを要す。

白石縣を後にして大河原に至る間、岩井白石川に沿って走り陸前に入る。【若沼】は常磐線の終點、奥羽に於ける稻荷明神の樓閣と稱せらる、【武廟神社】はこの地にあり。名取川を渡れば、仙臺にはや眼界にあらはれ来るべし。  
【仙臺】は折伊達侯の城市にして、東北の嶺、廣瀬川の大橋を渡れば即ち仙臺、今第一陣團の香城たり。これを経て、「さんざん時雨」が霧野の雨か音もせて来てぬれかかる。」を歌ひて、東北に雄飛したる獨眼龍の経營せし所、後には青葉山、懸崖相連りて森林叢茂し、前は廣瀬川、急流若石に鳴る、惜しいか其殿堂門檻は、先に圓融の災に罹り、當年の傲視を愧ぶべきもの、唯僅に一の城門あるのみ。城の南方經ヶ案あり、伊達家三代の廟宇のある所、満山樹木鬱蒼として繁茂し、廣瀬川を流る。

【龍宮】は松島灣に臨める仙臺市の門港、町の北方、龍宮神社あり、廟宇華麗、奥州一ノ宮の名に負かず、社前古櫻樹あり、これ龍宮櫻と稱するもの、境の東隅神社あり、千賀ノ浦の激波を見るべく、頗る形勝に富み、鹽釜より南、蒲生、附上の地を経て、阿武隈河口に至る溝渠あり、これ【白山】にして、政宗の開發せしもの、舟出の便、今尚餘草に浴すること多し。堀に沿って岩田川海水浴場あり。  
【天下右山水、各擅一方美、兼美臨松州、天下無山水」、こわ竹南の詠、一詩能く勝景海内に冠絶せるを説き得たり。其五山、七浦、八崎、八百八島の晴好雨奇、雪月夕の勝概は、よしや一斗の量を盡さずとも、尚よく嘗し得ざるを憂ふ。凡我邦の東海岸太平洋に面するの地、絶岸を拍つて雲夜を分たす、天清く風靜なる日も、波浪耳に噴しきに、當此灣内のみ波澄にして砥の如く、八百青嶺の松翠影濃かに、白帆點々危岨低く飛ぶ所、宛然二窟の好景、造化の技を亦なんぞ極まむや。遊子は先づ松島に降りたりむには、鹽道に出づく、鹽道よりせむには、松島に至るべし。【松島】は島の中央沿海の小村落、松島驛より一里を隔つ、龍藏寺、觀瀾亭、五大堂、雄島の名取、昔こ

の地あり。【五大堂】は水濱の一離島にあり、五大明尊像を安んず、老松羅列して碧潭に臨み、【觀瀾亭】は月見時により、亭頭に掲ぐる雨奇晴好の匾額、蓋し此亭の景を盡せり。【龍藏寺】は昔の南歌町、波月の長橋相通じて、松連國邊、周圍界洲に臨みて、斷崖削るが如し。村の西端、蔚然として高松の中に、大伽藍を見るは【龍藏寺】、其覺大師の創建する所、中興の祖は法身上人龍驤半四郎なり、佛殿廣き二千間、胡の觀世音を安置す、政宗中興の木像あり、短面にして鬚眼、半月を飾りたる兜を頂き、手に軍配を拂ふ、英風凜凜正に其人に接するが如し。堂内の彫刻精微、昔政宗當時の百匠大家の手に成り、桃山時代美術の精華として、斯道の人の推重する所たり。若しこれ松島全島の雄大なる風光を、パノラマ的に觀覽せむには、更に高きに登らざるべからず、こゝに於てか松島の四大觀あり、曰く【多門山の美觀】、曰く【大穴壺の壯觀】、曰く【扇塚の幽觀】、曰く【富山の麗觀】、中に富山最開の山は松島の北頭に屹立し、四近高嶺なきを以て眼界頗る廣く、海天一色通に外洋に接す、俯瞰すれば青嶺錯綜點々皆平べく、十里の碧海亦一泉池に異ならず。扇塚は松島と龍藏との中間にあり、扇塚一泉池に如かずといへども、龍藏は寧ろこれにあり。多景富山の宏きに如かずといへども、龍藏は寧ろこれにあり。大穴壺は扇塚の上あり、内外の靜波濤あはせ見るべし。大穴壺は宮戸島太平洋上の嶺、山高く水面を抜きて、四顧悉く佳、蓋四大觀中の隨一とす。



松島

かばらす人を想ひわたるかな 人丸  
松島驛を後にして、龍藏寺、松島町を過れば小半田、驛より岩田川を流り、荒瀬川の上流に遇れば、山溪幽邃を極め、到處温泉湧出す、其著はるもの、温泉村に川原、田中、赤梅、新米、鴨子、河原、中山の八泉あり、鬼首村に寒風潭、新米、鴨子、河原、中山の八泉あり、山嶽四奔し、眺望の瀾然た、神宮、吹上、荒瀬の五泉あり、中に吹上温泉のなほといへども、閑靜幽寂俗腸を洗ふに足る。中に吹上温泉は實に海内の奇觀、水邦に於て間歇性温泉は、伊豆の熱海のみにひとりに知られ、鬼首に亦一泉あるを知らざるもの多し。泉の噴口は左右兩口あり、右口既に瀟瀟して洩れむとするに際し、忽ち激發し、濛濛湯霧空中に噴揚す、左口此の右口に繼ぎて昇騰し、一起一息嘗て序を失せず、近時大孔の噴泉止ハ、小孔のみ毎二時間に噴泉するに至り、雨時の偉觀、半ば之を減じたとども、尙水邦稀有的温泉たるを失はず。

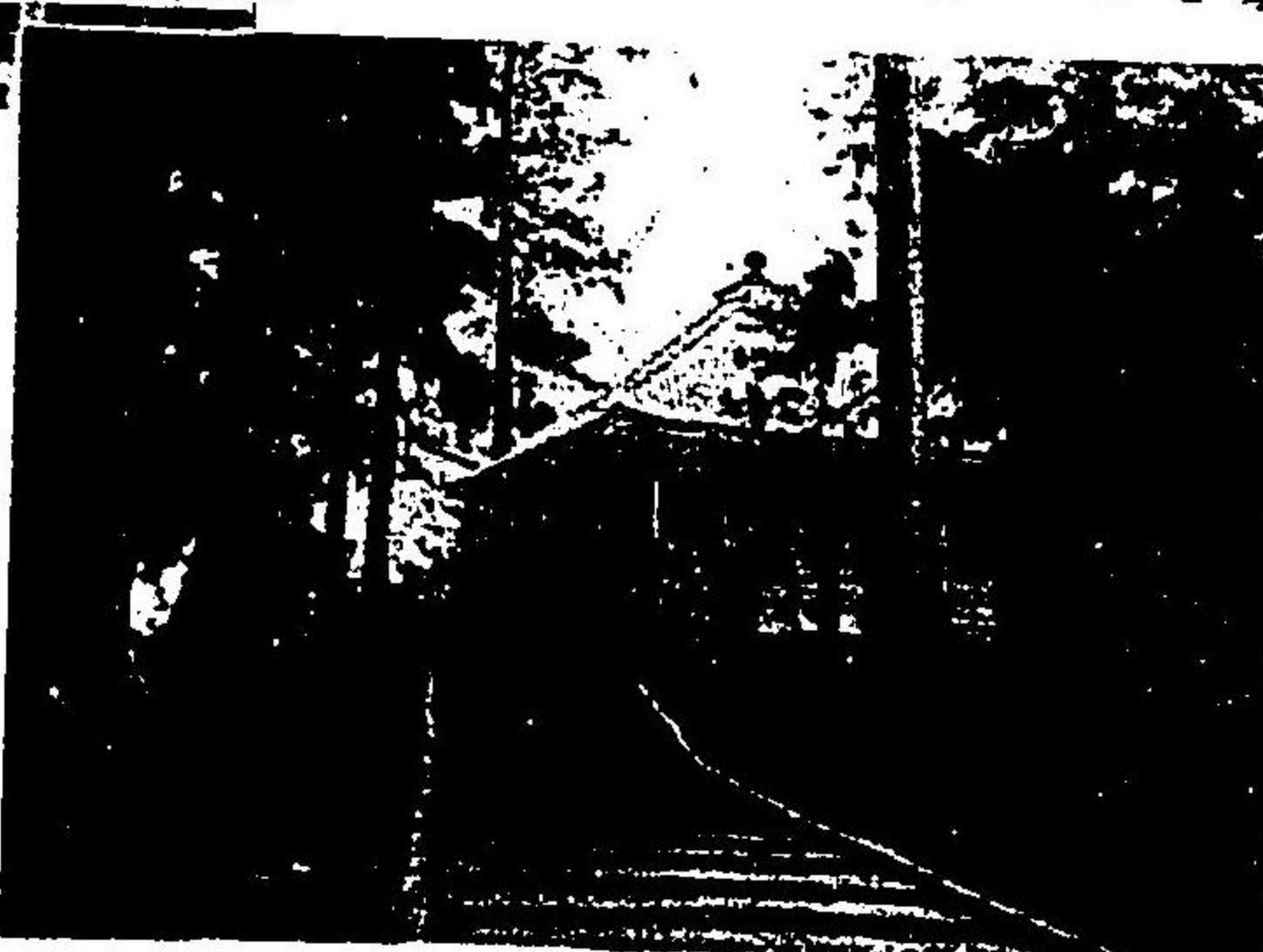
### 夏の細さ

東北本線、八戸線、奥羽本線。  
一路遙々陸中に入れば花巻、鐵路はこれより國道に沿ひて【一の關】に至る、地は古の狝非、歴史上著名の地、御前山公園あり、眺望佳なり、驛の西方一里半【五世の溪】あり、磐梯川の溪流衆洞を穿ちて漸く大、此處に至りて忽ち一峽の懸むる所となり、忽ちして瀑となり、流はては潭となる、溪岸、赤松三其上を覆ふ、大工橋上却を曳いて此風光に對せば、身の塵世にあるを忘れ、正に木谷の覺と壯稱すべし。一ノ關を後にすれば、東都の大猷忠意に通り來りて、北上の大河を帯にし、江山の景勝漸く凡ならざるを覺え、三代の榮耀一睡の中心にして【平泉】の遺址の近づきたるを知るべし。  
上國の戰塵飛んで到らず、東風古斷す九十年、白河ノ關以北綽綽一帯餘里、陸奥の黄金花映く大野に盤踞して、其宮主に超のと稱せられたる、藤原秀衡父祖三代の治府たりし平泉の榮華の存も夢のまた夢。今は唯一首照をたる家村、奥前、御前所、柳

ノ節などいづれに尋ねべしや、七百年の歴史を築き、金風としへに繁華の跡を吹けり。中尊寺は、老杉陰翳き、阿彌陀三尊、二天、六地藏、悉く定額の前なりと傳ふ。寺はもと無量天師の開基、清衡移て平泉に住するに及び、大に淨財を蓄積して、壯麗なる堂塔を建立せしが、今は唯「金風」を遺すに及び、大に淨財の積を遺して、三代の足利とゆふの名残を存し、経緯には三代の密附になれる一切を納む。丘を下りて北すれば、一依の溪流、阿彌陀の麓を繞りて、北上川に注ぐ、これ即ち衣川にして、上流五町餘、安徳朝臣父子の採りし「衣川の根址」あり、源氏累代の勇を以てして、尙其討滅に前後十二年を費したるを思へば、當年の勢威推すべきにあらずや、清衡の平泉に移れる、畢竟此故地に據りたるに外ならず、跡土奈しく残りて秋草猶すこと數十町、礎石いづくにかある

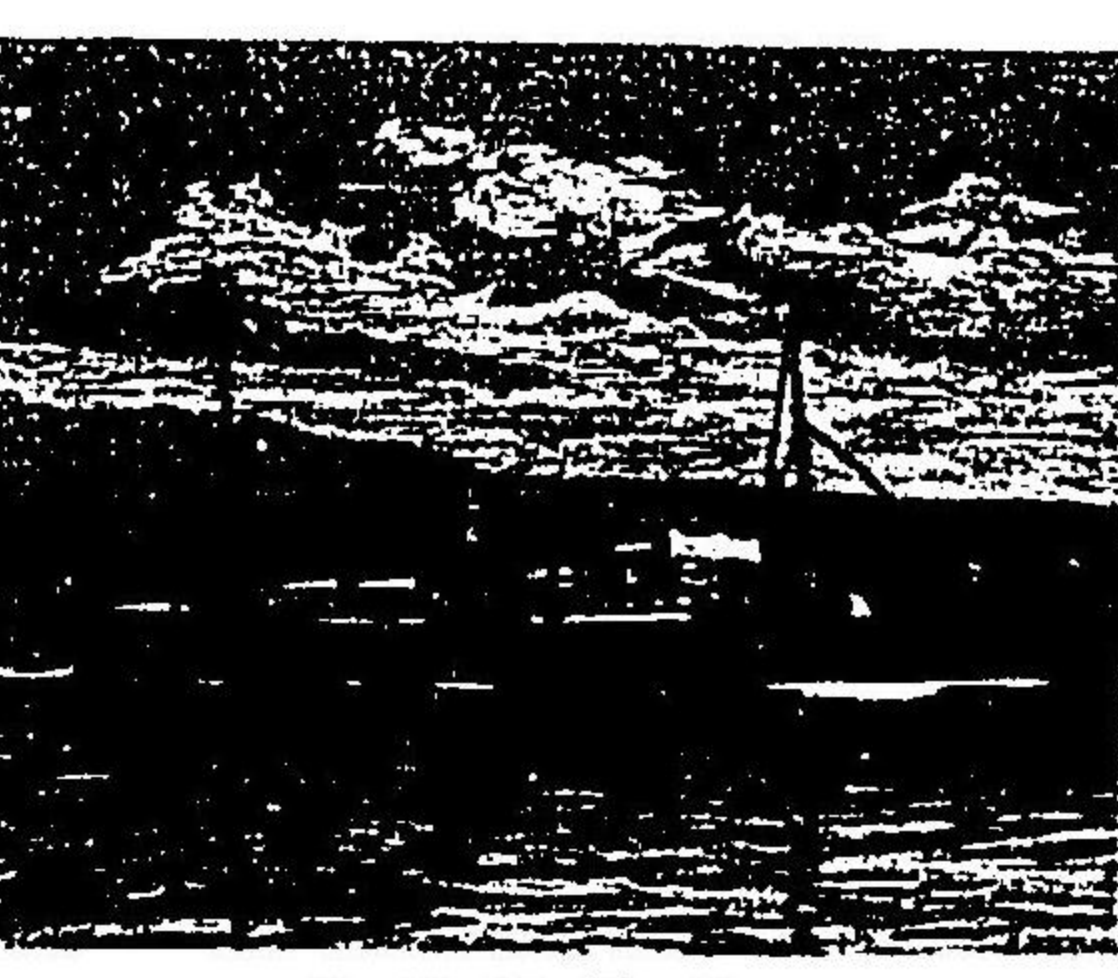


内堂の内堂也



し鳥谷ヶ崎城址あり、寧温泉、志度平温泉、盛岡はもと南部氏の城市、城址は今舊觀を見る能はず、藩祖を祀れる櫻山神社中にあり、稍陳れて公園あり櫻樹多し。安徳貞任の「阿彌陀の根址」は、平泉より三十町、斷崖數丈轟峻尙存す。「岩手山」は南部の鎮山、形状端麗、八面玲瓏として怡も倒扇の如し、これ奥ノ不二の名ある所以、盛岡より行程九里、登路三、瀧澤村口を以て最便なりとす。南麓有名なる小岩井農場あり。盛岡より北に進めば、地勢漸く高まり、右は磐梯山、左は岩手山の秀容を窺む、沼宮内を過ぎて中山峠前面を過る處、「可憐の湧水」あり、沼宮内驛より二里半、これ東奥の地を流る、七十餘里、本邦屈指の大河水、北上川の源池にして、源類泰が弓矢を以て岩頭を突きて湧出せしめたりと傳ふるもの、池の廣さ凡三四間、源泉滾々として清冷水の如し。中山峠は陸中陸奥の境界をなす一峻嶺、古く北より北を「奥の細道」といへり。東北線路中最後山の風色に富める處にして、秋風滿山樹木紅葉するの時、車窓自然の繪巻物を繰くを得べし。小鳥谷驛を過ぎてよりは、鐵路「馬淵川」の溪流に沿ひ、右に越え左に渡りて居るに至りて分る。其間一ノ戸附近に古の「末の松山」なる浪打時あり、三ノ戸は南部氏創業の基を開きし地、城址あり、異國風の碑あり。屋内は八戸線の分岐點、下川、古間木を過ぎ、瀧崎に至れば、右に「小河原沼」の波光瀲灩たるを窺む、乙供より野邊地に至る間は、冬則積雪の盛なるところ、所々雪除の木道隧道を見る。野邊地より鐵路西折して、陸奥海灣に沿うて走り、遙に恐山の威容を仰ぎつ、青森に向つて走る。瀧頭「後湯温泉」あり、三面山を負ひて北關、湯野島の架を渡して波鏡に泛べりあり、夏は涼しく、冬暖く、津輕の熱海は此處なるべし。「青森」は東北本線の終點、地は舊藩邊に臨める北海運航の名津、港として東北第一位を占む、「安武多祭」の奇習と、「善知鳥神

社」の靈異とは、安倍比羅夫、坂上田村麿の東夷征伐に關聯して、風に世に問ふる處、「甲村丸」、「北藤夫丸」、昔南進船の名、なんぞ人をして歴史を聯想せしむる好命名ぞ。「八甲田山」は、青森の南七里、駒形内より登るべし、西麓温泉あり、醜湯といふ、築伏は湧噴火口、往時の跡尙見るべし、南すれば「和川湖」に至るを得。青森より鐵路秋田街道に沿うて、秋田に至る。新城驛に至れば山嶺漸く迫り、其窮まる所隧道を穿つ。大釋迦驛を過れば、前面渺茫たる津輕平野あらはれ來りて、八面玲瓏たる岩木山の秀姿、長く平野に裾を曳いて、車窓の人を歎ましむ。「岩木山」は津輕氏の舊城市、津輕平野の中央に位置し、田野邊を開け、岩木川の清流潺湲として西に流る、秀麗なる岩木山北に聳えて、恰も盛岡の磐梯山に於けるが如し。市の中央丘阜をなし、喬木鬱鬱たる間、城址の白雲の隱見するは「舊城址」、日本七名城の一として知られたれど、今は大方崩壊せられぬ、城址の一部今公園たり。「岩木山」は市の西北三里、津輕富士の稱あり、南麓百澤に「岩木山神社」あり、金勢燦爛、華麗壯麗、喬木長發蒼々として表尙時々、奥ノ日光の名あり。山頂にあるを其本宮とす。弘前を後にすれば、津輕平野漸く盡きて、平川の溪谷に沿うて矢立に向ふ、「大野温泉」は平川の南岸にありて、北岸なる「藏前温泉」と相對せり。「藏ヶ淵」は津輕の南境、温泉あり、上地高うして大氣清く、山水の景亦見るべし。汽車隧道を開き出で、南すれば、先づ平川の溪谷に沿うて走る、大野以南之を渡ること前後六回、道は次第に爪先上りとなつて、進んで矢立の山中に入る、これ陸奥羽後の境、海拔八百呎、隧道に入りては又出づ始終七回、水流之より北するものは平川、南するものは下内川、車窓眼を放てば、老杉密樹蒼蒼として景色瀟々たる處、水流滾々として銀蛇走る、満日の光景不變を忘れしむ、峠を越えて下り入る處は即秋川の陣集。



船橋近西青

米海の世

奥羽本線



奥羽本線は、福島より米澤、山形、秋田を経て、青森に至りて東北本線と相合ふ。庭坂驛は「善基富士」登山者下車すべき所、山は驛より四里半、山容甚だ富士山に似たり。庭坂より鐵路「長谷野」を横断して羽前に入る、これ本線中最開鑿に困難を極めし所にして、十數の隧道を穿ち、山を深き處、赤岩、板谷、峠、大澤の四驛を設く、古米嶮峻無比、旅客の常に憂ふる所なりし米澤入りの道も、今は車窓溪谷に臨み、瀑布を仰ぎ、岩石の奇、山路の曲、變化果しなき自然の大畫幅を繰きつづ、容易に其險路を越ゆるを得るに至れり。「米澤」はもと上杉氏の城市、城址今折きて松崎公園といふ、中央山合にして、儉勤力行の徳風、今尙其遺澤に當ひ、機杼の響に聞かしく、米澤城の名風に世に知られぬ。「長谷野」は市内第一の巨刹、上杉氏時代の築あり、直江山城守の塔もあり、悪形すべし。「佐氏東公園」は驛より五町、稍高丘をなし、老松盤踞する邊、清泉滾々として湧く、古の佐藤庄司の宅址なり。市附近温泉多し、曰く小野川、曰く白布湯、曰く五色、曰く、姥湯、中に高湯は善妻山麓、姥湯は善妻山中にありて、共に幽邃閑



雅の地なり。

米澤より鐵路國道と作じて山形に至る、其間驛ノ口附近に「龜岡文珠堂」あり。赤湯驛附近「赤湯温泉」あり。中山驛は米澤平野と山形平野の界嶺、「上の山」に至れば、早く山形平野を見るべし。地は古來温泉を以て開きたるの地。「月岡城址」は町の西丘にありて、今公園たり、眺望に富む。高湯温泉は龍川の支流、龍山の南麓にあり、これより三里にして藏王山に登るべし。「山形」は古の最上、地は山形平野の中央に位し、四望宏潤、遙に月山の翠微を望む。「霞ヶ城址」は驛の附近にあり。六橋八幡宮は兩邊の境、山形兩所宮は鳥海、月山兩所の遙拜殿にして、一に武門將軍宮と稱す。山形より北漆山驛より一里半、俗に山寺と稱する「寶珠山立石寺」あり、境内奇石怪嶽群列して、洞窟を有するものあり、奇景實に愛するに堪へたり。「白石山」はその東北に屹立する巒嶺にして、山寺の奥ノ院と稱す。山中地蔵瀧、石橋、七瀧の三天景あり。「天童」は藏田氏の舊領地、驛東田野の間に隆起せるは舞鶴山にして、天童城のありし處、信長を祀れる建勳神社、この山上にあり、遙に月山を望みて、景致佳なり。「空の糸」くつ崩れて月の山はせを、「月山」は形狀臥牛に似たり、四時雲を蔽き、湯殿山、羽黒山、其の麓をなす、これ所謂「出羽の三山」として夙に世に知られたるもの、夏時參拜者山中に籠釋す、山形若しくは天童より至るべし。賽者多くは羽黒を第一にし、月山を第二にし、湯殿を最後にす、俗に三山懸九里の稱あり。山形若しくは天童より神町を後にすれば、最上八幡の一なりし橋岡、大石川、船形を経て、戸澤氏の舊領地新庄に至る、これより汽車は鳥海山の秀容を仰ぎつゝ、新町、釜淵、及位を経て、杉崎を貫きて羽後に入る。

### 秋田 野田

奥羽本線 能代驛



秋田 野田

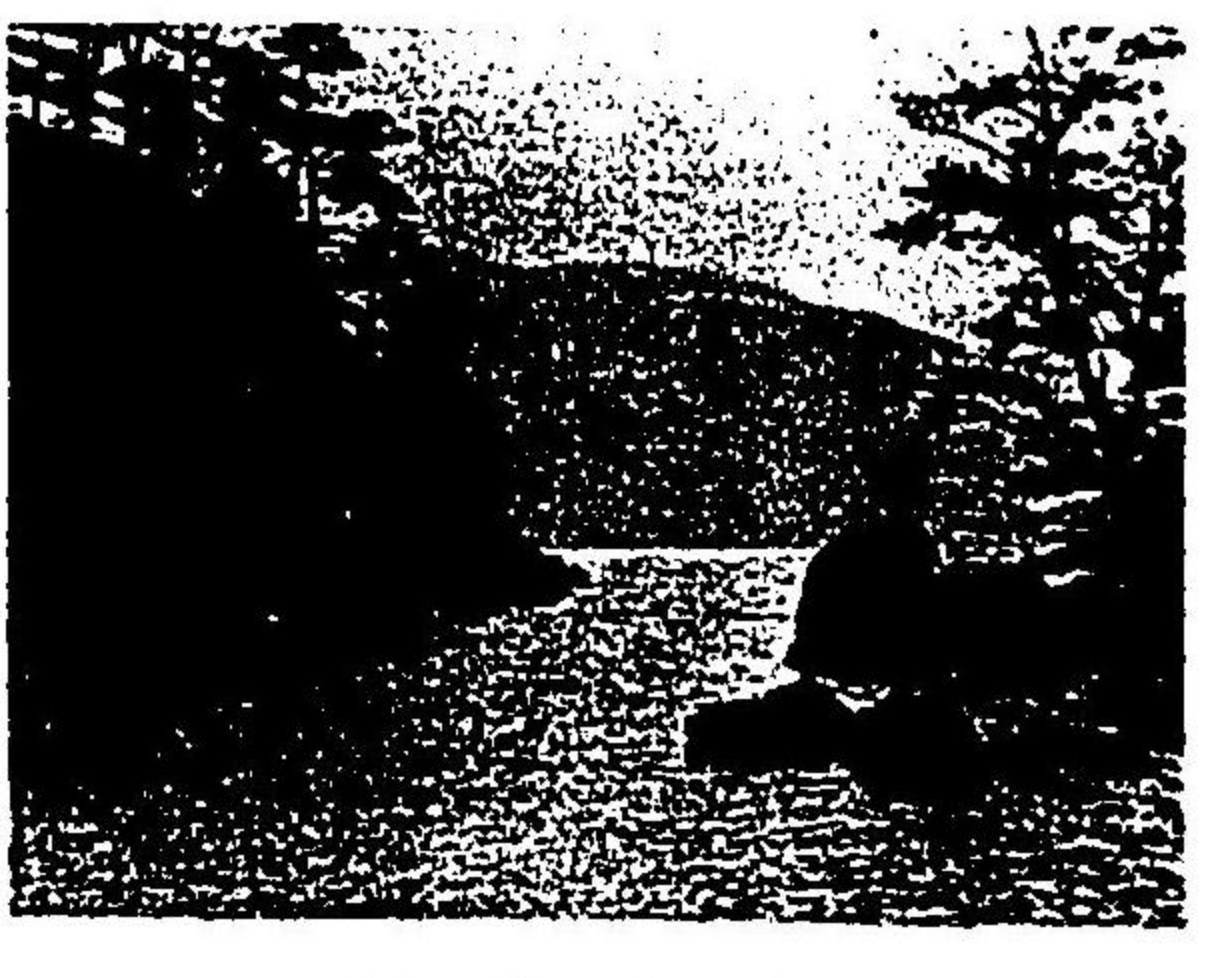
汽車形跡を越えて羽後に入れば、狭長なる谷地の相迫りたる處院內あり、銀山はこれより西に入ること一里餘、横堀、湯澤、十文字を過ぐれば横手、城は佐竹村内五塊の一、戊辰の役浦軍與羽聯合の軍に當れり。「田澤湖」は大曲驛より六里、四面翠濤を繞り、深碧なる水面靜に樹影山影を滿したる、幽遠極まりなし、特に雲の白濁と名づくるあたり、最風光に富めり。

秋田はもと佐竹氏の城市、城址は今折きて「千秋公園」といふ、東北に於ける公園中第一に推さる。「秋田神社」あり瀟湘蒼翠を祀る、高きによりて眺望すれば、東に太平山あり、南に鳥海山あり、御物川の白練、日本海の怒濤、孰れか登臨の人の心を惹くの料たらざるべき。

能代より南、地角斜に日本海に突出して、其端男鹿半島となり、更に土崎より北、地角の突出する處ありて、島と合はざる處僅に數百間、以て日本海の潮流を吞吐するもの、これ八龍湖又八郎湖の名あり。湖の風光は詩的の趣味を加へて一層の光彩を添ふ、春夏の交日朝東天に匂ふ時、或は星月明に差つる頃、白氣霧中に生じて、男鹿島かけて虹の如く、中に山川林丘、樓臺亭榭等差として人馬阻礙す、人呼んで「狐籠」といふ。五箇盆の節の夜には、筑紫の不知火の如く、湖上無數の火光を生じて煙波の上を浮遊し、明又滅、道又近、曉に至りて止む、之を「不知火」と稱す。雨夜打



八郎湖



魚の舟湖上に行くもの、燭光燈籠を携つて、之を挿へば燈光を發すといふ。秋田の北、大久保、五城目、鹿渡の間、汽車此湖に沿うて走り、うた、旅客の目を娛ましむ、鹿渡の西一里「三合峯」あり、湖の全景を總攬す。

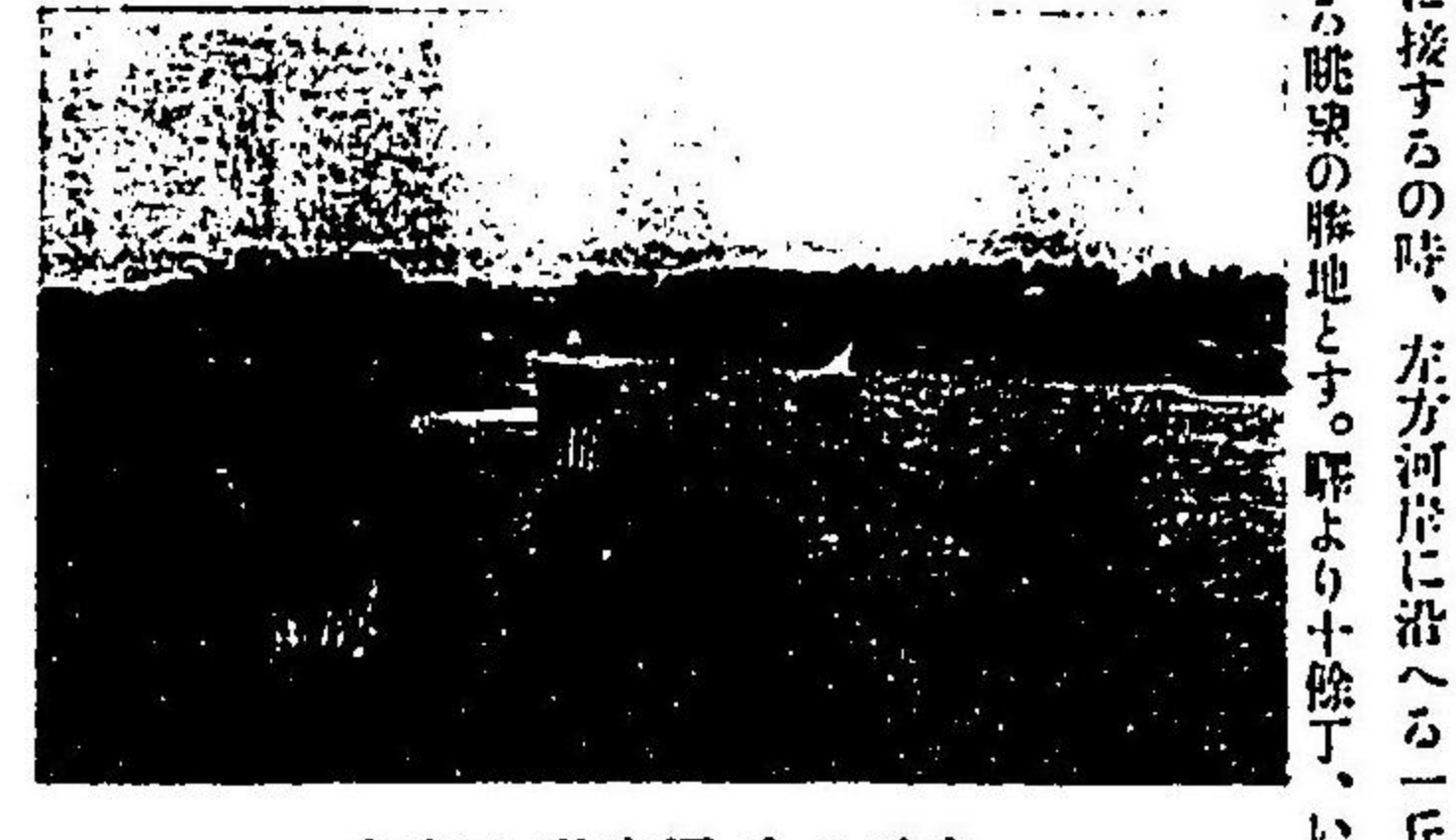
【男鹿半島遊り】は近郊驛に下車、八龍の長橋を渡りて船越より門前又は小濱に至り、船を雇うて戸賀に至るもの言ふ、此間凡三里半、奇巖怪石崩散し、神工鬼斧の聲も古し、中に「高峯宮」を最とす。宮前峭壁聳立して屏風の如く、海濤相激して雪山を崩すに似たり、漕ぎ入ること半町口に抵る、二十間餘にして沙磧あり、二坑あり、右は淺く左は深き三十間餘、二人袖を聯ねて進むべからず、火を執りて中に入れば、泥あり腰を没す、其奥脊くして極むることを得ず。遊子窟を探るや、伴ふ處の婦女側の島に上りて待つを例とす、【女泣島】の名あり。戸賀より湯温泉に至りて、心神を慰めたるには、更に勇を鼓して【寒風山】に登るべし、八龍の波光帆影雲上に弄すべし、加ふるに南北の海洋茫々として際なく、心氣自ら調大なることを愛ゆ、寒風より掃戸を経て八龍橋に歸れば、半島一週茲に終る。

### 支那の縁

雄武本線、房総線、東金驛

汽車兩國を發して僅に三十分、江戸川を渡りて下總に入らむとし、連りのほる白帆の美に接するの時、左方河岸に沿へる二丘陵の老樹に蔽はる、を認むべし、これ「國府宮」にして、市川驛より十九町東京附近に於ける眺東の勝地とす。驛より十餘丁、いはゆる「草間の橋」の址といへる小橋を渡りて、【宇見宗義堂】に其果敢き運命を悲しむ、數十種の石燈を並べ、弘法大師の遺蹟【弘法寺】、境内楓樹多く、晚秋樹梢錦を織るの時、都人杖を曳くもの多し。國府宮は高さ七十八の隆起に過ぎざれども、江戸川其脚下に瀑布を引き、帝都の瓦葺また階に入り、富士の高嶺も手に取りつべく、葛西の曠地眼下に在りて佳景なり。地は古下總國府のありし所、今【總持寺】域内即それ、天文七年小弓御所義明陣を敷いて、北條氏康と戦ひて大敗地に委し、永祿六年里見義弘、復氏康と鏖を交へて敗れたるガラメキ合戦の地、今兵營を置かる、軍馬空に嘶くの時、正に入をして當年の大陣を想起せしむべし。

市川より中山に至る間、桃林點々竹葉琴歌を響うて、春時車窓の人を囁かしむ。中山は【法華經寺】のある處、伽藍壯大なり、日蓮上人最初轉法輪の道場なりとて、信徒の崇敬厚し。【稻毛】は海水浴地として知らる、袖ヶ浦の海岸、松葉を凝して艦を沙上に游仰し、小舞子の觀あり、芙蓉の秀麗西に笑ひ、鹿野山、鎌山南に聳え、朝霞森標景常に新なり。【千葉】は房総線の分岐點、中世千葉氏の據りし處、城址は今荒廢せずといふ、丘上を松多く袖ヶ浦の風光を惹きしめし。登戸は附近の漁村海水浴地なり。



市川より國府宮を望む



千葉より向本線によれば、四ツ街道を経て「佐倉」に至る、町は驛の北十町を隔て、北に鴨川を負ふ、堀川氏の舊領地なり。此地成田鐵道の接續點、宗五堂堂、成田山新勝寺、小御門神社等、同鐵道附近亦多し。佐倉より南に成東に至れば、驛より六町にして「浪切不動尊」あり、堂下藤原初出、以て治すべし。兩總九十九里の沙濱の盡くる處を「磯間」とす、南上總國大東郡より此處まで海濱絶えて四町なく、渺漠たる平沙地形をなして、恰も弓を張れるが如し。磯間邊に海水浴場あり、遙に大吹ヶ岬と相對して風光畫に似たり、飯岡驛より一里半にして至るべし。磯路「銚子」に至りて盡く、地は坂東太郎の海に朝するの口にありて、大日本東方の限たり。「川口明神」は飯岡寺の背後、俯して川口を見るべし、七十幾里の長流、磯海に入りて流る、こと里餘、鹹澁相闘うて波數段をなす、高潮の時壯觀限りなし、川口の一ノ岩一ノ岩銚子の港門たり。これより東端女岬に至る一帶の海濱を平磯といひ、沙上文貝多し愛玩すべし。黒生浦の海中、帆掛石あり、海鹿島あり。一轉すれば青松白沙一望數十町、此邊波荒くして白雲濤濤々浪といふ。「大吹ヶ岬」は海に突出すること數町、岬端海拔百六十八尺の燈臺を建つ、光能く十九哩に達すといふ。凡そ岬を環りて巨威を甲ひ、

大海を遊へて椰關す、日暮れて白光波を照す時、壯絶海絶の觀を極む。燈臺より砥石山の地蔵殿を過れば「四明の里」、海水浴場の設あり、これより長崎ヶ岬、外川ノ濱、仙ヶ岬、大若島、名洗ノ浦に至る間、風光變又替、銚子磯廻り漸く盡く。銚子より汽船に乗じて、三社詣の旅に上る、息掛神社は吹氣戸生命を祀り、息掛にあり、祠は浪連浦の下流に臨み、華表水中に立ちて、老木社殿を圍み、景致甚佳なり。鹿島神社は息掛より里餘、北面の北岸大船津よりは十餘町なり、今官幣大社にして、官民の崇奉古に異ならず、「深原」天照神の宮ことうけて國たひりけし神ぞの神、武甕槌神を主神として、經津主神及天兒屋根命を配祀し、創建遠く土代にあり。境内宏闊、老樹鬱然として繁茂し、神威自ら威として、壯麗甚古、賽者まづ禱を正す、昔時東國の風俗、物語すべき始には、必ずまづ此社に詣つ、これ旅に立つ口を鹿島立といふ所以なり。潮來は古より世に聞えたる名色、「潮來出島」のまごの中にあやめ喚くといはしらしや、「潮來節」また世に行はる、大船津より佐原に至りて、香取に詣りてとす人は、一日を此地に費すも興多かるべし、地は北利根川の北岸、丘陵に登れば、直に香取、佐原の村市を水外に望み、右は浮島、阿波崎の樹色、左は鹿島、根三川の沙丘、皆指顧の中に在り。加藤洲は潮來の對岸、その十二橋は潮來、津宮の間を通ずる渡川の架梁にして、多く詩題に上り、「潮來出島の十二の橋を行きつもとつ夜がける」と歌へるものこれ。香取神社は佐原より三十二町、津宮よりは半里に足らず、社は經津主神を祀り、鹿島神社と相並びて、東國の名祀として歴史上著名なるもの、今官幣大社たり。青山東西南の三面を圍み、之を五峯の山と呼び、其中央龜甲の丘に神宮あり、壯麗を極む。千葉より右折し、木千葉、蘇我、野田を経て、上總に入り、土氣より大網に至れば、東金に至る分岐線あり、土氣驛より十數町「土氣城址」あり、これ領内の土民をして日宗に改めしめ、俗に「七里法華」の名あらしめし、酒井氏の據りし處、附近日宗の寺多し、中に土氣の本壽寺、大網の本國寺、東金の木瀬寺等世に聞ゆ、木瀬寺の東北「八鶴湖」あり、西福寺は北岸にあり、水を隔て、木瀬寺と相對す。大網より南し、木納驛を過れば茂原、驛より八町、日宗の名藍「滋原寺」、及「賢良寺」あり。「二の宮」は加納氏の舊封地、國幣中社「其前神社」あり、海岸は近時海水浴地として知られ、これより南、大東、長者町、三門、大原各驛の海岸、風光の奇海濱の清、相待ちて遊客の至るを待つ。「大東岬」は海中に突出すること一里、遠く北極星岬と遙相對して、奇跡たる露間の沙灘長さこと九十九里、脚突岩岬時、怒濤之に衝つて龍虎の關をなす。磯路大原に至りて盡く、「八鶴湖」はその海岸に突出し、勝景を以て著る。「勝浦」は大原より四里、海濱は極涼と稱し海水浴場あり、灣盡くる處、崗陵起伏し、若海と泉と自然の美を競ふ、遠見岬神社あり、展望の勝地とす。



鹿島神社

濱街道

常磐線、水戸線

上野驛より常磐線によれば、千作より北、磯路多く濱街道に沿ふ。「我孫子」は成田鐵道の接續點、附近手賀沼の勝あり、「布施」の辨天はこの驛より里餘、利根河野の丘陵にあり、春花秋葉また遊杖を曳くに足れり。利根川の鰻橋を渡れば常陸の國、取手は其國門にして、次藤代附近には將門の「相馬古御所」あり、佐貫驛あり、左に牛久沼を眺めつ、進めば、やがて「土浦」に至る。地は霞ヶ浦の西濱、土屋氏の舊領地、長江曲浦幾灣の風煙、佳趣窮りなし、汽船あり、鹿島香取息掛の三社に詣り、更に銚子の奇勝を探るべし。關東の野に天の成せる一大聖樓あり、名づけて「筑波」といふ、男體女體は其雙眼視たり。海拔三千二百尺、四近之に次ぐの峻嶒なきが故に、四聖眼界其大、八州の山川襟帶の勢ひ、全く雙眸の中に収る。一粟鏡ひ立ちて、自ら陰陽の形勢を爲すが故に、種々趣味ある傳説を有す、土浦より五里餘なり。



大洗海岸



土浦より神立を過ぐれば高濱、霞ヶ浦に向ひて、石岡の門戸をなす。「石岡」はもと府中と稱し、古常陸國府のありし處、町の西端府中城址あり、聖塚の遺形歴々たり。石岡より羽島、岩間を後にすれば、友部、小山よりこゝに來りて水戸に至る水戸線の合ふ所なり。これより内原、赤塚を過ぐれば、汽車仙波湖に沿うて水戸に至る。「水戸」はもと徳川氏親藩の地、「板城郭」を中央にして、上市、下市の二區に分る。舊城大手門前而一帯の地は三ノ丸と稱し、「引道館」のあるところ、今其一部公園たり、鹿島神社あり、孔子廟あり、八稜堂あり中に烈公自撰の引道館記碑を藏す、所謂水戸學の大木を見るべし。園内植樹數千株種香雪ながらなり、有名なる「備樂園」は今常磐公園といふ、烈公之を拓きて、好文亭を置く、結構古雅なり。園の東北は即ち梅林、この園の世に知らる、また之に因り、老梅數千株、幹枝參差として蘆葺厚く之を蔽ひ、松翠其間に點綴して雅致を添ふ、春風園内に拾ひの時、樹下を道通すれば、寒からざるに何の雪ぞ、空より降りて、衣袂爲に香ばし。園の東端「常磐神社」あり、義公烈公の靈を祀る。祠に近く「舊彰考館書庫」あり、我邦の教育史上看過すべからざるものの一とす。谷中共有墓地にある藤田父子の墓、また水戸に至る人の必す訪ふべき所なり。三ノ丸杉山通りの河岸より、汽船に乗じて那珂川を下れば、一時間にして「茨城」に至る。地は水戸の門港、御殿山公園あり、風色佳なり。茨より那珂川に架せる海門の長橋を渡れば「鹿嶋」、磯濱はこれより南半里餘、東方の岬角を「大洗」といひ、海水浴地として知らる、岸上古松林をなして、蒼老の態甚だ喜ばし、後山「磯前神社」あり、社頭に立て旭日水天洋に上るを見れば、雲霧萬里社に嗚谷に至るの感あり。社背水戸口、矮松雜生して風景清雅、子ノ口ノ原といふ。水戸より岩沼に至る其間數十驛、汽車濱街道と伴ひ、多く海濱に沿うて走る、松青く沙白く、萬里の海洋展望際涯なし。一帶の地近時海水浴地として世に知られ、夏期叙奏相影絶ゆる時なし。中に「助川」「磯根」最著はれ、氣象海濱保養に適するを以てつて知らる、加ふるに山光水色の佳麗なるあり、世に第一の大磯と呼ぶ。「水戸」は風



景を以て早く世に聞えたり、開木驛より十三町、地は左右より岬角突出して關門の狀をなし、海水深く灣入して巖形に似たり。山秀で水頗び、一島一岬皆佳趣あり、狩野派の山水畫に對するが如し。...

水登山の海北

新館本館 御膳所、宇田本館

青森より聯絡線に頼れば僅かに四時間にして、北海道の門戸たる「函館港」に達す、市街は海岸より延びて風牛山の麓に連り、海は巴字形に灣入して渡常に穏かなり。...



大 公 港 山田温泉は驛を距る約一里岩壁別に在り、山村の風俗趣味なかくに深し。

近石室あり、其巖上に頗る「崎形」の記號を彫刻す、或は古代の祭儀と云ひ、或は結繩時代文字に代へたる記號なりとも云ふ。...



古 居 神 銅路線の終點を「御膳所」とす、本道東部の要港にして、海陸産物の集散市場たり。...

此地に夕張線の分岐點にして、有名な夕張炭山に入るの咽喉なり、途上瀧ノ上驛を距る約五町の處に、「夕張瀧」あり、夕張川の急流の巖壁より瀧落ち、...

# 朝鮮の風光

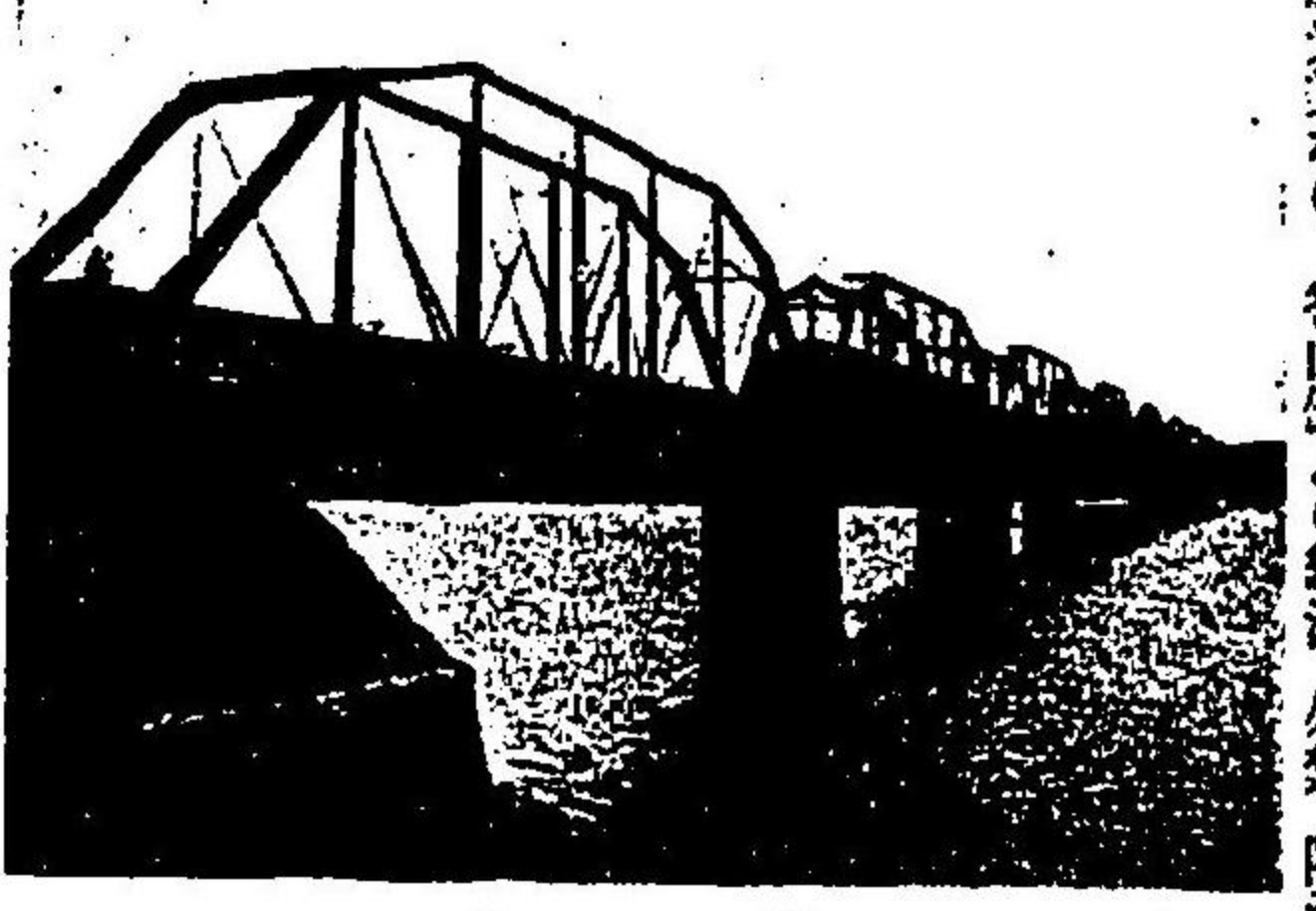
京義線 馬山線 京仁線  
京義線 平海線

光風の鮮朝

荒寒糸山何等見るべきの風光なしとは、朝鮮に遊べるもの、多く口にする所なりと雖、朝鮮の風光は、また朝鮮として、自ら別趣味なるべからざるなり。開港連絡船の上、幸甚、對馬の架寮を左舷に望み、常陸丸最後の衰を憶び、日本海々戰未分村の大捷を思ひ、悲喜こももろ胸に湧りて、旅情飄々、の時、船は早くも【釜山港】に達すべし。地は僅に四十裡を距て、對州と相對し、東南絶影島の横はあり、港内廣くして深、以て大艦巨舶を容る、に足る。幕府時代より久しく、邦人の部落を爲したる所、今や邦人の家屋稀北大厦軒を建て、宛然内地の都會を見るが如し。【龍頭山】は釜山の公園にして、洞内の風光一時の下に集まり、天清う晴る、の時、水天劈裂の間對馬を望むべし。山の東南隅絶影島と相對する處を、【龍尾山】といひ、加藤清正を祀る。絶影島は周圍七里、屹然として港の障壁をなす、その南面松樹繁茂して、沈瀟海水浴に適せり。

【釜山港】は支那の夜我諸軍の上陸したる處、驛の背西小西城址あり。【東萊府】は驛の北方二里、府の東北半里東萊浦あり、幽静閑雅風光天なり、釜山港より龜浦、勿梁、院箱の諸驛間、汽車は【洛東江】の流に沿うて走ること約二十哩、車中江上の風光を悉にすべし。【龍院驛】附近江の美を以て鳴る。【三浪津】は馬山支線の分岐點、洛東江、進永、昌原の三驛を過れば、驛波の如き【馬山浦】の風光に接するを得べし。浦は領海灣口の巨瀾を以て、外海の激浪を避り、水深く波靜に、氣候溫和風光明媚、朝鮮第一の避暑遊樂地なり。【馬山城址】は驛の東北一里、文祿の役第四軍の將、島津義弘の築きしものこれ。

三浪津を後にすれば密陽驛、驛を去る十數町、密陽江の右岸に【密陽樓】あり、眺望宏闊なり。【大邱】は南朝鮮第一の都會、驛より十二町【達城山】あり、四景展開いはゆる大邱八景管一眸の下に在り、今公園たり。新洞を過れば【倭館】、文祿の役我將士の残りて、此地に留りたるものあるを以て此名ありと。倭館より北、若木、金島山、金泉を経て、【秋風館】を越ゆ、全線中の最高所なり。秋風館より黃洞に至る間、溪山の風景佳なり。嶺は北方より來れる大山脈の分水嶺にして、嶺以東は洛東江の流域、嶺以西は鍾江の流域に屬す、人はいふ、朝鮮半島の富は南朝鮮にあり、南朝鮮の富は全州及び内浦の野にありと、而してこの富源地を貫流するものは、【鍾江】なり。美江驛は鍾江の右岸にありて、舟楫の便あり、江口の鮮山港に出づるを得、芙蓉山は觀日觀雲の勝地にして、鍾江の對岸にあり、江の下流一里の河岸、故大院君の觀月場として有名な【獨樂亭】あり。美江以北、島院院、全義、小井里を経て、天安驛に至れば、驛の西南約三里、【溫陽溫泉】あり、朝鮮溫泉中第一位に推さる。【咸興驛】は、二十七八年役の幕を開き、勇烈第一の凱歌を奏したる所。



漢江

【水原】は一帯城府といふ、八達山南に聳えて府の屏障たり、東北は光武山脈の尾に沿うて丘陵起伏し、西南は渺茫たる廣野一望際なし、府城圍むに城壁を以てし四大門を設く。【八達山】は満山松松茂、景色瀟々が如し、山の東麓軍營あり、建築壯麗なり。水原より北、軍浦場、安義、始興を後にすれば水谷浦、京仁線の接續點なり、同線により梧柳洞、素砂、富平、朱安の四驛を過れば、早くも【仁川港】の瓦葺眼前に展開せらるべし。仁川は日清日露戰役以後、非常なる發達を遂げ、驛は市の東端にあるを稱し、西端にあるを仁川驛といひ、【月尾島】、【小月尾島】其前に横はる。月尾島は間離一里餘、島中春花多く、春季優勝の客を絶たず。小月尾島は僅に三町を距て、相對す、島に燈塔の設あり、三十七年二月、露艦ワッカグ及びコレラ

の爆沈したるはこの附近なり。【日本公園】は市の東方官町に在り、南方海に而して風景絶佳、樹木繁茂綠葉瀟々が如し、月夜遠く眼を放てば、珍奇百里海上の風色佳なり。桃山公園は桃洞驛の東十町、境内桃樹多く春季紅霞たなびけり。

水谷浦より北、汽車漢江を渡りて【龍山】に至る、江は朝鮮に於ける有名な大河、水清く江岸又其風光に富む、蕭々として水結すれば、江上平馬を通じ、白衣の鮮人時に水を破りて魚を釣るを見る、江を廻りて史跡を索むれば、清正の銅雀津、行長の龍津等、文祿の役に於ける渡江戦跡あり、うた、人をして當年奮戦の跡を憶はしむ。龍山は京釜京義兩線に分岐點にして、其市街發展の速なる、蓋し朝鮮第一なるべし、土地平坦にして南漢江の激流を擁して、遠く南嶺山を望み、北は京城の市街と相連りて、近く北嶺山を仰ぐ、京城との間約一里なり。【萬里倉】はまた龍山公園の名あり、驛より北五町、幽園園雅俗興を絶つ。驛の西二十町、【孔德里】に大院君の舊陵あり。白雲丹碧樓臺の美を盡すと雖、却て老練の風姿を憶ふべし。

汽車已に【京城】に至る、地は朝鮮總督府の所在地にして、峯巒府城の四境を圍み、漢江の巨流洋々として東南を流り、山河縹緲に景勝の地、地勢頗る京都に似たり。周圍繞らすに石壁を以てし、八城門を設く、門は各二層樓より成り、結構壯麗を極む、中に崇峻、興仁の二門最雄大なり、城壁は李成桂の築く所にして、故大院君の修築する所、市街はその内外に連り、區劃非む、其最整華なるは、東大門及西大門通の分岐點たる鏡路にして、人馬絡繹無窮が如し。驛は二南大門外にあるを南大門驛、西大門外にあるを西大門驛といふ。京城の勝概を知らむと欲するものは、まづ【倭城倉】に登らざるべからず、これ文祿の役所川長盛の軍營せし處、南山の中腹にありて、倭に【南山公園】といひ、京城を市を眼下に俯瞰すべし。甲子戰捷紀念碑の左側より更に山頂に至れば、眼界更に廣く、龍山、慈雲津、水谷浦より漢江下流に及び、東は遠く楊州地方を望み得べし。【ハコタ公園】は塔洞にあり、【盤石の佛塔】あるを以て知らる、高麗時代の遺物にして、各層各個に佛像を彫刻せり。塔の南【龜門】あり。【曹洞院】は鏡路十字街にあり、俗に鏡樓と稱し、樓内大鐘を懸く。【天然亭】は西大門外にあり、池に覆橋あり、夏荷花亂發涼氣を吐く。南大門を出で、西十餘町、南に折れて山道を通れば、八九町にして一小村落あり、【梨峯院】といひ、戸數百餘、文祿の役我兵此に駐屯すること二年有餘、日、村者老兵、歸還の軍と進退を共にする能はざりしもの、子孫相傳へて今日に至り、甲子月御額を藏する家ありといふ。【三角山】は京城の北約三里、各路極めて險峻、山頂は宏潤なる平地にして、連山悉く一眸の下に集まり、瞻日壯快なり。山脚【北漢山城】あり、城内【重興寺】あり、秋高く氣清き時、紅葉全山を染め、溪流素沙白石の間を流れて、或は合し、或は散れ、幽雅難述、近郊第一の勝地たり。

光風の鮮朝



津江驛は【臨津江】岸にあり、江は朝鮮に於ける大河の一、古明將李如松の大兵を喪ひし所、日清の役にも我軍の渡河點となれり、日路の役にも我軍の兵站地となれり。

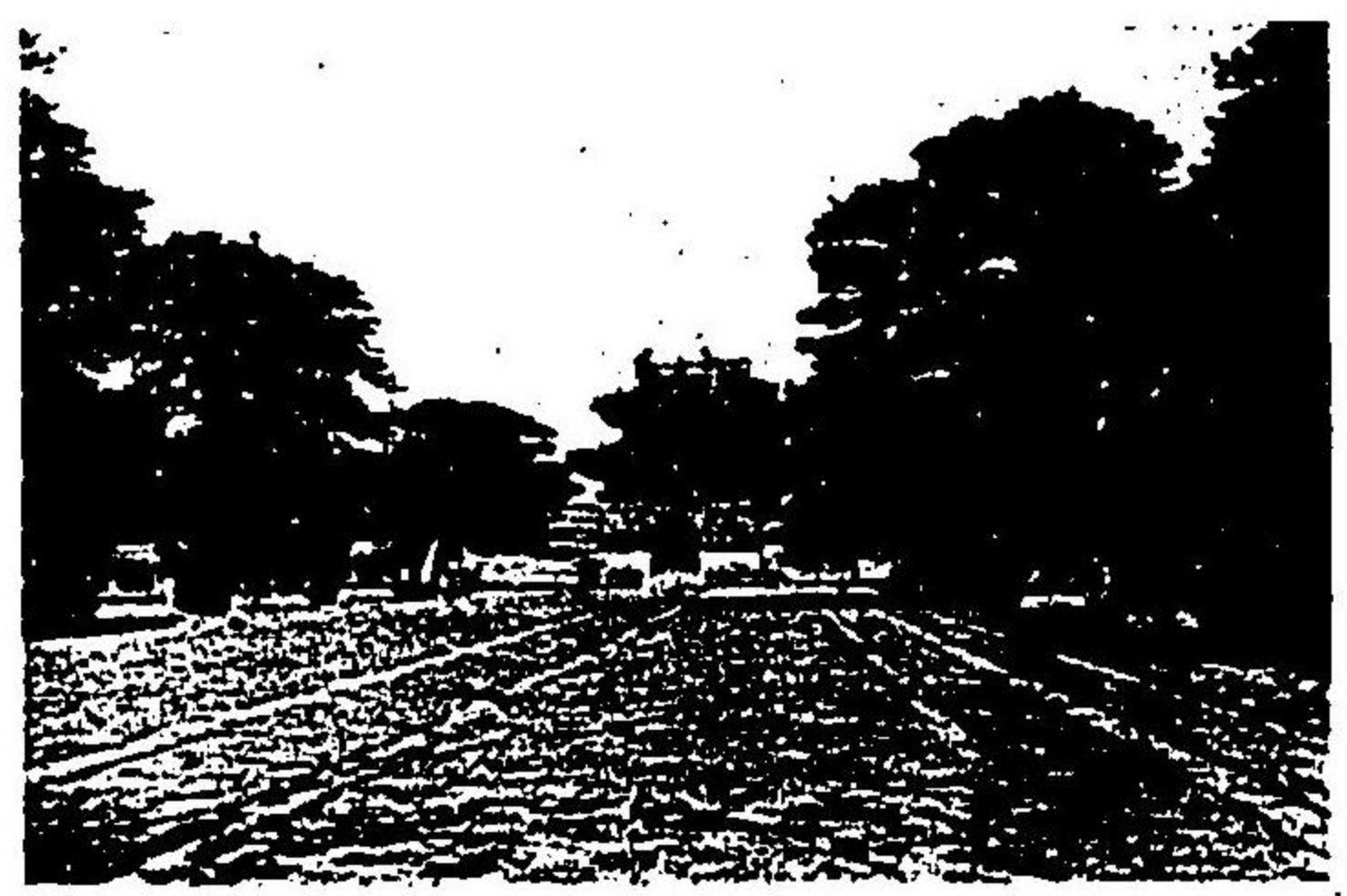
【開城】は日清の役兵站線の樞府として、軍政を備えたるの地、人家を此地方の特産とす、地は二に松都といひ、高麗三十二代四百年の舊都、城樓依然舊都に時つ、子男山にあり。【觀音寺】は高麗王室の遊覽所、四聖展開、開城全市を望見すべし。【金谷橋】、【杜門洞】等高麗朝の衰を語るもの多し。【朴淵瀑布】は韓國有名の勝地、秋季紅葉の美又開の、開城の北方三里を距つ。開城を後にして、土城、鶴津を過れば【空峯驛】驛の周圍、満山錦繡を以て蔽はれ、花時美観を見ず、驛の西南五町、龍津江、長位川合流す、沿岸奇岩怪立し、蕭雅幽邃の境たり、これより次驛汗浦に至る間、【龍津江】を左窓に望む、自沙碧流、所々風雅なる水車の回旋するあり、沿道中橋に見るの佳景なり。【太白山城址】は汗浦驛を距ること二里、高麗朝の築造に係り、難攻不落の天險と誇りしや、小西行長の爲に攻陥せられし所なり。沈村驛に至れば、驛の東南【正方山】の麓にあり、山頂正方山城あり、谷底なる城門内、成徳寺、別院、安國寺、上院卷の四大古刹あり、安置せる五百羅漢は、雲霧の金銀模刻落して、頗る古色を帯び、附近を樹蒼蒼たる所、佛池あり小滝あり、奇岩怪石其間に點在して幽邃を極む、又好むの避暑地なり。

【黃州】は山を貫うて平野に臨み、黃州城高く地を占めて建てたる、宛然雄偉の山水を見るが如し、これより兼、浦に至る分岐線

主



勝寺の遠達里塔あり、北郊には太宗文皇帝の御陵なる北陵あり、東郊には太祖高皇帝の御陵なる東陵あり、此二陵は五祖の水陵と併稱して三陵と呼び、祭祀最も壯嚴なり、皇陵は三陵とも名松萬千長へに皇雲を封じ、二境幽靜



【安泰】は日露戦役中我が滿洲軍の輸送機關として急設せし輕便鐵道なりしが、平和克復の後、一般の交通機關となし、一昨軍以降之を改築工事着手し、橋梁隧道等の工事既に成りて、近く廣軌列車の開通を見るに至りむとす、奉天を起點として、右橋子【】までは、坦々たる平野にして、空も耳口を覗ましむるものなし、されど隔口の山河皆是れ往日日露兩軍の角逐場なり、【大嶺】及び【木溪湖】は、沙河合流の動機たりし激戦場にして、我が小倉師團と近衛師團歩兵旅團とが、露國東方軍の三箇軍團と對戦して、一步も譲らざりし天險なり、大嶺より以南鳳凰城に至るの間は、山峽峻まりて幽谷となり、連綿脈々清流轉環して、奔瀾激を喘み岩潭崖を呑み、萬松毛よりも多く千峰水よりも碧し、線路は逶迤屈曲して此幽谷を通じ、谷蓋き山背ゆる所、隧道天地を穿つもの數十洞、洞開き水横はる所、奇峯長壑を描くもの一百餘、山迎へ水送るの趣、三峽江に倅して、闊に入るの觀あり、奇巖怪松相撮して風光最も愛すべきものを釣魚臺とし、邦人之を譽の耶馬溪に擬するもの多し、【木溪湖】は崑崙四方を圍み、山貨混々として蓋き、觀音寺の祖洞、太子河畔の祖廟は、此地の勝蹟と稱せられ、河南の額王墳は開院宮殿下の安戰し給へる壯觀なるに依り、又宮の原とも呼び做さる、【福金池】は安泰線第一の長隧道にして、太子河の流を測し、【橋梁】は嶺中屈指の大也、【連山】は往時の重關にして、其西方に控ゆる倭寇は、黒木軍がタレル軍團の衣裝を擊退せし戦場なり、【秋木莊】より【鄧冠山】に至るの山道は、勾配急にして迂屈甚だしく、幾たびか幽暗なる隧道に入り、壁立せる崖土を走り、轉た行客をして盛夏肌を寒せしむ、【鳳凰城】は金時代より知られ、清朝に至りて城壁を築き、兵備道添設し、遂に今日の版圖を見るに至り、【鳳凰山】は山紫水明の仙姿にして、瀋に朝陽寺、遺蹟寺、觀音閣、銀々廟等の寺觀あり、【高麗門】は六邊々門の終點にして、【海山城】は鴨綠江岸九城の一なり、【五龍山】は温泉を以て名高く、丁岐山の眺め殊に宜し、【安東監】は江岸第一の版圖地にして、日露戦役以來市街の發展頗る見るべきものなり、他江上の鐵橋成り、滿鮮の鐵道聯絡するの峻に至れば、江岸一帶總て肩摩楛

【南】は古の銀州城にして、遼河の水運最も便なり、龍首山上【三聖廟】の古塔と、城内同通寺の浮屠とは、共に數百年の風雲を経て古色滄蒼すべく、銀閣書院の舊蹟は、今尚學堂となりて、往時の遺蹟を懐かしむ、【開原】は古の扶餘城、驛を距ること東北二里の所にありて清河に臨み、城内石塔寺の古塔あり、遼時代の建築物なりといふ、開原以北は柳條湖外と稱し、東蒙古の王統界なり、【長春】は蒙古王政權繼承の旗界にして、今を距ること百餘年前初めて開墾せられぬ、城東を繞れる伊通河は、今游樂して水運の便なく、單に盛夏納涼の區として世人に知らるゝに過ぎず、此地は北滿洲唯一の大市場にして、道路四方に通じ、東は吉林を経て開略に達し、北は盛安城を経て哈爾濱首都納に至り、西は遠く遼南府に通ず、東清鐵道の停車場は三道溝にありて長春驛と稱し、吉林鐵道の停車場は三道溝にありて三站驛と稱し、

【安東】は日露戦役中我が滿洲軍の輸送機關として急設せし輕便鐵道なりしが、平和克復の後、一般の交通機關となし、一昨軍以降之を改築工事着手し、橋梁隧道等の工事既に成りて、近く廣軌列車の開通を見るに至りむとす、奉天を起點として、右橋子【】までは、坦々たる平野にして、空も耳口を覗ましむるものなし、されど隔口の山河皆是れ往日日露兩軍の角逐場なり、【大嶺】及び【木溪湖】は、沙河合流の動機たりし激戦場にして、我が小倉師團と近衛師團歩兵旅團とが、露國東方軍の三箇軍團と對戦して、一步も譲らざりし天險なり、大嶺より以南鳳凰城に至るの間は、山峽峻まりて幽谷となり、連綿脈々清流轉環して、奔瀾激を喘み岩潭崖を呑み、萬松毛よりも多く千峰水よりも碧し、線路は逶迤屈曲して此幽谷を通じ、谷蓋き山背ゆる所、隧道天地を穿つもの數十洞、洞開き水横はる所、奇峯長壑を描くもの一百餘、山迎へ水送るの趣、三峽江に倅して、闊に入るの觀あり、奇巖怪松相撮して風光最も愛すべきものを釣魚臺とし、邦人之を譽の耶馬溪に擬するもの多し、【木溪湖】は崑崙四方を圍み、山貨混々として蓋き、觀音寺の祖洞、太子河畔の祖廟は、此地の勝蹟と稱せられ、河南の額王墳は開院宮殿下の安戰し給へる壯觀なるに依り、又宮の原とも呼び做さる、【福金池】は安泰線第一の長隧道にして、太子河の流を測し、【橋梁】は嶺中屈指の大也、【連山】は往時の重關にして、其西方に控ゆる倭寇は、黒木軍がタレル軍團の衣裝を擊退せし戦場なり、【秋木莊】より【鄧冠山】に至るの山道は、勾配急にして迂屈甚だしく、幾たびか幽暗なる隧道に入り、壁立せる崖土を走り、轉た行客をして盛夏肌を寒せしむ、【鳳凰城】は金時代より知られ、清朝に至りて城壁を築き、兵備道添設し、遂に今日の版圖を見るに至り、【鳳凰山】は山紫水明の仙姿にして、瀋に朝陽寺、遺蹟寺、觀音閣、銀々廟等の寺觀あり、【高麗門】は六邊々門の終點にして、【海山城】は鴨綠江岸九城の一なり、【五龍山】は温泉を以て名高く、丁岐山の眺め殊に宜し、【安東監】は江岸第一の版圖地にして、日露戦役以來市街の發展頗る見るべきものなり、他江上の鐵橋成り、滿鮮の鐵道聯絡するの峻に至れば、江岸一帶總て肩摩楛

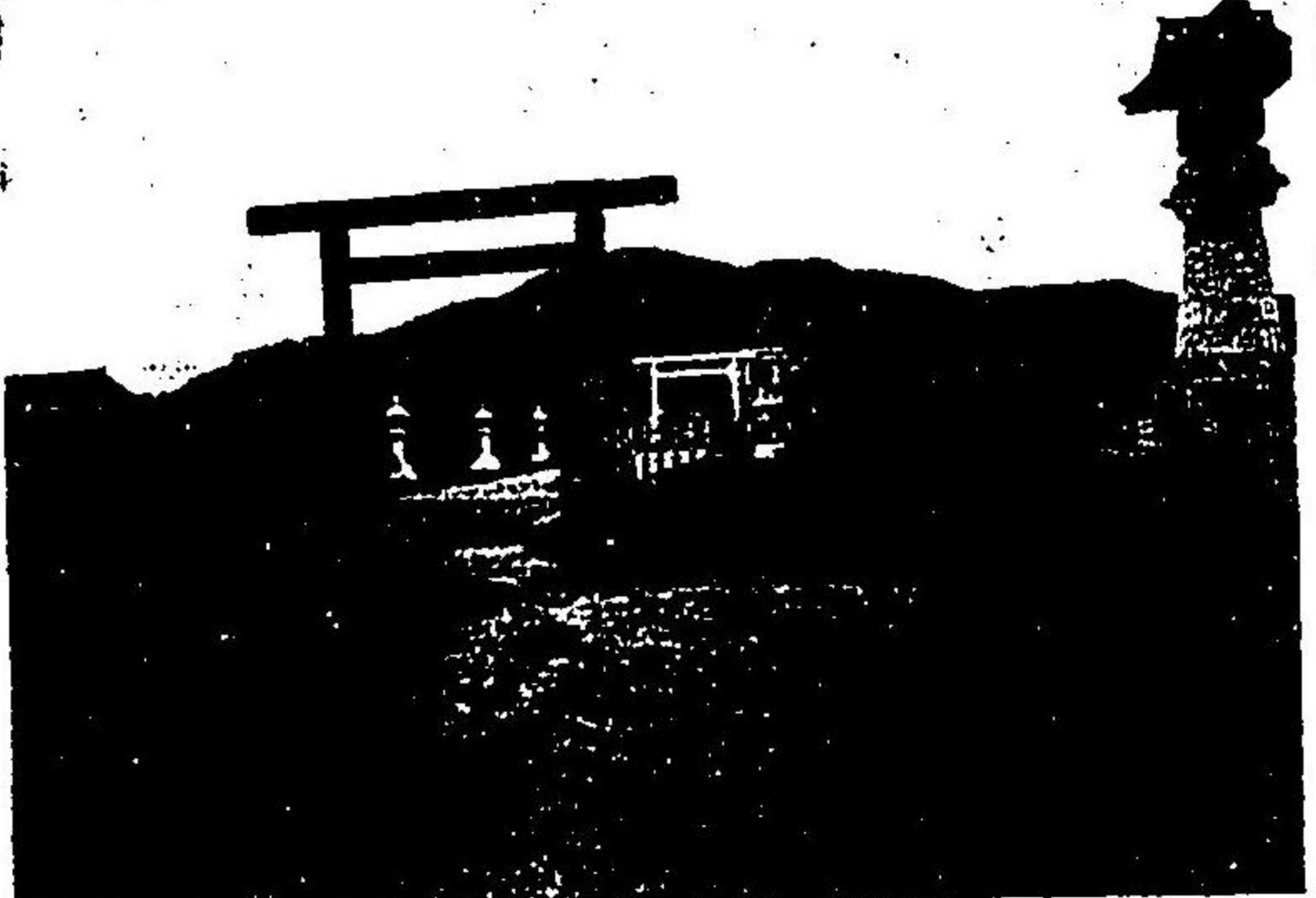


【安東】は日露戦役中我が滿洲軍の輸送機關として急設せし輕便鐵道なりしが、平和克復の後、一般の交通機關となし、一昨軍以降之を改築工事着手し、橋梁隧道等の工事既に成りて、近く廣軌列車の開通を見るに至りむとす、奉天を起點として、右橋子【】までは、坦々たる平野にして、空も耳口を覗ましむるものなし、されど隔口の山河皆是れ往日日露兩軍の角逐場なり、【大嶺】及び【木溪湖】は、沙河合流の動機たりし激戦場にして、我が小倉師團と近衛師團歩兵旅團とが、露國東方軍の三箇軍團と對戦して、一步も譲らざりし天險なり、大嶺より以南鳳凰城に至るの間は、山峽峻まりて幽谷となり、連綿脈々清流轉環して、奔瀾激を喘み岩潭崖を呑み、萬松毛よりも多く千峰水よりも碧し、線路は逶迤屈曲して此幽谷を通じ、谷蓋き山背ゆる所、隧道天地を穿つもの數十洞、洞開き水横はる所、奇峯長壑を描くもの一百餘、山迎へ水送るの趣、三峽江に倅して、闊に入るの觀あり、奇巖怪松相撮して風光最も愛すべきものを釣魚臺とし、邦人之を譽の耶馬溪に擬するもの多し、【木溪湖】は崑崙四方を圍み、山貨混々として蓋き、觀音寺の祖洞、太子河畔の祖廟は、此地の勝蹟と稱せられ、河南の額王墳は開院宮殿下の安戰し給へる壯觀なるに依り、又宮の原とも呼び做さる、【福金池】は安泰線第一の長隧道にして、太子河の流を測し、【橋梁】は嶺中屈指の大也、【連山】は往時の重關にして、其西方に控ゆる倭寇は、黒木軍がタレル軍團の衣裝を擊退せし戦場なり、【秋木莊】より【鄧冠山】に至るの山道は、勾配急にして迂屈甚だしく、幾たびか幽暗なる隧道に入り、壁立せる崖土を走り、轉た行客をして盛夏肌を寒せしむ、【鳳凰城】は金時代より知られ、清朝に至りて城壁を築き、兵備道添設し、遂に今日の版圖を見るに至り、【鳳凰山】は山紫水明の仙姿にして、瀋に朝陽寺、遺蹟寺、觀音閣、銀々廟等の寺觀あり、【高麗門】は六邊々門の終點にして、【海山城】は鴨綠江岸九城の一なり、【五龍山】は温泉を以て名高く、丁岐山の眺め殊に宜し、【安東監】は江岸第一の版圖地にして、日露戦役以來市街の發展頗る見るべきものなり、他江上の鐵橋成り、滿鮮の鐵道聯絡するの峻に至れば、江岸一帶總て肩摩楛

臺灣の風光

提貫總、淡水橋、鳳山橋

臺灣は我古のいはゆる高麗の國、西人の稱してフォルモサ島といふも美麗島の義にして、此島の風光明媚なるを證するにあらざるなし、聖哲秀吉の書を案に致すや高山の名山を以てす、嗚呼高山、島は實に我帝國第一の高峯、海拔一萬三千七十五尺の新高山を有し、附近の連峯一萬尺を越ゆるもの六峯を數ふ、山脈南北に延いて全島を東西に隔裂し、西部は地勢平坦土地肥沃にして、田野大に開け耕作盛に行はるれども、東部は山岳重疊し、峻峭峯の巔ありて文化未だ至らず、總督府は觀音閣開墾に腐心しつゝあり、鐵道は基隆、打狗間二百四十六哩八分を縱貫し、臺北より分岐線三十三哩二分を淡水橋と云ひ、打狗、九曲堂間十哩二分を鳳山橋と云ふ、門司港より汽船に頼れば、一晝夜にして島の北端なる【基隆】港に至らば、基隆は本島北部唯一の要港にして、内地往還の咽喉を扼し、貨客散放の關門たり、東西南三面は山を繞り、社寮島は北港口を擁して風浪を遮り、水深く渡縁に、六千噸級の大艦巨艇岸壁に横擧して悠然たり、港内山青水碧にして頗る風光に富む、【ブルーベイ】は停車場を距る東十餘丁に在り、今を去る廿五年前清佛戰爭の際、佛將クルーバーの陣地なりしを以て名あり、碧波帯を走らして白砂を洗ひ、巨口細鱗鱗をとし、打網の中に躍り、海水浴場あり、避暑あり、避暑の好適地たり、【仙洞】は港の西隅仙洞にあり、斷崖高く控ゆる所、巖脚に一大洞あり觀音を安置す、洞中更に三個の小洞あり、右なるを奥の院と云ひ辨財天を祀り、左なるを代明宮と稱す、元土人の廟にして清國官吏の詩文を洞壁に題刻す、中に氣韻生動一顧に賞するもの亦少からず、點なり、市は城内、艋舺、大稻埕の三區に分れ、人口約十萬、統治機關たる文武諸官衙のある所なり、殊に市街の長一道路の井然たる、下水道の完成衛生機關の具備せる、内地何れの大都會に比するも恐らく遜色なげん、【渡道ホテル】は臺灣鐵道部の經營に係り、臺北驛の前面大通りの東側に在り、宏壯整齊なる煉瓦造の三層樓にして、美麗なる大廣間あり、大小食堂、玉翠堂、舞臺、娛樂室、讀書室、浴池、理髮室、【エレベーター】等、一として備はらざるものなく、東洋一の稱あり、公園は城内府中街にあるものを新公園と云ひ、他を中山公園と云ふ、【新公園】は軍所造る、園種うして閑寂の趣に乏しと雖、青々たる空翠の間に、噴泉あり、花壇あり、涼風時に芬芳を透る、晚來散策の最好處たり、園の中央故兒玉總督の大理石像あり、英雄御學すべし、【中山公園】は市を距る約一里、元上臺陳某の別墅のありし所にして大古泉と稱す、園内廣闊にして老樹蒼々、奇岩怪石其間に起伏し、泉線跡が如く幽趣相傳ふ、【臺灣神社】は中山の對岸基隆山の半腹に在り、二十七八年設、視し此島に渡りて、掃風沐雨辛苦を嘗めさせられたる、故北川宮能久親王殿下の英靈を祀り、大國魂命、大己貴命、少彦名命を奉祀す、地高燥にして基隆河に枕す、神社は舊式にして、柱梁の材凡て粉飾を加へず、全島第一の盛場たり、臺北より淡水線に頼れば、北投驛に近く北投温泉あり、峰巒一面を繞らし、熱河涇々老樹の間を奔流し、林泉花鳥の里、無塵忘機の仙境なり、臺北人士唯一の樂境たり、淡水港は淡水河口の右岸に一郭を成し、對講貿易の吞吐口たり、【龍毛地】は街の正



【基隆】は淡水河の右岸にあり、臺灣總督府の所在地にして、淡水線の分岐驛なり、市は城内、艋舺、大稻埕の三區に分れ、人口約十萬、統治機關たる文武諸官衙のある所なり、殊に市街の長一道路の井然たる、下水道の完成衛生機關の具備せる、内地何れの大都會に比するも恐らく遜色なげん、【渡道ホテル】は臺灣鐵道部の經營に係り、臺北驛の前面大通りの東側に在り、宏壯整齊なる煉瓦造の三層樓にして、美麗なる大廣間あり、大小食堂、玉翠堂、舞臺、娛樂室、讀書室、浴池、理髮室、【エレベーター】等、一として備はらざるものなく、東洋一の稱あり、公園は城内府中街にあるものを新公園と云ひ、他を中山公園と云ふ、【新公園】は軍所造る、園種うして閑寂の趣に乏しと雖、青々たる空翠の間に、噴泉あり、花壇あり、涼風時に芬芳を透る、晚來散策の最好處たり、園の中央故兒玉總督の大理石像あり、英雄御學すべし、【中山公園】は市を距る約一里、元上臺陳某の別墅のありし所にして大古泉と稱す、園内廣闊にして老樹蒼々、奇岩怪石其間に起伏し、泉線跡が如く幽趣相傳ふ、【臺灣神社】は中山の對岸基隆山の半腹に在り、二十七八年設、視し此島に渡りて、掃風沐雨辛苦を嘗めさせられたる、故北川宮能久親王殿下の英靈を祀り、大國魂命、大己貴命、少彦名命を奉祀す、地高燥にして基隆河に枕す、神社は舊式にして、柱梁の材凡て粉飾を加へず、全島第一の盛場たり、臺北より淡水線に頼れば、北投驛に近く北投温泉あり、峰巒一面を繞らし、熱河涇々老樹の間を奔流し、林泉花鳥の里、無塵忘機の仙境なり、臺北人士唯一の樂境たり、淡水港は淡水河口の右岸に一郭を成し、對講貿易の吞吐口たり、【龍毛地】は街の正

上にあり、三百年前西班牙人の此地に據りし時、茲に砲臺を築き「サンチャゴ」城と稱し、發展の策源地と爲せしが、後南人之を驅逐し、更に山上に屏樓を構へたりといふ、今の英國領事館は其の所在地にして、本島最古の城壘とす。



上り、九曲堂は鳳山嶺の終點にして下淡水溪の右岸にあり、蕃薯寮、阿蘇、東港等の通路に當り、何れも輕便鐵路の便あり。口下九曲堂より阿蘇まで本線延長の計畫中なり。

鐵道院線 遊覽地案内終

廻遊旅行の葉

本旅行の計畫に於ける豫定日數には、旅客の出發點より目的地までの往復に要する日數を含み、

郷の故郷を見る。此豫定日數十日。【九州探勝】 門司より小倉に至り、豐州線によりて那珂湊の奇勝を深りて英彦山に登り、宇佐八幡に詣り、引返して小倉、鳥栖間の名勝を採り、四座前に入りて佐賀を經、唐津の虹ノ松原、七釜、名護屋城址を巡覽し、尙佐世保及長崎の風光を賞して温泉嶽に至る。此豫定日數八日。

葉の行旅遊脚

葉の行旅遊脚



東海道線 二等車 (成人床金金... 二等車 (成人床金金...)

客扱事務車

各線の急行及直行列車に於ける客扱事務車... 客扱事務車

列車給仕

各線の急行及直行列車の客扱車及一等客扱車... 列車給仕

途中下車

旅客は乗車用期限内ならば指定の途中下車... 途中下車

携帶品一時預り所

主要なる停車場には「旅客携帶品一時預り所」... 携帶品一時預り所

鐵道案内所

主要なる停車場には「鐵道案内所」の設け有之候... 鐵道案内所

告知板

一 即同行の約束ある方より先發又は先着せらるる... 告知板

Table with columns for weight (e.g., 五十哩未満, 五十哩以上) and corresponding values for various categories.

二箇以上の荷物に對しては一箇づつ、各別に運賃を計算した候... 運賃

大貨物

一、大貨物は小荷物に比し数量の多なる貨物に對する取扱方... 大貨物

Table with columns for weight (e.g., 五十哩未満, 五十哩以上) and corresponding values for various categories.

一 左記停車場の構上には食事の便に供する爲休座を設け... 市内營業所

市内營業所

一 左記の所に市内營業所を設け市内の停車場と同一賃金を以て... 市内營業所

手荷物及小荷物

一 手荷物 旅客の携帶せらるる手荷物は成るべく網棚の上... 手荷物及小荷物

内案道線

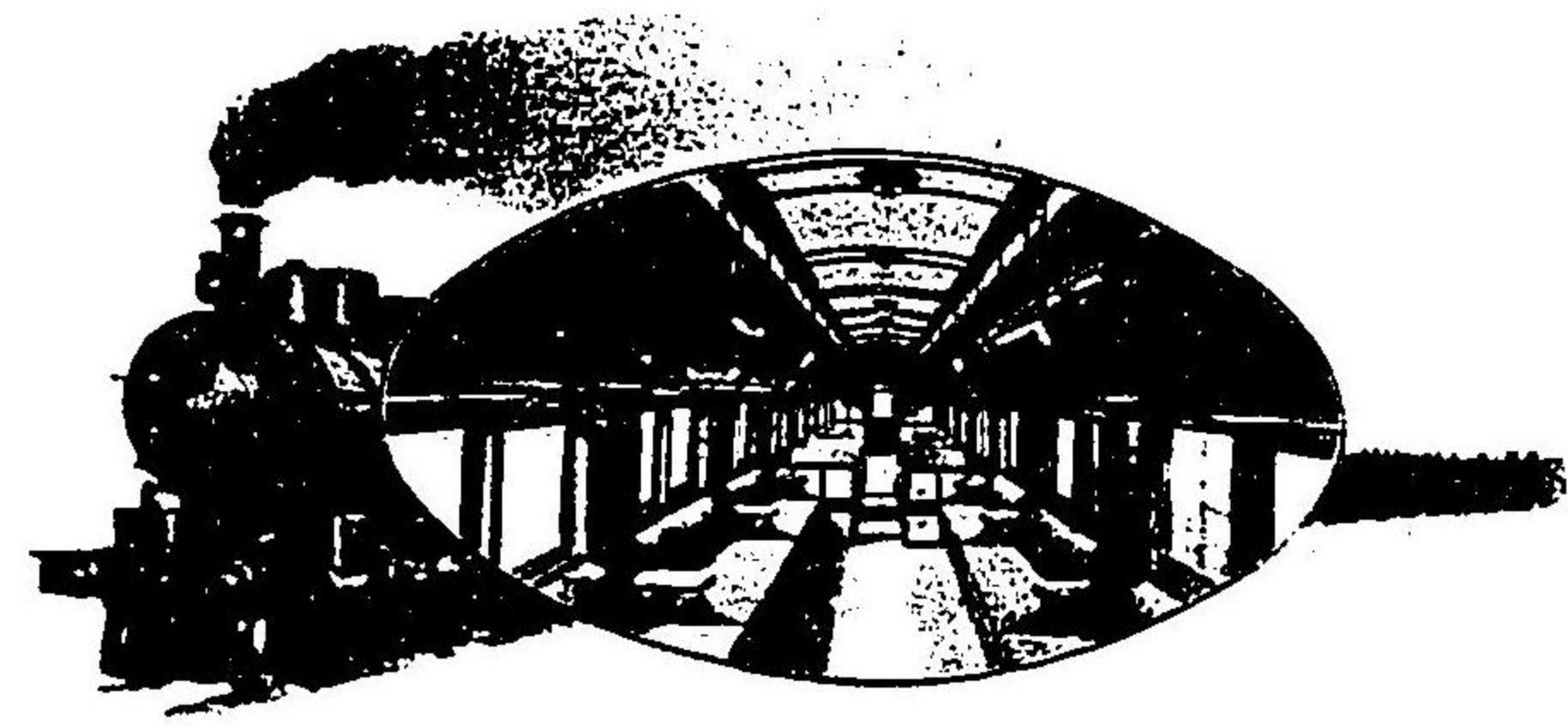
Table with columns for weight (e.g., 二百哩以上, 五十哩以上) and rates (e.g., 〇八五, 〇九五). Includes text about shipping regulations and company names like 山陽線, 大連線.

Table with columns for weight (e.g., 五十哩以上, 二百哩以上) and rates (e.g., 一噸一哩, 二〇〇). Includes text about shipping regulations and company names like 山陽線, 大連線.

内案道線

路は富田運送汽船に由る。
●天津、上海、大連、青島行
一、新橋、東京市内營業所、平沼、横濱市内營業所、名古屋、名古屋市内營業所、京都、京都市内營業所、神戸、岡山、広島、博多、佐賀、長崎、熊本及鹿児島と天津、上海、大連、基隆、臺北相互間(途中航路は大阪商船株式會社汽船に由る)
●南滿洲線行
一、新橋、東京市内營業所、平沼、横濱市内營業所、名古屋、名古屋市内營業所、京都、京都市内營業所、大坂、大坂市内營業所、神戸、下関、門司、博多、佐賀、長崎、熊本及鹿児島と南滿洲相互間(貨物運送は浦羅新船同大阪商船株式會社汽船に由る)
●東洋線行
一、大連經由新橋、東京市内營業所、平沼、横濱市内營業所、京都、京都市内營業所、大坂、大坂市内營業所、神戸、下関、門司、博多、佐賀、長崎、熊本及鹿児島と南滿洲相互間(貨物運送は浦羅新船同大阪商船株式會社汽船に由る)
●朝鮮線行
一、大連經由新橋、東京市内營業所、平沼、横濱市内營業所、京都、京都市内營業所、大坂、大坂市内營業所、神戸、下関、門司、博多、佐賀、長崎、熊本及鹿児島と南滿洲相互間(貨物運送は浦羅新船同大阪商船株式會社汽船に由る)
●海陸連絡小荷物輸送
朝鮮、青島、天津、上海、瀋陽及浦羅新船行小荷物運送の便を期す左記期間に於て其取扱致し候

●天津、上海、大連、青島行
一、新橋、東京市内營業所、平沼、横濱市内營業所、名古屋、名古屋市内營業所、京都、京都市内營業所、神戸、岡山、広島、博多、佐賀、長崎、熊本及鹿児島と天津、上海、大連、基隆、臺北相互間(途中航路は大阪商船株式會社汽船に由る)
●南滿洲線行
一、新橋、東京市内營業所、平沼、横濱市内營業所、名古屋、名古屋市内營業所、京都、京都市内營業所、大坂、大坂市内營業所、神戸、下関、門司、博多、佐賀、長崎、熊本及鹿児島と南滿洲相互間(貨物運送は浦羅新船同大阪商船株式會社汽船に由る)
●東洋線行
一、大連經由新橋、東京市内營業所、平沼、横濱市内營業所、京都、京都市内營業所、大坂、大坂市内營業所、神戸、下関、門司、博多、佐賀、長崎、熊本及鹿児島と南滿洲相互間(貨物運送は浦羅新船同大阪商船株式會社汽船に由る)
●朝鮮線行
一、大連經由新橋、東京市内營業所、平沼、横濱市内營業所、京都、京都市内營業所、大坂、大坂市内營業所、神戸、下関、門司、博多、佐賀、長崎、熊本及鹿児島と南滿洲相互間(貨物運送は浦羅新船同大阪商船株式會社汽船に由る)
●海陸連絡旅客及手荷物輸送
朝鮮、青島、天津、上海、瀋陽、浦羅新船及歐露等に往復する旅客の便を期す左記期間に於て旅客及手荷物の運送取扱致し候
一、東洋線(除浦羅新船各埠及龍馬川線)山陽線、大連線、青島線、威海衛線、九州線、中央線、信越線、東北線、奥羽線、北海道線、北陸線、東海線、關東線、各埠相互間(途中航路は大阪商船株式會社汽船に由る)
一、南滿洲線(除浦羅新船各埠及龍馬川線)山陽線、大連線、青島線、威海衛線、九州線、中央線、信越線、東北線、奥羽線、北海道線、北陸線、東海線、關東線、各埠相互間(途中航路は大阪商船株式會社汽船に由る)





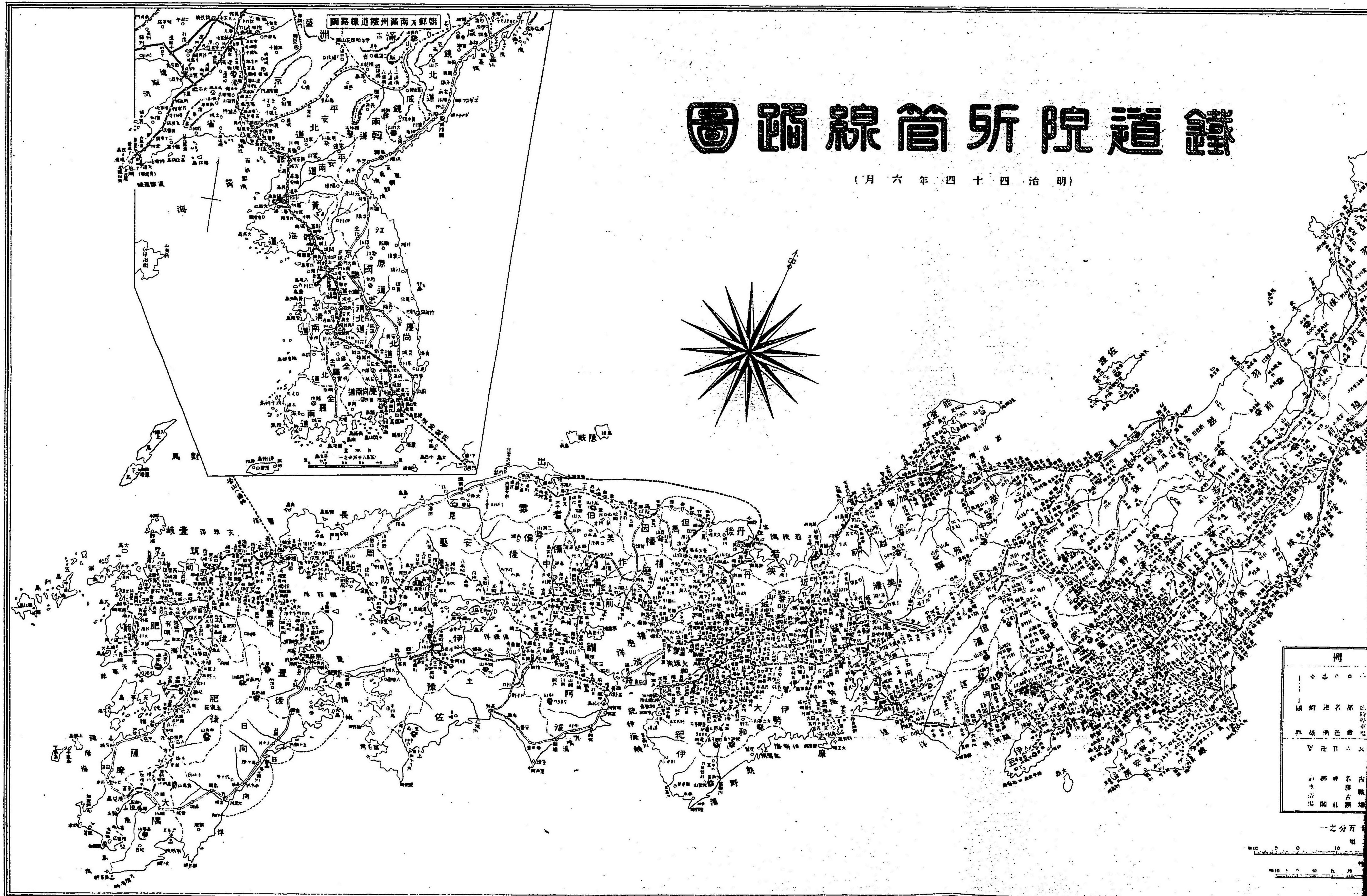






# 鐵道院所簡線圖

(明治四十四年六月)

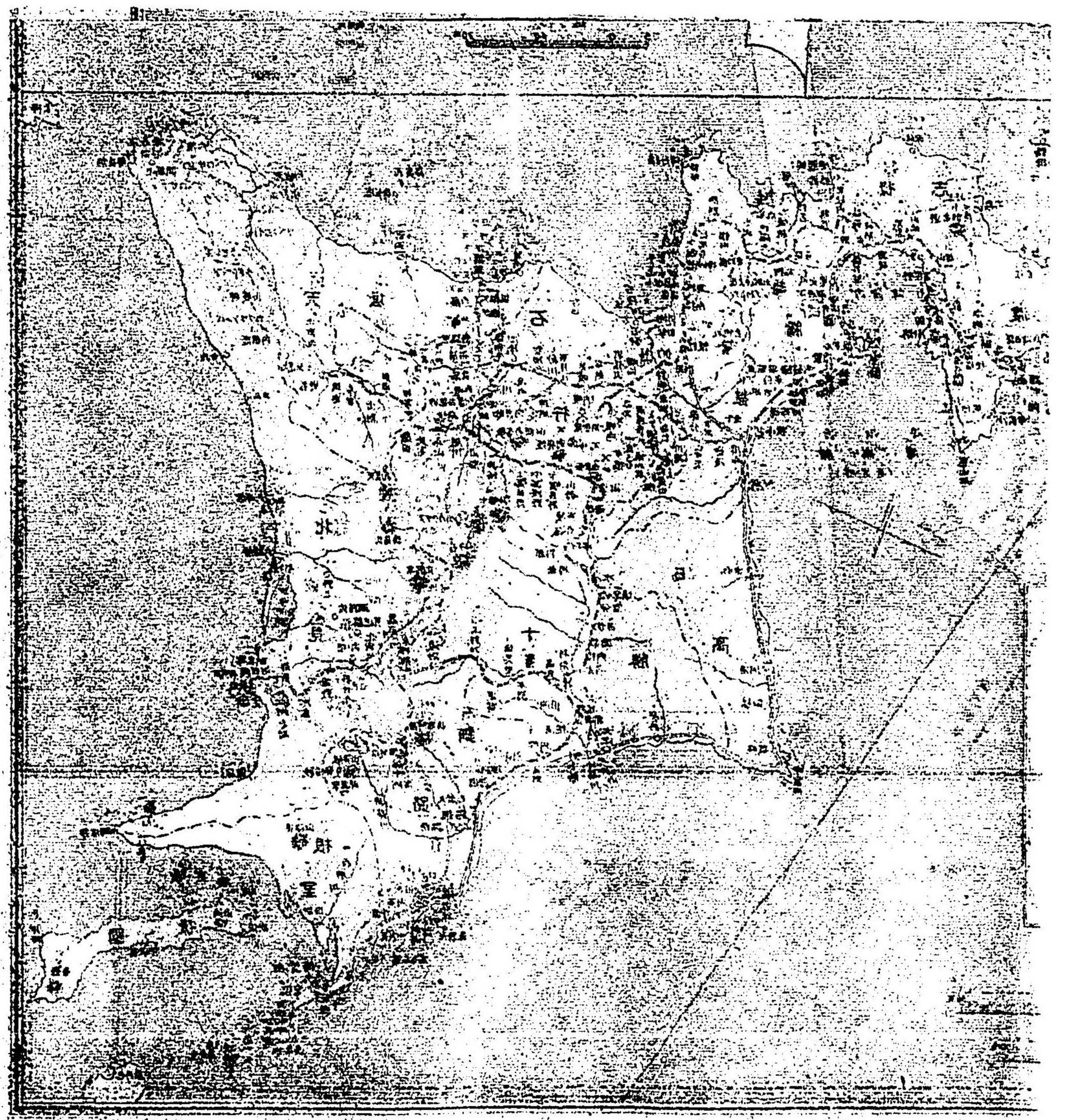


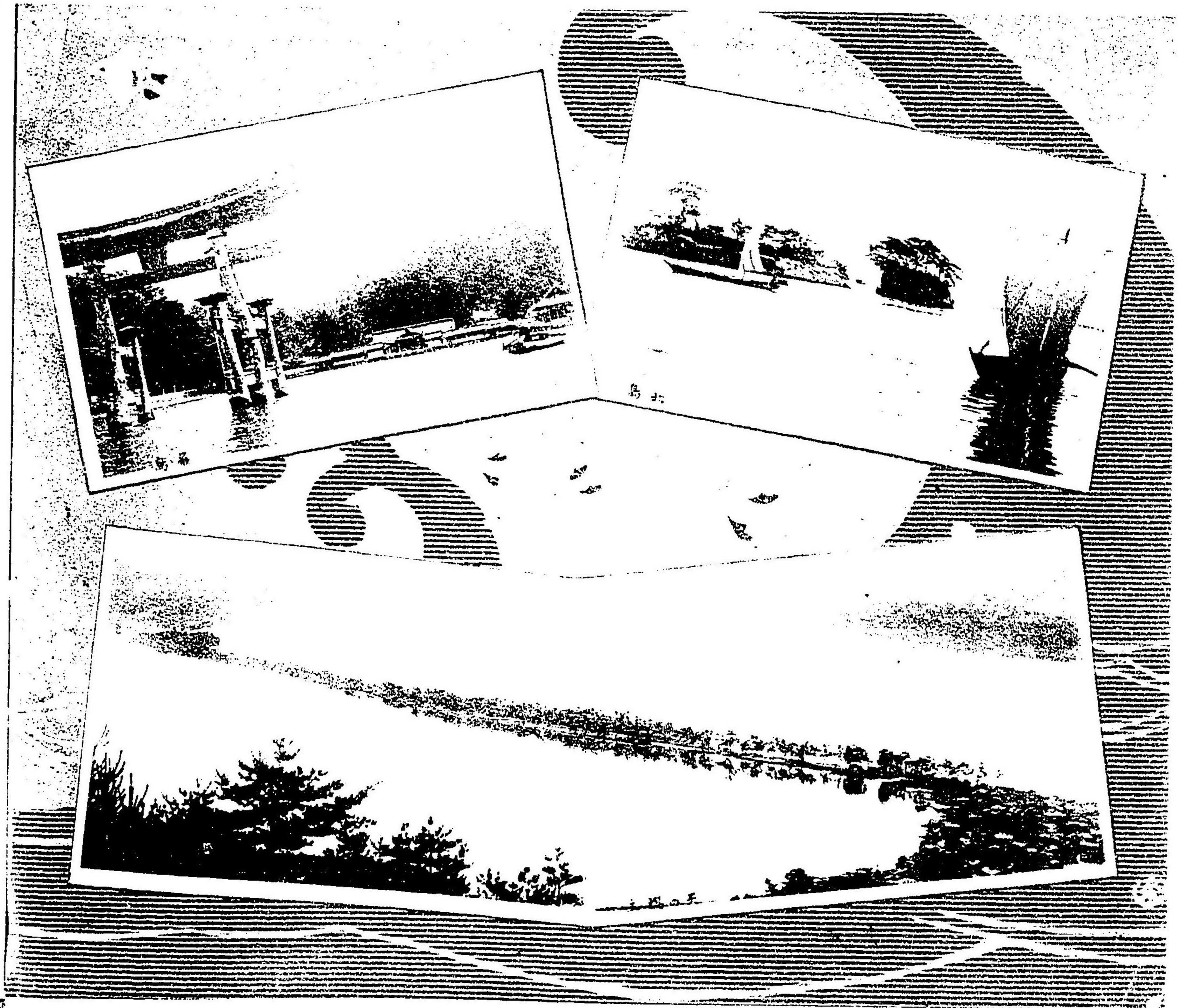
| 例 |    |
|---|----|
| ○ | 國府 |
| ● | 府廳 |
| ○ | 支廳 |
| ○ | 郡  |
| ○ | 邑  |
| ○ | 里  |
| ○ | 洞  |
| ○ | 村  |
| ○ | 邑  |
| ○ | 里  |
| ○ | 洞  |
| ○ | 村  |

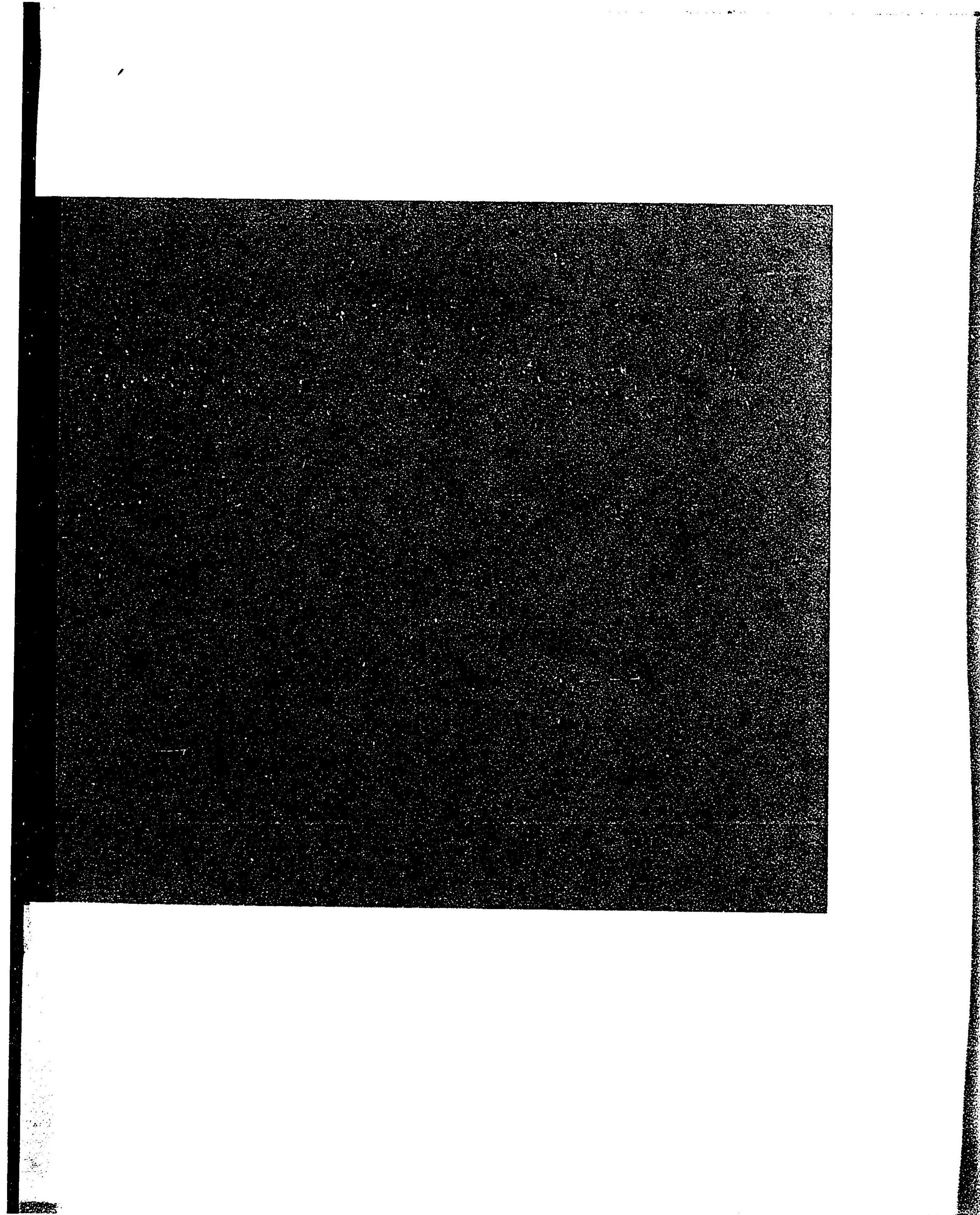
一之分万  
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100

301  
283

明治四十四年六月廿四日印刷  
明治四十四年六月廿七日發行  
鐵道院  
東京市小石川區大塚町八百八番地  
印刷者 水谷 景長  
印刷所 博文館印刷所  
品實非







特55  
184

鐵道院  
線沿道 遊覽地案内

国立国会図書館

022705-000-2

特55-184

鐵道院線沿道遊覽地案内

鐵道院

M44

ADB-0487

